

---

# とある魔術と禁断の能力者

ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術と禁断の能力者

### 【Nコード】

N9350M

### 【作者名】

ヒロ

### 【あらすじ】

6月23日、新連載考案中のため、連載は一時休載しております。1ヶ月位お待ちを！第四章「裏切りの超電磁砲編スタート」5月29日「崩壊の序曲後編」更新！！物語は上条当麻が禁書目録と出会って一年後。10年ぶりに学園都市に帰って来た少年「天城 焰」が上条当麻の学校に転校して来た事から物語は始まる。／／第三章「幻想御手 地帝の対馬黄河編。平穏を送る一方通行の前に死んだはずの垣根帝督が現れた。垣根帝督と地帝の対馬黄河が企てる絶対能力者進化実験とは！？三章完結。／／第一章、第二

章は文章になってませんのでご了承下さい。ノノ一時はスランプのため挫折しましたが、皆様の感想やメッセージを沢山頂き元気になりました。3ヶ月の間連載を止めた事をお詫びすると同時に感想や読んで下さってくれる読者様にお礼を申し上げます。ありがとうございます！！これからも頑張ります！！

## オリキャラ資料館（前書き）

ユニーク4000人突破記念に設立しました。

読んでくださった皆さんに感謝して設立させて頂きました。

ネタバレは多少含んでますが…なるべく省いています。

オリキャラ設定資料館第1弾です。

今回は2人の主人公の設定資料です。

最後にイメキャラとありますが、これはやっぱり想像できないと言  
う人の為のものです。

自分の文章力の無さを実感しています。

それではご覧ください

最後に鮮血の9人設定資料館も設立予定です。

## オリキャラ資料館

【名前】 天城 焰

【性別】 男

【身長】 173cm

【所属】 学園都市

【能力】 発火能力

【外見】 赤い髪は肩まであり、前髪も長く少し顔が隠れている。(顔が見えない訳ではない) 顔立ちは少しやんちゃそうな顔立ちである。体格は理想的なボディとなっている。

【性格面】 性格は基本は真面目で、土御門達の覗きを止めたり、人に言われた事はきちんとこなすタイプ。

嘘やお世辞が凄く下手で言い訳をしても逆に相手を逆上させてしまう。

女の子に耐性がなく女の子の可愛いらしい姿や下着姿、胸を見てよく鼻血をだす

【能力について】

能力は発火能力レベル4で、最大出力はレベル5の認定基準まで届いているが、調整出力が足りない為にレベル4止まり。現在最もレベル5に近い男と言われている。

【詳細】10年ぶりに学園都市へ帰ってきた。上条当麻の学校に転入して、土御門や青髪の騒動に巻き込まれている。

何か昔に罪を犯しているらしく、いつも胸を痛めている。

【キャライメージ】  
ネギま！？のナギ・スプリングフィールド

-----

【名前】 鏡 晴也

【性別】 男

【身長】 175cm

【所属】 学園都市

【能力】 鏡使い

【外見】 黒いツンツンの今頃のホストヘヤーで顔立ちもホストみたい、すなわちイケメンである。

【性格面】 基本いつもぶざけている性格で、自由奔放、誰かに指示

されたり命令されるのが大嫌い！

風紀委員に所属していて、仕事中にゲームセンターへ行ったり、コンビニでエロ本を立ち読みしたりする。

しかし真面目な場面ではふざけた口調は一変し、かなり真剣な口調へ変わる。

【能力について】

能力は鏡使い（ミラーージュ・マスター）のレベル4。鏡やガラスの両方が使え鏡の鏡像や光の屈折を利用し見えない斬撃を放つ。

【備考】風紀委員第002支部に所属するエリート。

過去に友人を亡くした過去を持ちその因果関係で統括理事会を冷たい目で見ている。

風紀委員本部では最強の風紀委員と言われている。

【キャライメージ】

コードギアスの主人公ルルシュ

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

プロローグではオリジナルキャラしかでなくてイメージしにくいかも知れませんが、最後まで読んでもらえたら嬉しいです。



## プロローグ

沖繩

「学園都市への転校手続きは済ましといたわよ」

俺の隣に立つ女の人は名前を「アリッサ」と言うらしい本名は知らない。

知らないのは今日あつたばかりだ。

外見は長い金髪でサラサラヘア、スタイルは一言で「セクシーダイナマイト」と言うのが相応しい。今は白の半袖Tシャツにベージュのハーフパンツをはいている。とにかく格好がラフでエロい。

「はや！？学園都市の転校手続きって1日で済むものですか？」

アホな声をだしているのは今作品の主人公である少年、名前は

(てんじょう ほむら)

「天城 焰」

身長173センチ、髪は赤く肩まであるストレート、体型は普通だが、半袖のシャツからでる腕はガッチリしている。

「お仕事だからね まあ裏稼業やってると色々あるのよ」

彼女の仕事は主に書類の偽装や犯罪グループを裏で交渉する 「交渉人」らしい

「明日から学園都市で学校生活か」

「あら？懐かしいんじゃないの？10年ぶりの学園都市は」

沖縄の海を見つめながら2人は語っていた

「10年か…」

焰の顔が少し寂しさを感じさせた。

「正直まだ頭の中が整理できてないかな…本当にあそこに戻っていいのかな俺は？」

「それを決めるのはあなた自身でしょ？」

「そうだな…だから交渉人を探してアリッサに転校手続きをお願いしたわけだし」

アリッサが持っていた書類を焰に渡した。

「ちゃんと目を通して置いてね。転校先やら学生寮の位置にそれに10年もたつと結構街並みが変わってると思うから

一応、学園都市の資料も入れておいたわ」

「さすが交渉人」

「私のサービス精神に感謝しなさいよ」

腰に手をあて胸をはるアリッサつついとおおきな胸に目がいつてしまうがなるべく気にしないように頑張る純情少年。

パラパラとページをめくり中身を確認していく。

ページ軽くめくり目を通し終わるとため息をついた。

「やっぱり俺の事情は知ってるみたいだな」

アリッサは申し訳なさそうに

「ごめんね。仕事上調べないわけにはいかないの。仕事をするのにクライアントの素性を調べる必要があるからね」

当然といえば当然かあくまで彼女は裏稼業をしている。クライアントの性格、信頼性などを判断して仕事をうけなければ 何かあるか分からない。

「じゃあ俺のしたことも俺の『チカラ』も全部お見通しというわけですか……」

沈黙が続く。焰にとってはどうやら知られなくなかった事らしい。そして沈黙はアリッサがやぶる。

「その『チカラ』が 憎い？」

「憎くんでののかも しれないな。これは『チカラ』というより俺にとっては『罪』だ。」

悲しい顔をしていた。彼の姿はまるで雨の中に捨てられた子猫のよう弱々しい 姿だった。

「でもその罪をあなたは背負う事にしたんでしょ？逃げて投げ出した方が楽なのに……」

「背負う事で罪が消えるなんて思わない。でも絶対逃げちゃ駄目なんだよ。誓ったんだ…ある人に『もうこの罪からは逃げない。背負って生きるそしてもう争いのない平和な世界に帰るから』って約束したから……」

彼の目には何らかの決意が見えた。

「強いね君は私には真似できない、私なら逃げる。きっとその罪からの重圧に耐えられない」

アリッサは何かを思い出すように波をうつ海を見ていた。

「逃げない為に刻んだだよ。『もうひとつの名前に』」

彼は刻んだもうひとつの名前に。それは魂に刻んだ名前。彼は言わない。

アリッサは言いたくないのだなとすぐに感じた。そして暗いこのムードを壊したかった。

「あゝあすっかり暗い話になっちゃったね。まあ悔いのないよう生きなさい。お姉さんからの忠告よ」

唇に人差し指をあてるアリッサを見て焰は鼻血がでた。焰は女に免疫がない嫌いなわけじゃないが。苦手なのだ。

「あらやだ鼻血。お姉さんに発情しちゃった？」

「男の生理現象です」

こういうノリはあまり得意ではない。

さっきまでの暗いムードは何処へいったのか2人はそういうやりとりを繰り返していた。

アリッサが時計を見た

「そろそろ時間ね」

「そうだな」

2人の別れの時間がやってきた。少し寂しい気がするが焔が告げる

「色々ありがとな。またどこかで会えるといいな」

「そうね。あなたとはまた何処かで会えそうな気がするわ」

向かえの船がやってきた。裏で手配した学園都市に迎かう為の船だ。

彼は乗り込む新たな物語の舞台へと

そして船が出航した。遠くになっていくアリッサに手を振る

彼女は見えなくなるまで砂の海岸にいてくれた。

そして天城 焔は向かう。学園都市へ

〜プロローグ〜完〜

## プロローグ（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

彼の持つ罪とはなんなんでしょうか？

直に明らかになりますので楽しみにしててください。

次回は上条当麻がめますのでお楽しみに

最後まで読んで下さったかたに感謝します。ありがとうございます  
た

## 第1話 転校生（前書き）

始まりました。

第一話です。第一話という事で話しは長いですがよろしくお願ひします

## 第1話 転校生

### 第7学区のとある学生寮

「待つてくたさいインデックスさん確かにお昼ごはんの買い置きを忘れたのは私のミスです。しかし今にも肉を引き千切るように歯をカチカチするのはやめてください」

「とうま・・・お昼ご飯のない1日を私に過ごせっていつんだね・・・」

「うっ」

「とうまは私を置いて学校に行くんだね」

「ぐぶう」

「とうまは一人で学校でご飯を食べるんだね？」

「違っ」

「とーうまー」

「ぎゃあああ不幸だーーーー」

小さな学生寮から断末魔の雄叫びが今日も響きわたる

「痛てえっ」



今は学校に向かっている。結局の所未来（お昼）の心配を大爆発させたシスターさんに噛みつかれ死にかけていた所を

心配（おもしろ半分）に見に来た隣人土御門元春の義妹「土御門舞夏」に助けられた。舞夏が今日は自分が通つてあるメイド学校が珍しく休みだったのでインデックスのお昼ごはんを舞夏に頼み自体は決着したのだが……

「歯形があちらこちらに……ちくしょうインデックスの奴最近凶暴化してねえか？」

シスターさんの歯形が顔、腕、足、背中いたる所についており、5メートル近寄れば肉眼で確認できる程くつきり歯形がついている。

（どうすんだよ。今日は新学期で新学年だぞ。新学期早々になんて全身歯形だらけで始業式に出なきゃいけないんだ）

全身から力が抜ける。もちろん4月の始業式には新入生がはいる顔を合わせたりもするだろう。

しかし全身歯形だらけの先輩を新入生は見てどう思うだろうか？間違いないなく

「先輩らしいな」とか

「頼りになりそう」またしては

「あの人素敵」

なんて展開は間違いないだろう。

「分かつてはいましたよ。今まで不幸フィーバーの上条さんが今更何を嘆いたって無駄だって事くらいは……でも春ですよしくらい

は素敵な事があたっていいじゃないですか!!」

『神様のバカヤロー』

俺、最近一人言多いな……半分涙目になりながら消えない菌形を体に刻み学校へ向かう上条さんでした。

—————

### 学校

上条当麻の通う学校とある教室から大きな声で話し合う2人組がいた

「うにゃ〜じゃあお互い結果報告といこうぜ青ピアス」

奇妙な猫ボイスで身長180cmあるう 大男。金髪をツンツンに尖らせ薄い青サングラスをかけた男。土御門元春

「あれやね今年の一年生はよりどりみどりやねー

猫耳メイドにバニーガール、スクール水着に体操ブルマ、宇宙少女に機械型ヒロイン、猫耳ロボットやクローン少女、軍人さんに水着秘書、ゴスロリ少女など アレンジしだいで光輝く未来を作れる女の子がたくさんおったね〜」

この怪しい関西弁で意味不明な言語を連発しているのは同じく身長180cm位の大男、髪は青く耳にピアスをしているため名前は青ピアス 本名は不明である

「さすが青ピアスだぜい俺も今その答えにたどり着いた所だにゃ〜」

「そうやる？そうやる？でも一番はバニーガールやね〜」

「にゃに〜」

土御門のサングラスが光輝く

「一番はロリに決まっているんだぜい！お前の目はふしあなか青ピアス」青ピアスの目が金色に輝きだす

「なにゆうてんねん。今年の一年生は赤バニーでアレンジしてこそ輝く子が沢山おんねんその可能性を見逃してる土御門の方がふしあなちやうの？」

「青ピアスめ今こそロリが最強だいうことをしめてやるにや〜」

「ええやる！上等や赤バニーが最強伝説をいまここにー」

熱い闘いを繰り広げる2人、クラスメートからそろって

「また始まった」

と溜め息を吐く者、また頭を抱える者、いつもの事と疑問を抱かない者、クラスでは三バカの闘いはもはやいつもの事  
そして三バカのもう一人ツンツン頭の少年が教室にはいつてきた。

「うい〜す」

（出た！！）

クラス一同の表情が急にに険しくなった

吐き気を訴える者、保健室へ向かおうとする者、いつもの事と疑問を抱くまいと努力する者、クラスが全員がこの3択に支配された。

「カミヤくんこの青ピアスになんか言ってるにや〜赤バニーが最強と寝言をほざくんだぜい」

「なにゆうてんねんカミヤんもロリより赤バニーが最強だと思うやろ」

さあ三バカの鬨いが遂にクラスメート全員が思ったのだが  
上条から予想外の一言が聞こえた

「どうでもいいです　せめて平和に過ごせる日常が欲しいです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はい？クラスメート全員が学園都市の崩壊を見たような顔をした。

「カミヤん一体何があつたん？救急車呼ばか？」

「にや〜カミヤんは人生の袋小路に詰まつたんだぜいきつと」

妙にテンションの低い上条にクラス全員から心配の声が聞こえる。  
不安になったクラスメートが上条を見ると奇妙なものが見えた。

「歯形？」

「どうしたんだにや？カミヤんその歯形はいつもの三倍は酷いにや」

「」

そう。上条が齒形をつけて登校する事は珍しいことではない。しかし異常なのはその数だ。

「あら〜甘噛み少女の逆鱗に触れたんやなカミヤん」  
そして遂に上条が反撃する。

「青ピアスこれが！この齒形の数が！甘噛み少女に噛まれた傷にみえるのか？ふざけんな！一時間たっても消える様子もない齒形が甘噛み少女の噛みつきであるはずがないだろう？」

この傷が甘噛みと言ふのなら、噛みつくという行為は肉を食いちぎる事という意味にかわってしまっわ！いいかこの傷は……」

上条の叫びを教室へ飛び込んで来た少女が打ち消す。

「上条また貴様達かー」

「げっ吹寄」

吹寄制理、胸がデカく美人なのだが、黒い髪は耳に引っ掛けるように分けられていて、おでこを丸出しにしている。美人だが色っぽくはない。そして彼女のまたの名を

『对上条属性最終兵器』

「貴様らは新学期早々騒がしいまたしょうもない話して盛りあがって…」

「にやんですと！聞きづてならぬ。ロリと赤バニーの…」

土御門が吹寄の言葉をかき消す用に反論したが……

「問答無用」

吹寄の拳が土御門を射抜いた。

ドカ！バタリ・・・土御門が地面に倒れた

「なっ！？ちよいたんまや吹き・・・」

「聞く身にもつか」

ゲシ！・・・青ピアスも蹴りをくらい掃除箱にぶつかりダウン。

「ちよつと吹寄さん今回の件は私は無関係でありまして…暴力を振るうのはよくないで……がはっ」

上条も頭突きをくらい昏倒する

「ふん！」

吹寄わずか三人を約10秒で撃破した。

「なんか吹寄機嫌悪くない？」

クラスメートの一人がつぶやく

「確かにいつもより凶暴というかなんか怖くね？」

クラスメートがささやく

「別にいつもどおりよ。朝っぱらからうるさいから成敗したまでよ」

上条がむくつと起き上がる。

「嘘つけ！どうせ買った通販の商品がまた思ったより使いにくかった…」

「やかましい！」

「ぶっ」

吹寄にとどめの膝蹴りを顔面にくらい地面に倒れた

「……………」

今日の吹寄はほっておこうと心に誓うクラス一同

とそこで教室の扉が開いた

「はいみなさんグッドモーニングです。ホームルームはじめるんでさっさと席についちゃって…って上条ちゃん達どうしたんですか？」

担任の月詠小萌。身長135cmで小学生のような容姿をしている。年は不明だがそれなりの年齢であり、学園都市の都市伝説にのるほどの人物である

「ああ、いつもの事ですから大丈夫ですよ」

吹寄が笑顔で答える

「上条ちゃん。そんな所で寝てないで、席についてくださいね」

御門ちゃんも青ピアスちゃんも」

(あんまりだにゃ〜そこスルーする所じゃないんだぜい)

(小萌先生に放置プレイされてる〜はあはあせえへんカミヤん?)

(黙れ青ピアス気絶したふりがばれるだろ!)

「聞こえてるわよ」

ビクツ!?三人の肩が動いた。

「先生。上条達が地面に倒れたまま先生のスカートの中覗いてます」

(なっ!!吹寄?)

「ひっ…く上条ちゃん…えっく」

クラスメートはさつき吹寄はほっておくと宣言中(もちろん上条達が無罪なのは知っている)

吹寄が笑顔で

「気絶したふり位で誤魔化せると思うなーーーーー!!」

ドガーーーーーン!!

物凄い音と共に三人は宙にまった(無実の罪で)

『不幸だーーーーー』



珍しく三人の声が重なり今度こそ気絶した。

――――

10分後

気絶していたがなんとか目を覚ました三人。スカートの覗き疑惑は吹寄が勘違いという事で無罪を証明された。

「がつ納得できるか」

上条がつぶやく

「まあまあカミヤん命あるだけええやんそれに小萌センサーのスカートの中見れたし」

「はあ！？お前まじで見たのかよ！」

「ありゃカミヤん見てないの？てつきり見たものか」

「にゃ〜カミヤんはこれだから甘いぜよ見れるものは見るにこした事ないにゃ〜」

「お前もか！！」

「は〜いこれ以上喋りやがったら午後からのシステムスキャン身体測定の後 特別授業を受けて貰いますよ〜」

そう新学年の最初の学期には午後から身体測定がある。お昼には帰れないのだ

そして特別授業なんか受けて帰りが遅くなったら家でまつ噛みつきシスターになにされるか分からない。

(ここは絶対黙っておこう)

「はい！では改めまして今学年もみなさんの担任になった月詠小萌です。また、みなさんの担任に先生は嬉しいのです。みなさん今学年もよろしくなのですよ」

『よろしくお願いします』

「そしてみなさんにビックニュースなのですよ。今日から転校生で一人追加なのです」

「まじで！..！」

「男？女？」

「男の子ですよ」

「男かよ」

「かっこいいのかな？」

「どんな子だろう？」

ガヤガヤと教室がクラスメイト達の期待で膨らむ。

「姫神の頃と反応が大違いだ」

と上条が姫神を見ると。

「ひ・めがみ？」

物凄いドス黒いオーラで不適な笑みを浮かべてる姫神がいた 耳をすますとなにか聞こえる。

「どうせ私なんて影が薄い…ブツブツブツ…フッフ（笑）」

五感が警告を出した 無視すると今の姫神には近づくなど。

（見なかった事にしよう）

「はい皆さん注目なのです。では転校生ちゃん入っちゃってください  
くい」

ガラガラ扉を開け転校生が入ってきた。

赤い髪に肩まであるストレート体型は普通だが夏用のカッターシャツからはガツチリした腕が見える

「さあ自己紹介をしちゃってください」

転校生がすうくと息を吸い込み

「天城 焰です みなさんどうぞよろしくー やあ女の子達、君の瞳に乾杯！」

沈黙するクラスメイト達そしてクラスを代表するように吹寄が

「はい上条属性一人追加ね」

「ちょっとまてい」

上条が突っ込みをいれる。

「俺はあんなキャラじゃないですよ。そして上条属性って一体なんですかー！？」

吠える彼は吠える俺はあんなキャラじゃないと。転校初日の自己紹介であんなキザで時代遅れな発言をする子ではないと。

しかしクラスメイトが騒ぎだした。

「上条属性がまた1人増えた」

「上条属性が4人！最悪だトラブルメーカー3人でも手におえないのに」

「学級崩壊の足音が聞こえる。」

「あははははー保健室へ行きます。」

上条が啞然とする。

上条属性とは多分、土御門、青ピアス、上条の3人の事だろうそして今の会話から上条は答えを導き出した。  
上条属性「トラブルを起こす者だと」

「ふざげんな！？なんで俺の名前が取締役代表者みたいな感じで使われてるんだ？土御門属性や青ピアス属性でもいいだろうが」

「語呂ゴロが悪い」

一発即答だった。

「にゃ〜カミヤんここで負けたら卒業まで一生トラブルメーカーとして扱われるにゃ〜」

土御門が手を差し伸べる

「カミヤん、僕らは負けるわけにいかないんや！立ち上がるんやでカミヤん」

青ピアスも手を差し伸べる。

そつだ。負けるわけにはいかない！

上条が2人の手を取り結束した。

上条が叫ぶ

「いくぞ今こそ俺達の平和（学校生活）を取り戻す時〜」

その後、色々抗議したが結局キレた吹寄に成敗され。3人はまた気絶した。

――

何が悪かったんだろう。焔は頭を抱えていた。今は始業式を終えて昼まで授業が あったが終わり昼休みにはいつている。自分の自己紹介をきっかけに教室は戦場とかしてしまった。3人が団結してクラス全員を相手に口論していたが結局怒ったおでこの広い女の子にど突かれ気絶してしまった。

焔は手元の書類をみる学園都市の入学手続きを手伝ってもらったアリッサからもらった書類だ。その1枚の用紙をみる

『自己紹介のポイント

1、第一印象が大事元気よく笑顔で自己紹介。  
2、名前を紹介するだけでは駄目みんなに親しみやすそうと思わせる事が大事。

3、カッコイイセリフを入れて好感度アップ例：君の瞳に乾杯など

アリッサ先生より 『

はあくため息がもれるやっぱりひかれましたよね。  
頑張って考えたのにな

まあいいかとりあえず保留にしてご飯食べるか。

彼はあまり考えるのが得意じゃない。その結果があのかれた自己紹介だ。

場所を移動して屋上へ行こうと階段をのぼる。ご飯はコンビニで買

システムスキャン

った弁当。昼からの身体測定がある為、空腹を満たさないと力がでない。

屋上への扉を開けようとすると声が聞こえた。

「にゃ〜吹寄は女の子という自覚がたりなすぎるんだぜい！」

「ほんまやね〜大人しかつたらまだ未来はあったのに残念な結果になつたね〜」

「君達少しは黙って俺と上条属性脱出作戦考えろよ」

「え〜カミヤんまだ諦めてなかったの？僕は無理やと思うけどね〜」

「そうだぜいカミヤん一度はられたレツテルは簡単には剥がれないにゃ〜ここ諦めて自分の運命をうけ……」

「絶対嫌だ」

ぎゃあぎゃあ騒がしい声、超聞き覚えがある。たった3人でクラス全員と口論をした騒がしい3人組だ。

「……………」

ドアノブに手をかけたまま思考が止まる。無視する理由はないのだが、なんとなく入りずらいしかしせつかく屋上まで来て引き返すのはしゃくなので勇気をだして入る事にした。  
ガチャ！

「どうも〜」

扉を開けて入った先の光景は……………

地獄絵図だった何故か弁当が散乱しており3人はまた熱い戦いを繰り広げていた

「つてめふざげんな諦めらめたら終わりといったのはてめえらだろ！」

「世の中諦めが肝心なんだにや〜」

「そつや諦めないで電腦型美少女軍団が僕の手元に来るなら頑張る気もでるのにご褒美なしではがんばれんわけやね〜」

殴り合い蹴り合い関節技を決め合い様々な攻撃が繰り広げられていた。

焰はよく分からないがこんな人達と同じカテゴリに入れられシヨツクを受けていた。

「これは平和とよべるんですかね？」

誰かに疑問をぶつけるが焰に返事が来る事はなかった。

しばらくして戦いは終わりバテバテになっている3人はやっと焰の存在に気がついた。

「はあ…はああれ転校生やないの？」

「にゃ〜確かゼエ…ゼエ天城 焰だっけ？にゃ〜」

「あっ？ほ…んとはあ…はあ…だ」



息切れしているアホ3人

「どうも〜はじめまして天城 焰です」

「はあ…はあ…ゼエ…ゼエ」

とりあえず呼吸を整わす3人。

「にゃ〜それにしてもあの自己紹介はないんだぜい」

いきなりそこを突っ込まれた。

「違うあれは誤解なんだよ」

必死に抵抗する焰。彼は自己紹介のポイントという用紙を見せた。  
3人は用紙を見た。

「これは…酷いな」

上条がどん引きする

「にゃ〜君の瞳に乾杯って例はちょいださいな」

「うんうん下手したら男子全員敵に回すセリフやね〜」

アリッサめ覚えてるよと焰は心に誓い再会の時まで怒りをこらえる  
事にした。

「そういえば自己紹介まだだったな俺は上条当麻。そして隣が土御

門と青ピアス」

「じゃあ俺も一応しところかな3度目だけど。俺は天城 焔10年ぶりに学園都市に戻ってきたんだ。まあそんなワケで街の事とか色々分からなからよろしく」

そこでチャイムが鳴った。

「やべっ身体測定だ早く行かないと怒られるぞ」

上条が立ち上がり号令をかけるが…

「ああ僕と土御門は今から一年生の身体測定見に行くからカミヤんとホムヤンで行ってきてええよ」

「はあ！？ちょい待てお前ら」

「じゃそついう事だにゃカミヤン。ホムヤンの案内頼んだぜい」

「何がそついう事だだ！？ちょいまでお前ら吹寄に怒られるは俺だぞ！」

2人は走り行く足を止めて振り向くそして親指を立てて

『グッドラック』

と一事言つと扉の彼方へ消えた。

ちなみにグッドラックとは幸運をという意味

「あいつら俺にグッドラックがあるワケねえだろちくしょうが、あ

「――もう不幸だ――！！！」

だいたい3人の性格を理解し焔は学校生活をおくるのであった。

〈第一話〉転校生〉完

## 第1話 転校生（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

お詫びですが上条当麻と土御門舞夏、インデックス、姫神の設定が抜けてました。ごめんなさい

さて次回はシステムスキャンです。

焰の超能力が明らかになります。

そしてバトルシーンもいれますので楽しみに。

では失礼しますありがとうございます

## 第2話 身体測定（前書き）

第2話です。

読みずらいかと思いますが、頑張ってください。

第3話からは読みやすくしますので、  
それではどうぞ

## 第2話 身体測定

お昼休みが終わり午後から身体測定だ。  
システムスキャン  
身体測定とは簡単に言つと、超能力測定の事だ。  
もちろん身長、体重も計つたりする。

身体測定の時間にとある2人は各測定室に向かっていた。

上条当麻と天城 焔だ。

さつきまで一緒にいた2人組、土御門と青ピアスは一年生の身体測定を覗きに行った。

もちろん何を覗きに行ったかと言つのは野暮である。

「あの2人っていつもあんな感じなの？」

焔が呆れた表情で上条に質問した。

「ああ。あんな感じだ毎日、毎日元気な奴らだ」

あなたも負けてない位元気何ですけど…と思つたが口を閉じた。

上条が質問する。

「お前、10年間学園都市離れていたんだろ？どこ行ってたんだ？」

「イギリス」

「はっ！？10年もか留学か何かか？」

「そんな感じ」

ほえ〜と上条は関心そうに話しを聞いた。自分に今からイギリスへ行けと言われても、カタカナ語しか話せない上条は間違いなく絶望的な未来に向かうだけだろう。

そこで2人のお腹がなった。とある騒動のおかげで2人は、お昼ご飯を食べていないのだ。

「土御門と青ピアスの奴らのせいでお昼ごはんが食べれなかったな  
…我ながら不幸だ」

あくまでも自分は関係ないと思ってる上条。

とそこで目的の教室に行く前に更衣室で着替えて行く事にした。

「おっここだな！」

焰が男子更衣室と書いているプレートの札を見つける。

上条の顔が青ざめる。

「焰ちよい待て！そこ違う！…！」

「はっ？」

しかし扉はもう開いていた。

焰は目を点にする。何故、女の子が着替えているのデスか？

下着姿の女子達も見られてる事を忘れてかたまっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が続く。

焰の鼻からは赤い液がタラリと出た。

上条は何か諦めたようにうつむきながら腰に手をあて。なにか声を発した。

「フツ（笑）」

ブチツと女子の何かが切れた音がした。

「またテメエらか上条おおおおお」女子とは思えない声達が聞こえる。

「なによ。また不幸だーーーーー！とか言ってやり過ぎそつとしたわけ？」

「天城までなにやってんだ。やはり上条属性だったかお前も」

「違う誤解なんだ」

焰が和解を心見るが…



「なにが誤解だだ！？ああそつだよここは五階だよ。だからどうした？」

ちなみにここは最上階の五階です

「話せば分かる皆さん落ちついてね？せっかくの可愛い顔が人を襲う前のゴリラになってますよ」

「なつ馬鹿焰！？」

上条が最悪を想定した。火に油を注ぐとはこういう事をいう。

「誰がゴリラじゃ〜女の子に向かって言うセリフか〜」

さつきから一番汚い言葉を放ってる女の名前はジャイアント本名は……知らない。

「ヤバいぞ焰逃げるぞ」

上条が扉を出て逃げようとしたが…

後ろには鬼神がいた

「上条やはりやってくれたな。」

「吹寄さん？なにか勘違いをなさっていますようですが。これ事故なんですよ」

「事故？」

「そう！事故何ですいや〜参ったまさかこんな事故がおきるとはな  
んたる不幸。」

（吹寄が笑ってる！？チャンスだ。ここでたたみかける。）

上条が言い訳を続ける

「まったくお茶目な不幸だ。もう、いけないでしょ？俺の不幸、皆  
さんに迷惑ばかりかけてすみませんねえ〜女子の皆さん。後で言い  
聞かせておくので今日はこの辺で…」

吹寄は笑いながらこう答えた。

「まあとりあえず、そこに倒れてる死体持って帰ってくれろ？」

「死体？」

「そう、し・た・い」

上条の首がギギギギギギと焰の方を向いた。

「!？」

上条の顔が青ざめた。

なんとジャイアントのバスケットボール級の太い腕が、壁ごと焰を  
押しつぶしていた

焰は壁にめり込んだまま動かない。

上条が震える。

「うつつっ嘘だ！？ありえない人が壁にめり込むなんて」  
そこで上条が気づく

（はっ！？まさか筋肉操作系の能力か？）

上条は自分の右手を見る

（イマジンプレイカー）

幻想 殺し

彼の右手にはあらゆる異能の力を問答無用で打ち消す力を持っている。

それは超能力でも魔術でもそしてゴリラ女の筋肉操作の能力を無用で打ち消す力

上条は確信する。

勝てる！？勝てるぞ！愛してるぞ俺の右手

ちなみに彼が不幸なのはこの右手のせいらしい。本当かどうかは不明である。

「吹寄、俺の最後の言い分聞いてくれるか？頼みます聞いてください」

吹寄は笑顔で

「遺言かしら？いいわよせめての情けで聞いてあげる」  
上条は右手を突き出し

「もし俺がジャイアントに勝てたら今回の事故はなかった事にして

もらおう」

男として最低の発言である。仮にも男の子が女の子を喧嘩で打ち負かすと言っているような事だ。

吹寄が眉毛をピクリと動かす

「あんた？正気？」

「俺は正気と書いてマジと書く男だぜ」

もはや彼に男を名乗る資格はない。

そしてジャイアントが雄叫びをあげた。

「かかってこいや！上条。テメエを粉碎してやる。女だと思って甘く見るなよ？」

「はっテメエを女だなんて思ってねえよ」

現在。上条当麻の株は下がり続けてとどまる事知りません。

「いいぜ！来いよ上条」

「覚悟は決まったようだな！？ジャイアント」

ジャイアント

身長215センチ。

体重はひ・み・つ

三つ編みで今はリボンのついた下着をはいており。上半身はプロテクターに見えるシャツを着ている。想像がしにくいかたはギルティ



ちなみに今日女子の人数が多い為、二年生の女子は女子更衣を使えないので。

男子更衣で着替えるように朝のホームルームいわれていた。

男子は自分の教室である。

まあ聞いて無かった本人達が悪いんだけどね

そうして戦いは終わった。残酷な結果に。

—————

### 保険室

「大事ですか？上条ちゃん？痛む所はありませんか？」

小萌先生の声が聞こえる。生きてるのか？俺は？

上条はベッドから起き上がる。

（まさかあのジャイアントの力が能力とは関係なかったとは…）

そこで小萌先生のほっぺが膨らみ怒り出した

「まったく上条ちゃんは何をやってるんですか？ ジャイアントちゃんに喧嘩なんか売って、ジャイアントちゃん泣いてましたよ。

女の子の着替えて中に入る上条ちゃんが悪いのに………聞いてますか？上条ちゃん！」

ジャイアントが泣いてた！？あの野郎カマトトぶりやがって。

小萌先生の説教が続く。

「先生は上条ちゃん達をそんな風に育てた覚えはないのです。まったく土御門ちゃんといい青ピアスちゃんといいなんで先生の言う事が聞けないのですか？」

「はっ？土御門と青ピアスも居るのですか？」

「えっ？いますよそこに」

小萌先生が隣のベッドを指差した。

「土・御・門？青・ピアス？」

上条はまるで信じられない物を見た目で2人を呼ぶ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

2人は答えない。彼らは包帯でグルグル巻きのミイラ状態になっていた。

小萌先生が呆れた声で

「2人共、一年生の身体測定を覗いてる所を吹寄さんに見つかって。その後一年生の能力一斉攻撃をくらったみないんですよ。」

彼らに可哀想なんて言葉はいらないが、あまりにも無惨である

上条が思いだしたように

「そついえば焔は？」

焔の姿が保険室にない。

「天城ちゃんなら先に起きて身体測定にいきましたですよ」

何故あの状態でうごけるだと思っ。上条本人はまだ体の節々が痛い。

(そついえば、あいつの能力って何だろう？まだ聞いてなかったな)

上条はそんな事を考えながら小萌先生の説教をくらっていた

能力測定室

薄暗い部屋の中で焔は能力測定をしていた。



日中だが部屋に光がない。能力測定を行ってる最中もしもの事がないように、部屋を特殊な壁で覆っている。

彼が居る部屋は

(パイロキネシスト)

発火能力者測定室

焰はそこで測定を行う

「さあ始めて下さい」

試験官の先生が開始の合図を出した。

測定方法は簡単、両手に熱耐石と言う手のひらサイズの石を持つ

その石に自分の炎を吐き出すだけ。

石は電極に繋がれておりその先の測定機 に炎の出力が数字ででる

ただし、ただ出力が高いだけでは駄目、試験官が言う炎の温度を放出し、クリアしたら徐々に出力をあげるの繰り返し。

出力と調整が測定の基準となり、高い出力を調整できればそれだけレベルが上がる。

焰は集中し炎を灯す。

――――  
廊下

なんとか体が動くようになった上条はいち早く測定を終え一人放浪していた。

もちろんレベルは0であったが彼は気にする様子はない。

今日はもう授業はない。測定した人から担任に伝え、寮に帰る事が許される。

ちなみに土御門と青ピアスはまだ死んでいる

(仕方ない。焔を待って一緒に帰るか。寮は一緒のはずだし。)  
と思ってる廊下が握わっていた。

発火能力測定室からだ。

「おいおいまじかよ!」

生徒達の賑やかな声が聞こえる。

「あいつ誰だ?」

「転校生らしいわよ」

「レベル4だって、大能力者よ！」

「はあ！？こんな能力値の低い学校で大能力者だって？」

「どうやらどこか転校生がレベル4を記録したらしい。」

上条の学校は能力値は他の学校より低くレベル3が4人いる程度だが、それでも表彰物だ。

上条がふっと思う。

「転校生だって？まさか！？あいつか！」

上条が生徒を払いのけ、測定室を見るそこには彼がいた。

「おつ当麻じゃん。なんかすげー記録がでちゃって」

転校生、天城 焔が立っていた。

「お前が大能力者か？」

「そうみたいだな。自分でもビックリだよ」

焔が測定室から測定結果の紙を持って出てきた。

最大出力4500

調整出力4000

結果レベル4

と書かれている。

「これで、レベル4かよ」

上条が啞然とする。

「試験官の先生が言うには最大出力は足りてるんだけど、調整出力が足りないみたいだね」

「それさえクリアしたら」

「うん、レベル5だったみたいだね」

生徒が騒ぎだす。

「まじか!？」

「惜しいあとちょっとじゃん。」

「レベル5が一番近い男だね!」

ガヤガヤ騒ぎだす。

噂を嗅ぎつけた生徒が廊下にたくさんいた。

「あの狭いんですけど」

焰が嘆いた。

「おいレベル4様のお通りだみんな下がれ」

一人の男の指示で全員が道をあけた。

「あの…そこまでしなくても」

焰が対応を違う生徒をみて、混乱しだす

とそこで一人の男が叫んだ。

「テメエら何そいつを王様気取りに扱ってやがる。この学校のエース、滝山様がお通りだぞ」

この男の名前は

(たきやま かおる)

滝山 薫

この低能力者の学校でエースを名乗る男

リーゼントに夏なのに学ランという番長を意識し過ぎて痛い男と言われる。

ちなみにレベル3である

「おい、転校生。テメエレベル4だからっていい気になるなよ」

「いやなっぺないですけど。」

「テメエに三年生の意地とレベル3の誇りとエースの尊厳を賭けて

……」

「賭けて……………?」

「タイムンじゃ!」

「お断りします!」

迷いもなく即答した。

「ぶさけてんのか? シャバゾウが! 後輩の分際で生意気だぞ」

「だって俺がタイムンはる理由ないもん」

「だまれ、プライドはないんか? お前」

「そんな安っぽいプライドは持ってない」

ブチと滝山がきれた。

「いわしたる。殺したる。表へでんかい」

「いい加減にしやがれ」

上条が横から口をはさんだ。

「嫌だつて言ってる相手に無理やり喧嘩なんか売ってんじゃねえよ

!

「なんなら俺が喧嘩買ってやる。」

上条が滝山を睨みつけるが相手は馬鹿にしたように

「だまれ無能力者、テメエが無能力者って事は知ってたよ。無能力者は無能力者らしく無能な日々は無能に明け暮れてればいいんだよ」

「なんだと!」

上条が今にも殴りかかりそうになる

「無能力のゴミが吠えんなよ、無能力者」

ブチ!と血管がぎれた音がした。

しかし上条からではない

「おい!そのリーゼント頭」

「あつ?」

「表にでろや!タイムンはってやるよ」

焔がキレていた。

「友達馬鹿にされて黙ってるほど、俺は優しくねえぞ。」

「おい!焔。タイムンなんかはらなくていいから、俺が変わりに」

「嫌だ!」

焰が珍しく叫んだ。

「友達馬鹿にされて 能力がないからって 理由で馬鹿にされて俺は悔しい、コイツは許さない、許しちゃいけないんだ。」

焰は誰かの為に真剣に怒れる人間だ、自分は馬鹿にされたって罵られた方がいいが。友達を馬鹿にされて笑って明日を過ごせる人間じゃない。

「出るよ表に」

「上等じゃねえか」

滝山と焰はグラランドに向かって行った。

-----

## グラランド

2人はグラランドの真ん中で向きあっていた。

「おい止めた方がいいんじゃないか？」

「先生に伝えた方がいいんじゃないの？」



「吹寄はいないのか？」

「吹寄さん、保険室にいるみたい」

生徒達が心配そうに見守る。

先生達は滝山の下っ端が上手く誘導しているようだ。

そしてグラウンドには身体測定がある程度終わっており誰もいない

滝山が口を開く

「来いよ。大能力者」

「行くぜ!!」

2人の戦いがはじまった

最初に動いたのは滝山。

滝山の手から水の塊が生まれた。

「俺の能力は水流操作系の能力だ。お前の能力は発火能力らしいが、相性が悪かったな」

滝山が勝利を確信した。

「行くぜ！火は水で消えるんだよ！」

滝山の手から水の竜巻が焰に向かって発射された。

水の竜巻はそのまま直線に焰に向かい

彼の体に直撃した。

ドン！と物凄い音がなり響いた。

水の竜巻は焰の体を打ち抜いていたはずだったが。

直撃したはずの水の竜巻は水蒸気になって白い煙に変わっていた。

「なっ馬鹿な！」

焰の手からは丸い炎のシールドがでていた。

「驚く事はないだろ？火は水で消える？確かに消えるが……」

「水が火に消される事もあるんだよ」

「水蒸気って言ってな？水の温度が沸点を超えると水が気体になる現象だ。」

滝山がもう一度水の竜巻を生み出し放出したがまた水蒸気に変わってしまった。

「逃げるなら今の内だぞ、お前じゃ勝負にならねえ」

「ふざけんな！なら俺の最大技で勝負を決めてやる」

滝山が水の塊をだし水の塊が膨張し破裂した。

大量の水が膨張し破裂した事によって一斉に焔に津波のような物が向かう。

「これで、焔のシールドも丸ごと飲み込むってわけだ。勝負あったな！」

焔が焔のシールドを解き。右手を差し出した。

「加減はしてやる。ただし逃げろよ」

「逃げるのはお前だ大能力者！」

高さ5メートルの津波が焔の頭上まで襲う

「終わりだ！大能力者ーーーー！」

滝山が叫ぶ

そこで焔の右手が焔に灯されていた。

焔の右手の焔が圧縮され

圧縮を解放し焔のレーザー光線が一直線に津波を打ち抜く。

「なんだと！！」

焔のレーザー光線が 勢いよく発射され、周りの土を巻き上げ風が熱風へと変わった。

炎のレーザー光線が滝山の横を通り抜け 衝撃で滝山が10メートル飛んでいった

「ぐわあああああ！」

滝山の体が地面に叩きつけられ、意識を失った。

あまりの焔の攻撃の凄さに皆、口があいたままだった。

焔が出した一直線の炎

フレアバスター

手に溜めた炎を圧縮しながらせき止め、せき止められた炎を一気に放出する。

啞然となっている生徒達。そこでアンチスキルをやっている黄泉川と言っ先生の声がした。

「コラッ！なにやってるじゃんよ」

「うわっやべえ黄泉川先生だ」

「みんな逃げろ」

ダーーーーーと物凄い勢いで生徒達がグラウンドから姿を消す

ゴキブリ並みの速さとはこういう事を言うのだろつ。

「あつお前ら全員待つじゃんよ」

黄泉川の声も虚しく全員退散してしまった。

残されたのは、上条当麻と天城焰そして気絶している滝山だけとなった。

「喧嘩に能力使うとはどういふことじゃん？説明してもらおつじゃんよ？」

上条が答える

「焰は悪くねえ悪いのはこい……………」

「いいんだ。当麻」

焰が口を横からはさんだ

「能力を使いその人を傷つけたのは確かです。罰は受けます」

「いい度胸じゃんよ」

黄泉川は焰を連れて職員室に向かった。

上条がグラウンドに取り残された。

「なんでだよ。あいつなんにも悪くないだろ。あいつなんで本当の事いわねえんだよ。」

上条が呟いた。そこで気絶していた滝山が目を覚ます。

「あれ？なんで俺はここに寝てるんだ？」

そこで滝山が気づく

「あっそういえばあの野郎は！」

「連れてかれたよ。お前をかばって、罰を一人で受けに」

「はっ？なんで？」

「最初あいつ、お前の喧嘩断ったよな？」

「ああ、それで逆に腹がたって更に挑発したわけだが……」

「多分、あいつ挑発されたとは言え、能力を使かってお前を傷つけた自分が許せなかったんだよ」

「なっ最初に喧嘩を売ったのは、俺だぞ 能力を使ったのも俺が先だ、あいつが気にする事じゃ」

「優しいんだよ」

はっと滝山が息をのんだ

「あいつはそういう奴なんだよ」

滝山は思う。俺はただ嫉妬であいつに喧嘩を売った。

あいつは嫌だといったのに俺が挑発したせいで嫌な喧嘩を買った。

そしてあいつに無理やり能力を使わせたせいで、あいつはケガした俺より、心が傷ついたんだ…

滝山は自分の小ささに気がついた。

そこで上条が背を向けて、呟く。

「俺、今日あいつの友達になれてよかったわ。さて俺も職員室であいつを待とうかね」

上条が職員室に向かう足を止め最後に

「どつするかは自分で決めるよ」

一言いい職員室へ去っていった。

滝山はしばらく考えこんだ、そして立ち上がった。

「自分で決めるだって？当たり前的事いうんじゃないかねえ」  
彼も職員室へ走っていった。

職員室

焰と黄泉川そして小萌先生が三人で話し合いをしていた。  
職員室の外で生徒が騒いでいた。

「天城君、まだ話し混んでるね？」

「可哀想だよな？」

「早く解放してやれよ」

天城の身を心配した生徒達が集まっている。

そこに滝山が走りこんで来た

「おい、滝山だ」

「何しに来たんだよ」

「帰れよお前のせいで天城は怒られてるんだぞ」

滝山に敵意を向ける生徒達



しかし上条が

「おいみんな通してやれ」

上条が滝山を通すように言った。

「おい、上条正気か？」

「いいから通してやれ」

生徒達が渋々道を空けた

「すまねえな」

滝山が礼をいって職員室に入った。

ガラガラガラガラと滝山が職員室の扉を開けた。

「待ってくれ、そいつは悪くねえ。俺が全部……」

滝山の言葉を小萌が遮った

「は〜い事情はだいたい生徒の皆さんから聞いたのです」

「なら話は早え！罰は俺一人が受ける」

「いや2人共、罰を受けなくていいじゃん」

「ぶさけんじゃねえよ。なんでだよ俺はコイツを……」

「確かに滝山ちゃんは先輩として大人げない行為をしたのです。」

「でもちゃんとこうして自分のした事を反省して、ちゃんと焰ちゃんに謝りにきたじゃないですか」

「それって誰にでも出来そうで出来ない事なんですよ。たいていの人は先に自分を守ると嘘をつきます」

「でも滝山ちゃんは嘘をついて自分を守るとせず、ちゃんと職員室に自分のした事を正直に言ってくれました」

「そんな滝山ちゃんを罰する事なんて先生には出来ないのですよ」

「そういう事じゃん お前が謝りにきたら罰は受けさせないって月詠先生と決めてたんだ。って事で2人とも罰を受けなくていいじゃん」

「でもよ…俺は」

滝山はそれでも自分を許せなかった。

そこで焰が口を開く

「なら俺と友達になってくれないか？転校したばかりでよくこの辺分らないし、そうしてもらえると助かる」

「お前……………」

焰が握手を求めた

滝山がその手を握る

「へっかなわれないなお前には、よし！今日からお前がこの学校のエースだ」

「エース！いやそれは……困るかも」

「いや、これは受け取ってもらうぞ！これは継承式だ」

仕方ないので渋々受け取った焰。

受け取ったのはポケットから取り出した五円チョコそして溶けている。

「一件落着なのです」

「いやーでもよかったじゃん、今日が身体測定の日で、グランドの事は身体測定の一貫って事で片付けておいてやるじゃんよ」

2人が気がきく性格 でよかったと思う焰、そこで上条が職員室に入ってきた。

「おーい終わったなら帰ろうぜ焰」

「ああ今行く！」

「じゃあな滝山また明日学校で合おうな」

焰が手を振る。

「おっしや、じゃあな友よまた明日な」

滝山が手を振り、焰と上条は職員室からでていった。

職員室に残った滝山、滝山も職員室からであろうとした所で足を止めた。

振り向き小萌と黄泉川に

「サ・サンキューな」

照れながら2人に礼をいった。

小萌は満面の笑みで

「無問題もーまんたいなのですよ」

と一言いい笑顔で滝山を見送った。

滝山が職員室を去り小萌と黄泉川は一段落し、タバコに火をつけた。

「いい子達じゃんよ」

「そうですね。子供は素直でかわいいのです」

黄泉川は目を細め

「素直…ね」

「どうしたんですか？黄泉川先生？」

「いやっ家にいるひねくれ少年もあれくらい素直だったらなって思っただけじゃん」

「？」

黄泉川の言ってる事が理解出来ず小萌は首を傾げた。

タバコを吸い終わると2人は仕事にもどった。

-----

### 学生寮

学生寮は当麻と同じで部屋は二個隣だった。

2人はクタクタでそれぞれの部屋に帰って行った。

焰は自分の部屋に入るとベッドに横になった。

「友達たくさんできたな。当麻に土御門に青ピアスそして滝山」

焰は今日の事を思い出しながら一人で笑っていた。

焔は写真立てに入っている写真を見た。

女の人と男の人そして女の人に抱かれている焔。

焔は写真に話かける

とても寂しい声で

「ねえ俺本当にこんなに幸せでいいのかな？」

「……教えてよ」

「父さん……母さん……」

そして彼はそのまま眠りについた。  
どんな夢を見てるのは彼しか知らない。

〈第2話〉身体測定〈完

## 第2話 身体測定（後書き）

読んで下さった皆様ありがとうございます。

第3話からはちゃんと読みやすくしますのでご期待ください

第3話は御坂 美琴が主役になります。

では感想お待ちしてまゝです。

### 第3話 とある少女の追跡記録（前書き）

第3話です。

読みやすくしましたのでどうぞご覧ください。



### 第3話 とある少女の追跡記録

#### 常盤台中学

常盤台中学とは、学園都市の五本の指に入る名門校。

入学条件は極めて難しくレベル3以上が必須条件となっている。

そんな名門校常盤台中学も3日前に入学式があり、たくさんの新入生がはいつて来た。

そして入学式から3日たった常盤台中学の校内は何故か騒がしい。

理由は常盤台中学のEースが学校内を歩いていたからだ。

「見て見て御坂様よ」

「本当だ！昨日写メ撮りそこなったからチャンスよ。」

「あーあやっぱり風格が違うわよね。どっにかしてお近付きにならないのかしら。」

好き勝手言っているのは、全員新入生達

まあそれもそのはず、学園都市でも、7人しかいないレベル5学園都市の第3位の実力を持つ者が同じ学校で学校生活を送っているのだ。

レベル5と言えば分かりやすく言うと芸能人みたいな者だ。

今、学校から帰ろうと校門に向かってる、常盤台のエース彼女の名前は

(みさか みこと) 御坂 美琴

名門常盤台中学のお嬢様肩まである茶色の髪に化粧の必要のない顔立ち、半袖の白ブラウスにサマーセーターを着ており 灰色のプリッツスカートをはいている。

またの名前を

(レールガン)  
超電磁砲 御坂 美琴

彼女は学園都市でも最強の電撃使いなのだ。

そんな彼女はぼやく。

「また、このシーズンがきたわね…」そう彼女は今年3年生この騒動は去年2年生の時もあった。

この騒動の体験をするのはこれで2度めだ。

そんな彼女の横を歩く者がいた。

「まったく鬱陶しい(うっとうしい)蛇じゃ馬共めわたくしのお姉様をジロジロ見やがって」

ツインテールで見た目は幼いが同じ常盤台中学の後輩。

(しらい くるこ)

白井 黒子

常盤台中学のレベル4のテレポーター。性格は、美琴限定の変態で美琴の着替えを盗撮したり、下着を自分のベッドに隠すなど行き過ぎた行為が目立つ。

しかしその反面、自分の信念は絶対曲げない、他人の為なら自分の体が傷ついても構わない性格。

まあ性格の半分以上は美琴への変態願望が強い為、美琴からは強い口調で怒られたり、電撃を浴びせられる事は珍しくない。

そんな美琴さん溺愛の白井さんからしてお姉様が他の女(敵)からチヤホヤ見られるのはあまり嬉しくないわけだ。

「まあ、この騒動も後、一週間すれば治まるから我慢するか。」

「安心して下さいお姉様、お姉様が一週間も我慢する必要はありません」

「はい？」

「この白井黒子今すぐ風紀委員シヤルジメンとしての権利を駆使して、お姉様に群がる、愚民どもを……」

「ハイハイ職権の乱用は禁止でしょ？後 私が我慢するって言ってるんだから、あんたは何もしなくてもいいのよ。」

「おっお姉様……」

白井が感激の瞳で美琴を見た。

「な…なによ」

「わたくしは自分の小ささを知りました。お姉様…そんな黒子を許してくださいませ」

何故かブラウスのボタンを外し始める変態。

「あんだ…何やってんの？」

美琴に嫌な予感が全身に駆け巡った。

「お姉様…これはせめてものお詫びですわーーーー！」

「!!!!!!!!!!!!!!」

美琴の体が固まる。ブラウスのボタンをすべて外し、派手な下着を身にまとった白井が、華麗なトリプルアクセルを決め美琴に向かってきた。

「止めんか！この度変態後学校の真ん中で服脱ぐなーーーー！」

バチバチ！と美琴の体からでた紫電が白井を襲う。

「あ~~~~~お姉さま最近の過激なお戯れのおかげで~~~~しる~~~~気持ちよ~~~~」

感電しながら何かほざく白井。

「まだそんな寝言をほざくかーーーー」

「あゝおねええゝさまあああああゝ激しいゝあああああ」

そんなやりとりを校門前でする。2人を見て新入生は口をポカンと開けたまま固まるのであった

――――  
10分後

美琴は電撃を黒子に浴びせていたが、あまり効果が無いため途中で諦めた。

「あんた、どついう体質してるのよ」

呆れたように白井に問う美琴に白井は

「お姉様の愛の鞭を受け入れる体質に変わってしまいましたの」

アホかコイツはと心の中で絶句する美琴

2人は今校門を出てある場所に向かっている。

友達からお茶しませんか？と言われて第7学区の喫茶店まで向かっている。

「あっそついえばお姉様、今朝の学園新聞見ました？」

「学園新聞？そついえば今日はチェックしてないわね」

白井が学園都市が発行している学園新聞を鞆から取り出し見せた。

「なんか面白い事かいてなかった？巨大ゲコ太がファミレスに出現とか？」

「またお姉様ゲコ太なんて…そんなの学園新聞に載りませんわよ」

なーんだとため息をつく美琴。

「わたくしが言いたいのはこの記事ですわ」

白井が記事をピックアップして美琴に見せた。

3日前の身体測定の結果だ。レベルが上がったり、大幅な成長が見られた生徒を学園新聞に載せる事がある。

「え〜と何々？」

美琴が新聞に大きく書かれている見出しを読み出す。

「8人目のレベル5なるか？最強の発火能力者現る！」

「どうやら低能力者の学校でレベル4を観測した生徒がいるようです」

「別にレベル4なんて新聞の大見出しに載せる事じゃ……」

「ここ見てくださいませお姉様」

白井は測定結果が詳しくかかれてる所を指差さす。

「じゃは…」



美琴が気づいた。

「そう、最大出力ならレベル5クラスですので、調整出力が少したり  
ませんですけど……」

「ふーんじゃあ実力的にはレベル5って事ね」

美琴の顔がにやけた。

「お姉様？もしかしてまたろくでもない事を考えてらっしゃるの  
は？」

「なっ何よ！ろくでもない事って……」

「例えば、あら面白そう、私とどっちが強いのかな？とか？」

「うっ！そんな事こればっちも……」

「どうせレベル5になるのなら順位を先に決めるところかしら！とか  
？」

「……そんな事思ってもないわよ、全然さっぱり、ボツキリ」

「お顔に出ていますわよ」

「うつうつるさいわねあんたは……」

「お姉様、何度も申し上げますがあまりトラブルを起こされは困ります」

「なによ……トラブルって私なんかした？」

「自覚がなかったのをごさいましたの？」

白井がため息をつき肩を落とす。

「だから何かしたかって聞いてんのよ……って無言のまま横目で見ながらコソコソ呟くなー……」

今日も元気なお二人はぶつぶついいながら喫茶店まで向かうのだった。

第7学区とある喫茶店

ちよつとお洒落な喫茶店で2人の少女は友達を待っていた。

2人は店の外の席で話合いをしている。

「佐天さん、本当にあの話をするんですか？」

このか細い少女の名前は

(ういはる かざり)

初春 飾利

学校帰りでセーラー服を着ている少女、体が小さく幼いためセーラー服すら似合わい珍しい女の子。頭にはたくさんのお花がもられている。

「当たり前でしょ？初春君！この話をする為に御坂さんと白井さん  
を呼んだのだから」

この妙に元気ハツラツな少女の名前は

(さてん るいっ)

佐天 涙子

初春と同じ中学のいつも明るい少女。

御坂、白井、初春のムードメーカー的存在。長いサラサラの黒髪に初春と違いセーラー服がよく似合う少女。

「はあく佐天さんまたそんな根拠もない話を……」

「いやいや今回ののは本当もんならだって、目撃証言もたくさんあったし」

「だいたいこんな科学の街で……」

「あれっ御坂さん達だ！おい御坂さん、白井さんこっちです」

佐天は御坂達を見つけ大きく手を振る。

隣ではあくため息をつく初春。

こうして4人は合流したがどうも御坂と白井の様子がおかしい。

2人共息が荒く、かなり疲れている。

「どうかしたんですか？御坂さん？」

佐天が声をかける。

「いやっはあ…はあ…別に」

御坂はかなり息が苦しそうだ。

そこで初春が白井の方を見て。

「白井さん、また御坂になにかしたんですか？」

「失礼ですわね……はあ…はあ…何もありませんいつもどおりですわ」

「ああ、なるほどいつもどおりですか」

2人はそれでだいたい理解したらしい。

実はあの後、美琴と白井の口論はエスカレートし、逆上した美琴に追いかけられた白井、そのままの勢いで喫茶店まで来たという訳だ。

「まあまあそんな事より」

佐天に2人の苦勞はそんな事ですまされてしまった。

「これ！見てください」

佐天は初春が持っているノートパソコンを取り出し2人に見せた。

「え〜と何々？学園都市の都市伝説？」

美琴がまたかつ！という目で読み上げた。

佐天は大のオカルト好きなのだ！

「佐天さんまたですか？何度も申し上げますようにオカルトなんてこの科学の街に……」

「今度は本当なんです！！」

バン！と机を叩き佐天が続ける。

「確かに今までは全部オカルトじゃなかったかもしれません。脱ぎ女なんてただの変わった人間だったし……」

佐天がいままでのおカルト話を捨て、間違いを認めたら

「しっかーしっし！」

そこで言葉をきり

「今度は本物なんです。これを是非見てください」

「え〜と何々？」

2人は佐天がピックアップした大きなタイトルを読んだ。

『第7学区の裏路地で不幸だあああああといいなながら、追跡する能力者の能力を打ち消す怪しい生物』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

美琴と白井の顔が固まった。

「ほら佐天さん御坂さんと白井さんの顔が固まっちゃったじゃない

ですか！」

「え〜だってありえなくないですか〜？追跡してくる能力者の能力を打ち消すのに不幸だああとか言って逃げるなんて」

「それに前もあつたじゃないですか！どんな能力も打ち消す男って言う都市伝説が、きつとその続報なんですよ」

しかし美琴と白井は反応しない。

2人は彼の正体を知っている。

絶対能力者進化実験で美琴と御坂妹の命を拳一つで守った少年。

白井も彼を知っている。愛しのお姉様といつもイチャイチャしている。白井の敵。ラスボス

そう彼の名前は上条当麻。レベル0の無能者で右手に幻想殺しを持つ少年。

予想外の所で彼の存在がたまたま、2人はまだ思考が固まったままだった。



「むっ御坂さんも白井さんも馬鹿にしてっ初春！」

「はい？」

「例の証拠動画を」

「えっあれ見せるんですか？」

「早く！」

「はいはい今出しますねっ」

初春は渋々ノートパソコンにあらかじめ登録してあった。動画をみせる。

2人は思考が固まったままノートパソコンに目を向ける。

そこには目撃者のコメント動画が流れていた。

ヤンキーみたいな少年の証言。

「本当なんだ！いきなり肩をぶつけられて、殴るとしたら不幸だあああといいなから逃げていったんだ」

ある可愛い系の女子生徒の証言

「裏路地でこけちゃって、スカートがめくれてる所を見られたんです。そしたらラッキーいや不幸だあああといいなから逃げたんです。」

その後腹がたつて能力をぶつけたんですけど、右手をかざされた瞬間に能力が消されたんです。」

オタクっぽい人の証言

「マジカルカナミンのフィギュアを買いにいった帰りにツンツンのウニが走ってたんだな〜ウニが走るなんて世の中怖いんだなあ〜」

などその他にも数十件も動画を見られされた後、最後に専門家のコメントがあった。

白い髪のココヘットの証言

「それは、未確認生物UMAだ。間違いない、まさか学園都市にいたとは…誰か捕獲して俺の所まで送ってくれ」

「ね？ね？御坂さんも白井さんも信じてくれました？」

しかし美琴と白井は頭を抱えて心の中でぼやいていた。

（なにやってんのよーあの馬鹿！学園都市に載るほどの不幸って  
どういふ事よ）

（不幸、不幸ってお姉様の心を虜にした分際でまだ不幸とほざきま  
すの、いいですわこの白井黒子への挑戦状と受け取りました。フッ  
フッフッフッフ）

「あの〜御坂さん？白井さん？どうかしたんですか？」

佐天が無視された事によって少々怒り気味だった為、美琴は本題に  
入る。

「…で佐天さんはその未確認生物をどうしたいの？」

「捕獲します」

「はい？」

美琴と白井の声がはもり思考にノイズが走る。

「だーから今から探して捕獲するんです」

今度こそ2人の思考が完璧に死んだ。

「その未確認生物の存在を突き止めて例の専門家の人に送るんです。」

読者の皆さん佐天が言ってる事分かりますか？

彼女は上条当麻を捕まえて、ダンボールに詰め宅急便で送るって言ってるのですよ。

そんな事許されるのですかね？

そこで美琴が死んだ思考をもう一度働かせ佐天に尋ねる。

「佐天さん正気よね？」

「はい！頑張って捕まえましょっね」

「今日から佐天さんずっとこの調子なんですよ」

「さあ！事情が分かったら行きますよ。御坂さん、白井さんそして初春！」

「私もですか！」

「あんたが一番に来なくてどうすんのさ？」

「ジャツジメントの時みたくバックアップお願いね初春！」

「ふえ~~~~~」

やる気のない声を出す初春、当然といえば当然である。

「さあさあ御坂さん達も行きますよ」

「いや！私と黒子は用事が…ってええ佐天さん！？」

佐天に襟首を引っ張られ、ひこずられる美琴と白井。

学園都市最強の電撃使いでも彼女を止めるのは不可能であった。

-----

### 第7学区とある裏路地

結局佐天に無理やりつれて来られた3人。

佐天は捕獲の為に、どこから出したのかわからない金属バットと赤色のヘルメットをかぶっていた。

金属バットでどうするかは想像したくもない。

「よし！みんな指示した通りに散開しちゃって下さい」

やる気のない三人はそれぞれの位置に散開した。

「絶対捕まえてやるからUMA」

一人やる気の佐天さん。格好からすれば佐天はよっぽど怪しい。  
新たに

『学園都市の裏路地でセーラー服の少女が金属バットを持って出現  
！』

などと新しく載せられそうだ。

散開しながら、美琴と白井は話をしていた。

「まったくどうしてあの馬鹿の為にこんな事しなくちゃいけないのよ」

「あらあらお姉様、本当はあの殿方に会いたくてウズウズしてるく  
せ」

美琴の顔が急激に赤くなった。

「ばっ…そんな事あるわけないでしょ！」

「黒子は知ってますのよ〜ん。お姉様がいつもあの殿方から メールが来ないか毎日携帯を確認してる事を メールが来ないから自分からメールを送るとしてのに恥ずかしがつて一人で落ち込んでいる事も黒子は全部お見通しです」

「違うわよバカ！ たく私こつちだから後、その話一応誰にもしちや駄目だからね」

逃げるように話をきり目的地に向かう美琴。

「まったくお姉様の心を奪うなんて悔しい〜〜」

ハンカチを噛み締める黒子。彼女もぶつぶついいながら、あの殿方をこらしめる為、目的地に向かうのであった。

-----



2時間後

周りは真っ暗になり今は午後7時。

「はあくやっぱり来ないか」

一人落ち込む佐天。

「そろそろみんな解放してあげないと、流石にまずいわね」

佐天は付き合わせた三人に謝る為携帯を取り出し、電話をかけようとした所……

「不幸だあああああ」

来た！佐天は金属バットを片手に声があつた方に向かう。

裏路地の角を曲がり 狭い通路を全力疾走そして、更に角を曲がり 目的の場所へとついた。

そこにはツンツン頭の未確認生物（上条当麻）が尻餅をついて地面に座ってた。

彼は特売品の卵をこけて割ってしまったようだった。

「ううう…焔に頼まれていた卵を割ってしまった……せつかく1時間も並んだのに……なんたる不幸おおおおお」

佐天は確信した。

コイツだ！

未確認生物（上条当麻）も佐天の存在に気づく。

「はい？なんのようでせうか？」

「フッフフやっと思つけたわよUMA2時間もまったかいがあつたわね」

UMA？と未確認生物（上条当麻）が首を傾げていると……

彼は気づく。女の子が金属バットを持って、まるでターゲットを見つけた殺し屋みたいな少女を……

上条当麻の全身が嫌な寒気を感じた。

「さあ捕獲しますから逃げないでくださいね？」

「捕獲???俺をか？」

「他に誰が？」

上条当麻はヤバいと思い立ち上がり

逃げだした!!

「コラー待てーーーー」

「くそつ何だよ何なんですか?この不幸は有り得ないこんな現実じゃない」

逃げる彼は逃げる。

金属バットをブンブン振り回し、捕獲すると奇妙な言語を放つ少女



そして未確認生物に 逃げられた佐天は一人裏路地にいた。

「なんて逃げ足なのはあ……はあ……とりあえず初春に報告を……」

そこで横から声をかけられた。

「おい、ねえちゃんこんな所に一人でなにやってんだ？」

いかにもたちが悪そうなチンピラに囲まれてしまった。

「こんな暗い所に女の子一人で来るなんて、危険って事位認識してなかったのか？」

どンドンチンピラが出てきて10人位に囲まれてしまった。

（まずっ 未確認生物追いかけてたら、こんな所まで来てたんだ。）

佐天に寄り添う男達

「いまからいい事して遊ぼうなーへへへ」

(まずっ)

近寄って来る男達

「さあ全員で回せ今日はご馳走だー」

「やめてえええ」

佐天に男達が手を伸ばそうとした瞬間、紫電が男達に降りかかった。

「ぐわああああああ」

男達が倒れて行く。

そこで

「大丈夫ですか？佐天さん？」

初春が心配そうな顔で近づいて来る。

「…初春」

横には美琴と白井がいた

「大丈夫？佐天さん？騒がしかったから、来てみたんだけどどうやら間一髪ってとこね」

「全くいい歳にもなつて女の子を大勢で囲むとは許せませんわね。初春！アンチスキルに連絡を！」

「はい！」

「まったく佐天さん！」

美琴が佐天に少し凄みがきいた声で話しかける。

「何かに夢中になるのはいいけど、もう少し周りをみて、こんな裏路地の奥深い場所、危ない事位分かってるでしょ？」

「はい、すみません」

「ならよし！疲れちゃったし後はアンチスキルに任せて帰る」

「そうですね〜門限も過ぎてますし、教官に見つかったら……」

美琴と白井が思いだしてはいけない事を思い出してしまった。

教…官…？

2人の思考がまた止まってしまった。

「御坂さん、白井さん、佐天さん、アンチスキルがきたので事情説明って、うわぁどうしたんですか？」

初春が固まった美琴と白井を見つけた。

「いやーいきなり凍りついちゃってなにがなんだか」

「しっかりしてくださいーい、御坂さん？白井さん？」



2人（美琴と白井）がこの後どうなったかは言うまでもない。

――――

## 第7学区とある学生寮

上条当麻は放心状態で帰ってきた。

「当麻！何があつたんだ！」

焰が心配している。ちなみにおつかいに頼んだ卵が割れてるが今は  
それどころじゃない。

「やまんばが……セーラー服のやまんばが…捕獲…バット怖い」

「当麻？大丈夫か？当麻ああああ」

上条はしばらくあの状態だった。

そしてあの裏路地を上条当麻が通る事は二度となかった。

〈第3話〉

とある少女の追跡記録

〈完〉

### 第3話 とある少女の追跡記録（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

次回は遂に禁断が動き出します。

日常編ばかりですみません。

自分的に日常編あってからこそその戦闘編だと思っているので よろしくお願ひします。

戦闘編ばかりだと暗いので日常編もちろんまだありますが

長くなりましたがありがとうございます。

## 第4話 禁断の能力者（前書き）

第4話です。

お気に入り三件突破ありがとうございます。

主人公の想像がつきにくい方は、ネギまのナギみたいな者と連想してください。

ではお楽しみください

## 第4話 禁断の能力者

学園都市第23学区

第23学区。1学区を丸ごと航空・宇宙開発分野のために占領している特殊な学区だ。

そして第23学区の空港ロビーに1人の青年がいた。彼はある人物と電話をしている。

「あゝもしもし？」

「着いたのか？」

電話の相手は声が低くどこか冷たい雰囲気を漂わせる声だった。

「はいよゝ今、学園都市の23学区にいる、俺はこれからどうすればいい？」

一方、電話をかけてる声の青年はどこか脳天気なかん高い声だった。

「ああ…今から第3学区のホテルに向かえ。そこにお前の武装品を運んである。」

「ほえ、あんなデカイ物よく運べたな？」

「そんな事より貴様目的は忘れてないだろうな？」

「忘れるわけないだろう？この任務一番に立候補したのは俺だけ。」

「ならいいが。状況は…今どうなっている？」

「俺の部隊の構成員は学園都市に約10人、学園都市の外には50人いる。学園都市に入れた構成員の数は少ないが、まあ問題ないだろう。」

「目的は大事だが、学園都市での騒ぎはあまり起こすなよ、後の計画に支障がでるからな」

「俺がそこら辺のアンチスキルや風紀委員に負けるとでも？馬鹿い  
うなよ俺なら常盤台のレールガンだろうとも一瞬だぜ」

「誰がその心配をしたんだ？お前がそこらの超能力者に負ける確率  
なんて考えてない」

「へえ〜じゃあ何が心配なんだよ？」

「学園都市と友好関係にある魔術結社の事はお前もよく知っている  
だろう？」

「え〜とイギリス清教徒の必要悪の教会の事か？」

「そつだ。奴らに今回の事が騒がれるのは好ましくない。学園都市  
に何かの騒動があつたら、奴らが動くぞ」

「はい？向かって来るのなら斬り落とせばいいじゃん、奴らには聖  
人と言う切り札があるらしいけど…俺なら負けないね」

「なんでもかんでも斬り落とせばいいって言う問題じゃないだろう」

「そんなもんか？」

「やはり貴様にこの任務を任せたのは間違いだったか……貴様位だぞ、我々鮮血の9人でそんなに脳天気なのは……」

「わっ悪かったよ、ちゃんと目的は果たすからそれでいいだろう？」

「最終確認だ、貴様の目的はターゲットの処刑に限る、また無用な殺生で学園都市に気づかれない事、この2つが今回の作戦になる」

「ああ分かったぜ、心配すんなよ。俺はやる時はやる男だ。じゃあさっさと武器を取りに行きますか」

「ふん果たして貴様に奴を殺せるのかな？」

「俺の覚悟を疑うか？なら名乗ってやる。俺のもう一つの名前を」



(裏切りを断罪する者)

「魔法名T r a d i t i o o 0 6」

「殺すぜ天城焰！」

そして彼は向かう天城焰の元へ

-----

## 学校

天城焰と上条当麻そして土御門、青ピアスは4人で屋上にいた。

今はお昼ご飯を食べていて、青い空のしたで桜の木がグラウンドから見える。

しかしそんな綺麗な景色など彼らには今どうでもいい

なぜなら……………

「てめえ土御門どういつつもりだ！何故あの時裏切った？」

何やら上条が怒っている

「まあまあ、カミヤん土御門も反省してるみたいだし今日はこの辺で……」

「青ピマス、この土御門が本気で反省してるとでも？そんなわけあるか！コイツのせいで俺は……」

時間は四時間目の体育の授業に遡る。

上条属性の4人は女子更衣室の前にいた。もちろん覗きである、と言っても、上条と焰は覗きを阻止しに来た。

「土御門、青ピマスやめとこうよ」

焔が周りを気にしながら止めに入る。

「何言ってるにや〜ホムやん、この扉の向こうに広がる景色を見ないなんて宝箱があるのに中身を開けないみたいなものだぜ」

「土御門君、その宝箱の中には凶悪なモンスター達がいると上条さんは推測しますが……」

「なにゆうてんねんカミヤん、覗きなんて男の夢やろ？ロマンやろ？それを奪うと言うのは子供の目の前でサンタさんは君達のお父さんって幼い子供に言ってるもんやで」

そんな純粋な話しじゃないだろうと焔は思った。

「大丈夫だにや〜カミヤんいざばれそうになった時の秘策考えてあるんだぜい。タイタニツク号に乗ったつもりで任せとけて」

「あれは結局沈んだらうが！」

そんな上条のツッコミなど無視して、扉に手をかけ少しだけそと開けた土御門

その先には絶景が広がっていた……はずだった。

土御門が扉を開けて 10センチほどの隙間から目が見えた。

「……ん？」

「どづしたん？土御門？早よ変わって〜」

「にゃ〜青ピアスちよつと覗いてみるんだぜい」

「どわどわ〜」

「……………ん？」

「僕の目はいつからこんなにおかしくなったんやろうな。絶景じゃなくてゴリラのような目が見えるんやけど。ホムヤんちよって覗いて見て」

焰が続いて覗いて見る

「確かに目が見るな。でもこの目どっかで見た事あるんだけど。気のせいかな？」

土御門と青ピアスが2人で溜め息をついて何かに気がついたようだ。

「あ。カミヤんも覗いて見るにや。俺達の目が腐ってる可能性も高いから」

「あ？どれどれ？」

上条が焰を押しつけて、中を見よつとした瞬間！

「カミちゃん、グッジョブ！そしてさようなら」

土御門が扉事上条を蹴り倒した。

「ばっ…！土御門！」

上条は扉ごと女子更衣室に突入、そして目の前には……

「かゝみじょう、またてめえか？」

上条の思考が止まる

「なっ！ジャイアント」

その扉からこちらを覗いていたのはジャイアントの瞳だった。

「今日こそ死ねや上条当麻、血みどろにしてやんよ」

「助けて、土御門！青ピアス！焰！」

しかし三人はすでにいなかった。

「死ねやーーーーー」

ジヤイアントが雄叫びをあげた。そして周りの女子もこちらに向き、上条当麻への総攻撃が始まった。

「…お母さん」

上条は一言だけ言つとその場に泣き崩れた。

結局タイタニック号は沈んだのであった。

そして現在。ボロボロになって帰ってきた上条は自分の怨念を土御

門に向けている。

「いや、カミヤンあれしかみんなが助かる道はなかったにや」

「そのみんなの中に俺は入ってないのか！」

「ならカミヤン、他にどうすればみんなが最高に笑える、ハッピーエンドがあった？そんなのないのにや、誰かを犠牲にしてみんなが助かるなんて素晴らしい…」

「ふざけんじゃねえ何がハッピーエンドだ。分かったぞ今、分かった俺の不幸の原因はお前達だ。俺の不幸は人為的なものだった…なら俺は」

「うっせいんだにや、ド素人が」

ブチ、ブチ、ブチと上条の数多の血管が切れた。

「殺す、俺を扉ごと潰した土御門を殺してやる」



「いくぞ土御門おおおおお！」

そしてまた始まった戦い。

焰は青空を見上げながら

「今日も平和だな」

といいながら2人の戦いを見ていた。

-----

## 第7学区の駅前

焰は1人で夕焼けが照らす駅前を歩いていた。

上条と土御門は結局午後の授業開始のチャイムがなるまで戦っていた。

上条は女子更衣室の件を密告され、今日は居残りだ。

そんな事で1人帰る焰、今は帰宅ラッシュで会社員や最終下校時間が近いので帰る生徒達で賑わっている

はずだった……

焰は異変に気がつく おかしい、人が1人もいないのだ……まるで自分だけが知らない空間に閉じ込められてるような感覚になった。

しかし焰はこの感覚を知っている。この不思議な感覚を……

「まさか……」

「人払いか！」

「」名答」

焰が声があった方に振り向く……そこには……

「…なんで」

焰は信じられない者を見るような目で声を発した者を見る。

「なんで？だとそれが本気に分からないのならお前は相当頭が平和になってしまったらしいな。まあ一応忘れてはないだろうが、俺の名前覚えてるな？」

焰が息を飲んだ。

(ひすい ひょうが)

「翡翠 氷河」

翡翠氷河、焔は彼をそう呼んだ。

翡翠と言う青年は、背は高くオールバックの白い髪に獣のような鋭い目をしており、黒い皮ジャンに黒い皮の長いズボン、黒い皮ジャンには沢山の銀色の鎖がつけられている。しかし一番に注目するのは、彼が持っている。巨大な剣。

刀身は白く長さが2メートル横幅が30センチもある巨大な大剣。

刀身にはGlaciersとかかかれている。

ラテン語で氷帝という。

「この大剣懐かしいだろうか？」

「フロンフェンリルか？」

焰が思いだす。雪のように白い大剣を見ながら……

## 氷剣フロンフェンリル

北欧神話に登場するフェンリルと言う巨大な狼の牙から作った剣。

フェンリルの牙は神でも飲み噛みちぎり

ラグナロク（神々の黄昏、神の時代の終焉）の戦いにおいて 主神  
オーディンと愛馬スレイプニルを大きな口で飲みこんだ凶暴な魔物  
である。

そのフェンリルの強さからデュールと言う神はフェンリルの牙を加  
工し、作った剣。

## それがフロンフェンリル

「フロンフェンリルなんて持ち出して何をしに来た？」

「本気にわかんねーのか？鮮血の9人の1人で氷帝って言われてる俺が来るほどの理由一つしかねえよな？」

「……………」

分かっている本気は分かっているんだ、奴が来た理由なんて最初からでも信じたくなかった。

「鮮血の9人の1人天城焰。てめえは組織を裏切った…裏切り者は死を与えるそれが俺らの鉄則だろうが！」

「確かに組織を裏切った事は確かだ！でも俺はもう戦いたくないんだ！」

「そんな世迷い言が通じるとでも思ってたのか？ああ？天城焰ああアアアアア！」

翡翠が叫んだ。彼の目には物凄い殺気がこめられていた。

「……………っそれでも俺は戦わないって約束したんだ……」

「約束だど？ぶざけんじゃねえよ。戦わないって約束した？そんな理由で平穏な世界に帰ったのかお前は……………」

「……………なら」

翡翠がゆっくりと告げる彼が一番聞きたくない言葉を……………

「……………教えてやるよ」

『人殺しの罪人が平穩に帰れるわけがないだろうがアア？人殺しはなそういう世界帰る資格・権利なんて存在しないんだよ……分かってんだろうがアアアア天城焰アア！』

「うわあああああ」

焰は絶叫した彼にとってこの言葉の意味はあまりにも残酷で彼は地面に膝から落ち、絶叫した。

「もうてめえに平穩なんて訪れねえ……終わったんだよ、てめえの偽りの平穩は なあ！」

翡翠は大剣を構えてた。

「戦わないっていうならそのまま斬ってやる、だがそれじゃつまらねえ」



翡翠は大剣を構えながら、もう片方の手で何かを投げた。

焔の目の前に落ちた物…それは……………

「てめえの刀だ。その刀で俺に立ち向かえ、お前が昔使っていた物だ。」

焔の目の前に落ちた物…それは長さ1メートル位の鞘に入れられた剣。

真っ赤な鞘な周りには金色の龍が巻きつけられている。

「俺の受けた指令はてめえを処刑する事、だがな俺はお前と一度戦ってみたかったんだ。」

焔は真っ赤な鞘に目を向ける事なく地面に手をつけている。

「俺と戦え天城焔！てめえを処刑する。命令は違反しねえちゃんと

殺すぜ。」

「……いやだ。」

「……そうか」

「……なら」

「……殺すぜ！てめえの作った偽りの友人を全員！」

「なっ止める！あいつらは関係ない」

焰が翡翠の方を向いた。

「てめえが戦わないんだ…なら憂さ晴らしに殺してやる。」

「何故だ！なんでそんなに俺にこだわる？」

焰が叫ぶとても強い目で

「だから言っただろ？てめえと戦ってみたかったって？理由はそんなだけだ！覚悟を決める天城焰ああ」

翡翠が最後の選択にせまった。

「俺と戦わずに殺されて友人も道連れにするか。  
俺と戦って友人を道連れにしないか選択肢は2つに1つ選べよ」

「カウントするぜ」

「5

戦いたくなんてない

「4

でも、当麻や土御門、青ピアスやみんなを巻き込みたくない。

「3

……だったら

「2

…ごめんなティア。俺約束守れないや

「1」

…友達を守る、そのために俺はもう一度

「0」

「カウント終了！いくぞ天城おおおお」

翡翠がもの凄いスピードで近づいてきた。

距離は10メートル

その距離を飛び越え大剣を焰に叩き落としたが……

ガキン！

という鈍い金属音が響いた。

「やっとその気になったか天城。」

「お前が関係のない人達を巻き込むと言っのなら……俺はお前を倒す！」

大剣を鞘で防ぎそのまま翡翠を押し返す。

「さあ始めようぜ！楽しい楽しい殺し合いをなあ？」

2人は間合いをあける。距離は30メートル。

「我は氷帝の翡翠氷帝」

（裏切りを断罪する者）

「魔法名Traditio006」

こうして戦いは始まった。この戦いが学園都市、イギリス清教を巻き込む大きな戦いになる事は誰も知らない。

〈第4話〉禁断の能力者  
〈完〉

#### 第4話 禁断の能力者（後書き）

いつも最後まで読んでくださる方マジであります。

第5話はバトル編になります。

禁断の力が明かされます。

では読んでくださった皆様に感謝し、次も頑張ります。

ご感想・評価お待ちしております



## 第5話 炎帝VS氷帝（前書き）

第5話です。戦闘ばかりで退屈かもしれないませんが、どうぞ最後まで見てやって下さい。

お気に入り6件突破！！

まじで嬉しいです。ありがとうございます。

## 第5話 炎帝VS氷帝

特別なチカラなんて欲しいわけじゃなかった。豪華じゃなくてもただ平穩に生きてみたいだけだった。

そんな夢すら儂い幻想になってしまったのはどうして……？

彼はもう…戻れない。

だからお願いです神様。

少しだけでもいいから…

偽りでもいいから……

だからせめてそんな夢を見させて下さい。

たとえそれがいつか壊れてしまふ幻想だとしても……

-----

氷帝 翡翠氷河と天城 焔

2人は誰もいない駅前の戦場で向かいあっていた。

大剣を構えた翡翠

一方、剣を鞘にいれたままの天城焔。

「剣を抜きな。天城、丸腰のお前を斬った所で面白くもなんともねえ」

焔は一度鞘に入った剣を見る。そして…

「剣は抜かない。俺の能力でお前を倒す！」

翡翠は苦笑しながら

「ああ…そうかよ。だったら仕方ねえ、なら無理にでも剣をひかせ  
てやるよー！」

ドン！と30メートルある距離を翡翠が走る。

2人の衝突まであと5秒

焰は手のひらに炎を纏い、圧縮した炎を翡翠に放出した。

ゴウツ！と焰から放出された炎は一直線に翡翠へ向かう。

圧縮されせき止められた炎を一気に吐き出す技。

技名：超炎圧縮炎砲。またの名をフレアバスター。

「チツ！」

翡翠が横に転がり、焰のフレアバスターをよける。

「その技、紙一重に避けない方がいいぞ。」

「……？」

その時、ドゴツ！と翡翠の体が10メートル位吹き飛んだ。

「チツ！衝撃波かよ」

そう、フレアバスターは相手に当たらなくても圧縮された炎を吐き出された衝撃で、地面を巻き上げるほどの強力な衝撃波が起こる。

体が浮き、吹き飛ばされた翡翠だが空中で体のバランスを取り地面に足で着地した。

「発火能力か…流石はレベル4、威力も速さも申し文ない」

翡翠は吹き飛ばされたのにも関わらず 笑っている。凄く楽しそうに……

「遊んでいるのか？翡翠お前の実力がこの程度じゃない事位分かっている」

焰は必要以上に手を抜いた戦いに警戒している。

焰は翡翠の実力を知っている、今のフレアバスターだって翡翠は防ごうと思えば朝飯前のように防ぐ事も知っている。

しかし翡翠は紙一重で攻撃を避けた、紙一重は確かに最小限の動きで次のステップに踏み出すのに最適な動きだが、リスクが高い。

使い方を間違えれば今のように衝撃波などを受けたりする。

それを分かっている相手じゃない。それ位、翡翠は強いのだ。

「遊んでなんかねえよ。試してるだけさ…1年も組織を抜けて弱体化してねえかな？つてな」

翡翠は大剣を地面に突き刺した。

「じゃあ次は俺の攻撃だ遠距離攻撃なんてできねーわけじゃねえからな！」

距離は20メートル

翡翠は大剣を突き刺したまま、左手を焔に突き出した。

焔が一瞬で異変に気づく

(地面から冷気が…ってヤバッ！)

焔は後ろに3メートルほどバックステップした直後に……

ドン！さっき焔がいた場所に10メートル位の氷の柱が地面から出てきた。

翡翠が手をかざし氷の柱が出る時間までわずか2秒。

「へえ〜上手く避けんじゃねえか。だが甘いぜ！」

翡翠が手をかざし巨大な氷の柱が次々と出現する。

(……つくやばい攻撃する暇がない。)

次々と出てくる氷の柱を避ける焔。氷の柱が出る時、地面が少し冷気を帯びるので回避するのはそれほど難しいくない。

(しかし、問題なのはこの数だ。攻撃するタイミングを狙うには……)

焔は足を止めた。

そして氷の柱が焔の立っている地面へと出現した。

ドンッ！氷の柱は出現し焔を突き刺した。

……はずだったが。



10メートルの氷の柱より高く、焰は飛んでいた。

彼にそんな脚力はないがしかし発火能力者としての応用、炎が宿るのは別に手だけではない。

そう、足に圧縮した炎を纏い圧縮した炎を爆発させた。

爆発の勢いで上空に飛んだのだった。

「なるほど〜そういう避け方もあったのかよ。確かに一度出した場所に氷の柱は続けてだせねえ」

上空に飛んだまま焰は右手を構え炎を放出する。

一直線の炎が上空から25メートル離れている翡翠へと向かう。

翡翠は左手を差し出したまま、氷の四角形の盾をだす。

炎が氷が受け止める そんな非科学的な事できるわけないと思ったが…

ドーーーーーン！と言つ轟音をたて、炎と氷がぶつかった。

氷の盾が……焔の炎を防いだ！

誰もが信じられない顔をするはずだが焔は顔色一つ変えなかった。

「冰雪使いレベル4か…その実力ならレベル5クラスだな」

翡翠は呆れたように

「アホか俺らに能力者としてのレベル何て関係ないだろうが、そんなのただの数値でしかねえ」

翡翠が突き刺さっていた大剣を握りしめ

「学園都市は能力の強さだけでレベルを判断する。駄目だよな」  
れじゃ」



焰は爆発を利用して横に飛んだが……

「遅っせえんだよ！」

翡翠は横に逃げた焰へ向かって斬りかかる。

ズン！と言う大剣を振り落とす音が聞こえた。

……しかし焰には当たらなかった。翡翠の斬撃は虚空をきった。だがそれが狙いだっただ。

ガシャ！バギ！バギ！

「俺の大剣は自分の氷雪使いとしての力を流しこむ事が出来る」

「…そしてもう一つの力も一緒に流しこむ事もできる！」

焔は攻撃を避けたはずなのに……

「油断してんじゃねえよ、天城このチカラの本質てめえが一番知ってるはずだろうが……」

……その瞬間

虚空を斬った大剣の先端から一直線に巨大な氷の斬撃が放出された。

そしてそれは今度こそ焔の体に直撃した。

そして氷の斬撃がそのまま突き進む。焔の体を押しつぶしながら。

ズガーーーーー！

氷の斬撃はそのまま突き進む駅の横にあるビルに直撃した。

焔は氷の斬撃にビルごと押しつぶされてしまった。

翡翠はつまらなそうに振り下ろした大剣を肩にかつぐ。

それは戦いの終わりを告げるようだった。

「あっけない結末だったな。」

翡翠は焔を殺したとプロとして確信した。あの攻撃を生身で防げるとは思えなかった。

ましてや能力を使った形跡はなかった。

「あゝあ終わっちゃまったな。あんなもんかよ。だいたい俺はまだ全然全力じゃないんだが………やっぱり憂さ晴らしに奴の友人でも斬って行く……？」

「…!？」

翡翠は驚き表情で周りを見渡す。

(…あれはどこだ！)

翡翠は気がついた。

どこにもないのだ。翡翠が焔に渡した剣が……

(まさか！)

翡翠は焔を吹き飛ばした方を見た。

倒壊したビルに埋もれているはずの焔が………立っていた。

そして焔は持っていた。

赤い鞘に包まれた剣を…

(おいおい！あの瞬間の間に剣を拾ったのかよ)

翡翠は改めて認識した。あの一瞬の間に剣を拾うなんて普通の人間では無理だ。普通の人間なら意識している間に俺の斬撃をくらうはずだ

それは意識するより身体が動いたという事だ。

それを可能に出来る可能性は1つしかない。



「やっぱり。腐っていても元鮮血の9人という事か？俺に吹っ飛ばされる間に剣を拾う……そんな事が出来るのは体が覚えているって事だ。戦いの経験がな。」

翡翠が肩にかついでいた大剣を改めて構える。

「その鞘で俺の一撃を防いだんだな？やるじゃねえかよ……」

翡翠の話途中で焰が遮る。

「お前さっき、憂さ晴らしに俺の友達を斬るって言ってたな？」

焰の声は冷たく、翡翠に妙な緊張感を与えた。

「……だったらなんだよ。てめえがあそこにくたばってたら俺がわざわざ来た意味がなくなるだろうが？」

「もういい…それで充分だ。お前はそれ以上喋るな。」

「正直このまま瓦礫に埋もれてやり過ごそうとした…けどお前が俺の友達を斬ると言うのなら」

焰が剣の柄を握る。

「俺は罪人にでも何にでも戻る。」

翡翠は体に冷や汗が湧き出る。翡翠はこの感覚を知っている。

「戻りやがったか。」

翡翠は鮮血の9人の一人、しかし焔と一緒に組織の仕事はした事はない。

しかし一回だけ焔の戦いを見たことがあった。その時感じたヤバいと……

「行くぞ……翡翠」

そして焔が剣を……

抜いた。

焔の周りの瓦礫が一瞬で灰になった。

「久しぶりに見たぜお前の剣。」

焔の剣は刀身が赤く 炎で包まれている。その剣の名前は

(えんがおぼろび)

「炎牙臙火」

焔が真つ赤に燃える剣を構える。

「後悔するなよ？俺にこの剣を使わせたんだ。それなりの代償は払  
つてもらうぞ」

焔は本当はこの剣を使いたくなかった。

もう戦わないって約束したから、けど焔は剣を抜いた。

簡単な選択肢じゃなかった。それは自分が過ごした平穩とは決別するということ…けど…それでも友達を守りたかった。

…たった4日だったけど

焔は上条達と過ごした日々を思い出しながら……

静かに呟いた。

「……………楽しかったな」

そして焔は自分の偽りの平穩に別れを告げるように……

焰は剣を構えて、そして……翡翠に向かって走りだす。

翡翠も焰に向かって走りだす。

「来いよ！天城！いや……炎帝 天城焰 ああああ！」

「うおおおおオオオ！」

距離は5メートル

そして炎帝と氷帝の剣がぶつかりあった。

バギーーン！

ぶつかつた瞬間に焔の炎牙が翡翠のフロンフェンリルを爆炎で吹き飛ばす。

「チッ」

翡翠の身体が大剣ごと20メートルも吹き飛ばす。

そして焔が一枚のカードを投げつけた。

そのカードは吹き飛ばされた翡翠の頭上に行き……

翡翠が焦つたように言った。

「ルーンか！」

焔が何かを口にした。

(光の裁きよ邪を喰らいあるべき姿に戻せ)

「Reverto ratio resurrectio  
lux lucis ut ainstar quod es  
t donatus ut quod habeo」

その瞬間、空から一本の巨大な光の柱が翡翠にめがけて舞い降りる。

「糞やるが！」

翡翠も一枚のカードを取り出す



(五大元素の獄炎よ我を守る盾となれ)

r  
o  
r  
i  
o  
r  
s  
e  
r  
v  
o  
c  
a  
r  
c  
e  
r  
f  
l  
a  
m  
m  
a  
i  
o  
r  
e  
s  
u  
r  
r  
e  
c  
t  
i  
o  
5  
m  
a  
g  
n  
u  
s  
e  
l  
e  
m  
e  
n  
t  
u  
m  
r.

翡翠の頭上に獄炎の 炎の壁が現れ光の柱を防いだ。

衝突が巻き起こる。

アスファルトは粉々になり周りの建物の窓ガラはわれた。

「やるじゃねえかよ!。まさか光のルーンを持っていたとはな、お前と相性よかったのか?光は?」

「……………ちあな」

焰は翡翠とのやり取りに応じるつもりはないらしい。

そして焰が翡翠に接近する。能力者としての爆発を使い、一瞬で距離は10メートルになった。

「いいぜえ俺も接近戦の方が好みだ。」

炎牙とフェンリルがぶつかり合う、

カキン！ カキン！

一回、二回と二人の剣はぶつかり合い火花を散らす。

翡翠は大剣を縦に振り下ろす。それを焰が横によけて、カウンターを炎牙で胸に突き刺す。

（この位置心臓狙いか！）

胸にめがけて突き刺だした炎牙は翡翠が振り下ろした大剣を軸（支

点）にして体を回転させてよけた

そして回転させた体の力を利用して、地面に振り下ろしている大剣をそのまま横になぎ払う。

ブユン！

焰は体を低くして避けた、そして大振りして身動きが取れない翡翠に斬りかかる。

（やべえ大振りし過ぎた。このままだと斬られる！）

翡翠はルーンをポケットから取り出そうとしたが………

……それより速く焰が動いた。

焰は翡翠の懐に入り込んだ。距離は0。

「紅蓮一式」

焰の剣が激しく燃えだした。

(えんせんか)

「炎閃火」

焰の剣(炎牙)が激しく燃え赤い光を帯びた。

そして翡翠に斬りかかった瞬間……

三日月型の赤い閃光が翡翠に直撃した。

「ガアあああああああああああああ！」

翡翠は赤い閃光の斬撃を受け肩から大量の血が出た。

「天城オオオオオオ」

翡翠は肩を深く斬られのにも関わらず大剣を構えてが……

焰は次のモーションに移っていた。

(やべえ！あれか！)

焰は剣を右手で握ったまま左手を翡翠に向けていた。

「フレアバスター！」

ゴウ！と一直線の炎が翡翠に向かう。

そして翡翠は大剣でフレアバスターを防ぐ。

「無理だお前のその怪我では防ぐ事なんて不可能だ！」

ガガガガガガガ！

焔は炎を放出し続ける。それを両手で大剣を持ち防ぎ続ける翡翠。

「…………ぐच्चくしょう」

遂に翡翠が防ぎ切れずに大剣で炎をガードしながら、建物に激突した。

バーーン！

翡翠は建物にぶつかり動きがとまった。

「翡翠俺の勝ちだ……」

焰が勝利宣言をしたが……

「ざけんじゃねえよこれからだろうがよ」

翡翠は立ち上がった

「……もういいこの力を解放してやる」

焰の全身が……嫌な………感じがして………固まる。

「おい翡翠正気か？その力を解放するのか？」

「それが俺達の本気だろうが……お前も解放するか？」

焰が叫ぶ

「ふざけんなあ！こんな所でその力を使ったら、人払いした空間を超えてたくさんの方が被害がでる。」

翡翠は自分の肩の傷を氷雪使いとしての能力で凍らせ血を止めた。

「確かに被害はでるがためえを殺す為だ仕方ねえ、本当は使いたくないけどよ。あれは自分への負担が強い、それに一応命令違反になるし……」

そこで翡翠が言葉をきる



「いくら命令違反をしようがイギリス清教に知られようがなあ…俺の魔法名は裏切りを断罪する者するためにある。命令がどうだ、被害がどうだなんて関係ないんだよ！」

「何故！裏切り者にそこまでこだわるお前に一体何があった……」

突然、焔の体が膝から落ちた。

(……………何だ？力が入らない)

翡翠が何かしたわけじゃない。翡翠すら何があったか分からなかった。

しかし翡翠は原因を理解した。とても簡単な理由を……

「……………そおゆう事が」

(……………?)

「クツククこれりや傑作だ！炎帝、やっぱりガタがきたみたいだな」

「……………ガタだと？」

「ああそつだ！分かりやすく説明してやるつ。一年ぶりだよなあ？その剣を使うのはよお」

焔が気づく。

(まさか！)

「その剣は使いたい時にいつでも使える剣じゃねえ、一年も使っていないお前の体じゃ耐えきれなかつたんだ。その剣のチカラに……」

翡翠はフロンフェンリルを持ち構えた

「さっきその剣のチカラで技を出しただろ？紅蓮一式の炎閃火だっけ？あの技は自分の炎と周りの光を一つの形として出す技だろ？そんな事はその剣のチカラを使わないと不可能だからなあ」

(やっぱりあの技は負担がでかかったか！……クソッ)

翡翠は大剣を焔に向ける。距離は15メートル。

「本当は解放状態のお前と戦いたかったがもう無理だな。」

翡翠が大剣の先端を向ける。そして大剣の先端に冷気を集めた。

焔の体は動かない。

(……ちくしょう)

大剣の先端に集められた冷気のエネルギーが丸い形になりどんどん大きくなる。

(……駄目なのか)

焰は歯をくいしばる

(……これが罪人が平穩に帰ると罰なのかな?)

「冷氣エネルギーMAXパワーだぜ。裏切り者、これで偽りの平穩は終わりだ。」

しかし焰は動けない

(……………せめて)

「いくぜええええ天城オオオオオオオ！」

(……………もう一度)

「フリーズブラスト 発射！」

翡翠の大剣から冷気のエネルギー波が飛んできた。冷気のエネルギーは全てを凍らし破壊しながら焔に向かう。

(……友達に……会いたかったな……)

……その時。

「焰らあああ————————!!」

焰の頭上を誰かが飛び超えて来た。

いや…誰かなんて分かってる。

……でも信じられない。

でもこんなに力強い声はあいつしか……

そして焔を助けに来た少年は冷気のエネルギーに走っていく。

……そして右手を冷気のエネルギー波に突き刺した。

その瞬間…巨大な冷気のエネルギーは風船のように割れエネルギーが周りに雪みたいに散った。

「バツバカな！？ありえねえ、あの冷気のエネルギーを消すなんて……」



翡翠は驚きが隠せずに雪のように降るエネルギーの残骸を見ていた。

そして焔はツンツン頭の少年に……

「……どっして……」

そして焔の頭上を飛び越えた少年は一言だけ告げた。とても強く暖かい声で……

「助けにきたぜ！焔。詳しい事情なんて知らないけどさ、一人で抱え込んでんじゃねえよ。俺達……友達たる！」

「………当麻。」

そして上条当麻は自分の友達を傷つけた敵を見る。

「覚悟しろよ」

「やってみやがれ！」

そして戦いはクライマックスに向かう。

〈第5話〉

〈炎帝VS氷帝〉完

第5話 炎帝VS氷帝（後書き）

戦闘シーン下手ですみません。

次回は焰と翡翠のチカラを詳しく書きます。

読んでくださった方に感謝！！

それではなのです〜

## 第6話 友達（前書き）

第7話です。長いですがどうぞ見てやってください。

## 第6話 友達

天城焰、翡翠氷河そして上条当麻は夕焼けがまだ見える駅前  
の戦場  
にいた。

翡翠が放つ冷気のエネルギー波を上条当麻は右手を使い打ち消した。

そして上条当麻は立ち向かう友達を助ける為に。

「……止める当麻。お前を巻きこむ訳にはいかない。」

焰は上条を止める。この血まみれの戦いに大事な友達を巻き込む訳にはいかなかった。

「悪いけどそれは聞けない。それと勘違いするんじゃないぞ！」

上条は敵を見ながら後ろにいる焰に……

「お前が巻き込むんじゃないやねえ！俺が勝手に巻き込まれるんだ！文句は言わせねえぞ」

上条の言葉はとても強引だった。焔の気持ちを無視したとても強引な言葉……

けどとても暖かくて…安心出来て…凄く力強い言葉だった。

そこで翡翠が上条に向かって。

「おい！少年テメエどうやってここに入って来た？一応、人払いのルーンはそこらに設置していたんだが」

「悪いけど俺にそんな魔術は通用しない」

「…なるほど魔術を知ってるって事はお前は魔術師って事かよ、ど

「この清教だ？」

「生憎俺は神様には見放された存在でね神には祈らないって決めてんだよ。まあイギリス清教の知り合いなら何人かいるけどな」

そうして上条は拳を構える。

「魔術師じゃねえのか？だったら学園都市の能力者か……」

翡翠は小さく笑い。

「面白れえてめえがどんな能力を使って俺の技をかき消したか分からないが…そいつの処刑の邪魔をするならまとめて殺してやるよ！」

「お前に俺の友達はやらせない絶対に！」

そして上条と翡翠が走り出す。距離は20メートル。

「駄目だ！当麻」

「うおおおおお！」

上条は焔の声を無視して真っ直ぐ翡翠に向かって行く。

そして距離は10メートル。翡翠はこの距離でフロンフェンリルを振る。

そして大剣を振った縦一直線に氷の斬撃が放たれた。

上条は右手に宿る幻想殺しを突き出し、その氷の斬撃を殴る。

バギン！！ 氷が碎ける音



そして翡翠が放った氷の斬撃はまた、かき消された。

(どうなってやがる！俺の技が殴られた瞬間にかき消される……)

(…まさか、魔力によ中和か？……いやそれは有り得ない。奴からは魔力が感じられない……どうなってやがる。)

翡翠は正体不明の上条の能力に戸惑いながらも技を次々と放つ。

(魔術が駄目なら、もうかた方の能力なら！)

翡翠が上条に向かって左手を突き出す。

(なんだ？地面が冷たくなってる気が……)

上条は地面が冷気を帯びてる事に気がつく。

「当麻！下だ！」

焔の叫び声と共に、上条が走り込んでいる場所へ氷の柱が出現する。

上条は慌てて右手を下に向け、氷の柱に触れた。

そしてまた氷の碎ける音と共に、翡翠の氷の柱は消える。

「どうなってやがる？何故俺の技が消されるんだ……有り得えねえ」

それは焔も同意見だった焔は、上条に能力値が0だと聞かされていた。

しかし上条は翡翠の放つ攻撃を全て防いでいた。レベル0はどうあつても不可能な事だった。

「てめえ 一体何もんだ！」

翡翠が氷の塊を上条に向かって放つ。

距離は5メートル。

上条は右手を前に突き出し、氷の塊を消す。

「何者でもねえよ。俺は焰の友達だ！」

そして氷の塊を消した勢いで、そのまま翡翠の顔面に右手を突き刺した。

「ガハア！」

翡翠の体が吹き飛ぶ。

(なんだと！対衝撃用の呪付を持っている俺を殴っただと…)

翡翠は地面に倒れた。

「あの翡翠を殴っただと！…当麻お前は一体…？」

「あいつと同じ事いわせんじゃねえよ……俺はお前の友達だそれ以上でもそれ以下でもねえよ。」

……その時笑い声がした

「クツクク」

「やっぱり殴っただけじゃ倒れねえか…」

翡翠は立ち上がり。そして上条を見て嘲るように言葉を放った。

「こいつが友達？笑わせんじゃねえぞ！そいつが今まで何をやって来たのか知ってて言ってるのか？」

「……何？」

上条が翡翠の意味不明な言葉に耳をかたむける。

「いいか！そいつはな罪人なんだよ！」

「…やめろ…やめてくれ」

焰は唇を噛みしめた。その言葉は友達に聞かれない内容だった。

「俺達は罪人、幸せになる資格なんてない。しかしそいつは資格もないくせに平穩に帰るとした。」

翡翠が言葉を続ける

「偽りの平穩に、偽りの友達、偽りの幸せ、こいつは全てを偽り続けてんだよ。お前はそんな罪人の為に立ち上がって哀れだな。いやお前は被害者って所か…」

「……もうやめてくれ頼むから…もうそれ以上は………」

焰の嘆きに翡翠は激怒した。今まで一番の怒りの表情に……

「ふざけんじゃねえぞおおおおこの裏切り者がああああ！」

翡翠が大剣を先端を向け、氷の槍を高速で発射した。

「しまった！」

上条はいきなりの事で反応できなかった

そして焰に直撃した

ドゴン！

「グハア！」

焰の体は吹き飛び堅いアスファルトの上に転がった。頭を打ち血が流れ、氷の槍を受けた腹部も血がにじんでいた。

「デメエ！」

「気づかないのか！」

翡翠の声が上条の走り出すのを止めた。

「こいつはな…俺達を裏切ったんだ！お前もいつかは裏切られる、コイツはお前にも同じ事をするぞ」

「何度も言うが俺達、罪人に幸せはねえ資格も権利も偽りの平穩にすら帰る資格はないんだよ……分かってんだろがああああああああああ！天城おおおおお！」





「幸せになる資格や権利なんて誰かが決めるもんじゃない！焔がどんな罪を犯したのかは知らないし、反省したからいいじゃねえかなんて軽い言葉なんてかけることもしない」

「……でもな」

「こいつが俺の友達と一緒に笑い合った仲間って事は偽りなんかじゃない！焔の笑顔は本物だったって俺が保証する！」

「お前は偽ってたのか？違うだろ！だったら胸張って言ってやれよ」

（…そうだ）

焔はボロボロの体に血をにじませながら足を震わせながら、立ち上がる。

「…翡翠、確かに俺は偽りの平穩の中で過ごしてきた……」

焰は齒を食いし口からは血が出ていた。

「……けどな」

彼は言う。自分の本物の気持ちを……

「…けどな！どんなに何かを偽っても、どれだけ自分に嘘ついても……こいつらが友達だって事だけは偽わる訳にはいかないんだよ！」

そうどれだけ自分を偽っても、彼らと過ごした日々には偽りなんてなかった。

焰の本物の気持ちを知り、翡翠は何故か少し悲しそうな顔をした。

(ちくしょう…裏切る奴なんて、みんなそうだ。裏切られた人間の気持ちなんて考えもしない…なら…)

翡翠が鋭くにらめつけ

「分かったぜ、天城なら先に……」

翡翠は一枚のカードを取り出す。

「てめえ友達の殺す！」

カードから強力な冷気が発生し天候が変わる。

(氷帝の名に応じて命ずる、氷の竜は終焉を包み込み我が力の礎となれ)

「Wrap terminus, quod extraho  
o resurrectio glacies praeeo  
cohaere ut nomo resurrect  
io glacies est in gravesco cre  
pidoinis nostrivox」

その瞬間、翡翠の目の前の空間が割れ

巨大な氷の竜が召喚された。その竜は首が9本あり禍々しい雄叫びをあげている。

「なんだ！この馬鹿でかいドラゴンは？魔法か！」

「俺が今一番もっている、魔術で一番強い魔術だ」

「ヒュドラって言うギリシャ神話の魔物知ってるか？それをヘルメス式魔術で俺がアレンジした、オリジナル魔術だ。」

「てめえは右手に不思議な力があるらしいが、この巨大な竜の9本の首を一個ずつ触れられる暇が果たしてあるのかな？」

「……くっ」

「さあ氷の竜よ奴らを食らえ！」

雄叫びと共に長さ30メートル位の竜の首が上条にめがけて向かう。

「死にやがれええええええ超能力者あああああああ！」

上条は右手を差し出し、氷の竜に走り出す。勝てるかどうかは分からないがこのままだと焰まで巻き込まれる。

「うおおおおおおおおおおお！」

距離は50メートル。距離はあるがそんな数値はすぐ埋まってしまう。

上条当麻の右手と氷の竜が交差する。

……その時。

(上方へ変更せよ)

「C F A」

どこからか声が聞こえた瞬間、氷の竜の首はギリギリ上糸に当たらず、上にそれた。

「……なっんだと！」

翡翠が驚愕する。そして続けて。



（竜の首を九対を一点に集約、一つの塊となれ）  
「C N R T T O A O」

そして上空の竜は9本の首を一つにまとめられて、ぶつかり合った  
衝撃で碎け散った。

「なんだと！俺の魔術に妨害をかけただと……一体誰が？」

翡翠が声のした方を見る

……そこには修道服をきた少女が立っていた。

「インデックス！」

上条が少女の名前を呼ぶ

焰もあの少女を知っている。上条の部屋に遊びに行った時、上条の頭にかじりついていた少女。

そして少女が口を開く

「……とうま後でお仕置きだね」

「はぁ？なんで！」

「当たり前なんだよ！また一人で戦って無茶してなにかあったらどうするつもりだったの？」

インデックスと呼ばれる少女にはふざけた様子はなく、怒りを爆発させていた。

「だいたい、とうまは考えもなしに突っ込み過ぎなんだよ、私が魔力を感じてここに来るのが少しでも遅れてたら、どうなってたか……」

「……」

「まあもう怒ってもしょうがないから、これ位にしとくけど次は承知しないんだよ」

インデックスは上条への説教を終えると翡翠の方を見た。

翡翠は修道服を来たシスターに話かける

「おい！そのシスターお前、俺のヒュドラに何しやがった。あの破壊力を持ったヒュドラを止めるなんて、教官クラスの魔術師でも不可能だぞ！それをどうやって……」

「ギリシャ神話に出てくる、ヘラクレスが倒したと言われる毒蛇のヒュドラをヘルメス式魔術で構成し、破壊力を重視したオリジナルの攻撃魔法……」

「確かに破壊力は凄いけど、ルーンを使った暗号化の省略に本来の詠唱を省略し過ぎた為に、内側の術式が安定してない。だから簡単に割り込められるんだよ」

ありえないと翡翠は思った、自分のオリジナル魔術を一回見た程度でここまで解析する少女に……

(……しかしここまで術式を解析されたらあれだけの事が出来ないわけじゃない。ヒュドラを操る方法があるとすれば)

「強制詠唱か！」

スヘルインターセプト  
強制詠唱とは相手魔術の命令を混乱させ、その制御も妨害もする技

「私の中の10万3000冊の魔導書の知識があれば、どんなに破壊力があっても簡単に制御できるんだよ」

翡翠が眉をひそめた

「お前…禁書目録か！」

インデックスには完全記憶能力と言う能力があり世界中の10万3000冊の魔導書の知識が頭にある。

「チッ！って事はイギリス清教の人間か…」

（つて事はこのガキに手をだせば、完全にイギリス清教が動く。学園都市の人間なら多少隠ぺい出来るが……やっかいだな……だが）

「おい！禁書目録。俺はてめえがイギリス清教の人間だろうと容赦はしないぞ、俺の魔法名にかけてそこに転がっている裏切り者を殺すって決めてるからな。」

インデックスは焰の盾になるように前へ出た。

「させないよ。とうまの友達に悪い人なんか一人もない。それにとつまが体を張って守ろうとしてる人を見捨てるなんて私には無理だよ」

インデックスは迷いのない言葉だった。彼女は焰の事をあまり知らない。けど上条当麻が守りたい人の為に彼女も体を張った。

それは彼女の上条当麻への信頼が見えた。

「それに……あなたはもう魔術を使えない。あなたはさっきの大魔術で魔力はもうガス欠状態のはずだよ」

「確かに魔術は使ねえ」

しかし翡翠は焦る様子はなかった。

「なら！魔術以外を使えばいいだけだろうが！」

翡翠は左手をインデックスの方に向け、氷の槍を放つ。

上条当麻はインデックスに向けられた氷の槍を殴る。そしてまたかき消した。

「やっぱりめえには両方通じねえか。」

「どうなってやがるあいつはもう魔術を使えないんじゃないのか？  
インデックス!!！」

インデックスの表情が固まっていた。まるで今起きてる現象が信じられないように。そしてかすれた声で……

「……とうま……あれ魔術なんかじゃないんだよ」

「は？何言って……」

「だってさっきの技に魔力なんて宿ってなかった……」



上条はインデックスの言ってる事が理解出来なかった。

「じゃあ、あれはなんなんだよ？魔術を使わずにあんな事出来るわけないだろ？ あんな事、魔術を使わずに出来るのは学園都市の超能……」

上条が言葉を切った

「まさか…超能力？なのか？」

「だったらなんだよ。」

翡翠がそのありえない答えに正解を突き付けた。

「…ありえないんだよ」

翡翠が笑いながら答える

「ありえないとは？現に俺は超能力と魔術を両方使ってみせたぜ？」

「それがおかしいんだよ！だって魔術師が超能力を使う事なんて出来ないんだよ。例え使っても神経が引き裂かれるはずなのにあなたにはその形跡すらない。」

そう魔術師が超能力を超能力者が魔術を使う事は不可能なのだ。無理に使えば神経を引き裂く。それがこの世界のルール

「インデックス！もしかして例外があるとかはないのか？例えば使ったとしても体には影響が少ない魔術とか」

上条当麻も魔術と超能力を使うのは無理だと知っていたが。よくわ

からない状況に自分で言っても無茶苦茶だと分かっている質問をする…

「…とうま、魔術師と超能力者は回路が違っていて昔私が言ったの覚えてるよね？前はそう説明したけど、詳しく言っとね」

「魔術と科学この関係ってね、とうまに分かるように言っと敵同士なんだよ」

「…敵同士？」

「魔術はオカルトなんだよ。例えば昔、雷ってね神様の怒りって言われてたんだよ。それを昔はみんな疑わなかった」

「でも、それを信じない人達がいた。神様なんていないってその人達は雷の原因を突き止めたんだよ」

「そして、雷の発生の原理は上空と地面の間や上空の雷雲内に電位差が生じた場合の放電で起きる事を神様を信じる人に証明しちゃったの」

「それって神様がいないって証明する事になるんだよ。雷は神様の怒りでは無くただの自然現象でしたって……」

「でも神様を信じる人は反論した。なら台風は？大雨は？地震は？って……けど神様を信じない人達はそれを証明したの。」

「科学と言つ形で」

上条はインデックスの言ってる事がよく理解出来なかった。

「でもそれと回路が違つってどういう事なんだ？」

「魔術はオカルトで超能力は科学。魔術は宗教や神の理論に沿って行くものなんだよ。神様の力を科学で証明する人が魔術なんて信じると思つ？」

つまりインデックスは魔術は神への信仰心が必要で、神様の力を科

学で証明する 科学達には信仰心がないので使えないと言っている。

そこで翡翠が口を開いた

「確かにその禁書目録が言うように、魔術と科学は考え方（回路）が違う。そして無理に言えばペナルティーとして、神経が焼き切れる。」

上条がますます訳の分からない顔をするそして疑問をぶつけた。

「じゃあ回路が違う魔術と超能力をどうしてお前は使えるんだよ」

翡翠は答える。上条当麻とインデックスが抱えてる疑問に。

「俺達はな……」

「体の中をいじられ神経を改造された人間なんだよ。魔術と超能力が両方使えるように……」

上条とインデックスは聞き慣れない言葉に驚愕する。

「改造だった？」

「そうだ。かなり前にイギリス清教の一部の部署で科学と魔術が手を組もうと手を取り合ってた時があった。」

「しかしそれは失敗した。超能力達には信仰心なんてなかったからな。そして魔術師は逆に神様を信じずに科学へと手を伸ばした為に回路が焼き切れた。」

「しかしそれでも研究を止めなかった奴らがいた。そいつらはある特別な物を俺達に埋め込んだ」

「……ある物だと？」

「イリスの聖石だ」

インデックスが驚きの表情をした。

「イリスの聖石？何なんだ、それは……」

疑問を抱く上条

「イリスの聖石っていう霊装があれんだよ。簡単に言えば。イリスの加護を使って体に溜まる魔術的毒素を抜く霊装なの」

「じゃあそれを使って魔術からの毒素を抜いても超能力を使ってるって事か？」

「うん、でも問題ないはそこじゃないの、確かにイリスの聖石を使えば可能かも知れないけど、その霊装には一つだけデメリットがあるの」

「デメリットだって？」

「イリスの聖石はね？普通の人間の体には耐えられないの、使った人は体が耐えられずに、体の神経が全てマヒするんだよ」

「でもあいつは普通に動いてやがるじゃねか」

「そこがおかしいんだよ普通の人間に耐えられない物を使い、動いてる……」



そこで翡翠が…

「だ〜からその為に改造したんだろうが、普通の人間じゃないよ  
うに、ある特別な人間の細胞クローンを使ったんだよ」

「特別な細胞？」

インデックスが疑問をぶつける。もはや彼女の知識すら翡翠は軽く  
超えていた。

「聖人の細胞だよ」

「!？」

「聖人の細胞だと？」

「ああそつだ。詳しく事は研究者じゃないからわかんねーけど、あの聖人の細胞から遺伝子情報を読み取り、俺達の体にその細胞を埋め込んだ。」

「そして、俺達には紛いなりにも体に聖痕が形成された、まあ本来の10%も聖人の力を引き出せないが、イリスの聖石の副作用はその聖人の力で補ってらるってことだ。」

まとめると翡翠は魔術と超能力を使う為に聖人の細胞クローンから遺伝子情報を読み取り、聖人がもつ聖痕を体に形成した。その聖人の力で、イリスの聖石の副作用を克服した。

「そんな無茶苦茶だよ。そんな事で魔術と超能力が使えるようになるなんて…」

だが翡翠は実際に魔術と超能力を両方を使った。

「そういう事だ。長い話はすんだし、そろそろ決着をつけるか……俺の超能力の最大技で……」

そして翡翠は超能力を使い大剣を持ったまま、左手をかざす

そして大気中の水分を冷気で固まらせ、50メートルはある巨大な氷の剣を作った。

「インデックス！今は考えてる暇はないあいつを止めるぞ……！」

上条当麻の体が動かない

「なんだ…これ？」

翡翠が巨大な氷の剣左手で持ちながら

「馬鹿かてめえは俺がお前達とただ呆然と話してると思ったのか？」

上条の足が氷で固まっていた。

「お前に気づかれないように、能力で足元をいつでも凍らせれるように細工をしたのさ……右手に触れられずてめえをこの剣で斬る為に」

「とつまー！」

「来るな、インデックス！」

そして翡翠が大剣を上条当麻の体の左に 向かって……



上条の体まで後2秒

……その時。

「行くぜ！最大出力」

「フレアバスタ……！！！」

その時、後ろにいた天城焔の右手から巨大な獄炎が一直線に発射された。

スピードは音速の2倍

そして焔が放ったフレアバスターが巨大な氷の大剣を包み込み

……破壊した。

「焔！」

上条が焔の名前を呼んだ





天城焰が上条当麻の足元を炎で爆発を起こし、その爆発の勢いで上条当麻は翡翠との距離を5メートルまで詰めた。

「…………ツ！」

（難しい事とかは分からないけど、お前がその力で友達を傷つけると言っのなら…………）

（まずはその幻想を…）

『ぶち壊す！…！』

そして上条当麻の右手を翡翠の顔に突きさした。

バゴン！翡翠は宙をまった。そして今度こそ決着はついた。

上条当麻、インデックス、天城焰で勝ち取った勝利だった。

〈第7話〉友達〈完〉

## 第6話 友達（後書き）

読んでくださった方に感謝です！

第8話で翡翠氷河編を終わらせる予定です

いつも読んでくださる方、そうでない人にも感謝です。

ではこんな駄作を読んでくださった方々に感謝し第8話を書きます。

ありがとうございました

第7話 ラゲナロク（前書き）

お待たせしました〜って誰も待ってないか……

だんだん話しが滅茶苦茶になってますがご了承ください。

翡翠氷河襲撃編ラストです。

どうぞ読んでやってください

## 第7話 ラゲナロク

決着は着いた。翡翠は地面に倒れたままだった。そして上条当麻とインデックスは無理に力を使い倒れている焔に近づく

「大丈夫か？焔」

「何とかって所だな…」

とりあえず大丈夫そうな焔にほっとする上条。

「所であいつ一体なに者なんだ。魔術と超能力を使う奴なんて初めて見たけど…」

改めて疑問を掘り返す上条。そして焔が口を開く。

「当麻、今回の事はあまり深く探らないほうがいい」

「…何でだよ」

「あいつの属してる組織に目をつけられたら終わりだ。もし目をつけられたら当麻は命を狙われる事になる」

焰の顔を真剣だった。しかし、友達が狙われてるなら言わないわけにはいかなかった。

「でもお前は目をつけられてるんだろ？命が危ないんだろ？だったらほっておくなんて出来ない。ましてや自分の命が危ないからなんて引く理由にもならない」

上条当麻は天城焰を友達だと思っている。それは焰でも分かっている。

「……当麻？」

焰も上条当麻を友達だと思っている。それは間違いない事だった。

……でも許せなかった

こんなに優しく誰かの為に命を張れるそんな人間の隣に自分と言う名の罪人がいる事が……

「……でもな当麻。俺はな罪を犯した人間なんだ、当麻の優しさは嬉しい友達だつて事も本当さ、けどなそんな優しいお前に俺が隣にいる資格なんて……ないんだ」

「お前まだそんな事……言つてやがる……」

『俺は人殺しなんだよ！』

焰が叫んだ。上条は焰の叫び声に動きが止まった。

「それが俺の正体なんだよ。俺はな翡翠と同じ組織にいたんだ、組織の邪魔をする人間を殺す為の部署、鮮血の9人の1人なんだ」

焰の声は泣きそうな声だった。

「…殺したんだよ沢山の人間を……自分の利益にならない人間を1人1人ゴミのように殺していった」

「でもある時気づかされたんだよ…俺のやっている事の惨さを……  
1人の女の子に……」

「そして約束したんだ、平和な世界に帰るって……もう罪は犯さな  
いって……けどやっぱり駄目…だった。」

焰の目には沢山の透明な雫が流れていた

「駄目だったんだ！人を殺した人間は平和な世界には帰れない。今  
回みたい当麻達を巻き込んだ！」



焰は泣きながら上条当麻に向かって叫んだ。

「だから……当麻達とは友達だけど、当麻の隣にいる事は出来ない……平穩に……はっ……帰れないんだよッ」

「うつく……ああ　ごめんな……っ　当麻ッ……」

焰は顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら泣いた。ずっと友達でいたかった。ずっとこんな優しい世界にいたかった。

けど耐えきれなかった、こんな優しい世界に自分がいる事が

「……だから当麻は平和な世界に1人で帰っ………」

バシッ！

上条の拳が焰の胸ぐらをつかみ殴った

「とつま!？」

インデックスの叫びなど無視して上条は倒れている焰の胸ぐらをも  
う一度掴んで

『お前が一体どんな気持ちで人を殺したのかは知らないし聞きたく  
もない。けどなお前は悔やんでるんだろ!後悔してんだろ!人を殺  
すって事は反省したからいいですよって話じゃない』

『…けどな、だからって平穏な世界には帰れませんなんて言うなよ  
!お前は一体この世界以外にどこに行くんだよ!また繰り返すのか  
?また人を殺すのか?違うだろ!そうじゃないだろ!お前がしなく  
ちやいけない事はそんな事じゃないはずだ』

『お前は約束したんだろ?平和な世界に帰りますって、その女の子  
はお前に不幸になってもらいたくてそんな事を言ったのか!違うだ  
ろ?その女の子はお前の幸せを願ってたはずだなのにお前はそんな  
所で何やってるんだよ!』

「立ち上がれよ天城焔！なら罪を犯した分だけ、誰かを守れよ。悲しんでいる奴を守ってやれよ！そして大事な約束を守ってみせやがれ！」

そして修道服の女の子が優しい笑みで焔に話しかけた。

「あなたのした事は多分許される事じゃないのかもしれないけどね？あなたは自分の罪を自覚して後悔したんでしょ？」

「だったらもう一度やり直せるよ！罪を犯した分だけ、誰かを守るよ、私もとうまもあなたが頑張って作ったかさぶたをはがして怯える事なんてしないんだよ」

とても優しい声だった。焔は2人の言葉を噛み締める。

(…そうだよな。ティア駄目だよな…こんな所でへこたれてたら…  
…なら俺は)

焔はゆっくり歯を食いしばって立ち上がった。そして2人の顔を見

て涙を拭う。

過去は変えられないけど未来は作る事が出来る。こんな人殺しでも…笑ってくれる暖かい友達がいるから…

「ありがとう。2人共俺さもう大丈夫だから……」

「俺は……誰かを守る為に戦う！」

もうさつきまでの焔はいなかった。大事な物を胸の中に秘め約束を守る為に立ち上がった焔は気迫に満ち溢れていた。

「まったく面倒かけさせるなよ？焔」

「悪いな」

2人は顔を合わせると小さく笑った。

……しかしそこで

「クツク…ハハはハハハハハ！」

倒れていた翡翠が起き上がり笑いだした

「何夢物語、語ってんだ！天城おおおおお！罪人の分際で幸せに帰るつもりかよ馬鹿か！帰れるわけ…！」

ドゴン！

「ガハア…！」

焰は翡翠に近づき炎を灯した腕で翡翠を殴った。

「悪いな翡翠。確かに俺は罪人だけど、もう泣かない平和な世界に帰る必ず！」

「……もう何を言っても無駄なようだな……」

翡翠が左手をかざし 冷気を集めた。

……その時

崩壊したビルから人影が出てきた。そして翡翠の元まで走り一枚の紙を翡翠の左手にかざした。

「そこまでだにゃ」

焰は一瞬だれかと見間違えたと思ったがそれは違った。そう焰がよく知る人物が翡翠を抑えつけた。

「…土御門？」

「間一髪って所だったかにはホムやん。そんなふらふらな状態で殴ったのはいいけど、こいつの攻撃はどう避けるつもりだったのかにゃ」

「…はは考えなかったな、それより土御門お前どうしてここに…」

しかし土御門は途中で話を止め翡翠を見た。

「動くなよ？この紙は魔術や超能力でも反射する魔術を書き込んだ物だ、打てばお前はそこで終いだ」

土御門の声が変わっていていつもの奇妙な喋り方はなかった。そして顔は今までに見たことない位に真剣だった。

「悪いがカミヤんの背中に通信用の護符を貼っていたからお前達の話は全て知っている。まあいまだに信じられないがな……」

上条が自分の背中に手をやると小さい紙が背中に貼ってあった。右手で触ると消えた。

「あの野郎いつの間に」

「さあどこの組織の人間だ話してもらっぞ」

土御門が翡翠を覗む



……その時。

土御門の手を誰かが掴んだ。

「……！？なん……」

言葉を発する前に土御門は謎の手にそのまま放り投げられた

土御門はそのまま20メートルも吹き飛んで、崩壊した建物に激突した。

「ぐはぁ……」

「土御門……」

焰と上条が同時に叫ぶ。土御門はいきなりの事態に状況が把握できなかつた。

(……一体何が)

頭を強く打ちふらふらする土御門はさっき自分のいた位置をみる。

そこには1人の少女が立っていた。

(いつの間にか！)

土御門はおるか上条当麻、インデックスすら気づかなかつた。

その少女は背中まである長いピンク色の髪にピンク色のボロボロのワンピースを着ていて、何故か目には生気がない、奇妙な少女だっ

た。

しかし焔はこの少女に気がついていて。この少女を知っている。冷や汗が滲み出る。

焔がその少女の名前を呼んだ。

「死帝のフラリス」

その少女は焔の声を聞き焔の方をみたがすぐに目をそらし翡翠の方を見る。

「ムカエニキタ」

ゾツとした声だった フラリスの声には感情がない人形が喋るような声だった。

「迎えに来ただと？」

「…テッシュウッ」

フラリスは翡翠に撤回しろと言っていた

しかし翡翠がフラリスに反発した。

「ふざけんなよフラリス！俺はまだやれる解放状態は使えないが…」

ゴキ！ゴキ！ゴキ！

翡翠の体から変んな音が聞こえた。

「……………ガッ」

翡翠の首にはいつの間にか黒い影みたいな手が翡翠を首絞めていた。

「…ウルサイナ」

少女は翡翠を見て無表情のまま首を絞めている。

「…コロシタイ・ケド・メイレイイハン」

「……………」

翡翠は首を絞られ気絶してしまった。

上条は声を上げる事すら出来なかった、フラリスと言う少女には何か近づくなと五感が警告している気がした。

それはインデックスや土御門も一緒だった。

そしてフラリスは翡翠の大きな体と大剣を抱えた。

フラリスが地面を軽く蹴ると扉のような影が出現し。

「帰るのか？フラリス、お前達の目的は俺の処刑だろ？何故撤退する理由があるんだ？」

焰がフラリスと言う少女に問う。焰は知っている、この少女の強さを

「…メイレイナイカラ」

少女は一言だけ告げると気絶した翡翠をかついで影の扉の中に入っ  
て行き姿を消した。

2人が撤退したと同時に周りが賑わい出した。どうやら人払いの効  
果がきれいらしい。

「カミヤん、とりあえずここから離れるぞ、アンチスキルやジャツジメントがきたら面倒だ」

「そつだな…焔、立てるか？」

「ああ多少傷は深いが問題ない。」

そして4人はその場を離れて上条当麻の学生寮に移動した。

- - - - -

#### 学生寮

とりあえず4人は上条当麻の部屋で状況を整理する事にした。

「にゃ〜とりあえず今回の事を焰の証言を元に整理するぜい」

「1、今回の襲撃して来た翡翠氷河と名乗る男は同じ組織の裏切り者、天城焰を処刑する為に学園都市に侵入した。」

「2、翡翠氷河は、魔術と超能力を両立使え特殊な霊装と聖人の細胞クローンので聖人の力を手に入れた為、強靱な肉体を持ち、霊装の効果を組み合わせる事にやって魔術と超能力を使えるようになった」

「3、翡翠氷河とフラリスと言う2人は鮮血の9人と言われる殺人専門の部署に属している」

「にゃ〜今の現状を整理するところなるけどホムヤん間違いはない？」

「凄いな、一回話ただけでこれだけ整理するとは……」



焰が土御門の情報の整理力に驚いた。普段の土御門からは想像がでない。

「実はカミヤんの背中に盗聴用の護符を張りつけて会話を聞いてたのもあるけど」

「カミヤん達を助けに行く途中、不振な男達が10人位いたんで適当にやつつつけたんだにゃ〜その時その男達から聞き出した情報を元に整理した事でもあるんだにゃ〜」

「不振な男達？そんなのがいたのか？」

「いたんだにゃ〜白いスーツを来た男達が…通信用の霊装で連絡を誰かとしてた見たいだったにゃ〜」

「ああ多分それは白猫部隊だよ。」

焔は白いスーツの男達を白猫部隊といった。

「ん？白猫部隊なんだにゃ？それは清教の所属部署名にしては聞いた事ないにゃ？」

「白猫部隊って言うのは翡翠を隊長としている総勢200人位の部隊の名前だよ」

「奴らは主に翡翠の連絡係やサポートをする為の部隊だよ。」

焔が話を続ける

「俺達、鮮血の9人の隊長にはそれぞれ雑用をする部隊が送られる、雑用する以外に副隊長も存在するんだ」

そこで上条が『だあー』と言う声と共に上条が立ち上がった。

「…とじまっ？」

「にゃ〜カミヤんトイレなら我慢せずに行った方がいいにゃ」

「違うわ！ちよい話の規模がデカくないですか？隊長とか副隊長ってなんか魔術とか関係無さそうだし。」

「ん〜確かにカミヤんの言ってる事は分かるけどにゃ〜なんか部署名にしても日本語見たいだし。」

「うん。それは私も思ったかも、どの清教の部署でも日本語を使う部署名はないんだよ。」

「という事でホムヤんそろそろ核心に迫りたいんだが……いいかにゃ？」

「奴らは何者なんだ目的は？」

焰は少しだけ黙った言葉を考えてるのか 言うのをためらっているのかは分からないがやがて口を開いた

「鮮血の9人が属してる組織の名前は…」

(ラグナロク)

「新世界」

インデックスと土御門の肩が「ビク！」と動いた。

「ホムヤン新世界ラグナロクってあのラグナロクでいいのか？」

土御門はその言葉の意味を理解できずにいた。

インデックスも同じような顔をしていた

1人置いてきぼりな上条は頭に？マークを大量につけながら…

「あの〜ラグナロクの意味が分からない上条さんなんですけど…そんなにやばい言葉なんですか？」

恐る恐る聞いてみる上条何故なら、彼は色々な事に知識がなさすぎて質問するたびにみんなから冷たい視線が贈られるが日常茶飯事だからだ

……しかし

「とつまは知らなくて無理ない事なんだよ。」

「ラグナロクなんて言葉聞く事、事態珍しい言葉だからね…」

「そうなのか？じゃあラグナロクって一体何なんだよ？」

「北欧神話の終末の日の事をラグナロクって言うんだよ。全部説明すると長いけど…神々と魔神の戦いで世界が崩壊したって話なんだよ」

「そして、戦いに生き残った神々はほとんどいなくて、主神オーディンの息子が新たな神になりましたってお話なんだよ」

「〜んだいたい凄い言葉だと言う事は分かったけど、そのラグナロクが意味する事ってなんだ」

「にゃ〜そればかりはホームヤんに聞くしかないんだにゃ」

しかし土御門はだいたいの予想がついてるらしいが、焰に話を振っ

た。どうやらまだ確信が持てないのだろう。

「当麻。ラグナロクが意味する事、簡単にまとめるとな…世界は破壊されました、しかし新たな神々は世界を再生しましたって事なんだ」

上条は何かに気づいたらしい。インデックスと土御門はどうやら確信がもてたのか納得したような顔をしていた。

「組織の目的は今の世界を破壊し新たな世界を作る事らしいな。」

「はあ？世界を壊して作り直す？なんか上条さんの頭の許容量を超えてるのですけど…」

どうやらここにいる三人全員がパツとしてないらしい。しかしそれは焰も一緒だった。

「でもな…俺もその話が本当かどうかは分からないんだ。」

「どづいつ事だ？」

「俺達、鮮血の9人は組織の事情なんて知らないんだ。俺達は命令された人間を殺すだけの部署だからな。」

「だから組織の目的もはっきりした事は分からない。ちなみに組織の内部の部署がどれ位あるのかも知らない。」

「分からない事だらけだな」

「まあそんなもんだよ。正直あいつらの目的は分からないし学園都市に危害を加えるかも分からない」

「…でも多分あいつらはまた俺を狙ってくる、その時は力を貸してくれ」

三人は強く頷くと一応解散する事にした。理由は簡単で情報がな



さすぎて話にならないからだ。

焰が病院に行くため部屋を出ようとしたら上条に呼び止められた。

「お前明日学校にくるよな？」

焰はドアノブに手をかけたまま。

「当たり前だろ！」

「じゃあまた明日な」

「当麻。ありがとうまた明日な」

焰は上条の部屋の寮を出て、空を見上げた。綺麗な夜空が見える。

「必ず守るからな、俺に関わった人は1人残らず守る！」

夜空を見上げ1人自分に宣言した。

第7話　ラグナロク　完

## 第7話 ラゲナロク（後書き）

いや〜なんか話のまとめ方がへたですみません。

一応出会い編は終了しました。

次はもう一人のオリジナル主人公がです。

ご愛読ありがとうございます。

第2部 『鏡 晴也』 (前書き)

第一部 鏡晴也編ですどうぞお楽しみ下さい。プロローグと言つて  
とで短いです

## 第2部 『鏡 晴也』

風紀委員ジャッジメントそれは学園都市の学生で構成された。学園都市の治安維持部隊。

学園都市内で起こる超能力犯罪また街の掃除に迷子の搜索など、色々な仕事を任せられている。それが風紀委員である。

- - - - -

### 風紀委員002支部

風紀委員002支部 学園都市の風紀委員達の中でよりすぐりのトップが配属される支部。

しかしこの002支部は風紀委員のトップの威厳をもつ支部なのに何故かいつも騒がしいかった。

第002支部は第3学区の高級マンションに支部を持つ。

高級マンションは防音対策バツチリなはずなのに…何故かこの第002支部がある部屋からいつも喧嘩してるような声が聞こえる。

「ちよつと鏡先輩！またパトロール中にサボってゲームセンターに行ってたんですか！」

「サボってたんじゃないよ、弥生ちゃんゲームセンターの機械の調整を検査してんだよ」

今、怒ってっている女の子の名前は

(しらぬい やよい)

不知火 弥生

背は162センチ、髪は茶色の長い髪を後ろで束ねている。常盤台  
中学の三年生。

正義感が人一倍強く誰の為に死ぬ気で動けるような子で周りからの  
信頼も厚い。

かわいい顔をしてるが仕事を真面目にしない人間を見ると鬼のよう  
な顔になる。

「…鏡先輩。いちいち貴方の意見を聞くほど私はお人好しではあり  
ません。」

今怒られている方の男は

(かがみ せいや)

鏡 晴也

身長175センチ。

黒い髪をツンツンにしホストみたいな顔つきをしている。

性格はとにかく自由奔放で誰かに指示されたり、自分の行動を制限  
される事をとにかく嫌う。





ドガ！BAKi！グシャ！？

怒りのボルテージMAXの弥生にパイプ椅子で殴られ、晴也はその場に倒れこんだ。

「鏡先輩。それより大事なお話があるのですが真面目に聞いてもらえますか？」

「この痛みを我慢して聞けと言われるのですか弥生ちゃん」

晴也はフローリングに倒れ込んだまま頭を抑えていた。

しかし問答無用に…

「じゃあ、そのままでもいいんで聞いて下さい。」

「ひでえ」

弥生は倒れた晴也を無視して、手元の資料を取り出す。

「風紀委員の本部から第002支部の責任者、鏡晴也に任務を命ずる」

弥生は手元の資料をスラスラと読んでいく。

（本部からの指令かよ〜面倒くせえ〜）

「第7学区の駅前で昨晚を起きた器物破損事件について調査しろとの事よ」

「ん？器物破損事件？そんなちっぽけな任務なんでわざわざ俺に調査しろって言うんだ」

「第7学区にも風紀委員がいるだろうそいつらに調べさせればいいじゃん」

弥生は溜め息を吐きこめかみに指を当てた。

「先輩まさかニュース見てないんじゃない……」

「見てるわけないだろう。昨日は第3学区の夜の繁華街で女の子と遊んでたんだから……ゴフッ！」

倒れてる晴也に弥生はみぞおちに蹴りを入れた。

「完全下校時間を過ぎて夜の街を遊んでる女の子を注意するのが貴方のお仕事でしょうが！」

「ぎょ…めんなさい」

「まったく…で話を戻すけど昨日夕方に駅前で大規模な器物破損が起きたの」

「ビルが四件倒壊していて、アスファルトは大きく捲れあがったの  
確実に能力者の仕業よ」

晴也は地面に倒れながら疑問をぶつけた

「…でもおかしくない？だってビルが倒壊する位だろ？しかも駅前で起きてる事なら目撃者だってたくさんいるはずだろ？」

「それがね…目撃者はいないの、どづいつわけか気がついたらビルが倒壊していたみたいなのよ」

「なんだよそれ？意味不明過ぎるぞ」

「まあとにかく貴方にはこれから第7学区に行ってもらいます。」

「ええ〜〜〜！！」

子供みたいな叫びを上げる晴也、ちなみに高校二年生です

「いいから行きなさい！第7学区に着いたら177支部へ行きなさい。分かった？」

「分からん！」

ゲシッ！！

「ゴハああ！」

バタム！

弥生の強烈な蹴りを顔面にくらった。

「たまには仕事しなさいよ、先輩！」

「分かりました。行きますから、これ以上暴力振るわないで……」

「私が一方的に殴ったように言うな。まったく先輩、身勝手な行動でくれぐれもあちらの方達に迷惑かけないようにね?」

そついつと仕事の資料を晴也に渡した。

(…つうう気は乗らないけど早く済ませて帰る。)

こつこつして鏡晴也は渋谷第7学区に向かう事にした。

(まさか弥生ちゃんのパンツが花柄なんて意外と子供ばいんだな)

「考えてる事が口から漏れてますよ〜せ・ん・ぱ・い」

「じよめんなだい！」

言葉にならない言葉を上げて鏡晴也は走ってその場を逃げ出した。

「ったくどうしていつもあんな感じなのかしら」

ガチャ。

「ただいま帰りました。不知火さん」

「あっお帰りなさい藤宮さん」



同じ支部の同僚の藤宮がパトロールから帰ってきた。少し痩せ気味な可愛らしい女の子だ

「不知火さん、さっき晴也先輩が顔色変えて走っていったんですけど何かあったんですか？」

「いつもの事ですよ」

「そうですね」

藤宮は差し入れのアイスクリームを弥生に渡した。

「ありがとうございますお金は後で…」

「相変わらずお堅いですね、不知火さんそんなんじゃ彼氏出来ませんよ」

「ブツ！な・なにを言ってるのよ彼氏なんて……」

顔を真っ赤にする弥生どころやらこの手の話は駄目らしい。

「え〜だって不知火さん晴也先輩と結構仲良さそうじゃないですか」

「違うわよ、あいつは夜中に女の子と遊ぶような奴よ？そんな奴私  
が好きなわけ……」

「私まだ好きまで言ってないですよ不知火さん」

「……」

（ありゃ〜やっぱり脈ありですか。）

藤宮は話をそらすことにした。

「それにしても不思議な人ですよ〜鏡先輩って…」

「…え？」

「今更かもしれないですが、謎が多いじゃないですか。」

「学園都市の能力開発分野ナンバーワンの長点上機学園を中退。中退してすぐに無名の学校に転入」

「そして転入したら風紀委員に入っていきなりこの支部に来ちゃうんですもの」

「まあ先輩も色々あったのよ。あんな風に見えるけどやる時にはやる人よ」

弥生はアイスを食べながら、窓の外を見た。けどその姿は少し寂しそうに見えた

藤宮は弥生の姿を見て

「…なんか似てますね」

「…えっ誰に」

「晴也先輩にですよ…あの人も時々すごく寂しそうな顔するから…」

「そっか藤宮さんも見ちゃったんだ」

「はい…支部の屋上で寂しい顔をして胸にかけてあるペンダントを

見ている晴也先輩はなんか見てられなかったです。なんか泣いてるような感じもしましたし……」

「普段の先輩からではとても……不知火さんは先輩と幼なじみなら何か知ってるんじゃないですか？」

弥生は窓の外を見ながら何かを思い出してるようだった。

「私も全部は知らないし、先輩も知って欲しくないと思うから私からは言えないわ」

「けどどんな事があっても鏡先輩は鏡先輩それだけは絶対に間違いないわ。」

「そうですね〜まっどんな過去を持っててもいいから仕事は真面目にして欲しいですよね〜」

「言って聞くなら苦労はしないんだけどね。」

「晴也先輩、真面目にお仕事してるんですかね〜？」

「自信はないわね」

アイスを食べながら鏡の心配をする二人一方その頃。

.....

## 第7学区の駅前

「じじはどこだ？」

鏡晴也は迷子になっていたのだった。

第二部「プロローグ」完

第2部 『鏡 晴也』（後書き）

いや〜読んでくださった方ありがとうございます。

第二部鏡晴也編は主にとある科学の超電磁砲を舞台にした主人公です。

天城 焰編はわけの分からない部分が多かったので鏡晴也編は皆さんに分かりやすくするつもりです

では読んでくださった方ありがとうございました。



## 第8話 スキルアウト（前書き）

え〜お待たせしました。

って誰も待ってないか。

鏡晴也編第1話。どうぞ

あとお気に入り登録10突破最高に嬉しいですありがとうございます  
す

## 第8話 スキルアウト

風紀委員第002支部

風紀委員第002支部とは風紀委員でトップクラスの実力を持つ者達を集めた支部。

支部の人員は8人その全員が大能力者である。

そんな凄い支部から来た男『鏡晴也』は 第7学区で迷ってしまった。

仕方がないので同じ風紀委員の弥生に連絡をとる事にした。

携帯のアドレスから弥生の番号を引き出し通話ボタンを押す

「あつもしもし〜弥生ちゃん俺だけ〜」

「先輩もしかして迷子になったから電話かけてきたっておちですか？」

「…なんで分かった？」

「電話かけてくる内容がそれしか思い浮かばなかったからです。」

「俺信用薄いね〜悲しいよ弥生ちゃん。」

「一番悲しいのは間違いなく私です。どうしていつもそっなんですかあなたは！」

「まあまあ口論しててもしょうがないでしょ？時間もないし場所おしえてよ〜」

「はあ〜分かりました。説教は後にします。第177支部の地図をメールで送信しておきますね。」

「それより弥生ちゃん」

「何ですか？」

「ちよい支部に行く前に駅前現場に行ってみていい？」

「…え！ちよつと先輩頭でも打つたんですか？」

弥生が声がひっくり返えている。

「頭なんて打ってないんだけど〜なんで？」

「だって先輩がお仕事を自発的にするなんて、学園都市が崩壊する位、珍しいことじゃないですか！」

とても失礼な言葉を連発され流石の晴也もへこんだ。

「…弥生ちゃん失礼じゃないかな？俺だってやる時はやるんですよ。それに……」

晴也は一度言葉をきって

「もしかしたら例の事件に繋がるかもしれないし。」

晴也にはいつものふざけた調子ではなくとても真剣な声だった。

「……………分かりました。支部の方には私が連絡を入れます。先輩はどうぞ行って来てください。」

「…ごめんな自分勝手です。」

「いつもの事ですよ。」

「…弥生ちゃん、ありがとくなー！じゃあちよっくら仕事してくるね！」

そして通話を終えた 晴也は駅前に向かっていった。

- - - - -

### 第7学区の駅前

第7学区の駅前はアンチスキルが沢山いた。どうやら事件の調査中らしい。

「…にしても、これだけの惨状が起きてるのに誰も気づかなかったとはな……」

弥生がある程度状況を教えてくれたが、実際に見るとやはり違う。

ビルは半壊しており周りのアスファルトは地震が起きたようにめくれ上がり。所々に血痕が残っている。

「とりあえず現場の調査にお邪魔しますか。」

晴也は現場に張られてるイエローテープをまたいぐ、そこでアンチスキルの人に止められた。

「ちょっと待つじゃんよ。ここは学生立ち入り禁止って書いてるのが読めなかったじゃん」

「ああいえ、風紀委員の者です。現場の調査に来ました。」

「ん？そんな連絡入ってないじゃん。風紀委員は今朝調査に来たばかりじゃん」

どうやら朝に風紀委員が調査をしにきたらし。晴也は仕方ないので支部から発行されてる。第002支部のバッチを見せる事にした。

「風紀委員第002支部から来ました。鏡晴也です。本部からの応

援で調査しに来ました。」

「まさかこの事件に風紀委員のエリートが応援が来るとは、上はよっぽどこの事件を気にしてるみたいじゃん」

「…上の事情はよく分からないんですけど、まあ調査させてもらってもいいですか？」

「そういう事ならOKじゃん。ついて来るじゃん」

アンチスキルのお姉さんの後を晴也は歩いて行く。

(はあ〜敬語って疲れるな〜だから仕事は嫌いなんだよな)

鏡晴也は仕事をする時はなるべく普段の態度を出さない事にしていく。自我もろだしたと現場から追い出さて、後で弥生に怒られるからだ。

「あのお姉さん。一応状況を確認してもいいですか？」



「状況確認…ねえ。正直に言っと何も分かってないっていうのが正しいじゃんよ」

「これだけの事が起きてるのに何も分からない？どうしてですか？」

アンチスキルのお姉さんは煙草に火をつけて空に煙を吐き出した。

「あれだけのビルを破壊できる能力者って学園都市に何人位いると思っじゃない？」

「最低でもレベル4クラスじゃないと無理な気がしますけど…」

「あのビルは対能力者の特殊な物で作られてるらしいじゃん。それをあんなに破壊するのは間違いなくレベル5はいるじゃんよ。」

「レベル5クラスの能力者ですか…」

「けど学園都市のレベル5には全員ありばいがあるじゃん。今レベル4でこんな事ができる能力者がいないかバンクを洗いざらいに調べるところじゃん」

「血痕とかはどうなんですか？血痕を調べれば誰の血液か分かるじゃないですか」

「やったんだけどね駄目だったじゃん。血痕になんか細工がされてたみたいじゃん。」

「なるほど。なら学園都市の監視衛星をしてみるしか……」

アンチスキルのお姉さんが不機嫌そうに

「却下されたじゃんよ」

「…何んで」

「それが分からないじゃん」

おかしいと晴也は思った。何故監視衛星の使用を拒む必要があるん

だ。監視衛星のアクセスは統括理事会が決定権を持っている。

統括理事会が知られてはまずい内容なのか？

「相変わらずだな統括理事会……！」

晴也の殺気こもった声にアンチスキルのお姉さんは少々驚いた。

「まあ調査は続けるじゃん。どうする今からアンチスキルの支部でバンクを検索して見るんだけど……」

「……あいえ自分これから風紀委員の支部に向かわければならないので……」

「分かったじゃん。成果があつたら支部の方に連絡しとくじゃん」

そついうとアンチスキルのお姉さんに頭を下げて現場を離れて支部に向かう事にした。

そして弥生からもらった地図を頼りに道を進む。しかし途中で足を止めた。

第7学区の裏路地。薄暗くそしてスキルアウトの溜まりばになっている。

（確かこの裏路地だったよな……………）

晴也は裏路地を見つめたまま何かを思っていた。

「……………銀次」

晴也から漏れた言葉は一人の少年の名前だった。

（お前の仇俺が必ず…）

パン！

その時、銃声が裏路地になり響いた。

（発砲音だと！スキルアウトの人間か！）

晴也は裏路地に入った。思ったより裏路地は道が複雑で枝分かれした道が多い

（火薬の匂いをたどれば、道を間違える事はない！）

そして晴也は裏路地を真っすぐ進む。

（ここかー！！）

裏路地の少し大きい道にでた。

……そこには青年が20人位で1人の少年を囲んでいた。

少年は腕から血を流していた。

「……やめろよ、無能力者の分際で僕にさわるなよ！」

「ああ！テメエもう一発ぶちこまれたいか！」

「……くそ能力者はみんな俺達を馬鹿にしゃがって。」

晴也は影に隠れて話を聞いている。いきなり突っ込んで、青年達に逃げられたら困るからだ。

「なんで僕が無能力者達にこんな屈辱を受けなければならないんだ。」

「テメエが最初に俺らの仲間を能力で攻撃したんだろっか！」

「無能力者の分際で僕の体に触れたんだ悪いのはあいつの方だ。」

「あいつは親切にお前の財布を拾っただけだろうが！」

「無能力に触られた財布なんて汚らわしいんだよ。あんな財布とっくに捨てたね」

「ぶざけんなあああああああああ！？」

パン！パン！パン！

三発の銃声と共に少年の肩を三発の弾丸が貫通する。

「ぐわあああ！痛いよ、痛いよ。スキルアウトの分際でお前達なんかみんな生きてる価値なんてないんだよ……」

「もういいお前達こいつを殺すぞ！」

青年達が拳銃を構えた。その時………

「ちよい待てよ」

青年達が一斉に振り返った。

「誰だ！」

「ジャツジメントです。皆様大人しくしていただけたら非常に嬉しいんですが……」

青年達が拳銃を晴也に向けた。

「動かない方がいいのはお前の方だ。風紀委員、俺達はどうしてもこいつに礼をしなくちゃならねえ。」



「そういう一般人の暴力を阻止するのも仕事なんですよ」

「風紀委員の人、早く僕を無能な奴らから助けてよ」

「テメエは黙ってる！」

青年の一人が少年に膝蹴りをくらわした。

「痛い、痛いよ、痛すぎる、何やってんだよ早く助けてよ」

「悪いが風紀委員こいつは殺す。いくらお前が能力者だからってこの人数は相手にできないだろう。大人しくしとけば命の安全は保証する」

晴也は首もとをかきながら。

「やっぱり一般人の暴力は認められませうん。」

「なら交渉決裂だな！風紀委員。お前らこいつもまとめてやっちなえ。」

男達が拳銃を構える

「しょうがないね。さっさと終わらせようかな。」

…その時

パン！パン！

二発の銃声と共に弾丸が発射され晴也の体を……………

貫いた

……しかし

ガシャン！とガラスが壊れる音がした。

スキルアウトが撃つたのは晴也ではなく『鏡』だった。

「なっ馬鹿な！奴はどこに？」

「ここだぜ」

晴也はスキルアウト達の後ろにいた。

「なっいつの間に！」

「お前達が見ていたのは鏡像だよ」

「鏡像だと？」

「ああ俺の能力は鏡使い（ミラージュマスター）だ。シンプルそんな能力だが、バリエーションはたっぷりなんだぜ」

晴也は指を鳴らすと晴也の鏡像が1、2 3………10とどんどん増えてきた。

「どれが本物だ？」

「構わねえ、全部撃ち落とせば問題ない」

スキルアウト達が銃を構えたが。

「なんだこれは……」

なんとスキルアウト20人全員が四角の鏡の箱に閉じ込められた。

「技名。ミラージュ・ボックスって言うてな？鏡に相手を閉じ込める技だよ。」

スキルアウトの一人が銃を構えて割るとしたが……

「やめとけよ」

晴也の声で動きがとまった。

「割ったら鏡の破片が突き刺さるぞ！もし割ったとしてももう一回閉じ込めたらいいし。そのまま動かないでくれ……」

…しかしスキルアウトの一人がスイッチがついた。棒状の装置を取り出した。

「なめるなよ。風紀委員、俺達はなあいつみたい有能力者が大嫌いなんだよ。力のない俺達を見下しやがって……」

「玉砕覚悟だ！悪く思つな風紀委員。」

彼がスイッチのボタンを押した瞬間。

ドガーン！！

裏路地を囲む建物から爆発が起きた。

「おい！何やってんだ」

「言つたる玉砕覚悟だつて？俺達ごと、そこのがキとお前を潰してやる。」

爆発した建物は真ん中から崩れ、建物の半分が晴也達に向かってきた。長さは10メートル。

「嫌だ〜死にたくないよ〜誰かたすけて〜」

晴也の後ろで少年が喚くが聞く身にもたない。

長さ10メートルほど建物が倒れてくる

「まったく面倒かけさせんじやないよ。」

晴也は腕を建物にめがけて横に振った。

スパーン！！

何かが切れた音がした。

10メートルもある建物が真っ二つになった。

「なっ馬鹿な！」

スキルアウトは自分の目を疑った。晴也は腕を横に振っただけで建物を切ったのだ。

真っ二つになった建物は軌道がそれで、スキルアウト達には当たらなかった。

「お前何をしたんだ？」

晴也はつまらなそうに

「切ったんだよ。」

「切っただと!？」



「俺の能力で鏡の斬撃を建物に放ったんだよ。鏡の光の反射を利用してるから見えないんだけどね。」

「まあ差し詰め、見えない斬撃。ミラージュ・ブレイドって所かな？」

スキルアウトは鏡に閉じ込められ動けない。勝負はついていた。

「…さてと」

晴也は被害者の方に寄って行った。

スキルアウト達はまだ少年を睨んでいた。しかし彼らは手が出せなかった。

そして被害者の少年は傷を押さえつけながら、晴也にかけよる。

「ありがとう。おかげで助かりました、こんなクズな無能力達に困まれた時……………」

……その時

晴也は被害者の少年の胸ぐらを掴んでいた。

「…何をするんですか？」

バゴン！

晴也が少年を殴り飛ばした。

「ガハア！」

アウトスキルは何が起こったかしばらく分からなかった。

「なにするんですか？アナタ風紀委員でしょ被害者を殴るなんて許

される訳ないですよ。アンチスキルに訴えてやる」

晴也は少年の胸ぐらをもう一度掴んみまた殴る。

「ブハア！」

少年は壁に激突した。少年は震えた声で晴也に言葉を放つ

「いい加減にしろよ僕は被害者なんだぞそんなグズな無能力者とは違うんだぞ。能力者なんだぞ、なんで無能な無能力者は一発も殴らなくて能力者の僕を……ガッ！」

晴也は少年の首もとを絞めた。

『さっきから聞いてれば能力者、能力者って…そんなに偉いのか？能力者が！』

晴也は少年を睨みつけるいつものふざけた姿はどこにもなかった。

『いいか？分からないなら教えてやるよ。人の価値はな能力なんかで決まらねえんだよ！』

『こいつらの仲間は財布を拾ってやったただけだろ？なのに汚い？汚らしい？ぶざけるのもたいがいにしとけよ！！』

『スキルアウト達だってな全員が腐ってる訳じゃないんだよ！？確かに一年前のアウトスキルは酷かった……けどな、今のスキルアウト達はスキルアウトなりに誰かの力になりたいって奴だっているんだよ！！』

そう一年前のスキルアウトは能力者狩りや風紀委員狩りなどをやっている汚い集団だった。

しかし新たなスキルアウトのリーダー『浜面仕上』と言う人物に変わりスキルアウトの大半は考え方を変え、誰かを助ける集団へと変わりつつあった。

『俺はそんなスキルアウトの人達はすげえと思うし、尊敬する。お前みたいな能力者なんかより全然価値があると思う！！』

晴也は少年の首もとから手を放すと、スキルアウト達に近寄り。そして彼らを閉じ込めていた鏡を消した

「お前達も、もういいだろう？これ以上こいつに何か言うだけ無駄だからな」

スキルアウト達はお互い顔を見合わせ。静かに頷いた。

「お前達は行っていいぞ。そろそろ騒ぎを聞きつけたアンチスキルや風紀委員がくるからな…」

「待てよ、何で俺らの肩を持つんだよ。」

晴也は小さく溜め息をつきそして…

『俺は自分が正しいと思った行動をする。そこに風紀委員とか法律とかは関係ないんだよ。それが俺の貫く正義だからな』

「ほらさっさと行けよ」

晴也は手を横に振り早く行け「しっし」と合図をだした。

「…あのよ、ありがとくな。」

「いって事よく始末書がまた増えるだけだからね」

そついうとスキルアウト達は走って裏路地へと消えた。

スキルアウト達がさり被害者の少年は脱力している。

そして晴也は冷や汗が湧き出た。

（最高に格好つけたのはいいけど…弥生ちゃんにまた怒られる…ど  
うしよう。）

仕方ないので前向きに言い訳を考える事にした。

しかしその直後に風紀委員の人間が来たようだ。

「お待ちせしました。風紀委員第177支部の白井黒子ですわ、騒ぎを聞きつけて参りました。」

(さてどう状況を説明しようかな?)

晴也は弥生の前にこの少女への言い訳を考えてるのであった。

第8話) スキルアウト

く完く

## 第8話 スキルアウト（後書き）

いやゝ相変わらず駄作ですみません。

毎回読んでくださる方には感謝。そうでない方にも感謝！

評価が伸びなくて残念ですが頑張ります



## 第9話 第177支部（前書き）

お気に入り14件突破ありがとうございます！

最近アクセス数もかなり上がってます皆さんのおかげです。

今回のラストですが見たら分かりますがてきとうじゃありませんの  
で……

それでは第9話どうぞ

第9話 第177支部

鏡晴也は悩んでいた。何故なら犯人のスキルアウトを逃がした挙句、被害者の少年をムカついたとは言え殴りとばしたのだ。

風紀委員ではあつてならない事だった。

「え〜と貴方はどこの支部の風紀委員ですの？見た事ないお顔ですけど…」

「え〜第002支部から応援に来た。鏡晴也です。第177支部に向かう途中にスキルアウトの暴動があつたので今、沈静化した所です。」

「まあ貴方が私達の支部に応援に来てくださったエリートさんですのー」

「いや〜エリートと言われるほどじゃないですよ〜」

（よっしゃこのまま話を流してしまえ！）

とりあえず肝心な所は黙って話を流してしまおうとした。

(さすが俺！)

しかし世の中はそんな甘くできてはいなかった。

「女の風紀委員さんそいつです。その風紀委員、僕を襲ったスキルアウトを逃がして被害者である僕を殴ったんですよ！」

晴也はイタズラがばれた子供のように小さくなってしまった。

「何かの間違いではございませんか？我々風紀委員がそのような事を……」

白井が少年に問いかける白井は状況が認識できてないようだ

「したんだよ…殴ったんだよ。この風紀委員は助ける立場である」  
の僕を……」

「……え〜と鏡さん？」

「はい!？」

「何かの間違いかもしれませんが、一応事情の方を支部で聞かせてもらってもよろしいですか？」

「……不幸だ」

「…は？」

「いやいや何でもございませぬよ。とりあえず支部で穩便に話合いましよ〜」

晴也はそういつと被害者に駆け寄り耳元で……

「余計な事を喋ったら、毎日寮をピンポンダッシュしてやるからな  
!」

と一言齧し、救急車を呼び、少年を乗せた救急車見送ると風紀委員の支部へと移動した。

――

風紀委員第177支部

「さあこちらです。お入りください。」

「…はい」

晴也にとってこの扉を開けば説教地獄が待っているであろう…覚悟を決めて中にはいった。

「お邪魔しま…ゴフ！」

入った瞬間に頭に拳骨が降りかかった

「相変わらずみたいね晴也君？」

誰だ！と晴也は拳骨をくらわした女の人をみた。

晴也の顔が青ざめる。知っているこの女の人を……

「なんで個法っちがここにいるんですか？」

「私がこの支部の担当だって知らなかったの？」

このいきなり拳骨をかました。女の方は

(このり みい)

個法 美偉

第177支部所属の風紀委員。今は支部の責任者をやっている。体型はとにかくメガネ巨乳、母性力溢れる高校生。

「個法先輩。鏡さんとお知り合いでしたの？」

「ええ昔からの腐れ縁よ。小さい時からよく遊んでたわ。と言っても中学と高校は違うけどね」

そう晴也と弥生と個法は小さい頃からの幼なじみ、しかし晴也にとっても個法は恐怖の対象でしかなかった。

「個法ucci昔から俺がなにかすると拳骨くらわして来るのよ」

「晴也君が悪さばかりするからでしょ？未だに弥生ちゃんを困らしてるんでしょ？」

「困らしてるつもりはないんですけど…ねえ？」

「わたくしに同意を求められましても……」

個法は溜め息をつき話を変えた。

「それより晴也君？犯人のスキルアウトを逃がした挙げ句に被害者を殴っちゃったんだって？」

晴也の顔が青ざめる

「…何で、もうばれちゃったんですか？」

「一応、支部に来る前に白井さんから報告を受けてたからね。」

晴也は白井を横目で見た、とても悲しいそんな子猫のような顔で…

「いえまさか本当に被害者を殴ったなんて思わなかったもので…」

「ですよ〜風紀委員が被害者を殴るなんて誰も思わないですもんね〜、個法うちって事で俺はどうなるのでしょうか？クビですかね？」

半分涙目で個法を見つめる。

「…たく…とりあえず始末書は書いてもらつわ後被害者に一応謝りに行く事、それから弥生ちゃんに報告しなく…」



…その時。

「やめてええええええーお願いです。何でも言う事聞きますから  
どうか弥生ちゃんには…」

個法にしがみつき必死に謝まる高校生二年生。

その姿はまるでイタズラがばれて「お父さんに言うからね!」とお  
母さんに言われ泣きつく子供のようだった。

「こらっやめなさい、晴也君!」

白井は2人の様子をポカンと見ていた。

(なんなんですか?この殿方が第002支部のエリートだとは思え  
ませんわ)

白井は心底幻滅したようだった。まあ無理もないんだけどね

…その時

ガチャ

「ただいまパトロール終えて帰りましたー」

同じ支部の花飾りを頭に盛っている少女初春飾利が帰ってきた。

しかし初春はドアを開けたまま立ち止まった。そして恐る恐る…

「あの〜白井さん？これは一体…」

初春は個法に抱きつきながら泣きわめいている謎の不審者に目が行く。

「説明するのも馬鹿らしい事態ですの…まさかあの方が第002支部から来たエリートだなんて…」

「えっあの人ですか？やだな〜白井さん冗談にしては面白くないですよ？」

「…初春…わたくしが嘘を言ってるように見えますの？」

「…まじなんですか？」

「大まじですの」

バゴン！

「クバア！」

終いには個法に拳骨をくらわされた晴也

「まったく弥生ちゃんが苦勞する理由も分かるわ…」

晴也は拳骨をくらい地面にへばりついていていた。

白井と初春は事態が飲み込めないまま部屋の隅にいた。

「あら初春さんお帰りなさい。紹介するのはこちらにいる方が第002支部から応援にきた鏡晴也君よ」

こちらとはどちらで？と思わず口に出てしまいそうになった

「個法うちこのタイミングで自己紹介される俺の立場は一体…」

地面にへばりついまま自己紹介されると言うなかなかレアな経験値を手に入れた晴也だった。

-----

10分後

一応、弥生ちゃんへの報告は保留と言う形になり決着はついた。

そして白井と初春は少し晴也にどん引き気味だったが失礼なので表情には出さない事にし、話は本題に入ろうとしたが…

「実はね晴也君、白井さん、初春さんに大事な話があるの…」

「ん？個法っち何いきなり改まってんの？」

個法は言いくそつに…

「実はね晴也君と白井さんが支部に来る前に本部から連絡があつて駅前の事件の調査は打ち切りだつて連絡が…調査はアンチスキルに引き継ぐつて」

「個法先輩？それってどういう事なの？」

「分からないわただ本部から一切この調査には関わるなとしか…」

白井と初春はもちろん晴也も正直疑問に思った。

「個法つち風紀委員の本部に連絡とれる？」

「…え！晴也君何をする気なの？」

「風紀委員の本部を問いつめる、何故打ち切る必要があるのか？聞かなければ納得できない。」

325

晴也は知っている。風紀委員の本部と言うのは遠まわしな言い方で…風紀委員の本部は統括理事会からの指示で動く。

つまり打ち切りを出したのは風紀委員の本部ではなく、統括理事会である。

「多分連絡をとっても無駄だと思うわ。それに私達風紀委員は上からの命令は絶対よ？忘れたの？」

「多分アンチスキルは調査なんてしないと思う。」

「どつという事ですか？」

初春は晴也の確信づいた言葉に思わず疑問をぶつける。

「実は支部に来る前に現場のアンチスキルのお姉さんに状況を説明してもらったんだ。…でもアンチスキルのお姉さんの話では、アンチスキルに事件を調べる為の監視衛星の使用許可がとれなかったらしい」

「それってどついう事なの？」

「つまりこの事件は闇に葬り去られるって事だよ。アンチスキルへ調査を引き継ぐつもりなら監視衛星の使用を拒む必要はないからな。」

「でも晴也君。風紀委員の本部からの命令なの私達が何を言っても仕方ですよ」

そう風紀委員はあくまで組織、上からの命令は絶対である。

「え〜とそれじゃあ駅前の事件は風紀委員が関わらなくてもいいって事ですか」

「なんだか釈然としませんがそういう事になりますわね」

「ごめんね2人共、朝から調査に行ってもらったのに無駄足になっちゃって」

「個法先輩のせいではありませんわ。本部が決めた事ですもの…仕方ありませんわ」

「そうですね。私達全然気にしてませんから」



「そう言ってもらえると助かるわ」

晴也は部屋の隅で親指をくわえて歯をカチカチしていた。

(なんで〜ありえないでしょ。俺には一言も労いの言葉はないのですか？個法っち)

晴也はこの事件を調べる為にこの支部へきたのにそれが打ち切りになった。

つまり無駄足だったと言うわけだ。

(つまり俺がやった事って始末書を増やしただけじゃん)

ズドーンと言う効果音付きで晴也は更にドス黒いオーラを放ち親指をカチカチしている。

そして個法は晴也の存在に気づき溜め息をはいた。

「ごめんね2人共…ちょっと席外してもらっていいかしら、晴也君と話があるから」

「分かりましたわ」

「…はい」

2人は近くの喫茶店に行くと言って支部を出た。

個法は怨霊へ変わり果てた晴也の元近寄る…

「個法うち俺っていらな子なんですか？」

「あまり意味わからない事言わないの」

「…だって俺来た意味ないじゃん」

すねている晴也に個法は机の上に置いてある資料を晴也に渡した。

「…何これ？」

「駅前の事件の一応調査報告書とこれからについて…」

個法は隅にいる晴也を引つ張り椅子に座らせた。

「晴也君の事だからどうせ本部に言われても調べるつもりだったんでしょ」

「…うっ」

「銀次君の時と重ねちゃうんでしょ？今回の駅前の事件。」

晴也は個法から目を背けた。

「銀次君の時も事件は打ち切りにされたもんね…」

個法は部屋の天井を見ながら思い出すように語る。

「やっぱり個法つちにはお見通しか…まあ今回の事件は銀次の時とは少し違う気がするけど…やっぱり何か引っかかるからな…」

個法は目線を晴也に戻して……

「晴也君？分かってると思うけど今回の駅前の事件調べるのには慎重にね？」

「風紀委員の本部から打ち切られたって事は学園都市の統括理事会が調査を打ち切ったって事よ…これがどういう事分かる？」

晴也も個法へと視線を戻した。

「統括理事会が打ち切った調査を調べるんだ…危険度はあるかな？」

個法は晴也の軽い調子に少し不快に思い口調を強めた。

「半端な覚悟じゃ潰されるわよ…貴方が相手にするのは学園都市全体なんだから…」

つまり学園都市のトップの統括理事会が打ち切った調査を調べるという事は学園都市への反抗とみなされる可能性があるわけだ。

でも晴也には立ち止まる訳にはならない理由があった。

「個法っち俺さ銀次が死んだ時…凄く悔しかったんだ。何もできなくて…助けてあげる事すらできなくてさ」

晴也は話を続ける。

「あいつの墓前で誓ったんだよ。必ず犯人を見つけて必ず銀次の墓前に連れてくるって…」

「だからさ個法っち俺には統括理事会とか学園都市とか風紀委員とかはそんなのは関係ないんだよ」

「…晴也君」

「…大丈夫だよ俺は個法つちには協力してくれなんて言わないよ…  
個法つちがこの事件に関わるとあの可愛らしい2人を巻き込むかも  
しれないからな…」

「…ごめんね」

「謝る所じゃないよ」

晴也はこの話を打ち切る為に話題を変えた。

「ねえ個法つちさっき言ってたこれからって何？」

「…えっ！」

「いやさっき言ってたじゃん…忘れたの？」

「あっそうそう…晴也君に頼みたい仕事があるんだけど…」

「仕事？」

「ええ、晴也君が来る前に事件は打ち切りになっちゃって弥生ちゃんに連絡したの…」

(なんでだろう凄く嫌な予感がするんですけど…)

晴也は気がつくと同手に尋常じゃない汗をかいていた。

「弥生ちゃんと話をして晴也君これから3カ月の間第177支部でお仕事してもらおう事になったから」

「…あの意味が全く分からないのですけれど…」

「だから弥生ちゃんに連絡をとったらこのまま帰らすのは可哀想だから、どうせなら内の支部で預かりますって…」

「ふざけんなあ！？保育園じゃないんだぞそんな預かるとか預けますとか…」

晴也は必死に訴えるが無情にも

「決定事項よ」

と一言で終わらされた。

(ちくしょう作者め成り行きで人の人生決めやがってええええ！)

こうして鏡晴也は第177支部で風紀委員のお仕事をする事になりました。



チャン チャン

第9話〜第177支部  
〜完〜

## 第9話 第177支部（後書き）

本当にてきとうじゃないんですよ（＾―＾；）

さてこれから鏡晴也編はこれから本編になります。

御坂美琴や白井黒子や佐天さんに初春と言った超電磁砲キャラクタがたくさん話に絡みます。

そして予想外のあのキャラまで…

第10話今週までには更新します。

評価や感想よろしく願います

## 第10話 とある美琴の強引な果たし状（前書き）

第10話です。

お気に入り16件突破！？いや、毎度ながら嬉しい限りです。  
では…とある美琴の果たし状どうぞ！

## 第10話 とある美琴の強引な果たし状

第177支部で俺は風紀委員の仕事になりました。理由  
はとても簡単で

幼なじみの弥生ちゃんと個法っちの陰謀によるものだった。

どうも第177支部で風紀委員としての自覚を個法っちの元で学べ  
と言っ事らしい。

因みに風紀委員の規則で一応は支部の移動は認められてないが研修  
と言っ形で他の支部へ移動する事は可能らしい…

…そして俺に任せられたもっ一つの仕事は……

「俺にあの2人の指導をしろだど？」

「あら？適任だと思っけど…嫌？」

嫌に決まっっている。そもそも晴也は人に何かを教えるのが苦手な人

間なのだ。

「個法うち俺のどこを見たら指導者に適任だとおもつのよ」

「確かにないって言えばないわね」

なら言つなよ。拳骨を恐れてあえて口には出さなかった。

「けどね？晴也君を見て学べる事はたくさんあるわ……」

「ナンパの仕方とか？」

ゴッソ！

「ゲブウ！」

拳骨をくらった。どうやらふざける場面を間違えたらしい。

個法はやや不機嫌そうに

「まあそう言う事だから指導係お願いね？」

「…あの2人の指導とは一体どのようにすればよろしうす？」

「何もしなくていいわよ」

「やったー」

個法が拳を握り締めた

「冗談ですよーやだな個法っち、別にお仕事サボってゲーセンに行こうだなんてこれっぽちも…」

「…思ってたわね」

「個法つち俺は男だぜ！男は仕事に命を燃やす為に生まれてきたんだ…仕事をサボってゲーセンに行くのは男じゃないわけで…」

必死に言い訳をするぜ！と言わんばかりに見苦しい言い訳を続ける。

しかし個法の表情は険しくなる一方。

「…けど男だからこそコンビニでエロ本を読むのは自然の節理と言  
うかなんと言うか…」

「…エロ本？」

晴也は言い訳を続けてるつもりなのだが…自分の思ってる事を口に出してしまっている。

「だからさ個法つち男がエロ本を読むのは…」

「…読むのは？」

(「とわり)

「自然の…理？」

ブチッ！

個法の血管が珍しく切れた。

「風紀委員の仕事中にエロ本を読む風紀委員が一体どこにいるのよ  
ー！ー！」

ズゴーン！

個法は拳骨ではなく右ストレートを晴也の顔面に突き刺した。

「…はっ鼻が痛い！」



晴也は顔面を抑えて地面を転がっている

「まったく私が言いたいのには2人の仕事に同行しなさいって言うのよ」

「…ああそつだったんですか？」

晴也は自分でエロ本と言う余計な言葉を放った事に気がついた。相変わらず馬鹿である。

「って事で今からこの事情を白井さんと初春さんに伝える行きなさい」

晴也は頭をかきながら

「個法つちやつぱりやらなくちゃ駄目？指導係なんて俺のキャラじゃないと言っかなんと言っか…」

個法は携帯をポケットから取り出し。

「え〜と弥生ちゃんの番号は…」

ビシッ！

晴也は個法に敬礼をしながら…

「私は今からあの2人と一緒にパトロールに行つて参ります隊長殿  
！！」

そして晴也は逃げるように支部を出て白井と初春が待つ喫茶店に向  
かった。

個法は一人頭を抱えながら

「なんか逆に白井さんと初春さんに指導されないか心配ね」

と一人つぶやいた。

――

### 第7学区とある喫茶店

白井と初春は喫茶店のパラソル付きのテーブルに座っていた。

桜の花びらが舞い春を感じさせる景色の中2人はノートパソコンを見ている。

「あつ……！白井さんありましたよ。鏡さんの事が書いてある記事。」

初春はノートパソコンを白井に良く見える角度に変えて記事を読みあげる。

「え〜とですね…鏡晴也さんは元々長点上機学園の生徒らしいですね…」

白井は目を丸くしながら

「長点上機学園！？あの方が…信じられませんかね」

「…けどすぐ退学したらしいですよ…理由は書いてないですけど、転校して全く無名な高校に行ったみたいですよ」

初春はノートパソコンに書かれてる記事をスクロールしながら話を続ける。

「鏡さんはレベル4の大能力らしいですね…ってええええ！！」

初春は大声を出し記事を何度も見つめ直す。

「どうしましたの初春？」

「白井さん1ヶ月前の第3学区のルピアホテル立てこもり事件覚えてますか？」

「ええ受験に失敗した能力者達が腹いせにホテルを襲撃した事件ですわよね」

「はい…しかも事件を起こした能力者は全員レベル4で犯行グループの人数は5人。ニュースでは第002支部が事件を解決したと報じてましたけど…」

「この記事によると犯行グループの5人を沈静化したのは鏡さん一人でやった事みたいなんです」

白井はガバツと席から立ち上がり…

「…そっそんな馬鹿な事ありえますの！？大能力者5人を一人で相

手にするなんてレベル5であっても容易ではありませんわよ……」

「……けど襲撃されたホテルにいた人の証言なんで間違いのないみたいですよ？」

「……後ですね鏡さんが風紀委員本部で何て言われてるか知ってますか？」

「いえ知りませんわ」

『最強の風紀委員

鏡晴也

』

「あのおちゃらけた人が風紀委員の最強とは……とてもじゃないですけど思えませんわ」

「……そうですね」

「あっそおちやうけててわる〜ごぞいましたね…」

白井と初春の肩がビクウと動いた。白井と初春がゆっくり振り向くと…

後ろの席のテーブルに顎を乗せて齒ぎしりしている晴也がいた。

「え〜といつからそちらにいらっしやいましたの？」

白井が恐る恐る晴也に問いかける。

「あんなおちやうけた人が風紀委員の最強だとは…位から」

「……………」

「……………」

白井と初春は無言のまま顔を合わせている。

晴也は歯ぎしりを止めて机の上に顔を転がしている。

「まあ2人が俺の事を嫌ってる事は知ってるもんね…悔しくないもんね…悔しなんか…悲しく……なんか…」

涙目になりながら2人を見つめる晴也。

白井と初春は困惑していたが、晴也をなだめる事にした。

「私達はそう言う意味で言ったんじゃないんですよ鏡さん」

「…え？」

「そうですね。普段はおちゃらけた感じで隠れた才能を持っていらっしやるなんてねえ…初春？」





お昼の喫茶店で大声で高笑いをする晴也。綺麗に舞う桜の花びらが晴也のせいで霞んで見える。

…とそじら

「白井さん、うっいはーる…」

後ろから白井と初春の名前を呼びながらこちらに向かって来る御坂美琴と佐天涙子が喫茶店に向かって来た。

「あれ？黒子今日風紀委員の仕事よね？」

「ええお姉様：今も一応お仕事中ですよ」

「っでそこにいるづるさい高笑いしてるバカは一体だれよ？」

初春はワタワタと慌てながら。人差し指を鼻に当て

「御坂さん駄目ですよ。一応年上の方なんですから…」

「まさか白井さんと初春が話してた風紀委員のエリートってあの桜の花ピラを体に浴びながらクルクル回って、高笑いしているあの人ですか？」

白井は、いたい頭を抱えながら喫茶店のテーブルにうなだれた

「そのまさかですよ…最初にあつた時なんて犯人のスキルアウトを逃がした拳げ匂に被害者の方を殴つたらしいのです」

初春も大きい溜め息をつきながら…

「私なんて最初あつた時なんて個法先輩に抱きつきながら泣いてましたからね…」

「つまり変人ね」

御坂が晴也のジャンルを「変人」とひとくくりにした。

反論できる者はいなかった。

「変人じゃないもん個性豊かなだけだもん……」

晴也がほっぺを膨らましながら御坂を睨みつける。

そこで白井と初春が慌ててフォローに入る

「いえいえ鏡さんお姉様は決して悪い意味で変人などと言ったわけでは……」

「…えっそんなの？」

「そんなんですよ。変人って言うのはあれですよ…珍しい人だな？  
って言う意味でねえ…白井さん」

もはやフォローになってないフォローを続ける2人だが…でも大丈夫！アホな晴也君なら…

「そうか…そんなのか！いや〜参ったね初対面の人にそこまで褒められるなんて…なんとという照れるな〜」

晴也は頭をポリポリかきながら「参ったね〜」などとほざいている。

美琴と佐天は「うわ〜なんて扱いやすい人何だろう」と2人して思った。

白井と初春はベタア〜とテーブルにうなだれている。そしてこの人と同じ支部で仕事をしてる人達に心からご冥福を申し上げた。

――  
5分後

晴也の妄想モードは  
終了し今は喫茶店で5人でそれぞれドリンクを頼み飲んでいる。

「え〜とお姉様、佐天さんこちらの方が第002支部から来られた  
鏡晴也さんですの」

とりあえず白井がの晴也の自己紹介をする

「どうも〜第002支部から来た鏡晴也です晴也と気軽に読んで  
ください」

いつものようにふざけた自己紹介をする晴也…まあ今更真面目に自  
己紹介した所で痛いだけなのだが…

「っでこちらは御坂美琴お姉様と佐天涙子さんですわ」

「御坂美琴ってまさかレベル5の第3位超電磁砲の御坂美琴か！ほえ〜まさかこんな所で会えるなんて今日はついてるな〜」

白井は目を細めて晴也を鋭い眼光でみつめる。

白井としては美琴による男はみんな敵なのだ。しかし晴也はそんな目線など気にした様子はなかった。

そして白井の様子をみて初春は話しを変える事にした…このままだと白井が暴走する恐れがあるからだ。

「それより鏡さん個法先輩とどんなお話したんですか？」

「ああそうだった2人に言わないといけない事があったんだっ…すっかり忘れてたわ」

晴也は思い出したように個法にもらった用紙をポケットから取り出した。

「はいこれ」

白井と初春に用紙を見せる。用紙の内容は…

『これより第002支部の鏡晴也を第177支部へ研修と言う形で3カ月間風紀委員の仕事を行ってもらう。なお第177支部所属、白井黒子、初春飾利の指導係りとする。』

白井と初春は飛びそうになる意識をなんとか保ち最後まで用紙を読んだ。2人の顔は酷く青ざめている。

「って事だからよろしくね 黒子ちゃんに飾利ちゃん…ブイ!!」

満面の笑みでブイサインをする晴也。白井と初春にはその笑顔が天の邪鬼の微笑みに見えた。

美琴と佐天は白井と初春の表情を見て顔がひきつっている。



「って事でちょっとトイレ行ってくるから」

晴也は喫茶店の中のトイレへとゆったりとした足並みで向かって行った。

「悪夢ですわ」

「私達どうなるんでしょう？白井さん」

美琴も佐天も鏡晴也と言う人間がどんな感じの人間かは理解している。それ故に2人を慰める事は容易にできなかった。

「全く何故あの方が最強の風紀委員と言われるのか納得できませんわ」

「最強っていう威厳も何もないですもんね？ハア、やっぱりあの記

事デマだったんですかね？」

その2人の会話に美琴の眉が動いた。

「御坂さんどうかしたんですか？」

「ねえ黒子あの人強いの？」

「…えっ！まあ風紀委員の本部では最強の風紀委員と言われるみたいですわね…それが何か？」

美琴は顔をにやつかせながら…

「ねえ黒子、初春さん？あの人から解放される方法思い付いたんだけど聞きたい？」

白井と初春はガバツと席を立ち美琴の話しに食いついた。

「どう？2人ともこれなら問題ないでしょ…」

「問題はないことはありませんが…」

「でも白井さんあの人と一緒に仕事をしたら間違いなく疲れますよ」

どうやら美琴が出した案はろくでもないものだったが、今回ばかりは強くは言えなかった。

…そして晴也がスキップしながら帰ってきた。

「ただいま」

そして晴也の前に美琴が立ちはだかった

「……ぶしなさい」

「はい？」

「だから私と勝負しなさいよ！」

「…あの～俺なにかお姉様のお気に召されない事でも…」

「お姉様言っな！」

ひいッ！と言う悲鳴をあげて白井の後ろに隠れた。

「いい？正直黒子と初春さんもいきなり現れた人に今日から指導係ですって言われて納得してないの…」

まあ正直2人は晴也だから嫌な訳で、ちゃんとしていた人なら文句はないだろう…。しかしこんなふざけた人にいきなり指導係ですと言われ「わかりました」なんて言う人は余程頭が平和な奴位だろう

「でも指導係は俺が決めたことじゃないもん！」

「話しは最後まで聞ききなさい」

シユンと小さくなる晴也

「だから私達で話し合った結果もし、あんたが私に勝てたら指導係を認めよつって」

「…いやっそんなの個法うちが許す訳が…」

「大丈夫よ！個法先輩からは許可はとってあるわ」

もちろん嘘である。

「そんな〜個法っち酷すぎる〜なんでそんな許可だしたんだよ〜全くでも俺戦いたくないもん」

どうやらこのままだと目的が達成できないようなので美琴は初春に切り札を出すようにと合図をだした。

「あの〜そういえば個法先輩がちゃんと指導係につけなければ弥生ちゃんに例の事件の事を言っつて…」

完璧に晴也の弱点をついた初春。

「…なっそれはまずい、マジで死にますから」

「なら私と戦うか、もう一つの道を選ぶか決めなさい！」

晴也はしばらく頭を抱えながら

「分かりました。戦いますよ……でも手加減してね？」

こうして鏡晴也はかなり強引に御坂美琴と勝負をするはめになった。

白井と初春は多少罪悪感はあるものの自分達が助かる方法はこれしかないと思いついた。

もちろん美琴は最強と言われる鏡晴也と戦ってみたかっただけである。

果たして最強の風紀委員とレベル5の第3位どちらが強いのか……

第10話とある美琴の強引な果たし状完

**第10話 とある美琴の強引な果たし状（後書き）**

さあ次回は晴也と美琴の戦いです。

最近アクセス数の多さに驚きっぱなしです。

第11話は水曜日に投稿予定です

皆さんありがとうございました。



第11話 晴也VS御坂美琴（前書き）

晴也と美琴の戦いです。

後次から戦闘中の効果音を少し変えてみます。

そしてお気に入り21件突破です。最近急激に評価が上がっています。皆さんに本物に感謝。そしてこれからも頑張ります。

## 第11話 晴也VS御坂美琴

### 第7学区とある河川敷

時間は午後2時を回る所だ。春の暖かな陽気な天気だった。

そんな河川敷で鏡晴也と御坂美琴は向きあっていた。

「それじゃあ始めるわよ？今から私がこのコインを投げるからそれが地面に落ちたと同時に試合開始よ」

「あのーやっぱり止めません？女の子に能力を放つのはあまり好きじゃないと言うか…」

「駄目よ！男でしょ覚悟を決めなさい」

晴也はやる気なし、美琴はやる気満々で前髪からバチバチと青白い電撃の音がなり響く。

「白井さんやっぱり止めませんか？なんか罪悪感が胸を締め付けるんですけど…」

「…ううわたくしも同感ですわ。やっぱり個法先輩とちゃんと話し

をした方が得策だったかもしれないわね」

白井と初春は晴也を脅迫し美琴と戦わせる事に罪悪感が湧きでてきた。

「でももう遅いみたいですよ」

佐天が晴也と美琴の方を指をさす。

美琴はコインを上空に投げていた。

そしてコインは地面に

…落ちた

「じゃあ行くわよ!」

2人の距離は20メートル。

美琴は前髪からバチン！と花火を散らし青白い雷撃の槍を晴也にむけて放った。

20メートルの距離を青白い雷撃の槍は一瞬で晴也との距離を詰めて…

ズドン！と言う音と共に晴也に直撃した。

「…えっやば直撃!？」

美琴は晴也は攻撃を避けるものかと思ったが晴也に直撃してしまっ

た。  
「鏡さん」「

白井と初春と佐天が同時に叫び、晴也の元に近づこうとした瞬間…

「あつぶね〜マジあんなのくらったら死んでしまっわ〜」

「…なっ!?!」

美琴は驚いた表情で声のした方を向き晴也は美琴の後ろにいた。

手応えはあつた確かに直撃したはずだつたはずなのに…

「どうなってますの?」

「確かに直撃しましたよね?」

遠くで見ていた3人ですら晴也が美琴の後ろにいた事に気づかなかつた。

「…どうなってるのよ」

その時、美琴気づいた晴也がいた場所にガラスの破片が落ちている事を…

「ガラス?」

「っそお姉様が見ていたのは鏡像だよ。」

「鏡像ですって?」

「俺の能力は鏡使いたたの名をミラージユマスター、俺は鏡やガラスを自在に作ったり、操ったりできる能力者なの」

「厄介な能力ね…」

美琴は手に汗をにぎり雷撃の槍を晴也に放とうとしたが…

美琴の周りを四角形の薄い透明なガラスが囲んだ。

「…なによこれ?」

「ミラージユボックスだよ。割らない方がいいよ破片が刺さるし、頑張つて割つたつてまた張り直せばいいからな。」

晴也は主にこの技を使い能力者犯罪を片付けている。シンプルだが相手を無力化させるには最適な技だ。

「どつ？お姉様…勝負あつたかな？」

「勝負あつたかな？ですつて…私をあまり舐めるんじゃないわよ！  
！」

美琴は自分の体から雷撃を放出しミラーージュボックスを溶かした。

「…ありゃマジですか」

「じゃあ次は手加減なんてしないから！！」

美琴は地面の砂鉄を能力で集め砂鉄を振動させる事によりチェーンソーのように切れ味のある砂鉄の槍を晴也に向けて撃つ。

晴也は手をかざして分厚いガラスの盾を自分の目の前に出す

「そんなガラスなんて突き破るわよ」

ズドン！！

砂鉄の槍がガラスの盾に突き刺さった

…がガラスを突き破る事はなかった。

「ガラスの強度の変更位は自在にできるんだぜ！」

「…ッならこれで！」

美琴は再び雷撃の槍を晴也に向けて放つ。

(これなら強度なんて関係なくガラスを溶かすわ)

そして雷撃の槍は直撃したがまた晴也はそこにいなかった。

「ハズレだぜお姉様俺の本体を捜さない限りお姉様の攻撃は俺には当たらないよ〜」



「なんて厄介な能力なのよ、予想以上だわ」

そして晴也は次々と鏡像を作り出し30人位の晴也の鏡像が現れた。

「どうする？お姉様まだ続ける？」

晴也は余裕な声で美琴に話しかける。

美琴の能力は確かに強い直撃すれば一撃必殺だろう…しかしどんな強い攻撃も当たらなければ意味がない。

(確かに目で追ってるだけじゃ勝てないなら…)

美琴は目をつむり神経を集中させた。

「悪いけどお姉様、決めさせてもらっぜ！..」

30もの鏡像が一斉に美琴に向かう。本物は30人の中に1人

晴也はガラスのトンファー作り出し美琴を気絶させるように狙った。

距離は5メートル

「もらったぜ！お姉……………！？」

晴也の息が止まりそうになった。なんと美琴の右手が晴也自身に向いているのだ。

美琴はそのまま雷撃の槍を放つ

「…なっヤベエ！！」

晴也は体を無理にひねり雷撃の槍を避けた。

「お姉様どうやって俺の本体を見抜いたんだ？」

晴也は自分の得意技が簡単に避けられた事に困惑していた。

「私の能力は電撃使い。周囲に微弱な電磁波を流して生体電気の流れを読んだのよ…生体電気がないのは全部偽物であるのは本体って言う風にね」

「つまり微弱な電磁波が生体電気を読み取るレーダーみたいな役割をしていた訳ですか…」

「…そうゆう事よさあ！あんたの小細工はもう効かないわよ形成逆転って所かしら」

白井と初春そして佐天は息をのんでいた。もはや戦いを止める目的を忘れてただ2人の互角の戦いを呆然と見ている。

ドバア！

美琴が作り出した砂鉄の波が晴也を襲った。

「叩き斬る！」

晴也は巨大な砂鉄の波に向けて右手を縦に振り下ろした。

ズバアアア！

晴也が右手を振り下ろした瞬間見えない何か砂鉄の波を縦に引き裂いた。

「…なによあれ」

美琴は晴也の出す見えない力に驚愕した。

「ミラージュ・ブレイド光の反射を利用して見えない斬撃を放つ技だ。この見えない斬撃避けれるか？レベル5！！」

補足説明するとミラージュ・ブレイドが見えないのは光の反射だけでは不可能だが…鏡を薄くする事で相手には見えにくくなってる簡単に言っと。

光の反射＋薄い鏡＝認識出来ない斬撃  
と言っ訳だ。

晴也は最小限に切れ味を抑えて美琴に向かって見えない斬撃を叩き込む。

ビュン！

美琴は横に避けてかわす

晴也は続いて横に右手を振り見えない斬撃を叩き込む

…がしゃがんで避けてすかさずに雷撃の槍を飛ばした。

「ゲッ！」

晴也は横に転がり攻撃を避ける。

そして転がり地面に手をついた状態で見えない斬撃を放つ

美琴はジャンプして軽々と攻撃避ける

「いくらやったって無駄よ…その技は確かに厄介だけどあんたの手の動きに合わせて動けば簡単に避けれるわ」

「なら！数で攻める」

晴也は手の平に大量の鏡の破片を作り出しナイフへと形を変えて美琴に投げつける。

「ミラージュ・ナイフ」

100本位の鏡のナイフを美琴に向かって投げ飛ばす。

美琴は動く様子はない…しかし一枚のコインが宙を舞っていた。

コインは美琴の頭上を1回…2回と舞い 美琴の親指に乗りそのコインを親指で…

…晴也に向けてはじいた

…その時もの凄い轟音が聞こえオレンジ色の閃光が駆け巡る。

晴也の投げた100本のナイフがオレンジ色の閃光と衝撃波で全て砕け散り、そしてその閃光は晴也の横を通り過ぎたが、晴也は衝撃波で30メートル吹き飛ばされた。時間にしてわずか一瞬の出来事だった

「…ゲウウウ！今は効いたぜ」

晴也は上手く着地出来ずに膝から地面に落ちた。

しかし攻撃を放った美琴は何故か驚いていた。

「…嘘、なんであれが避けれるのよ」

さっきの美琴の技はコインを音速の三倍で飛ばす。美琴の必殺技だ…美琴が驚いているのは美琴は晴也に向けて音速の三倍を放ったが晴也は反射的に避けた。

「っふ俺は音速の三倍をも動ける反射神経があんだよ！」

実はと言うと美琴のコインが宙を舞っている間に「ちょっとヤバそうかな…」と思って横に避けただけである。

「…ッならこれでどうだぁアア！」

美琴の叫び声と共にVの字型の砂鉄の斬撃が晴也に向かう。

晴也には当たらないものの晴也の横の逃げ道を塞いだ。

「…まさか…！」

晴也が慌てて美琴の方を見るとコインは宙を舞っていた。

( やばい横にはよけられない…まじで死んでしまっ。(



そしてコインは美琴の親指にはじかれた

ズドーーーーーン！

オレンジ色の閃光が晴也を襲う。オレンジ色の閃光は横の道を塞いでいた砂鉄を吹き飛ばし晴也に当たる。

（勝った！！）

美琴は勝利を確信した

……が

晴也は超電磁砲が向かった場所にいなかった。

「……あれ？」

美琴は慌てて周囲を見渡す。

(逃げ道は塞いだ逃げれる場所なんて…)

「どこを見てる俺はここだあ!!」

空から声がした。

晴也は地上から10メートル上を走っている。

「そんな空中を移動するなんて…」

あの時、晴也は横に逃げ道がないので見えない鏡で上空に道を作り出し見えない鏡の上を走っている。

美琴が上空に向かって雷撃の槍を放つ。

バキン!

と空を覆っていたガラスの道は砕かれて晴也は美琴に向かって上空から奇襲をかける。

上空から襲って来る晴也一瞬反応が遅れた美琴に晴也は見えない斬撃を美琴の首筋で寸止めた。

「……………」

「……………」

勝敗は着いた。

「これや引き分けだな」

「…そうね」

晴也は見えない斬撃を美琴の首筋に美琴は切れ味抜群の砂鉄の剣を晴也の胸で寸止めしていた。

「やるじゃない、あんた正直見直したわ」

晴也と美琴は互いに能力を解除して美琴は握手を求めてきた

「いえいえお姉様も流石ですよ。レベル5以前にいい戦闘センスでしたよ」

2人はガツチリ握手をした。まるでお互いいいライバルと認め合ったようだった。

白井と初春と佐天は まばたきすら忘れて2人の戦いを見ていた。

「お姉様と引き分け！？とてもじゃないけど信じられませんわ」

「凄過ぎです。佐天さん？口が開きっぱなしでよだれが出てますよ？」

「えっ本当だ！いや〜なんかあまりにも迫力がある戦いでついつい見とれちゃって…」

…とその時

白井の携帯がなった  
どうやら個法先輩からだ白井は電話の通話ボタンを押す。

「もしも個法先輩？どうかなさいましたの？」

『あなた達今どこにいるの！！』

ビクウ！白井の肩が動いた。

（まさかお姉様と鏡さんを戦わせた事がばれましたの？）

白井の携帯電話に耳を当てて聞いている初春も冷や汗がたっぷり出ていた。

『2人共、今すぐ晴也君と一緒に第7学区の裏路地の阿修羅と言っ  
廃ビル行ってちょうだい。』

どうやら晴也と美琴の事はばれてないらしいが…しかし個法の声に  
は余裕がなかった。

「第7学区の裏路地？何か事件がありましたの？」

初春も個法の声を携帯電話から漏れる声を聞いている。

『いい？白井さん落ち着いて聞いてね？』

個法はいったん言葉を切り深呼吸をして言葉を続けた。

『常盤台中学の送迎バスが何者かに襲撃されたの』

「……………ッ！！」

白井は息が詰まった。自分の通う学校の送迎バスが襲われたのだ。

初春も電話から漏れる声を聞き驚きを隠せなかった。

佐天は「どうかしたんですか？」と白井に話かけるが白井の耳には届かなかった。

「でも個法先輩！常盤台中学の送迎バスは特別製で超能力者対策は勿論軍のグレードとかでもビクともしませんのよ？それをどうやって…」

『分からないわ…でも常盤台中学の送迎バスの窓ガラスは全て砕けていてバスは半壊状態よ』

「…そんな馬鹿な事が…個法先輩そんな事より生徒達の被害はどうなってますの？」

常盤台中学の送迎バスには白井の知り合いも乗っている。しかし半壊状態と言う言葉に白井は最悪を想定したが…

『…実はバスの中には常盤台の生徒は1人もいないの』

「どっぴんごん事ですか？」

そんなはずないと白井は思った。今日は土曜日で学校はお昼で終わりだ。白井と初春は風紀委員の仕事と言う事で今日は休んだが。一般の生徒は送迎バスに乗って帰える時間だ。

『重要なのはここからよ白井さん、実はね常盤台の生徒は確かに乗っていたわ、そして姿を消したと言う事は…』

「まさか！連れ去れたとでも言うのですの？」

『そうよ、襲撃者は何らかの能力で生徒達を連れ去ったのよ…そして私達風紀委員の人間が調べた所第7学区の廃ビルに連れ去れた事が判明したわ』

個法の話によると監視衛星のアクセス許可をもらい常盤台中学の間をビルに連れ去る人物が映し出されたらしい。

『急いで晴也君と初春さんと現場に行つて頂戴。勿論アンチスキルも出勤してるわ…』

「分かりましたの急いで現場に急行しますわ」

そして白井は携帯電話をポケットにしまった。



「初春話しは聞こえていましたわね？」

「…はい」

「あの…どうかしたんですか？白井さん…何か事件ですか？」

「どうかした？黒子ちゃん」

晴也と美琴は白井の様子がおかしかったので急いで戻ってきた。

「…ええちょっと鏡さん少しついて来て頂けます？」

晴也は白井が何か言いたいのだとすぐに察した。

「…分かった」

「行きますわよ初春！」

「…はっはい！」

「ちょっと黒子、事件なら私も協力するわよ?」

「お姉様! 何度も申し上げますようにお姉様はあくまで一般人ですよ。今日は大人しくして下さいですの」

「でも黒子あんた顔色が… ってちょっと!」

白井は晴也と初春と一緒にテレポートで強引にその場から逃げるように消えた。

とり残された美琴と佐天はとりあえず個法の元へ行く事にした。

そしてこの戦いがきっかけで終わったはずだったあの事件が再び学園都市で起きようとしていた。

第11話 晴也VS御坂美琴  
〈完〉

## 第11話 晴也VS御坂美琴（後書き）

鏡晴也編。ここから終わったはずの事件が再び動きだします

最近禁断の能力と関係ないじゃんと思われがちですが…関係ありません。

鏡晴也とある事件が交差する時禁断の力の鱗片が発覚します。

ご愛読して下さる皆様…本当にありがとうございます

## 第12話 動き出す事件（前書き）

遂に総合100ポイント達成！下がったり上がったなのでいつまで維持できるか分かりませんが、頑張ります。

皆様ありがとうございます。

## 第12話 動き出す事件

4月10日午後2時。常盤台中学の送迎バスが襲撃された。

バスは窓ガラスが割れ、そして中にいた生徒達は姿を消した。

風紀委員の調査により常盤台の生徒達は、第7学区の裏路地の廃ビルに連れ去られた模様。

まだ学園都市のメディアには伝えてない。無駄な混乱を抑える為に第7学区の風紀委員とアンチスキルにしか事実は伝わってない。

風紀委員とアンチスキルは連携をとり事件の解決を求める。

-----

白井黒子と初春飾利そして鏡晴也は、タクシーに乗り第7学区の裏路地へ向かっていた。

白井のテレポートを使えば早いらしいが、体力的な問題があるためにタクシーに乗っている。

初春はノートパソコンを広げ情報収集をしている。一方、白井は落ち着きがなく、さつきから、ツインテールの髪をクルクルと指でいじっている。

無理もない。何せ同じ学校の人間が襲撃された挙げ句、連れ去られたのだ…落ち着けと言う方が無理はあるが…

「黒子ちゃん。あんまりイライラしちゃ駄目だぜ。救える者も救えなくなるぞ」

それでも晴也は普段とは違う真面目な口調で白井に落ち着くように言う。

「…そうですね。苛立ったって事件は解決しませんもの…」

「ああ、今回の事件かなり危険な事件だ。常盤台のエリート達を何十人も連れ去るような奴らだ…冷静に行かなければ、返り討ちにあうぞ」

「…ええそれにアンチスキルが事件を解決している事はまずないでしょうし…」

そう、確かにアンチスキルは対超能力用の装備を所持してはいるが、常盤台中学の特殊装甲のバスを破壊する威力を防ぐ手段は持っていない。

そして犯人の数や人質の状態も分からず突入はしないだろう。

「そういう事だ…つまり先陣をきるのは俺達、能力者の仕事だ。とりあえず今は情報が欲しいな…飾利ちゃん何か動きはあったか？」

晴也は情報収集をしている。初春に現場に新たな動きはないか確認する。初春は視線をパソコンに向けたまま…

「え〜とですね…鏡さんの言うとうりアンチスキルは今の所動きはありませんね…」

初春は頭に盛られてる花飾りをいじりながら…話しを続ける。

「同じ第7学区の風紀委員もサイコメトラ〜とかで中の情報を知ろうとしていますが、上手く行ってないみたいですね…」

晴也は予想通りと言ったように、後部座席に深く座り込みため息をはいた。

「これやお姉様連れて来なくて正解だったな〜」

「…そうですね。お姉様の事ですから、同じ中学の生徒が連れ去られたって聞いたなら無理にでも犯人達に突っ込そうですもの……」

「だからお姉様に関わるなって言ったわけだ……」

「それだけじゃありませんわ…お姉様は鏡さんとの一戦で体力を消耗していたみたいですから、事件に関わって、もしもの事があつては行けませんので……」

多分それも理由の1つだろうが、白井は本当は自分の大切な美琴を危ない事件に関わらせる事が、嫌だった。

「…そうだな」

晴也はそんな白井の気持ちを知ったのか少し優しく微笑んでいた。

そして話しているうちにタクシーは第7学区の繁華街まで来ていた。目的地まで後5分とかからないだろう。



「そろそろだな…2人共準備はいいか？」

「…ええいつでも」

「はい！」

「じゃあ行くぞ！目的は3つだ。連れ去られた人質の確保と犯人の逮捕、そして…全員無事に帰って来い！」

2人は力強く頷いた。

そしてタクシーを降りて。第7学区の裏路地を目指す。

-----

風紀委員第177支部

「教えられないってどういう事ですか？個法先輩！」

「言葉通りよ御坂さん、今回の事件はあなたに教える事は出来ないわ」

美琴と佐天は第177支部に来ていた。黒子達が何の事件に関わっているのか聞き出す為だ……

「……でも黒子があんなに顔色変えるなんて普通じゃないんです。何があつたのか教えられ下さい」

「駄目よ……今回だけはあなたの協力は頼めないわ……」

「個法先輩……！」

個法の冷たい態度に、美琴は今にも胸ぐらを掴みそうな勢いで個法を睨みつける。

「まあまあ御坂さん落ち着ついて」

佐天は個法から美琴を遠ざける。そうでもしないと本当に美琴は個法に飛びかかりそうだからだ…

「御坂さんが2人が心配なのは分かります。私だって心配です。けど個法先輩にその気持ちを違う形でぶつけけるのは、間違ってますよ、御坂さん」

「……ッ！」

「御坂さん少し外で頭を冷やしませんか？私何か冷たい飲み物買ってきます。」

そういうと佐天は美琴を支部の外へと出した。

そして佐天は個法の方に振り返り

「さっきは御坂さんにああ言いましたけど…私だって納得してませんから…」

佐天は個法に吐き捨てるように言葉を放ち。支部の外へと出て行った。

支部に一人になった個法は椅子に深く座り込み、天井を見上げた。季節はずれの風鈴の音だけが部屋の中に響きわたり、少し寂しさを感じさせる。

「ごめんね2人共」

誰もいない支部で個法は美琴と佐天に謝る。常盤台の生徒が襲われたとすれば、美琴は間違いなく助けに行くだろう。

しかし冷静さをかけた美琴を現場に向かわせればかなり危険だ。美琴の性格を知っているからこそ、今回の事件に関わらせる訳にはいかなかった。

個法は椅子から立ち上がり、窓から明るい外を見渡す。

「2人を頼むわね晴也君」

個法は祈るように一人ポツリと呟いた。

――――  
第7学区の裏路地

白井と初春そして晴也は事件現場に来ていた。

第7学区の裏路地は全てアンチスキルが見張っており一般人が出入りする事は出来なくなっていた。

三人は風紀委員の腕章を見せ事件現場に入ると近くにいたアンチスキルのお姉さんが話しかけてきた。

「おっあの時の少年じゃん！」

晴也は見覚えがある

「ああ駅前のアンチスキルのお姉さんか…」

「どうやら君もこっちの事件に回されたみたいじゃん、ゆっくり話したいけど時間がない、一応現状を報告するじゃん」

「ああ頼みます」

「まず、犯人と人質がいると思われるビルの前には見張りが2人。そして入り口はそこしかない、突入するにも犯人を刺激するのは、あまりよくないじゃんよ」

そう犯人に下手な刺激を与えると人質の身が危ない。人質がいる限りあまり派手な動きは出来ない。

「では一体どう侵入する気ですか」

「ああ裏口の方から侵入するじゃん、裏口と言っても壁しかないが、今アンチスキルの本部から高熱波ブレードと言う音もなしに物体を切断する代物を持って来てもらっている。そこから侵入するじゃんよ」

「アンチスキル本部からその代物は後どれくらいで届く？」

「あと1時間」

3人は沈黙した。1時間。それまで何もしない気でいるのかと3人は思った。

「それまで待機するしかないじゃんよ、その間に突入準備を…」

「いや、考えがある」

晴也はアンチスキルのお姉さんの会話をきり、見張りがいるビルの入り口を見た。

「鏡さん、どうする気ですか？まさか正面から突入する気じゃ…」

「そのまさかだよ」

初春の質問を迷いなく答えた。

「なつ馬鹿言うんじゃないじゃんよ、さっきも言ったが犯人を刺激するのは良くないじゃん、人質に何されるか分からないじゃんよ」

「そうだな、だったら見つからずに入ればいい…黒子ちゃんのテレポートを使えばすぐ入れるけど、テレポートした矢先に犯人とバツ

「タリなんて事もありえる」

そして晴也は拳を一度握りしめて。

「けど俺の能力なら見つからずに侵入する事も可能だ。ちょうどここは太陽の光が照らしてるしな……」

晴也は裏路地の空を見上げている。裏路地は建物がぎっしり詰まっているが、今の時間は建物から太陽の日差しが入ってきている。

晴也は一度深呼吸をして

「じゃあいつちよ突入しますか！」

――――

廃ビルの中

廃ビルの中には10人位の男達がいた。



そして部屋の隅には 20人位の常盤台の生徒が後ろを手錠で縛られている。

「兄貴アンチスキルがうじゃうじゃいますぜ。」

やせ細った白髪の男がビルの窓から下を眺めていた。

「まあ当然だろう。あれだけ騒ぎを起こしたんだ。騒ぎがない方が逆に気味がわるいだろう」

いかにもボスの風格を持ち、筋肉質でスキンヘッド頭の身長2メートルはある男は巨体を大きなソファーに腰掛けてくつろいでいる。「アンチスキルや風紀委員共は人質を気にして動けねえみたいだし、いっちょ早めに済ませ時ますか兄貴？」

「まあ待て、実験をするにはあの方の指示があるまで待て」

「あの方ですか？兄貴、あっしはどうも気に入りませんが、学園都市のレベル5かなんかは知りませんが、あんないけすかねえ野郎…」

「おい、聞かれてたらどうする。あの方には恩がある、何にも力がない俺達に力を与えて下さったんだ。恩は返す、そのためにこんな人攫いまでしてるんだ」

白髪の男は眉をひそめ人質の方を見た。同じ犯人の仲間達は常盤台の生徒達をやらしい目線で見ている

「しかしまあ常盤台の特殊装甲のバスを半壊にするなんて、レベル5様は何を考えてらっしゃるのか…常盤台の生徒を連れ去るなら、別にバスごと壊さなくても…」

白髪の男は兄貴と呼ばれる人物に人質を見ながら話しかける スカートの中身がみえそう………やっぱり見えなかった。

「まあ確かにバスごと破壊するのは少しばかりやり過ぎだが、一種のセレモニーが欲しかったんだろう」

一方、兄貴と呼ばれる人物は人質に興味がないのか見向きもしない。

「…でこれからどうします？兄貴？」

「そろそろあの方からの指示がある、指示がありしだいに実験を行い、そして正面から脱出する」

「さすが兄貴っす、アンチスキルや風紀委員を真っ正面から叩きのめすんっすね？」

「ああ、今の俺達ならどうって事ない」

そして兄貴と呼ばれる大男は人質の方を見て…

「大事な被験体だ、それまで丁重に扱ってやれ」

そして大男は不適な笑みを浮かべ、あの方からの指示を待つ

第12話 動き出す事件〜完

## 第12話 動き出す事件（後書き）

読んで頂いてる皆様ありがとうございます。

今回の事件はレベル5の誰かが絡んでいます。

もちろん一方通行じゃありません。

次回の更新はちよい遅くなりそうです。

それではなのです。

### 第13話 突入(前書き)

ごめんなさい許してください。今回はかなり駄文です。

批判全然OK

もうマジでごめんなさい。

### 第13話 突入

鏡晴也と白井黒子は廃ビルの中へと潜入した。

鏡晴也の超能力のミラージュ・マスターを使い、鏡を応用した光の反射で見張りに何もいない、という鏡像を見せて中に潜入した。

かなりの計算が必要となったが初春に協力をしてもらい。初春の情報処理能力と 晴也のレベル4としての演算能力を合わせてなんとかやり遂げた。

初春のパソコンを使った情報処理はプロも舌を巻くほどで、超能力ではないが、情報処理能力はレベル5と言っても過言ではない。

潜入した廃ビルは元々は大人のお店らしく、少し卑猥なポスターやお酒の空ビンが大量に置かれている。

廃ビルは全部で7階 まであるらしく、現在は2階にいる。

突入したのは晴也と白井だけだ、潜入なら少人数の方がいいし、初春は戦闘向きではない為、無線で指示を出してもらっている。

「初春？こちら白井黒子外から犯人に気づかれた様子はありますの？」

白井は小型の無線イヤホンを装着し初春に連絡をとる。

『はい、こちら初春飾利外には気づかれた様子はありません』

「飾利ちゃん、今、黒子ちゃんと2階にいる、まだ犯人とは接触していない。だがこれから先は必要最小限無線連絡を控えたい、なにが重要な事があつた時以外は連絡を避けてくれ」

『分かりました。何か動きがあつたら連絡します』

そう告げると無線からの連絡は途切れ、晴也は周りを見渡す。

晴也は部屋に置かれている、バーカウンターに背中を預けて現状を推測していた。

（見張りは入り口の2人だけ、そしてこの廃ビルはよく響く、近くに人はいないみたいだな。犯人グループは少人数、そして見取り図を見た限り、犯人達は6階のダンスホールにいる可能性が高いな…）

晴也は見張りの数から犯人を少人数と断定した。

理由は簡単で見張りの数がかかなり少ない為だ、少ないって事は見張りにあまり人員は割けないから、人員が多いなら見張りの数はもっと多いはずだ。

そして晴也は突入前に見せてもらった見取り図を見て、部屋の広さと人質の数から1階が丸々ダンスホールとなっている6階にいると判断した。

「黒子ちゃん、今から6階のダンスホールを目指す」

白井はいきなり話過ぎて理由を求めたが、「時間がない」と言われ、よく状況が分からないまま、6階を目指す事にした。

晴也と白井はなるべく早く、そして慎重に6階を目指す。





仕事を任せてくださったのだ。我々を見捨ててあの方が得をする道理はない」

スキンヘッドの男はタバコに火をつけ、あの方からの連絡を待つ。

やせ細った白髪の男は地面を蹴り。

「兄貴はお人好しすぎるぜ…一度信頼した人間を疑わない信頼はすげえと思っけど、そんな甘い事ばかり言っていると寝首かかれるぜ」

「…少々黙れ」

「…兄貴、俺とあの方どっちを信頼するんですかい？」

2人の間には嫌悪なムードが流れる…が 兄貴と呼ばれる男は瞳を閉じて、何かに集中しているようだ

「兄貴！俺の話聞いてるんですかい！」

「黙れと言っている…！」

兄貴と呼ばれる男は大声で怒鳴りつける、その声を聞き人質を見張っていた、男達が止めはいる。

スキンヘッドの男は慌てて立ち上がり。

「馬鹿共が持ち場を離れるな！何かがこちらに向かってきて…」

…とその時

人質を見張っていた男達と人質の間に一直線の線が入った。

白髪の男は急いで、振り返る。

そして、一直線の線の上をいきなり虚空から誰かが現れた。

「風紀委員だ！大人しくしゃがれ」

虚空から出てきたのは鏡晴也と白井黒子だった。

「なっ風紀委員だと？馬鹿な！どこから侵入しやがった。見張りは

何をやっていたんだ」

犯人グループの男達は拳を構える。

「動かないで下さいまし、あなた達を器物破損、拉致監禁の容疑で逮捕します。大人しくしていただけます？」

「白井さん」

人質の生徒達が白井が助けに来た事に安堵している。

白井は人質の生徒達に背を向けたまま優しい声で…

「もう大丈夫ですわ。みなさんは必ず無事に助けだしてみせますわ」

と一言告げると男達の動きに集中する。

「大人しくしろだと？それで大人しくする奴がいるかあああああ  
あ！」

男達は一斉に白井に向かって襲いかかる。

白井は大胆にスカートをめくりあげ、太ももから物騒な金属矢をとりだす。

白井は金属矢を自分の能力「空間移動」を使い、男達の肩にテレポ  
ートさせる。

「ガハア！」

男達は肩に違和感と激痛で地面に倒れこんだ。男達の肩からは血が  
にじみ出ていた。

「だから大人しくしろと申し上げましたのに…動かさない方がいい  
ですわよ。肩の骨に金属矢を無理やりレポートしましたので、無  
理に動かすと、金属矢が刺さった部分から全身にひびが入りますわ  
よ」

白井は余裕そうな顔で顔で地面に転がっている男達を上から見下ろ  
す。

「…黒子ちゃん。恐え〜つてか容赦なさすぎだろ？」

「容赦なんてする必要ありませんわ。」

一言で即答された。どうやら白井のボルテージは怒りで最高潮らしい。

晴也は今の白井は怒らせないでおこうと心に誓い。犯人達に話かけた。

「…でどうするんだ。そのハゲと白髪残ってるのはお前達だけだぜ」

そうさっきの白井の一撃で他の犯人の男達は全滅していた。しかし、スキンヘッドの男と白髪の男は焦る様子はなかった

「冷静だな？人質は俺達に取り返したし、お仲間も戦闘不能だぜ？

不利になったのはそっちだつてのに」

「別にこいつらは寄せ集めた野郎共だ。それと俺達は不利になどなつていない」

スキンヘッドの男は未だに余裕な表情だった。晴也はそんな犯人に警戒する。

「なかなか上手い奇襲だったな、俺達の位置を特定し真っ正面から入ってくるのではなく、下の階から奇襲をかけ、一瞬の間隙について、そちらの嬢ちゃんの空間移動でここまで来たんだな」

そう鏡晴也は見取り図から犯人の位置を特定した。しかし真っ正面から突っ込む馬鹿はしない。

下の階からミラーージュ・ブレイドで奇襲をかけ、犯人と人質を引き離し、白井の空間移動で上の階まで移動した。

「だが疑問が残るな俺達の居場所は分かっただとしても、俺達の立ち位置と人質の位置を知ってないと、あんな的確に奇襲をかける事はできぬはずだ…」

白井はあきれた様子で部屋の端を指差した。

「お馬鹿さんですわね。別に特別な事はしてませんわ、あれっなにだかご存知で？」

白髪の男は部屋の隅にポツンと置いてある小さななにかを発見した。

「なんだ…あの小さいレンズの付いた物は…」

晴也は面倒くさそうに説明する。

「盗聴カメラって言ってな？言葉通り盗聴とカメラを両方つけ備えた学園都市製の超小型カメラだ」

「そいつを黒子ちゃんの空間移動を使ってこの部屋に置いて中の様子を伺ってたってわけだ」



晴也と白井は小型カメラの映像をあらかじめ初春パソコンに繋いでいた。

そして中の様子を初春に連絡をとり教えてもらってた訳だ。

「さあ無駄なお喋りは止めて、さっさと大人しくしてくれないか？」

晴也はスキンヘッドの男と白髪の男に向き合う。白井もいつでも動けるように身構えた。

「……悪いが捕まる訳にはいかない。可哀想だがお前達には眠ってもらおう」

「交渉決裂だな」

晴也は鏡のナイフを10本ほど作り　スキンヘッドの男へ投げつけた。

スキンヘッドの男動かない。

そして、スキンヘッドの男にナイフが突き刺さる。

…はずだった

ガラスのナイフはスキンヘッドの男の体に当たった瞬間粉々に砕け散った。

「効かぬな」

「…なんだと！」

晴也はもう一度ナイフを作り出し。スキンヘッドの男に投げつけた。しかし数は30本

（これならどうだ！）

スキンヘッドの男にナイフが当たる瞬間に晴也は見た赤い血を…

しかしそれはスキンヘッドの男から出たものではなく…晴也の体から出ていた。

「…なんだと」

晴也の体には自分が投げたはずのナイフが突き刺さっていた。

「鏡さん！」

白井は慌てて晴也の方に近寄る。

「来るな！黒子ちゃん」

その時、遠くにいたはずのスキンヘッドの男に白井は腹を蹴上げられた。

「ゴフウ！」

白井はそのまま腹を押さえて地面に崩れた。

「戦闘中によそ見などするものではないぞ！風紀委員」

「兄貴、こいつら弱すぎですぜ？さっさと殺しましよっぜ」

晴もおびただし位血を流しながら膝を地面につき男達を睨みつける。

白井は腹を押さえて痛みには耐えながら必死に顔を上げる。

「おいおい、恐い顔すんなよ！お仕置きが必要かい？」

「お仕置きなど必要ない今ここで死んでもらおう」

こうして不利な状況のまま戦いは始まる。人質の命と自分の命を懸けた戦いが…

第13話  
〜突入〜

### 第13話 突入（後書き）

どうでしたか？この駄文ぶりは…

すみませんでした。

次回の配信は月曜日予定です。

読んで下さった皆さんありがとうございます。

## 第14話 空間反転の脅威（前書き）

お気に入り28件突破！！ありがとうございます。

今回は白髪の男と白井黒子の戦闘がメインです。

白髪の能力がいまいちピンと来ない方は後書きで…

ではご覧下さい

## 第14話 空間反転の脅威

状況は最悪だった。

犯人達に先制攻撃を仕掛けたはずだった。鏡晴也のミラーージュ・ナイフは相手に当たらず、晴也自身に突き刺さり。

白井は一瞬の隙をつかれて、大男の蹴りを腹に直撃をくらい地面に倒れ込んでいた。

晴也と白井は自身に襲う激痛に耐えながら、ユラユラと立ち上がった。

「ほえ〜まだ立ち上がれる位の力があつたのかよ」

白髪の男は感心そうに2人を見つめる反面、少し馬鹿にした様子にも見えた。

「いやまさか：自分の攻撃が突き刺さるなんて、考えてなかったものでねえ〜。その白髪の能力だな？」



晴也は見た、大男にナイフが当たる瞬間に白髪の男が手をかざしていた事を

「ありやばれたか」

白髪の男はケラケラと笑いだした。

「じゃあ自己紹介しとかな？」

「俺の名前は「佐々木一平」だ。俺能力名は『空間反転』。またの名をスペースインヴァージョン」

「俺は手に触れずあらゆる空間を反転できる能力者だ。さっきはナイフが進む空間を反転させたから、ナイフがお前さんに向かって刺さったってわけだ」

どうやら白髪の男は白井と同じ、空間に干渉する能力者のようだ。

しかし白井は痛みを耐えながら口を開く。

「そんな空間能力は聞いた事ありませんの」

「はあ？そりやお前さんが知らないだけだろう。ここは学園都市だぜ…能力の数なんて10000や20000はあるだろうが」

「ええ確かに能力の数はそれ以上あるでしょうけれど…空間移動能力者は学園都市に58人しかいませんの…」

白井は痛みを堪えながら話しを進める。

「その58人の空間移動能力は57人は私と同じ『空間移動』そして『座標移動』の2つですわ」

「学園都市のバンクに『空間反転』なんて能力はありませんでした。あなた一体何者ですの」

「クツクク、ハハハハ」

白髪の男は急に笑いだした。まるでとても愉快に

「いや、まさかあれを使って、いきなり目覚めた俺の空間移動能力が学園都市で初だなんて、俺すげえ」

白井の耳には奇妙なワードが聞こえた。

「あれを使つて？一体何の話しですの」

「内緒だよ」

白井の質問に白髪の男は答える気はないようだ。

「鏡さん、わたくしはこの白髪の男を相手にします」

いきなりの白井からの言葉に晴也は思わず。

「はあ何言つてだ黒子ちゃん！」

「空間移動能力はわたくしの専門ですわ、空間移動に疎い鏡さんでは少々厄介な相手になりますので」

晴也はしばらく考えて込んで。

「分かった。俺はこっちのハゲの男を相手にする」

白井は小さく頷いた

「では、文句はありませんね？佐々木さん？まさか女の子相手に逃げる気はありませんよね？」

「馬鹿がどつちが相手でも一緒だよ。まあ兄貴の邪魔をしたくねえ…四階まで来い」

そう言うと白髪の男は四階の空間と六階の空間を反転させ虚空に消えた。

「では…言って参りますわ」

「待て！」

晴也は白井を呼び止めた

「死ぬなよ!!」

「ええ指導係さんのご命令であれば」

そう言うと白井は虚空に消え戦場に向かって行った。

「じゃあこっちも戦闘準備に移りますかね」

晴也は鏡の剣を作り出し、スキンヘッドの男に構える。

「ふん、どうやら鏡使いのようだが、そんなものじゃ俺の体に傷を負わせる事など出来んぞ」

晴也は小さく笑い

「どつたるつな？あんたの能力はまだ分かんねーけど…必ず勝つてやるわ」

「いい覚悟だな、しかし俺に勝つことは出来ないさ、その覚悟無情に散れ！」

距離は20メートル 鏡晴也とスキンヘッドの男は、同時に走り出し、能力と能力がぶつかり合った。

――――  
4階廃ビル大食堂

廃ビルの4階は大食堂になっていた。大人向けのビルのはずだが、この4階は少し落ち着いた感じの あるフロアだった。

6階ほど広くないがそれでも人が100人位は入れそうだった。

この大食堂には横に20メートル位の長い机が2つ置いてあるだけ、後は割れた埃がかぶった皿や壊れた椅子が地面に散乱しているだけだった。

そんな大食堂に2人の人影は立っていた。

白井黒子と佐々木一平

「ここなら落ち着いて戦えるかなあ？つてか勝負になんのか風紀委員？」

白井は太ももから3本の金属矢を取り出す。

(相手の能力は未知数。けど…ここで退く訳には行きませんわね)

「なんだよ、黙りかよ、ならこっちから仕掛けさせてもらっぜ！」

白髪の男は左手をポケットに突っ込んだまま右手を白井にかざす。

白井は直感した。何かが来る、とりあえず後ろにテレポートしたが

…

「…えっ！」

白井は呼吸が止まるかと思った…白井の体はなんと、白髪の男の前にテレポートしてしまった。

「…そんな馬鹿な!!」

突如に白髪の男は白井の横腹に蹴りをいれた。

「…がっ!!」

白井の体は横に吹き飛ばされ、地面に転がった。

「どうしたのかなあ…風紀委員？テレポートでもミスちゃったの？」

白井は横腹の痛みを我慢しながら立ち上がった。

「あなた…一体わたくしに何を…」



「ん〜俺の能力で引き寄せただけだけど…」

「ふざけていますの？空間移動能力を使う者に空間移動はできませんのよ。あなたがわたくしをテレポートさせるなんて…不可能ですわ」

そう空間移動能力者を空間移動で移動させるのは不可能なのだ。空間移動能力者のAIM拡散力場は 自分以外の空間移動の邪魔になるらしい。

「確かにお前自身はテレポートさせる事はできない。けどお前が移動する空間をテレポートさせる事は出来るぜ」

確かにそれなら不可能な事ではない。しかし疑問が残る。

「あなたはわたくしのテレポートする位置が分かるとでも？」

そう、白井をテレポートさせるには、白井がテレポートを使い、その空間に移動する間の時間に白井が移動する場所をテレポートさせなければならぬ。

見てから判断してからでは、確実に間に合わないのだ。

「まあ普通の人間じゃあ、まず無理だよなあ？相手の動きを先読みするなんて、けどな…俺には分かるんだよ」

「俺は『元ボクサー』なんだからよ、素人がどっちに動いて、次何をやるかなんて、読み当てるのは簡単なんだよ」

「いいか？お前の動きはまる分かりなんだよ…目の動き、肩の動き、足の動き、全てが鮮明に見える、俺はボクサーの直感能力、動体視力と能力者としての力を備えた、オールラウンダーなんだよ、ただの能力者が俺に勝てる訳ねえだろ」

白髪の男は話しを終えると今自分がいる空間と白井の目の前の空間を『反転』させ白井の目の前に現れる。

「…ッ！」

白井はテレポートで距離を取ろうとしたが……

「見えてるぜ！」

白髪の男は白井がテレポートする位置を白井が現れる前に『反転』させ、白井を目の前にテレポートさせた。

そして白髪の男は白井の顔面にめがけて膝蹴りをくらわす。

「……があ！」

白井は膝蹴りを顔面に直撃し顔を抑えている所をすかさず、腹に鋭い蹴りを腹のド真ん中に当てる。

「……っっっっ」

白井は体を九の字に曲げて、かがみこんだ。

白髪の男は愉快そうに笑う

「はあっはっん いいねその顔、生意気な風紀委員を一度ボコボコにしてみたいと思ってたんだよ」

白井は何も出来なかった。自分だけのアドバンテージ、テレポートは使えないし、かと言って肉弾戦で男にしかも元ボクサーに勝てるとも思わなかった。

まさかここまで実力の差が開いているとは思っても見なかった。

「ふん、もう諦めるよ。風紀委員さんよ、俺の能力『空間反転』の恐ろしさはわかったろ？」

『空間反転』まだよく分からない人の為に説明すると…

まず最初に彼は白井黒子をテレポートさせてる訳じゃない白井黒子がテレポートで移動する空間ごと反転させているのだ。

そして反転と言うのは色んな意味がある。一般的には逆になるって言うのが一般常識だろう。

しかし数学的反転には逆になるの他にAからBを入れ変えると言う意味にも使われる。

白髪の男には全ての反転が使える。

・上下の反転

・左右の反転

・前後の反転

・AとBの位置の反転

これら全ての空間を反転できる。これが 能力『空間反転』なのだ。

「俺の空間反転はバリエーションたつぷり、色んな空間を触れずに自由自在に反転できる。お前のテレポートは触れた物だけしか空間移動させる事が出来ない」

白髪は九の字に折れ曲がったまま…白髪の男に視線を向け、言葉を痛みが混じったような声で喋りかける。

「結局あなたは何がいたいたいんですの？」

白髪の男は白井に近寄り、白井の胸ぐらを掴みあげる。

「つまりだ」

白髪の男は一度言葉をきり

「俺はお前と同じ空間移動能力者でも、お前とじゃ次元が違うんだよ。そして肉弾戦も俺の方が圧倒的上、つまりお前が俺に勝てる要素は何一つねえってことだあ」

白髪の男は胸ぐらを掴んだまま、白井を突き放し、蹴りを真っ直ぐ突き出し、白井の腹に直撃させる。

「…ゴホツ…がっ」

白井は吹き飛ばされ 地面にうつ伏せで転がった。

「惨めだよなあ〜けどな〜お前を簡単に殺しちゃったら、面白くないんだよ…」

白井は歯を食いしばり立ち上がろうとしたが力が入らない。

反撃するため、白井は太ももにある金属矢をテレポートで相手の肩にテレポートさせたが…

「甘めえんだよ」

白髪の男は後ろに下がり、刺さるはずだった金属矢を避けて、右

手で金属矢を握りしめ、そのまま白井の肩に空間反転で金属矢を突き刺す。

「…があああ！！」

白井は灼熱する痛みには耐えきりずに、叫び声をあげた。

「いい加減あきらめろや……惨め過ぎて逆におもろいぞ」

白井の肩からはおびただしいほどの血が流れ出す。白井は腹の痛みと肩の痛みで頭がおかしくなりそうだった。

最早白井が勝てる要素はなく。誰が見ても圧倒的な力の差、やるだけ無駄な戦い。

…しかし

…彼女はそれでも相手を強く睨みつける

…その瞳には諦めるなんて事は頭にもないみたいに…

「…なっなんなんだよ」

男は白井の目に気圧されて、一歩後ろに下がる。

「おいおい、この状況見てみるよ…圧倒的じゃないか…」

…それでも白井は立ち上がろうとする。

「ありえねえ！お前本物の馬鹿か？なんで逃げねえんだ？建物の外にレポートして、俺の目に見えない所にレポートすればいい話じゃねえか…」

その時、白井はポツリと呟いた。

「…諦め…られ…ません…わよ」



「何だと！」

「約束しましたの、みんなが無事に帰っ…て来るって」

白井の声は弱々しかった、けれど彼女は膝をもたつかせながら立ち上ろうとする。

「どんなに惨めでも…相手がどんなに圧倒的でも……ッ勝てる要素が何一つなくても…それでも…」

白井は血まみれの体であちこちが痛む体で今度こそ立ち上がる。

『そんな下らない理由でわたくしが諦める理由にはなりませんの！約束したんですもの、みんな助け出す、無事に帰って来るって。それをわたくしだけ無様にノコノコ逃げ出して自分だけ助かった…そんなわたくしに明日を笑って過ごす権利なんてありませんの！』

白井は一度言葉をきり。

『…それにわたくしはこんな所でくたばる訳には行きませんの…自分にあの日誓ったんですの、必ず強くなって、大好きなお姉様と同じ世界に立つとだから…』

白井は金属矢を取り出し力いっぱい握りしめ…戦宣告をする

『あなたなんかには負ける訳に行きませんの!!』

「…ツ面白れえ、じゃあさっさと殺してやるよ！」

こうして戦いは再開された。

(見つめましたわ…あなたの能力の弱点!!)

白井と白髪の男の戦いはクライマックスに突入する！

絶対勝つ大好きなお姉様の元に笑って帰る為に……

第14話 空間反転の脅威

## 第14話 空間反転の脅威（後書き）

『空間反転』 みなさん。ご理解できませんでしたか？

空間移動能力を空間移動できない。それは原作で明らかになっています。

白髪の男は白井が空間移動する時、白井は一回虚空に消えます。

その虚空に消えた白井が出現する前に白井が現れる空間に反転能力を使い。自分の手元に呼び寄せた。

簡単に説明

白井が虚空に消える 白井が現れる空間に反転作用をかける 白井自身を空間移動させた訳じゃない 白井がレポートした空間には反転作用がかかってる 相手は白井のレポートした空間の自分の目の前の空間を反転させる 白井は白髪の男の目の前に…

文章力なくてすみません。

それでも納得いかない方は……

二次創作なんだからいいじゃねえか!!

すみませんでした。

では次回お楽しみに…

## 第15話 消えた才能（前書き）

今回は白髪の男の過去話になります。

皆さんの小説を読んでオリジナルキャラクターを大事にしたいと思  
い、急ぎよ過去話を入れました。

退屈かと思われませんがどうぞ見てやって下さい。

ちなみに今回も文章に自信がありません

お気に入り30件突破大変嬉しく思います。ありがとうございます  
！！

ユニーク4000人突破と言う事で記念にオリキャラ資料館を設立  
させて頂きました。

是非見てやって下さい

## 第15話 消えた才能

一年前：俺はボクサーだった。

中学の時にボクシングを始め、高校の時は高校の全国チャンピオンになった。

俺には才能がある。俺はプロでもやっていける才能が…そう思っていた。

俺は野望通りプロボクサーに20才と言う若さでなり、ライト級のボクサーになり数々の勲章を得ていった。

俺は強い…この才能でどんどん上に登り詰めて言ってやる… そう俺の野望は膨らんでいった。

俺のボクシングスタイルはパワー押しではなく、ヒット&アウェイのスピードタイプ。相手の攻撃を避けて体力を削り、体力がなくなった所を一気に叩き込む。

俺は持ち前の動体視力と反射神経で若手の無敗の新人ボクサーと呼ばれていた。

そんなある日。野望へ一歩近づく日が来た。俺は才能が認められてライト級のチャンピオンへの対戦が決まった。

負ける気はしなかった。

俺の才能は相手より上だと思っていた。

相手はライト級のパワータイプ。いつものように攻撃を避けて、体力がなくなつた所に必殺の一撃を決めてやる。

そんな思いで迎えたライト級チャンピオンとの対戦。

相手は確かにパワーがあつた。だが俺の反射神経にかかればゆっくりに見えた。

（才能が違うんだよ！）

そして俺は相手の右ストレートを華麗に避けて見せるはずだった。

……しかし。

内面緊張していたのか、足首をひねらせて体制が崩れた。

(やばっ!!)

…その瞬間。

相手の右ストレートが顔面に直撃した。初めてモロにくらったストレートだった。

俺は試合開始わずか30秒でKOされた。初めての敗北。俺は脳震盪を起こし立ち上がる事は出来なかった……。

そんな俺は世間から罵倒された。

「所詮は新人だよ。経験が違う」

「生意気な事ばかり言ってるから痛い目見るんだよ」

「あゝあ友達と賭けたのに…あいつのせいでボロ負け…ボクサーなんて辞めればいいのに…」

惨めだった。けど世間からなんと言われようが…俺は諦めなかった。

…そんなある日。俺は所属する、ボクシングジムの会長に呼び出された。

「会長！どういう事ですか？」

「どういう事だと？言った通り君はクビだよ…」

いきなり出されたクビと言う発言に理解出来なかった。

「君は確かに速い…しかし結果どうだね？ライト級チャンピオンとの対戦で君は無様にも30秒でKO無様にもほどがある」

「あれはたまたまです。次は負けねえです。お願いです！俺にもう一度チャンスを下さい」

俺は生まれて初めて、地面に手をつき土下座した。屈辱だった。だが我慢した野望の為に…



「君は最初私との契約の時何と言った？必ず上に登り詰めるこの才能でと言ったはずだが？私はその言葉を信じて、君との契約を決めたはずだが…？」

「どづいつ意味っすか？会長？」

会長は椅子に座ったまま膝を組み直して言った…

「君には才能がない！」

「…ッ！！」

「君のようなボクシングスタイルの選手は山ほどいる…君のような才能のないボクサーは我がジムにいらん！！出て行きなさい…目障りだ！！！」

「…待…って下さい…お願いします！お願いします…俺にはボクシングしかないんす…俺には……」

俺はみっともない位泣きながら、会長にしがみついた。

…しかし俺にとって最も辛い言葉が俺の心をへし折った。

「黙れ！！才能のないクズが！才能のない人間は私のジムには要らない！こいつをつまみ出せ！」

横から出てきた。体がでかい2人の男に 両腕をもたれ、俺は部屋から追い出された。

「会長！会ちよ…ああッ…お願いっす！俺は俺はアあああああ  
！！」

俺の叫びは虚しく、ボクシングジムの外へつまみ出された。

俺は冷たいコンクリートの上でひたすら泣いた。

才能がない。俺には その言葉は鋼鉄のハンマーで殴られたように心に響いた。

俺は自分の心をへし折られ…才能を失い…ひたすら泣いた。

「…何でだよ…俺の才能……なんでなくなっちゃったんだ？」

たった30秒…その時間で彼の運命は変わり…そして才能も失った…。

泣き崩れたていた時…彼はビルに取り付けられた、大型スクリーンのテレビを見た。

そこに移っていたのは…学園都市の『大覇星祭』の映像だった。

大覇星祭は学園都市の体育祭で、学園都市の様子が一般公開される日でもあるのだ。

その大覇星祭の様子をただ見つめる自分。

映像には…石を大きな塊に変えて相手に投げつける男の子。

水や炎を手から出す男女2人組。

電撃を出す茶髪の女の子

俺は名前位は知っていた。『超能力』と言うものを…

「俺もあいつらのような才能が…絶対に…崩されない…なくならない才能が欲しい…俺も!!」

俺は才能が欲しかった。無くなってしまった才能が……。

だから決意した。

学園都市へ行く事に…

才能を手に入れる為に…

そして…もう二度と才能を失わない。自分だけの現実を手に入れる為に…

—————

学園都市へ入るのは簡単ではなかった。

厳重なセキュリティに厳重な警備体制。

俺は学園都市のゲートの前で泣き崩れていた。

夢はそこにあるのに…才能はそこにあるのに…長く高い学園都市を

困む壁が彼の野望を邪魔した。

彼は学園都市へ入る為に警備員に頼んだが…相手にもされなかった。

彼はひたすら学園都市を困む高い壁にへばりついて泣きわめく。その姿はまるで子供が迷子になって泣いているのようによく儂く見えた。

「どうして泣いているのかね？」

一人の優しそうな白衣を来たおじさんが話しかけて来た。

「…俺、ツ！！才能が欲しいんです…」

優しさそうなおじさんは顔を傾げて…

「才能とは超能力の事かね？」

「…はい」

優しそうなおじさんは誰かに連絡を取り出した。電話の内容は聞け

なかった。しかし…

「君、どんな事をしてでも超能力を手に入れたいかい？」

「はい」

「いいだろう…ついてきなさい」

俺はよく事態を飲み込めなかったが…そのおじさんは俺を学園都市へ入れてくれた。

俺が連れて来られたのはとある研究所だった。

「君には私達の実験体になってもらう、もちろん超能力と引き換えにだ…そしてある程度の自由も保証する…どうだ悪い条件じゃないだろう？」

「才能を…超能力を手に入れる事が出来れば…何も入りません…お願いします」

こうして俺の能力開発は行われた。

――

…しかし

「どづいつ事っすか！超能力者になれないって！」

能力開発が済み俺に告げられたのは超能力者にはなれないと言っ  
言だった。

「君は超能力者になれないんだよ…」

優しいおじさんは予想外と言わんばかりの顔をしている。

俺はこのおじさんが何を言ってるのか理解出来なかった。

…そして俺はここでも絶対に二度と聞きたくない、最悪な一言を聞  
かされた。

「君には才能がないんだよ……」

「……ッ！……えっ？おじさん今？……今何を言った……の？」

「才能がないんだよ君には……超能力者になる才能が……予想外だったよ。まさかこんな事になるとは……」

才能がない？何？何？何で？何で？ありえないよ……俺には……超能力者になれる才能が……」

「……嫌だ！嫌だ！何でだよ！うわッ！アあああああ！」

何でだよ！嫌だよ！才能が手に入ると思ったのに……誰にも馬鹿にされない才能が手に入ると思ったのに……」

「いいかい君のように能力開発をしても能力が手に入らない人を学園都市では……」

『無能力者と言っただよ』



俺はもう何も分からなくなった。もう俺に才能は何もない、手に入らない、何もない人間は無能力者…。

「能力のない者に実験は出来ない。かと言って能力開発をした人間は学園都市の外に出す事は出来ない……つまみ出せ」

優しいおじさんの顔を豹変していた。優しさなんて何もない悪魔のような顔に…

「無能力者は学園都市では一円玉より価値のない人間だ…そんな目障りな者…さっさとつまみ出せ!」

こうして俺は研究所からつまみ出され、右も左も分からない裏路地に捨てられた…生ゴミと一緒に…。

俺の心は壊れかけていた。もう何もなかった。あるのは本当に心の中にある『無』だけだった。

裏路地の汚い地面に倒れ込んだ…しだいに雨が降ってきてそれは俺の無を笑う声に聞こえた。

「もう嫌だよ…神様…は…なんで…こんな俺を助けてくれないんだよ…才能が欲しいよ…」

俺はもう泣く事も出来ない位に無になっていた。

…そんな時。

「おい、お前も才能がないのか？」

「誰？」

俺の目の前にはスキンヘッドの男が立っていた。

「誰でもいいだろう。才能がない者の味方だ…」

「あんたも才能がない無能力者なのか…？」

スキンヘッドの男は小さく笑い。

「ああ、昔はな…だが今は違う俺は才能を手に入れた」

そしてスキンヘッドの男は俺に大きな手を差し伸べた。

「俺と手を組まないか？俺はある方に無能力者でも超能力者になれる方法を教えてもらった。俺と手を組めば才能がないお前でも才能を手に入れる事が出来る」

「本当か？本当に！俺は才能を手に入れる事が出来るのか？」

「ああ、復讐してやろうぜ、俺達をクズ呼ばわりした世界に！」

迷う必要はなかった。俺はスキンヘッドの男の大きな手を握りしめ、思い切り泣いた。

クズ呼ばわりされた俺を仲間に入れてくれた男に俺は一生ついて行くこと決めた。

これが俺と兄貴の出会い

そして才能を再び手に入れた瞬間だった。

…そして今俺は才能を与え心から迎え入れてくれた兄貴の夢と兄貴が尊敬するあの方の為に一人の少女と戦っている

俺の才能にその少女はボロボロ傷付き、そして肩からは大量の血が吹き出ていた。

しかし彼女は立ち上がる

その姿は何故か俺の心を強く酷く揺さぶっていた。

試合の時立ち上がれなかった俺とは違って…彼女は立ち上がる。

何故…彼女はこんなにも強く…勇ましく…迷いもなく立ち上がる事が出来るのだろうか？

多分…あの時立ち上がる事が出来なかった俺には知る事も出来ない答えなのだろう…

…あの時、立ち上がる事が出来たら俺の運命は変わっていたのだろうか…

…しかし時計の針はもう戻らない。後悔したって始まらない。

…だから戦う。

あの方なんてどうでもいい…ただ才能を与えてくれ、心から俺を迎え入れてくれた、尊敬する兄貴の為に…

第15話〜消えた才能〜完

## 第15話 消えた才能（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。

次話は遂に決着です

白井黒子ははたして白髪の男に勝つことは出来るのか？

土曜日位に配信予定です。

それではなのです

## 第16話 立ち上がる理由（前書き）

すみませえええん！！

今回は超駄文です！いやッもうありえないですよマジで！！

見て頂いてる方本当に申し訳ありません。最近本当にスランプ気味で…

次回からは少し勉強してきます。

本当にすみませんでした。

## 第16話 立ち上がる理由

白井黒子の体を悲鳴をあげていた。腹部は酷く腫れ上がっていて、肩からは自分の金属矢が刺さり、おびただしいほどの血が溢れでていた。

しかしそれでも決して倒れる事はないボロボロの白井の姿を見て、白髪の男は気圧されいた。

(いや落ち着け。有利なのはまだ俺だ… 状況は何も変わっていない。勝てるぞ！！)

白髪の男はそう自分に言い聞かせて、深呼吸する。そして…

右手をかざし。自分の空間と白井の目の前の空間を反転させて、白井の目の前に現れる。

白井は即座にテレポートして回避行動に移る。

(さっきの足の動き、目線の方角からして後ろに移動したか…)

白髪の男は白井が虚空から現れるであろう、後ろの空間と自分の目の前の空間を反転させ、後ろに逃げた白井を自分の目の前に引き寄



せるように空間を反転させた。

そして白井が出てくるタイミングを見計らって。

横腹を蹴り上げる。

……しかし

白髪の男の蹴りは白井に当たらなかった。

白井は自分の狙い通りに後ろにテレポートしていた。

(馬鹿な!?)

白髪の男は蹴りを外し、無駄なモーションをとっていた。

その隙をつき白井は痛む体を無理やり走らせて相手の懐に小さな体を潜り込ませた。

そして地面を思い切り踏み込み、右足に全体重をのせて、思い切り自分の肘を相手の腹にめり込ませる。

「グアッ！」

白髪の男に腹部へ劇痛がはしり。肺の空気が全て吐きでた。

「…がはっ…ゴホッ」

白髪の男は長い間体を鍛えるのを怠っていた為、白井の一撃はかなり効いた。

白井は腹を押さえて隙がある白髪の男に追撃を与える為に、白髪の男との距離を詰める。

（くそッ！！）

白髪の男は体を蝕む劇痛に耐えながら、反転能力で後方へ空間移動した。

「ちッ」

白井は後方に逃げた白髪の男を見て舌打ちをする。

白髪の男には理解出来なかった。何故自分の空間反転が適用されなかったのか？

（ツク相手に気圧されて演算をミスったのか？）

白井は太股に装備している、金属矢を五本取り出す。

（チツ体内にテレポートさせる気かよ…さっきと同じように空間を反転させて、お前の体の中に金属矢を入れてやるよ…）

白井は金属矢を虚空へ飛ばした。

（馬鹿が！！）

白髪の男は右手をかざす自分の体内の空間と、白井の体内の空間を反転させる。これによって白井が虚空に放った金属矢は、白井の体に突き刺さるはずだったが……

赤い血が吹き出る、白井の体からではない…白髪の男の体からだ…

「あッ…がアアあああああッ!?!」

白髪の男は絶叫する。自身を襲う猛烈な痛みに。

「何が…ッ」

白髪の男は自身を襲う痛み of 正体に気がつく…なんと金属矢は白井の体ではなく白井の狙い通り、白髪の男の体に刺さっていた。

「何だと…ありえねえ…どついつ事だ？」

男は劇痛が襲っているにも関わらず疑問 がポロリと口から出た。

「簡単な事ですわ」

そこで白井が口を開く

「あなたの能力結構厄介そうですが…一つ決定的な弱点がありますのよ」

白髪の男は白井の言葉が理解出来なかった。

「弱点だと……」

「ええ、あなたは空間を反転させる事によって、攻撃の位置やわたくしの空間移動の位置を狂わせていますが……」

白井は一度言葉を切り核心に迫る。

「あなたが出来るのはあくまで『反転だけ』つまり、わたくしがあなたの反転に合わせて空間移動した場合どうなります？」

白髪の男は気づく。

「お前！……まさか？」

「ええあなたの反転を上手く利用して『正転』に戻しただけです  
！」

そう白髪の男の能力で可能なのはあくまで『反転』だけ……

白髪の男が反転させるには相手が移動したい空間Aと白髪の男が反転させたい空間Bの二つの空間がいる。

つまり白井は移動したい空間Aに飛び込んだのではなく、白髪の男が反転させたい空間Bにわざと空間移動した。

つまり白井は『反転』を上手く利用し、相手が思っているとは逆の行動をとる事で反転を正転に戻したと言うわけだ。

しかし白髪の男は痛みで頭がおかしくなったのか笑っている

「ああそうかあ確かにそれなら反転は正転に戻される…けどなお前は一つ単純なミスをおかした」

白髪の男は空間移動ではなく走りだし、白井に近づく…そして白井に蹴りを放つモーションをとった。

白井は空間移動で後ろへ回避する。もちろん相手の能力の逆手を取った方法で…

（はんッ前に移動したか！！だが予想通りだ…相手が馬鹿で助かったぜ…まさか俺の弱点を本人に教えてるなんてな！！）

白髪の男の蹴りはフェイク、白髪の男は右手をかざした。

（相手は逆手を取る。なら俺はそれを更に逆手に取るだけだ！）

白髪の男は白井が逆手を取ると予想した。白井は反転を上手く利用して、白髪の男の前に空間移動する。

それを予想して白髪の男は反転能力を使わない。白井は反転を利用して、前に移動したが、相手が能力を使わないなら、話しは別。

白井はただ相手の前に移動しただけ…

白髪の男は白井が出てくる、空間に蹴りをいれる。もちろん白井が空間から出てくるタイミングに合わせて…

…しかし

白髪の男が蹴りを放った場所に白井の姿はなかった。

（…ッ何だと！奴は確かに前へ移動したはずだ！？一体何処へ…）

「何処を向いていますの？わたくしはここですわ！」

白髪の男は後ろから白井にタックルされた。白髪の男は蹴りのモーションをとっていた為、片足で立っていたので、無様に前へ倒れた。

「…ッてめえ」

白井は追撃をかけ相手の背中を思いつきり踏みつける。

「があ…がアあああああああ！」

白髪の男は雄叫びを上げ力を振り絞って体をうつ伏せから仰向けに戻して白井の足を持ち白井を横に倒す。

「…がッ」

白井は地面に倒された衝撃で体の痛みが全身に電撃のようにはじつた。



2人はお互い地面に倒れた状態になっている。

2人の体はお互い悲鳴をあげていて、容易に立ち上がれる状態ではなかった。

そこで白髪の男は口を開いた。

「…てめえ！まさか俺の能力のもう一つの欠点まで分かってやがったのか!？」

「あら…もう片方の弱点はお気づきになってましたのね？」

「…ッ!!」

2人は地面に倒れたまま会話をする。

「あなたの能力のもう片方の弱点は、自分の目が届く範囲しか反転を使えない…前から後ろへは移動できても、目の届いていない、後ろから前への移動は出来ない、だからあなたの前ではなく、後ろに空間移動させて頂きました。」

「いつ…気がついた？」

「あなたは能力を使う前に必ず右手をかざしていたのが最初ですね…そしてあなたがわたくしに『俺の見えない所に空間移動して逃げればいいだろう』と言った時に確信へと変わりましたわ…」

白髪の男は苦い笑みを浮かべて。

「…だがそれで俺に勝てるつもりか？悪いがまだ勝負は終わっていないぜ」

男は白井の方に向かって地面に倒れたまま右手をかざした…しかし白井に向かってではない。

食堂に置かれている長いテーブルに向かって…

「…ッ！」

白井は地面に倒れた体制のまま右に30メートル離れた場所に空間移動をする。

その直後にテーブルは白井がさつきいた場所に上から落ちてきた。

後少し判断が遅ければ白井は20メートルあるテーブルの下敷きになっただろう。

白井は空間移動して回避したが：痛みでバランスを崩して、片膝を地面についている状態になっている。

白髪の男は倒れた姿勢のまま周りに落ちている、壊れた椅子や割れた皿などを白井の真上に次々と落とす。

白井は空間移動を連続で繰り返して、相手の攻撃を回避する。

「ちょこまかと逃げてんじゃねえよ！」

白髪の男の攻撃は白井には当たらない。

そして白井は白髪の男の前に空間移動した。

（これで決めますのー！！）

白井は地面に思いっきり踏み込み、白髪の男の顎にとどめの一撃を繰り出す。

…しかし

「ざっけんなアあああああああ！」

白髪の男は全ての力を振り絞って無理やり立ち上がった。

白井の顎に振り上げるはずだった足は白髪の男に直撃を与えられずに白髪の男の腹をかすっただけだった。

そして立ち上がった白髪の男は白井に膝蹴りをくらわす。

白井はすぐに体制を立て直して、白髪の男へ肘鉄を相手の腹にめがけて放つ。

クロスカウンター

2人の放った攻撃は互いに直撃した。

白井は顔面に膝蹴りをくらう。

白髪は白井の肘鉄がみぞおちに突き刺さった。

「…あぐッ」

「があッ！」

強い衝撃と共に2人はその場に倒れたこんだ。

クロスカウンターによる同士討ち、2人共重心が前にかかっていた為、ダメージは相当なものだった。

しかし白髪の男が受けたダメージよりも白井が受けたダメージの方が遙かに上だった。

白井は脳が揺さぶられて脳震盪を起こし立ち上がろうとするにも、立てる状態ではなかった。

…しかし

…白井は揺れる脳と痛みを耐えながら

…立ち上がろうとする

白髪の男も白井が脳震盪を起こしている位は一目で分かった。かつて自分も味わったからだ…

白井はもう空間移動を使う事は出来ない。白井が能力を発動するには三次元的に捉えてる世界を十一次元上の理論値に置き換え再把握する必要がある。

そのため計算が極端に面倒で急な焦りや驚きで発動しないことがある。そして脳震盪を起こし脳が揺さぶられた今の白井には空間移動は使えないと言っわけだ。

しかし白井はそれでも、地面に手をつき腕の力だけで何度も立ち上がるうとする。

「…なんでだよ」

白髪の男が突如に乾いた声で呟く。

「なんで、諦めねんだよ！畜生！ちくしょう！チクショウ！！」

白髪の男は地面を叩く、何度も…何度も…

白井の姿はかつての自分と重ねてしまう。

あの時、立ち上がれなかった自分。

…そして、どんなにボロボロになっても立ち上がろうとする少女。

少女は言った…お姉様と同じ世界に立つまで負けられないと……だが一体それにどれだけの意味があるんだ…

これだけボロボロになっても…叶えない願いなのか…

俺には分からない……これがあの時立ち上がれなかった答えなのだろうか……だから問う　あの少女にあの日の答えを……

「なんで立ち上がれんだよ…おかしいだろっが、そんなにボロボロになって、脳みそは揺れて、肩からはそんなにいっぱい血が出てんによぉ…そんなに大事なのかよ！その誓いつてやつがあ！」

「…大事ですわよ、…一年前 わたくしはあなたと同じもう一人の空間移動能力者と戦いましたの」

白井は嫌な事を思い出すように白髪の男に語る。

「結果わたくしは無様に敗北してしまっただんですの。そしてボロボロになったわたくしの姿を見せてしまって、お姉様を悲しませてしまいましたの。…だから誓っただんですの」

『わたくしは強くなってお姉様と同じ世界に立つと！強くなってもうお姉様を悲しませる事はないようにと！だから何度でも立ち上がります！100回、1000回、10000回転んだって、必ず立ち上がりますの！』

白井の言葉は痛みなど感じさせない位に強かった。だけど…やっぱり理解出来なかった。



「お前ならあの日の答えを教えてくれると思ったんだが、やっぱりだめか…」

「あの日…?」

「ああ、教えてやるよ、俺がどうして復讐する事を誓ったのか…」

白髪の男は歌うように語りだした。自分がボクサーだった事

30秒の時間で全てを失った事。

学園都市に来た理由

学園都市でも才能が手に入らなかった事。

兄貴と出会い才能を手に入れた事

自分をクズ呼ばわりした世界に復讐する事

白井は呆然と聞いていた。この男の悲劇を…とても悲しそうな顔を

していた。

「なんで認めてくれないんだろなあ…この世界は俺を、認められただけだったんだよ！なのに 何故」

「あなたと同じような人を知っていますわ」

「…えッ？」

白井は思い出すように語りだした。あの日の出来事を思い出しながら…

「その方はとても強く、強大な力を持っているにも関わらず無能力者と言う烙印をおされてしまったんです…けどその方はそんな事を氣にとめる様子もなく、よくも知らないような人間を救う為に強大な力で助けていますの…わたくしもその内の一人です」

「馬鹿みたいでしょう？けど…だから周りから認められるんですの！その強大な力ちからを人を傷つける為ではなく…誰かに救う為に使うあ

の殿方は、あなたと違ってその力で誰かを傷つける為には使わない。

「

「あなたがその才能で誰かに救いの手を差し伸べていたら、あなたはたくさんの人に認められていたはずですわ！復讐などとはちっぴけな野望に何故あなたは、あの日の為の言い訳にするのですの」

『あなたがまだその力で復讐すると言うのなら、そんなつまらない幻想わたくしが打ち砕いて差し上げますの！！』

白井の体は限界だったそれでも全身の力を振り絞った。

体の痛みは全身に電撃のように駆け巡り、肩から流した血の量は尋常ではなく、脳にダメージをつけ意識が上手く回らない中…

遂に白井は両足二本で立ち上がった。

白髪の男は理解した。

「はッそうか…確かにお前の言う通りだ…どうして俺が立ち上がれないのか 何故お前が立ち上がる事が出来たのか 分かったぜ」

「俺は結局、自分だけの為に動いていた。復讐でも兄貴の為といいながら 結局は自分の為じゃあねえかよ、そんな奴が誰かの事を思っ  
て動いてる人間に勝てるわけねえ」

男は手を大の字に広げた。そして天井を見ながらゆっくりと…

「自分の事だけ思ってる人間が周りから認められるはずねえな…な  
んで今頃気づいたんだよ」

ボクシングの時だって自分の才能を認めて欲しかっただけだった。

ファンとか応援とかそんなのはどうでもよかった。

そんな周りを認めない人間が自分を認めて欲しいだなんて馬鹿げ  
ている話だった。

白髪の男は全身の力を抜いて言葉を放つ。

「俺の負けだよ」

そう告げた。しかし一つ腑に落ちない事があった。

「あなたはボクシングをなさっていたのでしょ？なのにあなたは一発もわたくしを殴りませんでした 何故ですか？」

「ああ多分心のどこかでボクシングはまだ好きだったのかもな 復讐の為に大好きなボクシングを汚したくなかったんだよ」

そうして白髪の男の意識はどんどん失っていった。

「なあ…俺は間違ってしまったけど変わるかな……………？」

そう寝言みたいな感じで一言言うと男は意識を失った。

「何度間違ってたっていいんですの…人は何度だ…ってやり直す事が出来ますの…だか……………ら…」

白井はそう言うと地面に倒れ気を失った。

何度だってやり直せる。間違ってたていい。最後の最後で素晴らしい人間になれば きっとそれでいいと思った。

間違っていていい、多分それも勇気なのだから

第16話 立ち上がる理由  
完

第16話 立ち上がる理由（後書き）

ぐすんッ

最後らへん特に駄文でしたよね…

すみませんの一言しかし言えません。

すみません

## 第17話 最悪の相性（前書き）

第17話まで行きました。お気に入り34件達成！！ありがとうございます。  
ざいます。

今回は晴也とスキンヘッドの男の戦いです。鏡晴也編〜なんか天城  
焰編より長くなりました…

最近禁断の能力者関係ないじゃんと思っっている方…実は絡みます！



## 第17話 最悪の相性

廃ビルのダンスホール。部屋の広さは縦横共に30メートルで部屋にはステージ台とステージを照らす照明しか置かれていない。

そんなダンスホールに鏡晴也とスキンヘッドの男そして常盤台中学の人質がいた。

鏡晴也はスキンヘッドの男と戦っている……いや戦いになどなっていないかった。

「…はあ はあ クソ！」

「どうしたこの程度か風紀委員？お前は俺に一度もダメージを与えてはいないぞ！」

「…ッ！」

鏡晴也は鏡で出来た切れ味の鋭いナイフを50本ほど能力で作りました。そのナイフをスキンヘッドの男に放つ。

当たればケガでは確実にすまない。

……しかし

スキンヘッドの男にナイフが当たった瞬間にガシャン！と無数のガラスが砕ける音が炸裂する。

スキンヘッドの男は無傷だった。相手はただ腕を組み立っているだけ……特別な動作はしなかった。

「何度やったとしても結果は変わらん……諦める」

そうさつきから攻撃しているのは晴也だけ……しかし相手にはかすり傷一つつかない。地面には攻撃するたびに砕けたガラスの破片が散らばっている。

「ツチ！ やっぱり駄目か……クソ どうなってやがる？」

鏡晴也は相手の能力を見抜けずにいた。それもそのはず相手はただ立ってただけなのだから……

スキンヘッドの男はうんざりしたような感じのため息をつく。

「少しは期待してはいたんだがな…もういいだろう。最後に俺の名前と能力位は教えといてやる」

「俺の名は舛田剛貴ますだこうき能力名は鉄鋼操作スチールオペレーションだ。」

「鉄鋼変化だと？」

「ああパツとしないようだな…サービスだ例えば、この地面に落ちているガラスの破片」

舛田はガラスの破片を手を持った…その瞬間…

ガラスの破片はシルバー色の鉄へと変わってしまった。

「…ッ!?まさか、お前の能力…」  
「そうだ 俺は触れた物を鉄や鋼に変えてしまう能力者だ 自分の体であっても例外ではない」

そして男は能力を使い、自分の体をシルバー色の鉄へと変えてしまった。

そうこれがトリック、男はただ晴也の攻撃を全て体を金属にして防いだけ…

「もう分かっただろう？」

舛田は確信づいた声で

『鏡で鉄を斬る事が出来る道理など存在しない！！』

これはもう勝利宣言でもあった。鏡はどれだけ強度を増そうが所詮は鏡なのだから…それでも晴也は諦めずに相手に立ち向かった。

「ならッ！これでどうだスキンヘッド！！」

晴也は見えない斬撃ミラージュ・ブレイドを相手の体に叩き込んだむ。

晴也の鏡はある程度強度の変更ができて、その強度は御坂美琴の砂鉄の槍を防ぐほどだ…

強度最大のミラージュ・ブレイドが相手の体に叩き込まれる。

（確かに斬るのは、不可能だがへこまず位なら、出来ない事はない！）

そしてスキンヘッドの男にミラージュ・ブレイドが降りかかった。

鉄を殴る鈍い音が聞こえ、そしてミラージュ・ブレイドは 割れなかった……だがたったそれだけだった。

「痛くも痒くもないな」

「…ッ！？なんだと…」

舂田の体には傷一つついていない。

そして舂田はもう時間の無駄と言う感じで晴也に向かって走ってきた。

「悪いが終わりだぞ、風紀委員の坊主」

晴也と舛田の距離は5メートルそして男の鉄とかした銀色の腕は風をきるような速度で向かって来た…

晴也は地面を蹴りトン！とバックステップでタイミングよく避ける

…

「おいそれで避けたつもりか？」

舛田の腕は確かに晴也に届かない位置にあつたが…なんと急に男の鉄の腕が変形した。

「…なッ！？」

その変形した腕は鉄の剣となり、バックステップで避けた晴也の方に10メートルほど伸びた！

晴也は反射的に避けたがその伸びた鉄の剣は晴也の左肩にかすり…晴也の肩をえぐった。

「…痛ッ！」

舛田は鉄の剣を次は上から振り下ろし、晴也を縦に真っ二つにするように剣を振るう。

「…ッ…ミラージュ・ボックス！！」

晴也は能力で限界まで強度を固めた鏡の正方形の壁で自分を包み込んだ。

ゴキン！と言う鏡と鉄がぶつかる音…男の剣は晴也のミラージュ・ボックスに突き刺さった。だが…なんとか受けて止めた。

「おいハゲのおっさんあんたの能力は体を鉄や鋼に変形する能力じゃないのかよ…嘘つき！！」

明らかに子供のように「嘘つき」と放つ晴也に対して男はいたって大人のような冷静ぶりで語る。

「ふんッ　嘘などついていない…鉄が曲がったり伸びたりするのは当然だろ」

舛田はミラージュ・ボックスに突き刺さった鉄の剣を引き抜くと、鉄の剣を巨大なハンマーに変形させ、ミラージュ・ボックスを叩き潰す。

ガシャン！！とミラージュ・ボックスは猛烈な音と共に碎け散りつた。

晴也はとっさに横に避けて回避したが、無理な避けかたをしたため、地面に転がるような感じになった。

「あつぶね〜もうちょっとでペシャンコだぜ！」

舛田は続けて鉄のハンマーを鉄のしなやかな鞭に変形させ、晴也に向かって振り下ろす。

鉄の鞭は長さが20メートルと長くそのしなやかさはまるで生きている蛇のようだった。



鉄の鞭はしなやかくそして、周りの風を勢いよくきり晴也の体を打ちつけ…

晴也に直撃した

…しかし…バキンと晴也は鏡のように砕けた散った。

「なるほど…光の反射による鏡像か…」

「正解」

晴也は自分の姿の鏡像を30体ほど作り出した。

「どれが本物か分かるかな？」

「下らない茶番だな…そんな事しても何も変わらないと言つのに」

そう何も変わらない。鏡像を作った所で男にダメージを負わせる事は出来ない。

(時間稼ぎが出来ればいい…その間に勝つ方法を)

舛田はかがみこんで地面に手を当てた。

「見せてやろう…俺の技の真骨頂を…お前の茶番など一瞬で吹き飛ばしてやる」

そういつと男が触れている地面…いや地面に繋がっている、壁や天井が………

全て『鉄』に変わった。

「…ばツ！馬鹿な!？」

そして地面、壁、天井が全て鉄へと変わり果て…その鉄と化した空間から…晴也に向かって無数の鉄の鉛がマシンガンのように吐き出された。

地面。壁。天井から吐き出される…無数の鉄の鉛、それは晴也の鏡像を全て叩き割り…晴也自身にも直撃した。避ける事など出来な



「力を手に入れただって……？」

舛田はもう勝利を確信したのか構える様子はなくただ地面に転がっている晴也を見つめだけ……そして口を開く

「よくあるセリフで気いらすが……冥土の土産に教えてやる。どうやって無能力者の俺が力を手に入れたか……」

そしてこの俺から告げらる……この鏡晴也の物語となる、戦いのコン  
グが……

『幻想御手と言う物を知っているか？』

第17話 最悪の相性〜完

第17話 最悪の相性（後書き）

読んで下さっている方ありがとうございます。

次回の配信は木曜日を予定しております。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします

## 第18話 幻想御手（前書き）

お待たせしました。待たせた割りに出来映えはあまりよくないですが…

お気に入り登録38件突破！！感謝します。嬉しいです！！

今回は少し文章が多く分かりにくい部分があると思いますがよろしくお願い致します

## 第18話 幻想御手

鏡晴也と白井黒子は連れ去られた常盤台中学の生徒達を救出するために、犯人達がいる廃ビルに侵入した。

鏡晴也は犯人のボス舛田と言う男と戦ったが相手の能力『スチールオペレーション鉄鋼操作』の前になす術なく倒れた。

2人が戦っている場所は廃ビルの6階のダンスホールと言う場所。しかし壁や床、天井は全て相手の能力で鉄と化してしまった。

その部屋は相手のテリトリーでその鉄と化したしまった壁、床、天井全てが相手の思い通りに操作出来る。

晴也は部屋全体から生み出された、無数の鉄の鉛で体全体を叩かれ地面に倒れた。

そして舛田は勝利を確信したのか。戦う姿勢を止めて、晴也に言った。

「幻想御手と言う物を知っているか？」

晴也は鉄臭い床に倒れこんだまま答える。

「幻想御手？確か一年前に学園都市で密かに流通していた。簡単に能力者のレベルを引き上げるプログラムだろ？それがどうした……」

舛田はポケットの中から小さな青色の学園都市製のウォークマンを取り出した。

「なんだそれ？ただのウォークマンじゃねえか……」

「ふん画面を見る」

舛田は晴也に向かってウォークマンを投げつける、晴也は倒れた姿勢のままウォークマンを手にとり画面を覗いた。

……その画面には文字が書いてあった。



A u n n n o 《 l e v e l u p p e r 》

「…………ッ！これは！？」

晴也は驚愕した。それは幻想御手の音楽ファイルレベルアップ。かつて学園都市に繁栄した使えば能力者のレベルを上げるが、昏睡状態に陥ると言う恐怖の産物。

「なんで…そんな馬鹿な！？幻想御手は一年にアンチスキルと風紀委員が協力して学園都市から抹消したはずだ！？何故それがこんな所に…！」

舛田は晴也の驚愕ぶりを嘲笑うかのように淡々と答えた。

「新たに開発したんだよ。ある方が自分の目的とそして俺達みたいな無能力者に力を与える為に」

「新たに開発した？そんな馬鹿な事あるか、幻想御手はさっきも言

「だが、学園都市から完全に抹消した、誰かがまた開発して悪用するかもしれないと言う事も視野に入れてに必要なデータも全部消した。それを新たに開発するなんて不可能だ！」

「だが今現にここに存在しているぞ？」

晴也はA u n n n o《levelupper》と書かれているウオークマンの画面を見る。本物かどうかは怪しいが、この男が嘘をついている様子はない。

「これは俺が唯一尊敬するある方が自分の野望を実現する為に新たに作り出した物だ、どうやって新たに幻想御手を作り出したかは俺も知らんが効果は本物だぞ？ただしまだ未完成だがな……」

「未完成だと？」

「ああ、どうやらある方の話ではまだ自分の目的を達成出来る範囲まで行ってないらしい。お前は幻想御手を使ったら昏睡状態になるのは知っているな？」

それ位は晴也 いや多分学園都市にいるほとんどの人間が知っているだろう。一年前に起きた事件。

幻想御手事件。幻想御手を使った低能力者達が一斉に昏睡状態になった。学園都市のニュースでも大きく取り上げられた。

「では何故昏睡状態になるのか知ってるか？」

それは晴也も知らなかった。一般に公開された情報は「能力を簡単に引き上げる幻想御手は使えば昏睡状態になります」位しか知らない。

514

「そもそもレベルアップは能力者のレベルを引き上げる為に作られた物ではないらしい…」

「そうなのか？」

「ああ、ある1人の科学者が意識不明の子供達を助ける為に、高度な演算装置を作るのが幻想御手の本当の目的だったらしい」

舛田は話しを続ける

「レベルアップの正体は使用者の脳波に直接干渉し脳波パターンを統一させ、一つの巨大なネットワークを作ることによって高度な演算能力をもつ演算装置を作るプログラムらしいな。」

この事によって、巨大なネットワークに多くの能力者の脳が繋がったために、能力を使う際に通常なら発動できなかった能力も、多くの人にその処理を分担させることで、より大きな能力をより効率的に発動出来るようになる」

晴也は頭で相手の言う事を整理しながら

「けど…それと昏睡状態になるのは関係あんのか？」

舛田は呆れた様な感じで

「予想通り頭の悪い坊主だな…」

「うっさいわ！ばーか！！」と言おうとしたが状況が状況なので黙っておいた。

「考えて見る。常時脳がネットワークに接続しているんだ、それはつまり常に自分の脳で誰かの能力の演算をさせられている事になる。そんな事したら、最終的には脳がネットワークにやられてしまう。だから昏睡状態になってしまつと言つ訳だ」

スラスラと難しい言葉を流れるように放つ舛田。見かけによらず頭はいいのかもしれない。

「かなり詳しいみたいだな？ある方からの受け売りか？」

「そつだ…そして本題に戻ると俺達が使っている幻想御手はある特殊な措置を施す事によつて昏睡状態にならないように細工してある。使ったのはいいが俺達も昏睡状態になつては流石に困るからな

しかしそこで問題が生じた、その特殊な方法で昏睡状態を防ぐ事が出来たが、その副作用とも呼ぶべきだろうか…この幻想御手ではどんなに頑張つてもレベル4で止まってしまうらしい」

「レベル4まで上がれば上々だろうが……」

「それでは駄目なんだよ、ある方が目指しているのはその上だ……」

「……まさかッ！？レベル5か？」

レベル5。学園都市に7人しかいない逸材。それを幻想御手で生み出す……晴也はそんな馬鹿けた野望を抱くある方は本気で頭が終わっているとは心底思った。

レベル5と言うのは頑張ってもそう簡単になれる者じゃない。それをたかが一つの幻想御手と言うプログラム一つでレベル5になれてしまなら誰だって苦労はしない。

……しかし舛田は更に晴也の予想を遥に超える、とんでもない言葉を放った。

「ある方の目的はレベル5になる事ではない……」

「はあ！？さっきお前自分で言ったじゃねえの、レベル4より上だつて…」

「ああ上だ、そしてその方はレベル5を超えた存在になるのが目的だ…」

レベル5より上…そこ言葉の意味が理解出来ない晴也。そして告げられた。この男が尊敬するある方の目的が…

「その方が目指すのはレベル5を超えた存在、即ち『レベル6（絶対能力者）になる事だ！』」

「……レベル6だと！？そんな言葉聞いた事もないぞってかレベル6なんて存在するのかよ」

学園都市のレベルの限界はレベル5…それは学園都市の一般常識だ。しかし舛田は言ったある方の目的はレベル6になる事だと…

例えで言うならば、オリンピックの最高のメダルは金メダルと決まっている。しかしこの男は、オリンピックの最高のメダルは金メダルではなくまだ上がある！と言っている位おかしい発言だ。

「レベル6聞いた事もないのは無理もない、まだ存在していないだけなのだからな…たがお前がなんと言おうがレベル6と言う規定は学園都市に存在する」

晴也はあまりにも馬鹿らしい話しに付き合いきれなくなりはじめた。レベル6…そんな存在するかしないは別として、一体レベル6になって何をするつもりなのか？そして、常盤台の生徒を拉致したのはレベル6になる事と関係しているのだろうか……？色々模索してる最中に舩田から驚愕する一言が告げられる。

「そして、ある方のレベル6になる為の段取りはもう済んでいる。後はそこにいる人質達を使い『実験』をするだけだ」

(……………実験?)

舩田はポケットから次は青ではなく赤い色のウォークマンを取り出



した。

「この赤いウォークマンに入っている幻想御手のデータはその青いウォークマンを改良した物だ。」

この改良した幻想御手は昏睡状態にならず、そしてレベル4を超える効果を持つ。だがまだ使用した試しがなくてな…。」

晴也は気づいた。この男の目的、そして常盤台の生徒を拉致した訳。

「その新たな幻想御手のテストをする為、常盤台の生徒達をさらったのか…？」

「今頃気づいたのか」

「ぶさけんな！そんな自分達でも使った事のない危険かどうかも分からない代物をこの子達に使わせる気なのか！？」

「危険かどうか調べる為の実験、そしてその為の被験者だ」

妙に淡々と答える舛田の態度に晴也の怒りは限界だった。

……幻想御手とか言う訳の分からない物を無理やり使わせ

……危険性を調べる為の実験。被験者だと？

……ある方の夢の為？

……レベル6？

銀次の時と同じだ……こいつもあいつらと同じように自分の利益しか考えてない。ふざけやがって……関係のない人間を巻き込みやがって！！許さない！許さない！許さない！

「さあ話しは終わりだ。お前と話している最中にあの方から連絡があるかと思って時間潰しをしていたが、連絡はないみないだな、やはりあいつの言う通りに先に実験を……」

「黙れ!!」

舛田の声は晴也の一言によりかき消された。

「お前があいつらのように自分の利益の為に関係のない人間を巻き込むと言うのならお前は絶対許さない!」

晴也の声には計り知れない怒りが宿っていた。その声は普段の晴也を知っている者なら誰もが顔色を変えるだろう。

舛田自身始めて晴也に恐怖を感じた。

(なんだ…こいつ急に何かが…変わった!?)

晴也は痛みを堪えながらフラフラとゆっくり立ち上がった。

「お前達みたいなの…自分の利益しか考えてない人間がいるから、銀次は死んだんだ。もう幻想御手とかレベル6とか細かい事はどうでもいい…あの時のような二の舞が起きると言っつのなら、お前を倒す…！」

晴也は右手を構えた。

『見せてやるよ…俺の本気を…』

舛田は瞬時に体を鉄に変えて防御に移る。鏡で鉄を傷つける事は不可能…先に晴也の攻撃は全て舛田にダメージを与える事なく無意味に終わった。

(そつだ…何を恐れている、優勢なのは俺だ！鏡で鉄を傷つける事など…)

「プリズム・ブレイド」

晴也の声と同時に右手が真っ直ぐ振り下ろされた…見えない斬撃が  
舂田に襲いかかる。

「ふんツ鏡で鉄を斬る事は出来ないと何度言えば…」

見えない斬撃が舂田に当たった。晴也の斬撃は舂田の鉄の体に砕か  
れる

…はずだった。

「馬鹿…な…」

予定調和の崩壊。

晴也の見えない斬撃は舂田の体を真っ直ぐ切り裂いた。

「構えるよ…一瞬で終わらせてやる」

最強の風紀委員。鏡晴也の反撃が始まった。

第18話〜幻想御手〜完〜

## 第18話 幻想御手（後書き）

幻想御手の改良版は今回は特殊な措置と説明しましたが、後になり明らかなになります！！

ああ鏡晴也編まだ長くなりそうです。

次回の配信は来週の半ばになる予定です。

皆さん読んで頂いてありがとうございます。

## 第19話 Level1プリズム（前書き）

ちくしょおおおおお！！また駄文になっちまいやがったです。皆様申し訳ありません。

お気に入り41件突破！！みなさんのおかげで20話目まで行けそうです。感謝しています。



## 第19話 Level1プリズム

舛田の鉄の体は晴也の見えない斬撃で斬られた。

「何が起きた……？」

晴也の攻撃の本質は鏡、舛田の鉄の体を斬る事は原理的には不可能だった。鏡で鉄を斬る事は出来ない。……しかし晴也の攻撃は確かに舛田の体を縦に真っ直ぐ切り裂いた。

舛田の体から真っ赤な血が流れる。しかし致命傷にはならなかった。体が鉄だったのが幸いした。生身の体ならまず生きてはいないだろう。

528

「何をそんなに驚いてやがる、俺の攻撃がお前を斬った事がそんなに信じられないのか？」

晴也の冷たい声と同時に晴也の手から20本の鏡のナイフが作り出された。

「プリズム・ナイフ」

晴也は20本もの鏡のナイフを舂田に向かって投げつける。

(あの時の鏡のナイフか……それならさっき防いだ…俺の体に傷は……！?)

しかし舂田の考えは見事に外れた。晴也のナイフは舂田の鉄の体に突き刺さった。

手、足、肩、腹、あらゆる所に晴也の鏡のナイフは刺さり、赤い血が吹き出る。

「ガアあああああああああ!!」

舂田は痛みของあまりに片膝をついて、その場にしゃがみこんだ。

「何が……ッ起きた? さっきは防げたのに何故……?」

理解出来なかった。晴也の鏡のナイフはさっきは舂田の鉄の体に刺さる事はなかった。なのに今何故晴也の鏡のナイフが自分の鉄の体に刺さっているのか分からなかった。

「どうした？こんなものかよ…だったら正直拍子抜けだぜ」

挑発的な言葉で相手を威嚇する晴也。

腹立たしいその挑発的な態度に舂田は怒りを表にした。

「ふざけんなよ…風紀委員のガキが！俺の体に傷を負わせた位でいい気になりよって、忘れたか？この鉄で覆われたこの部屋が俺のテリトリ。だと言う事を」

そう舂田の能力で鉄で覆われたこの部屋は舂田のテリトリ。この部屋の構造や地形の変化、そして鉄鋼使いとしての力で部屋全体を使った攻撃など自由自在に出来る。言わばこの部屋全体が敵でもあるのだ。

……しかし晴也は余裕の表情を見せたまま腕を一回、二回と回し指  
の中指をたて一言だけ告げる。

「やってみる」

「上等だ青二才。体を穴ボコにしてやる。」

舛田はしゃがみこんだまま右手で地面に 触る。

その瞬間、晴也と人質を遮るように鉄の壁が出現した。

「今回は手加減できないからな……大事な被験体に傷を負わせるわけ  
にはいかない……なるべく無傷で実験をしたいからな」

「俺もその方が好都合だあの子達を巻き込む心配がないからな」

2人の会話が終わると同時に部屋の床、壁、天井の形が変わり晴也の周りを鉄の鋭利な棘が無数に出現した。

その光景はまるで地獄に存在する針地獄のようだった。

「終わりだ風紀委員のガキ…お前は結局誰も救えず、犬死にする運命だったのさ…あばよ」

別れの言葉が告げられ、床、壁、天井にある無数の鉄の槍は勢よく伸びて、晴也に向かって襲いかかる。

時間にして一瞬。

無数の鉄の槍は晴也の体を全方位から突き刺した。あまりの鉄の槍の数に晴也の姿は舛田本人からも見えなかった。

舛田は勝利を確信した。あの数の攻撃を受けて生きている人間などいない。晴也の体は多分原形を留めていないだろう。

「実に呆気ない結末だったな……」

舛田はそう一言告げタバコをポケットから取り出し火をつけようとした……

……その時。

「確かに呆気ないなこの程度か？」

「……………なッ！？」

死んだと思っていた。晴也の声が無数の槍の山から聞こえた。

「何が……………！？」

そして晴也を覆っていた無数の鉄の槍に亀裂がはいり…

……砕け散った

砕けた鉄の無数の槍が雨のように降り注いだ。

……そして。晴也は無傷でまるで何もなかったかのようにその場に立ち尽くす。

「あれだけの攻撃を受けて無傷だと！？そんな……一体何が……！」

しかしすぐに気づいた。晴也の周りを囲むように正方形の鏡が晴也を守るように張り巡らされていた。

「いい加減に気づけよ。もう俺の鏡はお前の鉄より堅いって事によ……」

晴也の言葉を信じきれない舛田。しかし晴也の言う通り舛田の鉄の体は斬られ、鉄の槍は防がれた。そして何より、今も体から流れている血と体を蝕む痛みがそれを証明していた。

「クソツ…手加減していたとでも言うのか」

舛田は苦虫を潰すような顔をして晴也を睨みつける。

「そう睨むなよ…別に手加減していたわけじゃないさ。ただ少し力の質を上げただけだ」

「質だと…？」

「ああ、俺の能力はな…つの強さで分けられる。一番弱いミラージユ、二番目がプリズム、ただミラージユに比べてプリズムは演算が少々厄介でな、いきなり使えって言われて使えるもんじゃないんだ。

けどミラージユではどうやら鉄を斬る事も防ぐ事も出来なかった。だからしょうがなくlevelをミラージユからプリズムまで上げ



たつて訳だ」

晴也は舛田にゆっくり近いて。虹色の鏡の剣を構える。

「分かっているとは思うがプリズムの硬さはお前の鉄よりも堅く鋭くすればお前の鉄より鋭い、諦めて降参しろ…そうすればこれ以上は……」

「黙れええええッ!!」

舛田の猛烈な雄叫びが晴也の声をかき消した。

「降参など出来る訳がないだろう…ふざけんやがってクソガキがア  
ああああ」

「……なっ!!」

舛田は鋭く尖った晴也の鏡の剣を強く握りしめた。

「あの方の夢を実現し、我らを見捨てた世界に復讐するまでは負ける訳にはいかんのんじゃないアああああ！！」

舛田の力強い叫びに共鳴するように、もの凄い力で晴也の鏡の剣を握りしめる。そして剣はメキメキと音を立てながら亀裂が入った。

(……………なんだと俺のプリズム・ソードが！？)

「貴様に教えやろう、俺が使う事が出来るのは鉄だけじゃない。言っただけだ」

晴也は最初に舛田が言った言葉を思い出した。

「……………ちツ鋼か！？」

遂に晴也の鏡の剣は碎け散り虹色の破片が宙に舞う。

そして舛田は鋼の左腕を晴也に向かって叩きつける。

「プリズム・ボックス」

鋼の剛腕を晴也の鏡の正方形の盾が受け止める。

――しかし

晴也の鏡の盾は亀裂が入り。波紋のように広がっていった。

そして亀裂はすぐに全体に広がり鋼の剛腕は晴也のプリズム・ボックスを鋭く貫いた。

晴也は盾が碎けると同時に後ろに回避した。

当たるはずだった鋼の剛腕は地面に突き刺さり、鉄の床を軽々と砕き鉄の破片が衝撃で飛び散り晴也の右頬をかする。

晴也の右頬からゆっくりと血がなだれ落ちた。

舛田は突き刺さった剛腕を元に戻し、腕の調子確かめるように手を握りしめる。

「鋼は金属で最も強固な部類にはいる。鋼の前ではもう貴様のプリズムとかやらではもう防ぎきれないようだな」

「……………」

晴也には分からなかった。この男が何故世界を憎むのか……………だから聞いてみる。この男が何故ここまで憎しみに捕らわれ世界を恨むのか…

「なあ？お前は何故そこまで世界を憎む、そんなに憎いのか？この世界が……………」

「当たり前だ、貴様には分かるまい無能者と言う存在がどれだけ惨めで滑稽か……思い出しただけで死にたくなるようなそんな辛い経験……」

舛田はあの日の憎しみを思い出しながら語りだした。自分が無能者だった日々の悲劇を……

第19話 levelプリズム完

## 第19話 level1プリズム（後書き）

今回は舛田の過去話になります。この男が世界を恨む理由とは……？

配信は日曜日に予定しております。

皆さんの暇潰しになる事を祈り次回も頑張ります！！

ありがとうございました

## 第20話 世界を恨む理由（前書き）

すみません遅れました。日曜日に配信といいながら月曜日になってしまいました。申し訳ありませんでした。

お気に入り是一件減りました……自分の無能差を実感します。しかしめげません頑張ります！！

お気に入り40は件それでも大変嬉しいです。ありがとうございます！！

## 第20話 世界を恨む理由

俺には兄弟がいる。6才の弟と4才の妹そして俺は当時8才。そんな、俺達兄弟は両親に捨てられた、理由は分からないただ俺達は捨てられた……それだけは当時の幼い俺でも理解できた。

俺達兄弟が捨てられた場所は学園都市という高い外壁で覆われている外の世界から切り離された奇妙な街に入る為の巨大なゲートの前。

今は12月、冬の冷え込んだ空気が肌にじわじわと染みわたる。そんな寒さに耐えながら俺達は巨大ゲートの前で互いにに体を寄せ合い座っていた。

昨日から何も食べていない。空腹は限界を超え冬の寒さが幼い俺達の体を蝕む。

これからどうなるのだろうか？もしかしたらこのまま死んでしまうのだろうか？幼い子供が考えるにはあまりにも残酷かつ虚しい思考だった。



体を寄せ合い、震える俺達兄弟。そこに学園都市の周りを巡回をしていた1人の警備員が俺達の存在に気がついた。

普通の人間の考えであれば幼い子供達がこんな場所で凍えながら座っているのを見たら誰もが急いで駆け寄ってくるだろう。しかし警備員は慌てる様子はなくゆっくりと近いてくる。

そして警備員は俺達の目と鼻の先まで近きポツリとため息まじりで呟いた。

「やれやれ、また捨て子かよ、今月で何人目だ？学園都市は子供のゴミ捨て場じゃないって言うのに」

そして警備員の人は無線機で誰かと連絡を取り。何かを確認すると優しく俺達にこう言った。

「許可は降りたよ、君達は今日から学園都市で生活してもらおうからね。さあついて来なさい」

これが俺達兄弟の悲劇の始まりだった。しかし当時の幼い俺はまだ知らなかった。ここは学園都市と言う名の監獄だと言う事を………

…

-----

俺達が連れて来られたのは能力開発研究所と言うかなり大きな建物だった。

俺達が学園都市の正式な住人になる為にはここで、『能力開発』と言うものをしなければならぬらしい。しかし当時の俺は能力開発が何なのか、学園都市がどう言った場所かすら知らない。

そして俺達兄弟の能力開発は行われる。そして始まる俺達兄弟の無能力者としての学園都市での生活が幕を開ける。

-----

俺達の能力開発は無事に終わった。麻酔がとけて目を覚ました俺達に告げられた言葉は「君達兄弟には超能力者になる才能がない」の一言だった。

今は白い病院にあるようなベッドの上で体を休めていた。体が重たい、まだ麻酔が完全に切れていないのだろうか。俺は幼い頭で色々考えていた。俺達はこれからどうなるのだろうか。お父さんやお母さんにはもう会えないのか、仲の良かった学校の友達に会いたい。そう考えている内に1人の白衣をきた研究者が近いてきた。

「これから君達は身よりのない子供達を収容する施設に移ってもらうからね、迎えの手配はしておいたから、すぐに建物の入り口まで出てもらえるかな？」

そう言い残し研究者は去って行った。行く宛のない俺達兄弟には今は言うことを聞くしかなかった。俺は重たい体を動かして兄弟と共にこの研究所を出た。

外は太陽の光が差し込んでいるがやはり寒い、研究所の中は暖房が効いていたので部屋の中が少し恋しい。

しばらく待っていると児童施設行きと書かれた迎えての大型バスが来た。バスの前方の自動ドアが開き、運転手さんが乗れと首を振り合図してきた。感じが悪く少し怖かったが素直に言う事を聞くことにした。

バスの中は暖房が効いていてやはり快適だった。弟と妹はよほどバスの中が快適なのか疲れいるの分からないが横でスヤスヤと寝ている。俺も兄弟達の眠気に誘われゆっくりと眠りについた。

「おい起きろ」

バスの運転手さんの声で目が覚めた。どうやら目的の施設についたらしい。俺はまだ寝ている兄弟を起こして俺はバスを降りた。

ついた場所は小さなボロい学校のような場所だった。しかし第3学区児童施設と言う看板が立っている。どうやらここが研究所の人が話していた児童施設らしい。

児童施設の入り口には向かえの女性の人が出ていた。多分施設の責任者だろう。その人はタバコをくわえてジーパンに手をいれたまま俺達に声をかける。

「あんたらが今日から新しい施設に入る子供だね？あたしはこの施設の管理を任されてるもんだ、テメエらみたいなクソガキは大嫌いだからあまり気安く話しかけんじあねえよ」

汚い言葉を吐き捨てるように放つ管理人の人、どうやら俺達は歓迎されてないらしい。

「ぼさつとしてんじあねえよ、ささつと中に入りな今から床の掃除や部屋の片付けなんかで忙しいんだからさ」

俺達兄弟の悲劇はここら始まった。

ここは児童施設と言うより牢獄に近いだろう。睡眠は1日4時間、食事は1日2食の朝と晩だけ、睡眠と食事の時以外は全て管理人の世話と施設の掃除や雑用、休憩などはなかった。

施設は全員で30人位で俺達と同じ身よりのない子供達だ。子供達は全部で6班に分けられる。俺は1班、兄弟達は2班だった。

俺達兄弟は厳しい仕事に耐えながら生きていた。そして7年の月日が流れたある日……………

「お前ら無能力者なんだってな」

同じ班のリーダー的な存在の奴が絡んで来た。

「それがなんだ」

俺は素っ気ない返事で返す。

「知ってるか？この街じゃ無能力者ってゴミに等しい存在なんだぜ」

そんな事は言われなくても分かっている。この街で学生を数字でランク付けするそれは能力レベルであり研究価値を示している。レベル0の無能力者はこの街にはいない存在なのだ。この街から無能力者を追い出さないのは、能力開発をした人間を外の街には出せないからだ。

だから隠していた。自分が無能力者だと言う事を……

「この施設で無能力者ってお前達兄弟だけだぜ」

「だからなんだ」

「だから今日からお前達無能力者は俺達のパシリだ。存在価値のない無能力者でも俺達のパシリに使ってやるありがたく思え」

ソロソロと俺達兄弟は同じ施設の人間に囲まれた。どうやら俺達が無能力者だと言う事は全員知っているらしい。

「ごめんなさいお兄ちゃん。私無能力者だって事を管理人さんに知られちゃって、それでみんなに」

妹が体を震わせて泣いている。弟は顔を伏せたまま体を小さくして俺の腕にしがみついている。

「抵抗しても意味ないぜ管理人さんの許可は得たんだ、無能力者兄弟は好きにこき使っていいってな、さあ俺達の方まで働いてもらおうか」

「……………クソッ」

抵抗など出来なかった。下手に抵抗などしたら施設を追い出されるかもしれない。それは困る施設を追い出されたら俺達には居場所がない。

こうして俺達兄弟のパシリとしての施設生活が始まった。



同じ班の奴らの仕事を押し付けられ、雑用も俺達兄弟だけやらされたり最初はそんな事から始まった。

そして俺達兄弟への扱いはだんだんエスカレートし食事の没収や少ない睡眠時間　は班の連中の靴磨きをさせられ、なんとか食べる事が出来た食事には画鋏が入れたりした。服がなくなる事は日常茶飯事だった。妹の場合は下着を盗まれよく施設の庭の木に吊されいた。

我慢は限界だった。しかしもし自分が奴らに逆らえば兄弟達に迷惑がかかる。歯を食いしばった、涙が出た、自分を捨てた両親を憎んだ、無能力者な自分を呪った。

――そして遂に事件が起こった。

妹と弟が死んだ。

原因はいつものように同じ班の連中がイジメをしていた。屋根の掃除を弟と妹に押し付け、遊んでいた他の連中が悪ふざけで弟と妹を屋根から突き落とした。

弟と妹は首の骨を折り即死だった。俺はもう動かない弟と妹の前に呆然と立ちつくしていた。信じられなかった弟と妹が死んでしまった事がだから呼んでみるとても小さく弱々しい声で………

「……………太一……………美優」

返事はない。2人は首が不自然な方向に曲がったまま動かない、そして俺は理解してしまった。

——弟と妹は死んでいる事に。

「あッ…あ…太一ッ…美優ッううう　う……………ッうわアああああ  
あああ…!!」

2人の体を抱きかかえて俺は泣いた。もう動かない弟と妹、もう笑  
っている所も寝ている横顔も体の温もりも全て見る事も感じる事も  
出来なくなってしまった。唯一の肉親を……………

俺の周りを囲む施設の子供達。

「お前がやったんだろ」

「いやいやまさか落ちるとは思わなかったんだよ」

「そうだよねだつたら不可抗力だよね」

「別に無能力者だし、死んだってしょうがないよね、元々学園都市  
には必要のない人間だし」

「そうそうしかたがないって、事故だよ事故……」

弟と妹の死を簡単な言葉で片付けられ、次第に悲しみは怒りへと変わっていった。

「き……貴様ツらアあああああッ！！」

俺は殺すような勢いで兄弟を殺した張本人に殴りつけた。

「……が……ッ」

地面に倒れた弟と妹を殺した張本人を何度も殴りつける。一回、二回、三回と何度も何度も怒涛の如く殴り続ける。

「……ごめん ッなさい……だから許して…… ッ痛いよ」

泣きながら許しを問うが俺の怒りは増した。

「痛い？許してだとふざけるな…ふざけるな…ふざけるなアああああああッ！許さない、貴様は絶対に許さない！死んであの世で詫びて来い！いまからお前を殺してやるッ！！」

俺はそいつの首を力いっぱい捻り切るように首絞める。そいつは顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら息をしようとしていた。

俺は更に力を入れそいつを首絞める。後少しで殺せる……と 思ったその時…

ゴン！と言う音と共に後ろから強い衝撃が襲った。俺は力が抜けてそのまま倒れた。

「まったく何面倒事起こしてんだよ、無能力者の分際で」

後ろには金属バットを持った管理人が立っていた。

「まったく死体は事故死で片付けておくからお前らは施設に入りな」

管理人は弟と妹の死をまるでただの面倒事という感じで忌々しそうに2人を見ている。

俺の意識は後頭部を殴られた事による衝撃で真っ白になっていた。声をだしたいのに声がでない。

施設の子供達は管理人の指示通りに施設へ入り俺の兄弟を殺した奴も中へと運ばれた。

そして俺と管理人そして弟と妹の死体だけがその場に残った。

「今回の事は事故死だ、いいなアンチスキルにはそう言っておく、お前の兄弟は屋根から足を滑らせて転落死、それで今回の事は終わりだ……………ッ何をしている」

俺は管理人の足を持った。終わらせない……………事故死なんかで終わらせてたまるか 俺は管理人の足を力強く握る。

「ッち、気安くさわんじゃねえよ！！無能力者の分際でえ」

管理人はもう片方の足で俺の横腹を蹴り上げた。

「……………ガハッ……………！！」

「胸くそ悪いガキだねえ兄弟が死んだ事がそんなに悲しいのか？あほか、いいかお前達無能力者はな生きていてもしかたのない人間なんだよ」

管理人は罵倒の言葉を発しながら俺の横腹を力強く蹴り続ける。

「いいか気づかないようなら教えやるよ。お前達無能力者が生きて  
いる意味なんて存在しないんだよ。お前の弟や妹も一緒さ」

(言うな…言うなアあああああああッ!!!)

俺の悲痛な叫びは声には出なかった。そして管理人から最も聞きた  
くない言葉を聞かされた。

『お前の弟や妹はな元々死んで当然だったんだよ、だからさ私は学  
園都市に住む一人の人間として、この学園都市の代表として言わせ  
てもらおうよ』

『死んでくれてありがとう』

そして俺は顔面を強く踏み潰され、だんだん意識が遠くなっていく。  
そして薄れていく意識の中心の中で謝る。



――ごめんなお兄ちゃんお前達の仇をとれなかった……。

――ごめんなお前達を馬鹿にされて何も言えなかった……。

――ごめんな俺に力がないからお前達に辛い思いをさせて……。

――そして許さない。俺の兄弟を殺した人間もそれを嘲笑う管理人もそして無能力者をクズみたいに扱うこの世界も……。

そうして俺の意識はちいさな銀色の一粒の涙と共に完全に途切れた。

-----

5年後

俺はもう施設にはいない。あの日は俺は目を覚ましたら汚い裏路地のゴミ捨て場に捨てられていた。どうやら施設を追放されたらしい。

あの後すぐに俺はアンチスキルに頼み兄弟がいた児童施設であった事を話した。しかしやはり事故死として処理されていた。俺は必死に訴えたがそれ以上取り入ってもらえなかった。

そして弟と妹の仇を取りに施設行ったが児童施設には誰もいなかった。アンチスキルの人の話しによると弟と妹が死んだあの日調査に入ったアンチスキルが体に痣が出来ている子供を何人も発見した。管理人は虐待、暴行の罪でアンチスキルに連行された。そしてあの児童施設の子供達は別の児童施設に移ったらしい。

しかしこの世界はとても残酷で虐待や暴行があったと分かっているのにも関わらず弟と妹の死が事故死だと言う事は覆らなかった。これがこの世界の俺達無能力者の扱いなんだと悟った。

そして5年たった今俺は探し続けていた。弟と妹を殺した施設の連中と管理人の居場所を死に物狂いで探していた。しかし手掛かりは見つからなかった。

アンチスキルに居場所を聞いたが俺の素性が調べられ俺が変な気を起こすと悟ったアンチスキルの人は教えてくれなかった。

アウトスキルに頼み込んで情報屋を紹介してもらったが、やはり手掛かりは掴めない。

学園都市中の児童施設をまわって見たが俺達がいた施設とは異なり見張りのアンチスキルがいたりして中に入る事は出来なかった。強行突破すら考えたが得策ではなかった。もし俺が超能力者であれば強行突破でも出来ただろう。しかし無能力者と言う壁が邪魔をした。

無能力者の俺が武装しているアンチスキルに突撃したとしても結果は言うまでもない。

しかし諦めなかった。弟と妹の無念を晴らすまでは、どんなに自分の身を引き裂かれようと、どんなに心を傷つけられても諦めない、復讐するそれが俺の生きる目的になっていた。

そしてある日俺はいつものように弟と妹を殺した施設の人間を探していた……そこに5人位の品川高校の制服を着た学生が俺を困んだ。

品川高校、名門校ではないがそれなりの能力者が集まる有名な高校だった。

「おいオッサンどうみてもスキルアウトだよな？」

多分俺の人相やボロボロの服装からそう察したのだろう。

「俺達さあ〜結構有名な高校行ってるんだけど規律が厳しくてストレス溜まってんのよ、だからさオッサンでストレス発散させてくれない？」

俺は人がいない裏路地へと連れこまれた。

「ぐおおおお……ッ!！」

「ははこのオッサンなかなか倒れねえいいね、いいね最高のストレス発散道具だよ」

「おい変われよ、次は俺の能力をどれだけ耐えられるか試したいんだよ」

「おっけ」

惨めだった。俺は抵抗する暇もなく様々な超能力を体にぶつけられた。

皮膚はすりむけて、腕は酷く腫れ上がり、口の中切れ、足はガクガクと震えていた。

惨め、滑稽、哀れ、無能力者それら全てを実感させられる。無能力者と言うだけで俺達を傷つける。

許さない、超能力者も兄弟を殺した人間も兄弟を罵倒したあの管理人もそして無能力者を差別するこの世界も全てを許さない。

だから倒れる訳にはいかなかった。奴らに復讐するまでは絶対に…

……

「クソッなんで倒れねんだよこのオッサン無能力者の分際で」

「あゝ逆にストレス溜まるっつうの!」

「なあもっついつその事殺しちゃわない?どうせ無能力者だし」

「だな…多分このオッサンが死んだってこの学園都市は痛くも痒くもないだろうから、適当な形で処理してくれるよ」

「だよな〜じゃあ、俺の合図と共に一斉攻撃な?」

5人は俺に向かって右手を向ける。

死ぬ訳にはいかない死にたくない、死んでたまるか、まだ誰にも復讐してないのに死ぬのは嫌だ。

俺は5人を強く睨みつけた。必ず耐えるそしていつかお前達にも復讐してやる。そう心の中で誓った。

――その時。

轟！！と言う凄まじい爆音と共に俺の周りを囲むように巨大な爆発が起きた。

「……………なにが？」

俺には何が起きたか理解出来なかった。俺を囲んでいた連中はみな爆発に吹き飛ばされた衝撃で壁に強くぶつかり肉片と化していた、

俺は呆気に捕らわれているとその時、裏路地の奥から誰かが現れた。

「…誰だお前は…？」

その男は俺の目を見て小さく笑った。

「いいね、その目は復讐の目だ、なあ俺と来ないか？お前の復讐の手助けをしてやるよ」

そう言うと男はポケットから青いウォークマンを取り出し、俺に向かって投げつける。

「それを使えばお前みたいな犬野郎でも能力者になれる。復讐したい奴がいんだらうが、だったら俺に協力しろ」



俺は状況が理解出来なかった。しかし一つだけ理解出来た事はある。これを使えば能力者になれると言う事。

しかし一番分らないのはこの男は何故見知らぬ俺に協力するのかと言う事。

「まあ難しく考えんなよ、いいからついて来い詳しい話はそれからだ」

そうして俺は訳の分からないままその男について行った。それが俺とある方の出会い。そしてある方はこう言った。

「お前の復讐を協力してやる、だから先に俺の復讐を手伝えそしてら今度はお前の復讐を手伝ってやる」

こうして俺はある方の寛大さに惹かれついて行く事に決めた。レベ  
ル5の身でありながら無能力者の俺に救いの手を差し伸べてくれた  
あの方に、力を与えて下さったあの方に……

兄弟を殺した世界《学園都市》に復讐するために

第20話 世界を恨む理由 完

## 第20話 世界を恨む理由（後書き）

次回は遂に決着です。

配信はつづくん木曜日までには書きたいですね

読んで下さる皆様ありがとうございます。これからますますしくお願  
いします

第21話 断ち切る一撃最後のギアアップ（前書き）

お気に入り46件突破！ 前の更新から五件も増えるなんて……これは幻想か！ 夢ならどうか覚めないでくれ……！

## 第21話 断ち切る一撃最後のギアアップ

鏡晴也は舛田の過去に起きた悲劇を知った。

親に捨てられ学園都市に来た事。

児童施設でいじめられていた事。

兄弟が死んでしまった事。

世界を恨んだ理由。

舛田は言っていた。俺達を見捨てた世界に復讐すると兄弟を殺し自分をも不幸のどん底に叩たきつけた世界に……。

舛田の瞳には今も怒りが満ち溢れている。その瞳からは言葉で表しきれない怒りを感じるがそれ以上に感じるものがあつた

――それは悲しみと戸惑い。

悲しみは分かる。彼の怒りは深い悲しみから生まれたもの、でも彼の瞳には確かに戸惑いを感じた。怒りの底にある悲しみそして戸惑い。

晴也は少しだけ瞳を閉じた。そして少しだけ小さく晴也は笑った。この瞳を晴也は知っている、それはとても身近な人間。その人間もかつては悲しみを怒りとし戸惑いを感じながらも、怒りを抑えきらずに復讐に満ちていた。

しかしその人間は復讐を止めた。ある一人の少女に教えられた。『復讐から生まれるのは新しい悲しみだけ』その人間はそれに気づいていた。

気づいているにも関わらず、復讐を止める事は出来なかった。

怒りと悲しみが邪魔をした。戸惑いながらも狂気を止める事は出来なかった。

晴也はこいつも同じだと思った。復讐の先には悲しみしかない。それを知っているはずなのに認めたくない、だから戸惑っている。

晴也は瞳を開けて、復讐と言う呪縛に捕らわれた男を見る。

彼の顔は怒りに満ち溢れている。そして凄く悲しそうで辛そうで苦しそうだった。

晴也は大きく肺がいつぱいになるまで、深呼吸した。

そして晴也は強い眼差しで舛田と向き合い。とても優しい言葉で沈黙を破った。

「辛いのか？」

「……何ッ？」

「辛いのか？」その言葉は舛田の心を揺さぶった。心の奥に怒りで覆った感情を触れられた、そんな感覚だった。

「お前がどんな思いでこの学園都市で生きて来たのか、兄弟達を失ったのか全部は俺には理解できない」

「当たり前だ。この怒りは俺にしか分からない、お前などに理解されてたまるものか！」

舛田は更に強い怒りの視線を晴也に向けた。しかしそれに晴也は臆する事はなく言葉を続ける。

「お前の怒りは悲しみから生まれた。辛くて痛くて苦しくてそんな悲しみをお前は背負って生きていたんだな……」

「うるさい黙れ！！お前に何が分かる？俺の全てを理解した風になうな」

確かに晴也にはこの男の全てを理解する事は出来ない。けど一つだけ……たった一つだけど分かっている事がある。

それは本人が一番知っている事。けどそれに気付けない、だから教えてやらなければならぬ。伝えなければならぬ。あの時の少女



がある1人の人間を救ったように……。

晴也はその人間と舛田を重ねて、ある少女の言葉をそのまま伝える。

「気付いているんだろう？復讐は新たな悲しみしか生まない事ぐらい」

「……………ッ言っな」

「逃げんな！逃げんなよ！！気付いているならもう認めろよ、分かっただろう？自分自身が一番知っただろう？」

舛田は耳を塞いだ。目を背けてきた現実を晴也に突きつけられる。聞きたくない、その言葉を聞けば今まで目を背けてきた現実が自分を襲ってくる。

怖かった。それに気付けば生きている理由を失いそうで……



もう晴也の鏡では鋼の拳を受け止める事は不可能だったはずなのに……晴也は何事もなかったかのように鋼の拳を受け止めた。

「駄目なんだよ……」

「言っなッ言っんじゃない！」

激昂した舛田は今度こそ晴也を潰すように全力で鋼の右腕を弓のようにひいた。そして全力で晴也を叩き潰すように右腕を突き刺さそうとした。その瞬間――

「いい加減にしやがれエえええええええええッ!!」

晴也の叫び声と同時に鏡の剣は舛田の右腕より速く動いた。鏡の剣は舛田の鋼の右肩に真っ直ぐ振り下ろされた。

「……………がッ……………!？」

激痛が走る、鋼の体には傷はつかなかったが鏡の剣の強い衝撃が体に響きわたり鋼の重たい体は地面に叩き伏せられた。

「気付いてんだろ？」

聞きたくないのは分かっている。認めたくない事だつて分かっている。けどそれに気付かなかつたら一生その復讐に捕らわれ続けてしまふ。それは多分とても悲しい事、きつと死んでしまった兄弟もそれを望んではないはず。

晴也は鏡の剣を手から離し、そして強い視線で彼を見つめた。

『駄目なんだよ……………』

「言う……………なッ……………」

舛田はその言葉をかき消そうと晴也に手を伸ばす。けど体は思うように動かなかつた。きつとその言葉を聞けば自分の生きている理由を失う。それだけは嫌だ兄弟達に誓ったんだ必ず復讐すると。しか

しそんな思いを断ち切るように晴也は言葉わ放った……………

『駄目なんだよ！大切な人を失った悲しみを知っている人間がその悲しみを広げたら駄目なんだよ。』

辛かったんだろ？痛かったんだろ？その悲しみを埋める為に復讐に向かっってしまったんだろ？駄目だそれじゃ何も変わらない、何も生まれない、誰も救われないお前の兄弟達だってだからお前はその悲しみを広げたら駄目なんだ！

復讐に向うな！！本当の悲しみを知った人間はもうこれ以上悲しみの連鎖を広げたらいけないんだよ！！

気付いてるならもう認めるよ！！お前はその悲しい復讐で誰かに新たな悲しみを与えるな、お前が与えた悲しみはまたきつと新しい復讐を作ってしまうだから、そんな悲しい復讐はここで断ち切れ！！』

力強い言葉だった。舛田は怒りと悲しみで隠していた感情がじわじわと湧き出た。それを人は涙と呼ぶ、舛田の目から涙が溢れる、分かっていたこの復讐は新たな悲しみを生むだけだって……………分かっていくはずなのに……………。

認める訳にはいかなかった。

「うおおおおおおおッ… おおおおッ！！」

舛田は雄叫びを上げて立ち上がった。その雄叫びにはどんな感情がこもっているのかは分からない。怒りかもしれない、悲しみかもしれない、戸惑いかもしれない、もしかしたら全部かもしれない。彼の心はもう色々な感情で自分でも分からない位に滅茶苦茶になっていた。

そして、そんな彼を黙って見守る晴也。晴也にはその雄叫びの意味が伝わって来た。

「認めてたまるかあぁッそれを認めたら一体…俺の人生はなんだっただんだアああああッ！！」

舛田の悲痛な叫び声と鋼の拳は晴也へと向って行った。

晴也は瞬時に右手をかざして鏡の盾を自分の前方に作り出した。

激突する鏡の盾と悲しみの拳。悲しみに満ちた拳は晴也の鏡の盾に亀裂を入れる。鏡の盾はメキメキと軋む音をたて……

砕け散った。

しかし舛田の拳は晴也には届かない。彼の拳は鏡の盾を砕くのが限界だった。

「無駄だ、そんな悲しみ満ちた拳が俺に届くかよ、けどそれでもまだ続けるって言うのなら……」

晴也は言葉を一度きり右手を構える。

『お前のその悲しみも痛みも苦しみも全部俺にぶつけてみやがれ！お前の夢物語は今日で終わりにしてやる！』

「ッ……クソがアあああああッ！！」

怒りに溢れた声をあげて鋼の拳が向かって来た。

晴也はバックステップで鋼の拳を避ける。鋼の拳は虚空をきった。

晴也は舛田を見つめたまま深く深呼吸する。今から使うこの技は集中を凄く使う。その為に一度呼吸を整えた。

「……ふう、じゃあ本気で行くぜ、見せてやるよ俺のラストギアをお前の悲しみを殺す為に！！」

晴也の言葉と同時に晴也の周りにキラキラと虹色に輝く光が現れる。その光は次々と出現し晴也の周りをクルクルと回転している。

「何だ…それは…」

思わず驚愕の声をあげた。理解が出来なかった、鏡使いは光の屈折などを利用して鏡像や姿を消す事は出来る。だが鏡使いには光を操る事は出来ない。しかし何故奴の周りからは溢れんばかりの光が奴を包み込むように現れる、一体奴は何を……。

「おい何してんだ？ぶつけて見るよ、お前の全てをその拳に乗せて俺の信念を砕いてみやがれ」



晴也はわざと舛田を挑発した。舛田の思考はそこでシャットダウンされ、怒りを現にした。

「クソがアアあああああッ!!」

怒りは炸裂した。鋼の拳は弓のように全力でしなり、そのまま正体不明な光へと突き刺したが……。

ガン!! 響いたのはそんな鈍い音だけだった。鋼の拳は虹色に輝く光に受け止められた。

「……………なッ」

思わず間拔けな声をあげてしまう。舛田は鋼の拳を正体不明な光に突き刺したまま晴也の方を見た。

「なんだ？そんなものかよ、それがお前の全力と言っのなら。正直拍子抜けだぜ！」

「黙れッ黙れッ黙れッ。」

全てを分かった風に語るあいつを黙らせたい。なのにこの鋼の拳は晴也には届かない。

「ッならもう一度だ！」

鋼の拳を一旦引いてもう一度全力で鋼の拳を引く、そして自分の全てを乗せて、全力で晴也は取り巻く光の壁に向かって鋼の拳を突き刺す。

そして衝突した2つの力、その瞬間バキィ！！と何かが砕けた音が聞こえた。

「こんなものかよ」

「がアアああッアアあああああッ！！」

悲痛な叫びをあげたのは攻撃した舂田の方だった。砕けたのは舂田の拳。強固な鋼の拳には亀裂が入っていた。

舂田は腕を押さえたまま片膝をつく。鋼で出来た腕の亀裂からは赤い血がゆっくりとなだれ落ちていた。

「何故…砕けないッ」

痛み混じりの声をあげ当然の疑問が口から零れた。腕が砕けた理由は分かっている。自分の鋼の拳より晴也を覆っている光の壁の方が堅い。

鋼の拳は光の壁に激突した衝突に耐えられなかったのだ。

「鏡が…鋼より堅くなるなど限度が…あるだろ」

「そつだな鏡が鋼より堅くなるなんて限度がある、だけど鋼よりは堅く出来るさ。まあ種明かし位はしてやるよ」

晴也は両手を横に広げた。それに連動するように虹色に輝く光は真横に広がった。

「俺を覆っているこの物質の正体は光じゃない、小さな鏡の破片だ」  
そう晴也を覆っていた物の正体は肉眼では確認出来ない位小さな鏡の破片。それは無数に集まった鏡の粒子であり1つの集合体。その無数の鏡の破片は光を乱反射し巨大な虹色の光放つ。

「そしてこの無数の鏡の欠片の一つ一つの強度は『ダイヤモンド』だ。」

「……………何だと!」

ダイヤモンド……………それは世界で一番堅いと言われる鉱石。その強度は鋼とでは比較にならない。

「……………ッありえない。」

最早戦う気さえ起きなかった。自分の能力の唯一の長所はあっさりという意味をなくした挙げ句、鋼の腕は砕かれた。もう戦えなかった……………。

「諦めるのかよ?」

晴也の冷たい声が聞こえた。しかし男はその言葉に反応を示さない。怒りは憎しみは悲しみや痛みも全て心の中で渦巻いているのに、もう戦う気力はなかった。そんな舛田を見て晴也は叫ぶ。

『立ち上がれよ！そんなものなのかお前の怒りや悲しみや憎しみは？違うだろこんなものじゃないはずだ！！』

うるさい全てを知った風に言いやがって。

『お前の復讐はこんな風に幕を閉じていいのかよ』

いいわけないだろう。こんな惨めな終わり方で。

『悔しくないのか？ここまでよく知りもしない人間に全てを否定されて』

悔しい…悔しいさ、けどどうしようもないじゃないか……

『こんな事で戦う姿勢をやめるなよ！戦う理由位はその胸に押し留

めとけよ！！お前の復讐、こんな形で終わらせてんじゃねよ。じゃないと……」

『お前の人生は一体何だったんだよ！！』

「……………ッ！！」

『いいのかよ、お前が過ごしてきた今まではこんな惨めな終わり方で……いいわけないだろ？だから、悔しいなら拳を握れ！苦しいなら全部吐き出せ！怒りが溢れるならそれをぶつけて見るよ！こんな意味もない終わり方なんてするなよ！！』

晴也の言葉は深く舛田の胸に突き刺った。そして思う奴の言う通りだと、こんな惨めで情けない終わり方でいいわけがない。もしここで全てを終わらせたなら、それこそ本当に俺のいままでの怒りや憎しみや悲しみは全て意味のないものになってしまう。

強く唇を噛み締めた。瞳には生気が蘇る。戦う気力が溢れ出た。そして心の中で呟く。

(この少年は最初から全て分かっていたのか、俺の怒りや憎しみや痛みもまるで自分がこの辛さを知っているかのようにな) )

舛田はフラフラと立ち上がる。認めるのが怖かった。自分の復讐が悲しみを広げている事も、無能力だったと言う事も、こんな事をして兄弟達が喜ばないって言う事も。

そして、認めたくないから、それを復讐と言う言葉で隠した。けど…もう終わりにしようと思う。

この少年に教えられた、自分のしている事の無意味さも悲しみも辛さも…だから最後はちゃんときちんとした形で終わらせよう。そして自分のこんな悲しみ復讐は今日ここで終わらせる!!

そしてしっかりと二本の足で体を支え、真っ直ぐとても強い目で晴也を見据えられる。

「礼を言つぞ。風紀委員会の坊主、どうやらお前の『せい』で俺の復讐は終わりそうだ」

「『せい』って…最も素直にお礼は言えないもんですかー？」

「悪いが素直じゃない性格でね……」

「ははッ……お互い様にな」

2人は少しだけそういうやり取りを行い、そしてすぐに構える。決着をつける為に……

「手加減はいらんぞ」

「当たり前だ」

そして最後の激突が始まる。舛田は真っ直ぐ晴也へと向かう。

晴也は両手を前方にかざし、虹色に輝く鏡の粒子を舛田に向かって放つ。虹色の光は波のように舛田の体を上から覆った。

「うおおおおおおおおおッ!!」

舛田は鏡の粒子を鋼の両腕を上に向け、受け止める。

ガガガガッと言う激しい音と共に舛田の体に亀裂が入る。

「……ッく、重たいな……」



「どうした？ギブアップか？」

「抜かせ！！これしきで終われるかアああああッ！」

身体がきしむ。全身に痛みが走る。しかし諦めるわけにはいかなかった。そして更に力を込める為に叫ぶ。

「うおおおおおおおおおッ！！吹き飛ばエえええええええッ！！」

その雄叫びに共鳴するように全身に信じられない位に力がはいる。そして遂に――

舛田は虹色に輝く鏡の粒子を上空に弾き返した。鏡の粒子は勢いよく上空に上がり鉄の天井を貫き、オレンジ色に輝く空へと舞った。

「はぁ はぁッ俺の勝ちだ」

息を荒くして舛田は晴也に最後の言葉を放つ。

「これで後悔はない。トドメをさしてくれ」

晴也は小さく頷いた。

「……分かった。じゃあ、終わらせてやるよお前の夢物語を」

晴也は両手を下に振り下ろした。『最強の風紀委員鏡晴也』の誇る最後の技。

『ダイヤモンド・レイン』

そして上空に舞っていた鏡の粒子は勢いよく舛田の鋼の体に雨のように降り注いだ。

舛田の体は鏡の粒子に全身を叩かれ、ストンと力なく地面に倒れた。

遂に決着は着いた。そして、この男の悲しい復讐劇はこうして静か

に幕を閉じた。

第21話 断ち切る一撃最後のギアアップ〜完〜

第21話 断ち切る一撃最後のギアアップ（後書き）

いよいよ次回は第一章〜第二部鏡晴也編のエピローグになります。

配信はん〜来週の月曜日までには済ませたいです！！無理かもですが頑張ります。

では次回までさよならなのです〜

## 第2部 晴也エピソード（前書き）

ちょっと書き方変えて見ました。携帯で読んで下さっている方には少し見にくいかもです。

お気に入り50件突破！！

総合評価200ポイント達成

皆様ありがとうございます！！

## 第2部 晴也エピソード

「何がそんなに気に入らないんだい？」

鏡晴也は病院の一室にいた。窓から差し込むやわらかい夕焼けの日差しが真っ白な病室をオレンジ色に染め、どこかホッとするような陽気な感じを与えてくれる。

そんな病室に一人、陽気な空間が漂うこの病室とは対照的にやや不機嫌な鏡晴也がいた。今はリクライニング式のベッドの上に腰掛け、自分に巻かれている包帯に視線を落とし、ほっぺたをむっくりと膨らませている。

中年のカエル顔の医者はそんな不機嫌な晴也の様子に首を傾げていた。怪我をして運ばれて来た晴也の治療を担当したのは自分な訳だが、正直自分が担当した患者がこんな不機嫌な顔をするのはもちろん医者としても面白くない。何度も不機嫌な理由を聞いているのだが晴也は黙りとしている。

陽気な病室は不穏な空間へと変わり沈黙が続く、とそこで病室のドアがガララと開かれる音がした。扉の向こうには純白の白衣を身にまとったその姿はまさに「天使」といっても過言ではないような清楚な雰囲気を漂わせるナースの姿があった。

晴也の顔が一変する。目は大きく見開かれ、口元はまるで口裂け女のように広がり、顔全体は気持ち悪いほどにやけている。そして勢いよくベッドの上に両足で立ちバネの如く足を伸縮し勢いよく「

天使」の胸元へ飛び込みタッチダウンした。

「静香ちゃん、会いたかった」

歡喜余る声で「天使」の胸にほっぺをこすりつける。あまり大きくないが、とても柔らかくマシユマロのような感触だった。

「天使」はそんな晴也を突き飛ばす事なく優しく胸元に寄せ付ける。

「どうしたの晴也君、今日は特に甘えん坊さんね」

「だってえあのね？あのね？あの力エルの顔をしたおっさんが俺と静香ちゃんの愛に別れを告げろって……」

「はあ」と深く溜め息を吐くカエル顔の医者。

晴也の機嫌が悪い理由が分かった。

「先生？晴也君にそんな事を言っちゃったんですか？」

「勘違いしないで欲しいかな、僕はそんな事一言も言ってないよ僕はただ『うん、もう大丈夫みたいだね、明日には退院出来そうだが、今日中に荷物をまとめておいてね？』と言っただけだよ」

つまり晴也は晴也なり病院生活《ナースさん達との触れ合い》をエンジョイしていた訳で、退院してしまうのは非常に晴也にとって

面白くない。

それは白衣の「天使」との別れとなってしまっからだ。

「退院だけは絶対嫌だ！俺は何が何でも入院生活を続けてやる！」

そんなわがままな小学生みたいな戯れ言をほざく高校生そんな晴也を見て、やれ困ったと言わんばかりカエル顔の医者は腕を組んだまま顔をしかめている。

一方、純白のナースさんは晴也を胸に抱き寄せたまま、晴也とカエル顔の医者の顔を交互に見て満面の笑みを放っている。

どうやらこのナースさんはこの状況を楽しんでいるみたいだ。天使と言うより小悪魔と言うのが妥当だろう。

しかし流石に入院生活を続けられては患者の受け入れの時、非常に困るので晴也を説得する事にした。

「晴也君？退院はおめでたい事なのよ？」

「おめでたい事なんてあるもんか！このハーレム生活に終止符を打つなんて俺には出来ない！絶対入院生活を続けてやる！！」

盛大に入院生活続行の意義を唱える晴也、この病室を通り過ぎる他の入院患者やナースさん達は皆「小さな子供と母親が医者と口論してもめている」程度にしか思っていない。

実際はそんな可愛いものじゃない。

病室の扉を開けば誰もが目を疑う、まさにパンドラの病室だろう。



「困ったね、僕には君の欲求不満を治す術は持ってないんだよ」

「それでもあんたは医者か!？」

「ふむ、なら可愛い女の子がいる店を紹介しようか？ネバーソープランドって店なんだけどね……」

未成年に「ソープ」などと禁断のワードを持ちかけるカエル顔の医者。

そんなカエル顔の医者にはナースさんは鷹のように鋭い眼光で睨みつける。

その鋭い眼光からは「話しの腰を折るなら黙れ!!」と言う声がひしひしと伝わって来る。

それを察したカエル顔の医者は咳払いをして話しを急いでで切り上げる。

「ねえ晴也君？お姉さんも晴也君がいなくなるのは寂しいわ……けどね？お姉さんは晴也君が外で元気いっぱいじゃってジャッジメントのお仕事をしてくれる方が嬉しいの」

まるで母親が子供に話しかけるような優しい声だった。

しかし内心は「（よゝしあともう一押し）」と別れを惜しむ様子など微塵もない。

しかし純正少年鏡晴也はそれを疑う様子はない。そんな無垢な少年にナースさんはトドメの一撃を放つ。

「ジャッジメントを頑張っている晴也君をお姉さんは「大・好・き」

だよ」

大・好・き・だよ

大・好・き・だよ

大・好・き・だよ

その一言に晴也君の心に電撃が走る。大好きと言っ言葉が心の中でエンドレステープのように無限に繰り返され、少年の心に小さな種を植え付ける。

その種の名前は「恋」。少年の無垢な純粹で真っ白な心に今一つの汚れなき種が植えられた。

晴也は決意した。「退院」しよう！！そして、この恋と言っ名の種にいつか花を咲かせよう。

晴也はもう一度ナースさんの胸の谷間に鼻を当て、ほっぺを両方のお山に高速ですりよせる。

「静香ちゃん、俺退院する！！そしていつかこの種に花を咲かせて静香ちゃんの元に戻ってくるからね！！」

こうして鏡晴也は退院を決意した。これで晴也の入院続行計画は中止され、映画だとこれからエンドロールが流れる予定だ。

しかし世の中はそんなに甘くない。

晴也には真のエンドロールが待っていた。

「鏡先輩……？さっきから一体何をやっているんですか？」

聞き覚えがある声と共に、いきなり背後から襟首を捕まれた。襟首を掴む手は万力のように晴也の首を押さえつける。

そして晴也は勢いよくナースさんの胸元から引き離された。

晴也の額にはたっぷりと冷や汗がじわじわと湧き出た。

そして後ろで自分の襟首を締めている女の子の名前を恐る恐る呼んだ。

「ハ…ハロー弥生ちゃん」

背後に立つのは晴也と同じ支部の不知火弥生だった。

茶色の肩まである長い髪はピンク色の可愛いゴムで結ばれており、細く華麗な腕綺麗な細い足、近寄る男達は皆こう言う「ミスオールパーフェクトプリティアー」

彼女は常盤台中学の生徒で、学校帰りに晴也のいる病院へお見舞いに来たのだが……

晴也はナースさんに変態行為を行っている真つ最中だった。

「先輩？元氣そうで何よりです」

「やあ弥生ちゃん心配して来て来れたんだね……」

「ええ心配してましたよ、たった10秒ほど前までは」

かなりぎこちない会話を続ける晴也と弥生。

弥生の顔は晴也からは見えないが、しっかりと殺気が感じられた。

そんな2人を呆然と見ていたナースさんとカエル顔の医者は、病室から出ようとしていた。

「ちよい待って！静香ちゃん、先生！俺を置いて一体どちらへ」

「いや僕達はお邪魔そうだから出て行くよ。高校生の純粹な恋愛イベントを邪魔するほど僕達は野望じゃないよ」

「……そんなッ!？」

「それに僕だつて暇じゃないんだよ、これからこの病院の常連さんが運ばれくるんだ、「不幸」な少年でね、どうやら財布から落ちた500円玉を拾おうとしたらしくてね、そのまま車道に飛び出してオートバイと激突したみたいだね」

一体どこの馬鹿だ？と一瞬考えたが今はそれ所じゃない。

この今自分の後ろにいる殺気だった彼女をどうにかするのが先決だ。その為には今は1人になりたくない、1人になった瞬間自分の命は容赦なく奪われるだろう。

そう考えてる内にカエル顔の医者はもう病室から体が半分出ていた。

ナースさんの姿はもうどこにもいない。

「お願いです！先生助けて下さい。俺多分先生が病室から出ていった瞬間に間違いなく彼女に殺されますだから……」

しかし聞く身にもたないのかカエル顔の医者は病室に背を向け振り向きもしなかった。

しかし最後に別れを告げるかの如くこう言い残した。

「死ぬなよ。死なない限りは助けてやる」

そうしてまるで何事もなかったかのように病室を立ち去った。

その瞬間、気のせいだろうか？夕日でオレンジ色に染められた真っ白な病室が、後ろの彼女から放たれる殺気で、真っ赤に変色し病室全体をどす黒く真っ赤なドロドロした空間へと変えてしまった……

そして彼女はととてもとも殺気の籠もった優しい声で晴也に死刑宣告を告げる。

「死んでください」

「嫌アあああああああッ!？」

こうして断末魔の雄叫びが病院全体に響きわたり、無事晴也は工ンドロールを迎えた。

~~~~~

（30分後）

すっかり機嫌を悪くした弥生は晴也を懲らしめた後病室から去り常盤台中学の寮へと帰宅した。

一方、晴也は激怒した弥生に顔面を何度もハエタタキのように平

手打ちを叩きこまれ、顔は真っ赤に腫れ上がりアン　ンマンみたいになっている。

顔中が熱を帯びていて痛いのか熱いのか神経が麻痺してよく分からないが、取り合えず顔を冷やしにトイレまで行こうとした瞬間：

……

真っ白な棚に置かれた一枚のA4用紙に目が行った。

今回の常盤台中学のバス襲撃事件の事件報告書だ。

実は鏡晴也は舛田と決着をつけた後、意識を失った。

原因は最後に使用した「ラストギア」あの技は無数の鏡の破片を1つ1つを自分の演算能力によって操作する。

その為、脳が晴也の演算に耐えられずに神経を圧迫し、ショック状態を起こし気絶してしまった。

病院に運ばれた晴也の状態は酷く、脳に極度な疲労とダメージがあった為、後遺症が心配されたがわずか1日で奇跡の復活を遂げた。しかし一応、一週間は絶対安静期間と言う事で面会謝絶をしていた為、事件の報告に来た風紀委員の人間とは会えなかった、その為晴也にはあの後がどうなったのか分からずじまいだった。

そして事件から3日後、第177支部所属の個法美緯から事件報告書と言う一枚の書類が届いた。

その事件報告書からは分かった事は

鏡晴也は廃ビルの6階で気絶している所を発見された。

同じ6階で常盤台中学の生徒をアンチスキルが保護、生徒達にケガはないらしい。

そして廃ビルの4階で同じく気絶している白井黒子を発見。肩から大量の血と肋の骨が数本の折れており重傷。現在は意識も戻って

どうやら元気らしい。

しかしこの事件で一番腑に落ちない事がある。それは犯人グループが全員廃ビルから姿を消したと言う事だ。常盤台中学の生徒達の話によるとスキンヘッドの男の能力で晴也と舛田との間を遮っていた鉄の壁は消え去り。気絶した2人の姿が見えたと思った途端。

舛田と他の白井にやられた10人位の男達は地面から突然出てきた黒い沼みたいな影に飲み込まれたらしい。

どうやらまだ彼らには仲間がいたらしく何かの能力により逃走したと思われる。

アンチスキルとジャッジメントは連携を取り逃走した犯人グループの追跡を行っているらしい。

「……………」

晴也は顔を冷やしにいく事を忘れ、その事件報告書に目を通していた。

舛田達は一体どこへ行ったのだろうか？

舛田が言っていたある方一体何者なのだろうか？そして彼らの目的「レベル6」そしてレベル6になる為のカギ「幻想御手」

分からない事ばかり残したままこの事件は終わってしまった。

晴也は事件報告書を白いベッドの上に放り投げ。そして病室の窓の扉を開けてオレンジ色に染まる夕空を見上げた。

吹き寄せる風が優雅に舞い、春独特の暖かい風が晴也の髪をそつと撫でるように吹いていた。

そんな優しい風が舞う誰もいない病室で晴也は誓った。

ある方の目的もまた復讐。そいつを止めなければ今回みたいな事件がまた起きる。舛田の悲しみを利用し、関係のない人間を自分の復讐の為に巻き込んだある方。

晴也はグツと唇を噛み締めた。そして窓の外に向かって叫ぶ。この世界にいるある方に向かって。

「いいぜ、テメエがまた関係の人間を巻き込み、他人の悲しみを利用すると言うのなら……テメエの夢物語は俺が終わりにしてやる!!」

そう一言夕空に輝く夕日に向かって宣言した。

そして、鏡晴也はまだ知らない。この事件をきっかけに鏡晴也の運命の歯車は大きく動きだす事を……

〈第2部〉鏡晴也〈完!!〉

おまけ

「お姉様アあああああああッ!」

「何であんたはそんなに元気なのよ」



「ふふふこの白井黒子。お姉様が付きつきりで看病して下さいるのにノコノコといつまでも寝ている訳にはいきませんわ」

「……………」

「さあお姉様、わたくしと一緒に添い寝をしてくださいな。ふふふ2人だけの空間を今ッ！！さあベッドにお入りになってくださいまし」

「……………」

「あら？お姉様どちらへ？」

「帰る」

「あゝんお姉様そんなに恥ずかしがらずに…………ッてお姉様！！本当にお帰りにッてお姉様アあああああああッ！！」

皆様、白井黒子はとっても元気です。

くおまけく完く

## 第2部 晴也エピソード（後書き）

う〜んどうでしたかね？

あまり上手く書けた自信はないのですが、皆様感想よろしくお願  
い  
します！！

第22話 鮮血の9人（ブラッディーナイン）（前書き）

最早小説にすらなってますん!!

ただの文章です。

そして編集を誤って改行が変な所にあつたりなかつたり。

ああッ不幸だあ!!

そしてお気に入り登録56件突破!!

ありがとうございます!!

お気に入り登録を維持して下さってる方、新しく6件登録して下さい方。

本当にすみません。

今回は自信が誇る最高の駄文です!!

次からちゃんと勉強させて頂きます!!

## 第22話 鮮血の9人（ブラッディーナイン）

鮮血の9人……組織『新世界』に所属する暗殺・殺人などを主体とする殺人専門の部署。

鮮血の9人にはそれぞれ部隊がある。

それは1人の隊長格に2人の副隊長。そして約50人の雑兵で1つの部隊が構成される。

隊長格の強さの次元は教官クラスの魔術師をも凌駕する戦闘能力を持ち、世界にたった20人も存在しない『聖人』に匹敵する。

そしてそんな彼らに緊急召集命令が下された。運命の歯車はゆっくりと動き出す。

~~~~~

鮮血の9人の隊長格は1つの大きな部屋に集められた。

固いアスファルトに覆われた特に何も無い部屋だ。あるのは大きな30メートル位の長い木製の机と同じく木製の椅子が机を挟むように4つずつ並べられているだけだ。そして鮮血の9人の隊長達はそれぞれ決められた席に座っている。

彼らは皆、漆黒の黒いコートを羽織り、襟に銀色の刺繍で英数字が記されている。それは彼ら鮮血の9人の戦闘能力の順位をあらわしている。彼らの順位は鮮血の9人のリーダーが決めたもので、それぞれの能力やバトルセンスなどを判断し総合評価が高い順位に小さい数字が与えられる。

つまり彼らが羽織っている黒いコートは自分達の力の象徴とも言える。

そして漆黒のコートを羽織った強者達は沈黙が支配する部屋である人物を待っていた。「時間だな……」

1人の男がそう呟いた瞬間。

何もない虚空から1人の青年が現れた。年齢は20才位、目はアイマスクで隠され、黒い髪は針金のように細い、服装は葬式に衣着ていくような黒い礼服を身に纏っている。そして一番の特徴は全身にお経のような文字が体に刻まれている、なんとも不気味な青年だ。

「皆様大変お待たせしました。これより鮮血の9人の隊長格による提示報告会を開催させていただきます。」

全員が青年の存在を確認した瞬間。その場にいた半数がが頭を抱えた。

「はて？どうされました？」

アイマスクが邪魔でよく表情は分からないが、彼らから発せられる不穏な空気に疑問を抱く青年。

そこで1人の白髪のオールバックをした男がその場にいる全員を代表して疑問を突き付けた。

「おい円まてがなんでテメエが仕切ってたんだよ副隊長の分際で、ボスはど  
うした？遅刻か？」

どうやら円と呼ばれる人物は彼らが待っていた人物ではないらしい。

円は何か言い忘れた事を思い出すかのように慌てた感じで彼の疑問に答えた。

「実はですね……ボスは今日来ません」

「ああ！！俺達を呼び出した張本人が来ないってどういう領分だ！？」

噛みつくような勢いで言葉を発する男に対し、円はかなり言いにくそうにゆっくりと答えた。

「あのですね……ボスは今日何やら予定があるらしく……」

「なんの予定だ……」

ギクリ！！翡翠の槍のよう鋭い言葉に円は隠し事がバレた子供のよう肩が大きく跳ね上がった。そして言葉を慎重に選ぶようゆっくりと答えた。

「あのですね……実は今日ボスはマジカルカナミンの再放送があるからと今日の会議は出れないと申し上げております……」

ブチッ！！と言葉が終わると同時に白髪のオールバックをした青年の血管が切れる音がした。

「あのクソボスッハッ裂きにしてやるうかアあああああッ！！」

天を貫くような怒声を放つ青年。円はわたたと白髪の青年を鎮めようと色々説得するが、説得する為の材料が少ないので（ボスの欠席の理由があまりにふざけてる為）白髪の青年の怒りを押さえる事は出来ない。

「とりあえず席に座って下さい」

「黙れッ円、俺は前からあのクソボスが気に入らなかつたんだ、革命の時は来た今すぐあのボスを抹殺し、ボスの座から引きずり降ろしてやるッ」

そんな……と弱々しい声で白髪青年を見つめる円。怒らない理由は分からなくもないが、このままだと話しが一向に進まない。

激昂する翡翠そんな彼を鬱陶しいと言わんばかりに1人の銀髪の長いロン毛の男が口を挟んだ。

「いい加減黙れ！貴様の声は知能の低い犬の声より鬱陶しい。まるで猿が喚いているようだ」

「……ッ何だ！？文句あのか地帝の対馬つしま黄河こうが」

「文句だと！？あるに決まっているだろう。貴様のせいでいつまでも立っても会議が始まらない。私は早く研究室に戻りたいというのに……」

漆黒のコートの襟首に『？』の英数字を刻む男。

鮮血の9人の第9位

地帝の対馬つしま黄河こうが

つり上がった目に三角メガネをかけ、銀髪の肩まである長い髪は余程手入れされていないのか、所々獣みたいに跳ね上がっている。

漆黒のコートの下に白い白衣を身につけているが、一見、誰もが博士と連想させるような格好をしている。性格は自分の研究の為に人徳すら捨てる根っからのマッドサイエンティスト。能力名『人パーソナルオートブシー

体解剖

「対馬ッ！！テメエ俺に喧嘩売ってんのか？」

「おや？猿が何か嘆いているのだが……はて？猿の言語は流石に私でも理解できんな」

明らかに挑発的な態度をとる対馬に対し、白髪の男は獣の如く対馬に殴りかかるうとする。

一方、対馬は身構える様子もなく、ただ淡々と白衣の胸ポケットからレディース用の拳銃を取り出し、銃口を白髪の男に向けた。そして……対馬は仲間に対してなんの躊躇もなく引き金に指をかけ、引き金を引こうとした……

……その時

2人の間に割り込むように1人の少女が現れた。

「喧嘩しちゃ駄目だって、仲良く行こ？」

少女は両手を左右に広げて、対馬を睨みつける。対して対馬はレディース用の拳銃を少女の心臓部分に突き付けた。

「邪魔だよ、音帝の桜、死にたくなければそこをどけ」

漆黒のコートに『？』の英数字を刻む少女。

鮮血の9人第8位

音帝の桜 乙葉。

いかにも小学生みたいな幼い顔立ちに幼い体系をした少女。腰まである長い黒いコートの下にピンク色の清楚なドレスを身に纏っている、黒とピンク、非常にミスマッチな組み合わせだ。黒く長い髪



は背中まであり、余程手入れされているのか黒い髪は跳ねる事なく真っ直ぐと背中まで伸びていた。彼女の能力名『ディストゥラクションローア音空波動』

彼女はレディース用の拳銃を胸に押し付けられているにも関わらず、退く事はない。彼女は仲間同士の争いを最も嫌う、それを止める為なら命すら差し出す事を惜しまない優しい少女なのだ。

しかし、そんな少女の思いを全く察してない対馬は拳銃を華麗なピンク色のドレスに強く押し付ける。

「死にたいか？」

「あなたに私は殺せないよ」

「そうか……なら試してやるよ」

対馬は黒いレディース用の拳銃に指をかけ桜の心臓を的確に狙いを付け。ゆっくりと引き金を人差し指を添える。

ためらないなどない対馬と言う男にそう言った感情はない。邪魔なら殺すただそれだけ……それが地帝の対馬黄河。

そして対馬は遂に引き金を引こうとした。

……その瞬間

「……………ッ！！」

黒色の光沢を放っていた拳銃は真っ白な拳銃へと色を変えた。拳銃は帯びただしいほどの冷気を放っていた。

「……………ッ翡翠！！」



桜が仲介に入ったおかげで翡翠の怒りは冷め、翡翠はその一言で簡単にその場を収めた。

しかし一方対馬は……

「おいッ氷帝！逃げてるのか？私に臆したのか？やはり貴様は抜け腰だ。そんな事だから裏切り者に遅れをとるんだ！！」

対馬は更に怒りを煽るように翡翠に罵倒の言葉を投げつける。

「……………」

翡翠は対馬の方を見向きもしない。別に悔しい訳ではない。翡翠は対馬に背を向け苦虫を噛み潰すかのように歯を食いしばり耐えていた。

翡翠は桜の悲しい顔を見たくなかった。この場で翡翠が対馬に殴りかかれば彼女は泣く絶対に、そんな自分を想ってくれてる彼女を悲しませる訳にはいかなかった。ただそれだけの理由だった。

「全く貴様みたいな甘子ヨロな猿は鮮血の9人にはいらん。」

対馬は漆黒のコートの内ポケットにしまっていたもう片方の拳銃を取り出し、翡翠に銃口を向けた。

「私の逆鱗にふれた事を後悔しろ」

そう一言だけ拳銃の引き金に人差し指を添えようとしたのだが……

…

すぐに異変に気がついた。ないのだ、引き金をひく為の人差し指が……………」

なくなっていた。

「なんだと？」

対馬の人差し指は何か鋭い刃物で斬られたかのように綺麗な断面が残されていた。斬られた指からは赤い血が雫のようにポタポタとなだれ落ちていた。

対馬は冷静に自分の人差し指を探す。

「はい お探しの指はこれかい？」

対馬は声のした方を振り向くと、まるで汚い物を持つように対馬の人差し指をつまんでいる。1人の少年がいた。

「……ッ幻帝のエルメス」

漆黒のコートに『？』の英数字を刻む男。

鮮血の9人第6位

幻帝のエルメス・バシリス。

年齢は16才、整った顔付きに眼帯をつけ、肩まである紫色の髪は綺麗に整ったウェーブを巻いており、一見女性のような感じを漂わせるが、性別は男。

彼の着ている紫色のスーツは彼の存在感をアピールするかのよう  
にキラキラと輝いていた。特殊な鱗粉をスーツに染み込ませているらしい。

性格はとにかく自由奔放で生涯気まぐれをモットーに生きる掴み  
どころのない男。能力名『ファンタズマゴリア去来幻想』

「きつたな〜い指 なんか薬品臭いし、捨てちゃえ」

ポイツと対馬の人差し指を無造作に床に投げつけた。  
床に落ちた人差し指は地面に落ちた衝撃で中に詰まっていた血が溶かしたチヨコレートのようにつっくりと溢れ出た。

対馬はポケットの中にあつた小さな小瓶を取り出した。小瓶の中には透明な液体が入っていた。

そして、小瓶のコルクを抜き中の液体を切断された人差し指の断面に浴びせた。ジュ〜と言う肉を焼くような音をたて切断された人差し指の断面から流れていた血は止まった。

「うわッ〜 気持ち悪ッ！！薬漬けのご趣味がごありで？」

対馬は空になった小瓶とコルクをその場に放り投げ、エルメスを睨みつけた。

「貴様ツ 一体なんのつもりだ？」

「ん？」

「何故私の指を貴様が切断する必要がある？貴様は能力をそんなつまらない所の為に使うのか？」

エルメスはケラケラと対馬を嘲笑うかのようにふざけた笑い声を上げる。

「ケツケツ！！つまらない事の為に使うのかって使った後だし〜それと対馬君の指を斬ったのはただの気まぐれだし〜」

対馬の怒りのボルテージは最高潮に達し腹に渦巻いた怒りの感情を爆弾の如く破裂させた。

対馬は瞬時にエルメスに向かってあらかじめ構えていた一枚のカードを取り出した。

「ありゃ〜 土属性を刻んだルーンのカードねえ……ここで使う気？」

「無論だ、私に傷を負わせ私を冒涇した貴様を許しはしない」  
ルーンのカードが金色の太陽のような輝きを放つ。

さつきまで黙って見ていた円はもうどうしたらいいか分からずに頭を抱えている。

一方、桜は対馬を止めようと動きだすが、翡翠の腕が桜の手を強く握りしめた。どうやら馬鹿らしいから行くなと言う事らしい。

「ー原初は土」

そして、対馬は歌うように呪文を唱えだす。

「ー竜は土より形を作り、命を吹き込み、力を与える、その秘法は真実を壊し、墮天使によって偽りへと変色される」

金色の光は呪文と共に輝きを増しアスファルトの部屋を黄金に染め上げる。

「ー破壊は象徴、竜の息吹により汝を食い殺す糧となれ……」

エルメスを粉碎する呪文は完成された。

「終わりだ……」

そう対馬はエルメスに一言告げ、両手を叩き魔術を召喚しようた。

……その時。

「そこまでだ」

どこからか声が聞こえた瞬時。対馬の動きが固まった。ルーンのカードは真ん中に剣が突き刺さり、カードに刻まれた魔法陣を真つ二つに切り裂いた。

そして対馬の首筋には1.5メートルほどの銀色の剣を突き付ける1人の女の姿があった。そして後方には赤色の殺気を放つ巨大な男の姿があった。

それはまさに刹那、対馬は彼らの行動に反応はおろか察する事すら出来なかった。対馬の顔から冷や汗が湧き出る。

「何の真似だ？武帝の神楽、雷帝のボルクス」

「何の真似？それはアタイらのセリフだよ、地帝の対馬」

対馬の首筋に銀色の剣を突き立てる女。

漆黒のコートに『？』の英数字を刻む女。

鮮血の9人第5位

武帝の神楽志気かぐりしき

年齢は18才、大人の女性特有の色気を放ち、顔は街中であるけば存在が浮いてしまう程の美人。

彼女もまた漆黒のコートの下に黒い礼服を着用しており、服の下からもくつきりと腰のライン見えるほどのスタイルの持ち主。

性格はとにかく規律正しく、上の人間の言う事は絶対に厳守するお堅い頭の持主。能力名『マルチプレイヤー原子斬殺』

そして対馬の後方に立ち尽くす。強烈な殺気を放つ男。

漆黒のコートに『?』の英数字を刻む男。

鮮血の9人第4位

雷帝のボルクス・バートン。

年齢は20才。肌の色は黒く、人を食い殺すかのような鋭い目や口に金髪の鬣たてがみが彼の存在を強調している。その姿はまさに獅子を連想させる。

黒いコートの下には軍服のようなフード付きの上下迷彩服を着ている。

性格は一言で言えば戦闘狂、戦う事だけを生きがいにしてきた男。  
能力名『デストフラスマ雷破帝壊』

「おいおい対馬ッ!!やる気なら先言えよ。俺様が相手になってやるよ」

「……ッ!」

舞帝の神楽、雷帝のボルクス、2人の強さは鮮血の9人でも飛び抜けている。それを知っている対馬は金縛りにあったかのように額から嫌な冷や汗を出したまま固まっている。

「なあ?対馬君よ、やるならエルメスより俺と闘った方が幾らかスリルを味わえると思うぜ」

「ひっどいボルクスさん」

「アンタら規律を乱すなら対馬もろともけしぐずにするよ?」

混乱する場、対馬と翡翠から始まり今は対馬、神楽、ボルクス、



エルメスが言い争いをしている。

対馬の首筋に剣を突き立てたまま神楽はボルクスとエルメスを鋭い眼光で睨みつける。

ボルクスはやる気満々と言った感じで楽しそうに笑っている。

エルメスは「2人共こわい」などと感情が籠もっていない声を出し、ケラケラと笑っていた。

場は一向に治まる兆しを見せない。円は、すぎる思いである少女に救いを求める。

「助けて下さいフラリス様！！これではいつまでもたっても会議が始められません！！」

フラリス……その言葉にその場にいた全員の動きが静止した。

さっきまで騒然としていた空間は一瞬で沈黙へと塗り替えられ、1人の女性へと視線は向けられた。

「……………」

ゾツとするような少女だった。

漆黒のコートに『？』の英数字を刻む少女。

鮮血の9人第3位

死帝のフラリス

年齢は13才。その少女を見た者は皆、人間とは呼ばないだろう。少女には人間から放たれる生気がないのだ。

ガラス玉でできたような感情のない目はこの世の者とは思えないほど気持が悪い。

少女が着ているピンク色のワンピースはボロボロであちこちに破れた後がある。そして、ピンク色の髪もまたボロボロであちらが痛

んでいる。手入れされている様子はなく無造作に伸びている。能力名『死ノ宣告』デスノマッジ

「アマリサワガナイデ……シズカニ、シテ」

絶句。フラリスの声には人間らしさはない。本当に人形が喋っているような不思議な感覚。

フラリスは視線を対馬、ボルクス、神楽、エルメスに向け、小さく笑った。フラリスの声に感情はない、しかし彼らは察した。これ以上騒ぎを起こせば殺されると……

神楽は銀色の剣を鞘に戻し、ボルクスは軽く舌打ちをして4人は元の席にそれぞれ着いた。

対馬、ボルクス、神楽、エルメスからは嫌な冷や汗が涙のようにポタポタと零れた。フラリスの脅威を知っている彼らはこれ以上騒ぎを起こす事は出来なかった。

そして、あれだけ騒がしかった会議室は何事もなかったかのよう  
に元の静けさを取り戻し、場は再び沈黙が支配した。

「では皆様、これより提示報告会を開らせて頂きます……とその前に、起きて下さいルージユ様!！」

「…ぐおーッ」

ルージユと呼ばれる少年は起きる様子はない。今も豪快ないびきをかいて気持ちよさそうに寝ている。

漆黒のコートに『?』の英数字を刻む男。

鮮血の9人第2位

現帝のルージユ

年齢は16才。整った顔立ち、黒い髪を肩まで伸ばし、両耳に銀色の竜の形をしたピアスをつけている。

黒いコートを羽織っているが何故かその下はペンギンがプリントされた水色のパジャマを着ている。能力名『自分だけの現実』パーソナルリアリティ

彼は一向に起きる様子はない。仕方がないので円はそのまま話を進める事にした。

「ルージュ様には後でお話しするとして……まずはこの映像を見てください」

言葉と同時にアスファルトの壁が巨大なスクリーンへと変わった。そこには3人の少年が映し出されている。

翡翠の顔色が怒りへと変貌した。翡翠は映し出された内2人の少年を知っている。

映し出された少年は天城焔、上条当麻、鏡晴也だった。

「皆様、こちらの映像の人物1人は身覚えがあるとおもいます。元鮮血の9人のメンバー天城焔です」

「残りの2人は誰ですか？」

桜がツンツン頭の少年と風紀委員の腕章をつけた少年を指差した。

「あのツンツン頭の少年は幻想殺し、上条当麻と学園都市の治安維持を目的とした組織の一員、風紀委員の鏡晴也です」

そして、スクリーンの映像は別の映像へと移り変わった。そこには以前の翡翠と天城焔、上条当麻が戦っている姿が映し出されていた。そしてスクリーンの映像は更に移り変わり鏡晴也と舛田剛貴の戦闘場面が映し出された。

「映像に映し出されたこの3人は私達の計画の邪魔になると判断した者達です」

円はサラサラと台本を読み上げるかのように話しを続けた。

「天城焔は我々の計画の邪魔になる可能性が最も高いでしょう、翡翠が学園都市へ侵入した事で天城焔は我々の動向を探るでしょう」

円は話しを続ける

「そして、鏡晴也に関してはどうやら翡翠様と天城焔が戦闘を行った駅前の事件を鮮明に調べている様子です。そして、我々の計画『幻想御手の効果実験』を行っていた、舛田剛貴とそのメンバーを倒した」

そして、一度言葉をきり。

「しかし私が一番要注意とするのは幻想殺し、上条当麻です」

「なんで」確かに翡翠君の戦闘報告書を見せてもらったし彼の能力は知ってるけど、別に脅威になるってほどじゃ……………」

エルメスは上条当麻の能力を翡翠から提出された報告書を読んだので知っている。彼の右手には能力を打ち消す不思議な力がある。しかしエルメスはそれだけで彼を危険視する理由が分からなかった。別に聖人のように脅威的な身体能力があるわけではなく、強力な能力を使える訳でもない彼を……

「確かに、上条当麻の能力は魔術や超能力問わず打ち消す能力者で

強力な能力を使える訳ではありません、私が注目しているのは彼の脅威的バトルセンスです」

「先の映像をご覧頂いてお分かりかと思いますが、全力ではないとはいえ翡翠様にダメージを負わせた彼の動きは素人ではありません、そして私も驚いたのですが、上条当麻はかつてローマ清教が誇る『神の右座』のメンバーを全員撃退したという報告が新世界の諜報部に入って来ました」

「……ッ！」「……」

フラリスとルージユ以外全員顔色を変えた。

彼らも神の右座が何者かによって壊滅させられた事は知っていた。しかしまさかこんなただの少年がああ神の右座を壊滅させた張本人だとは誰も思ってはなかった。

「それともう一つ上条当麻の注目すべき点があります。それは、上条当麻のカリスマ性とも言うのでしょうか？彼は学園都市のレベル5、イギリス清教の魔術師、そしてあの禁書目録すら仲間につけています危険視するには十分かと……」

「つまり何が言いたいんだ？」

話しが遠回し過ぎて話しの主旨が見えない翡翠は円に聞く。この会議の本題を……

「はい、実は会議の前にボスと話し合い決定した事柄があります。」

そしてこの一言から遂に始まる。鮮血の9人と学園都市、イギリス清教、世界を巻き込む戦いが……

『天城焔、鏡晴也、上条当麻を現時刻を持つて我ら鮮血の9人の正式な敵で認め、我らの計画を破綻させる可能性がある場合、速やかに抹殺せよ』

第22話 鮮血の9人 完

第22話 鮮血の9人 (ブラッディ・ナイン) (後書き)

すみませんの一言です  
本当にすみません

## 読者の皆様へ

読者の皆様へ、とある魔術と禁断の能力者をご愛読頂きありがとうございます  
ございます!!

実は最近スランプ状態が抜け出せず、更新ペースは愕然と落ち頭  
を悩ませてる次第でございます。

とそこであまりに更新が遅く

「この作者はサボってんじゃねえか!!」

「ありや連載休止の足音が聞こえる」

「駄目だなこの作者は終わってる」

などと思われたくない為、活動報告の所に最新話の制作状況を毎日  
更新していききたいと思えます。

皆様に多大なご迷惑をおかけしてしまうと思えますが、よろしくお  
願いします!!

制作状況のコメント記事欄を見て頂ければ後何日で完成するなど  
分かるようにしますので、よろしくお願ひします!!



## 第2・5章 とある一方通行のデート記録（前書き）

すみません！！本編前に2・5章という形でサイドストーリーをはさみます。

このままだと一方通行さんの出番がなくなる気がするので……

そして今回はなんか小説と言うより説明書みたいになってますご了承ください

お気に入り62件突破！！頑張ります力になります！！62と言う数字を重く受け取りとある魔術と禁断の能力者連載頑張ります！！

## 第2・5章 とある一方通行のデート記録

ここはとあるマンションの一室。

電気もつけられてない薄暗い部屋で、木製の机の上に頭を乗せて寝そべっている少年がいた。

少年の名前は

『アクセラレータ  
一方通行』

髪も肌も不気味なほど白く、鮮血の赤い瞳をした少年。彼を初めて見た者は誰も自分と同じ人間なのか？と疑ってしまう位、恐怖に彩られた少年。

しかし今の一方通行にそんな威嚇はない。

一方通行を知っている者がいれば誰もが驚きと戸惑いに満ちた表情をするに違いない。

一方通行は机に頭を乗せたままうなだれていた。

「……………ねむ」

そう一方通行は寝不足だった。

3日も寝ずにある物を改造していたからだ。

そのある物とは一方通行の首にある黒っぽいチョーカー……………に見えるが、内側には電極が取り付けられている。世界中に散らばっている1万人弱もの妹達の脳とリンクして、莫大な並列演算機能を彼に貸し与えるデバイスだ。

一方通行の脳は1年前の8月31日に傷つけられている。

この演算補助デバイスがあつて、彼は能力者として初めて人並みに生活できる。

通常モードー歩行、会話、数を数える事なら48時間保つ。

しかし、能力使用モードローベクトル制御能力をフルで発動させると、膨大な計算量を瞬時にこなす必要があるため30分程度でバッテリーが切れてしまう。バッテリーが切れてしまうと能力の使用はもちろん、歩行、会話、数を数える事すらも出来なくなってしまう。

そんな訳で一方通行にとって首につけられている電極チョーカは必要不可欠なアイテム。

そして一方通行が何故電極チョーカを改造しているかと言うと、それは能力使用モードの時間制限の効率化のためだ。

一方通行は学園都市最強のレベル5だ。しかし最強と言う2文字を背負っている一方通行には敵が多い。一方通行が街を歩けば昼夜問わずに挑戦者達（面白そうだから喧嘩を売ってみようと思う者達）が後を絶たない。

脳に損傷がなかった頃の一方通行にはそれほど気にする事ではなかったが今はこのザマだ。電極チョーカの使用時間も限りがあるため雑魚を蹴散らすのは一瞬だが無駄使いはしたくないのが本音だ。

そしてそんなある日、一方通行は純白で高級感の溢れた学園都市特製の安眠快適ソファで通販ショッピングを見ながら昼間をしていた時……

「はい皆さんお昼のガクネットなかたのお時間ですよ」

気持ち悪いほどソプラノボイスの男の声が液晶テレビから聞こえる。快適な安眠を邪魔しかねないあまりよろしくない声だ、しかしテレビのリモコンを取って消すのも面倒なのでしばらく放置する事にした。

「本日のオススメはこちら、学園都市製の安全快適体温感知システムを備えた省エネエアコンです」

なんとも胡散臭い名前のエアコンだった。テレビ画面に目を向けると清潔感を彩られた真っ白なエアコンが映し出されていた。見た目は外の世界に売り出されている普通のエアコンと一緒に見えるが性能は学園都市で作られたエアコンの方が断然いい。

学園都市は科学の街だ。外の世界との科学技術の差は2、30年も先に進んでいるサイエンスな街だ。となるとやっぱり外の世界のエアコンに限らず数々の製品は学園都市が製造した物の方が断然に質も性能もいいわけだ。

(……にしてもエアコンに安全装置なんていらねえっつうの)

そう一人心中ではやきながらつまらない通販番組を見ていた。

(季節は春だってエのに今頃エアコンねエ……)

ツツコミ所満載の通販番組。エアコンが必見な季節がくる前に事前に予告しておいて売り上げを上げようと言う一種のイメージ戦略なのだろうと勝手に予測しながら番組を眺めていた。

「そしてこのエアコンの一番の見所はなんと！人間の体温を感知して冷房や暖房に切り替わりー」

(くっだらねエ)

エアコンに搭載された便利機能の説明が長々と続くが、これと言って目を光らすような機能はなかった。どうも学園都市製の製品にはいろいろな機能がついている物が多すぎる。

プロペラが逆回転する扇風機や目覚まし機能のついた枕、ほうきとモップ両方使える掃除機などと別に一緒にしなくていい物まで一緒にしている始末だ。

そして何より値段が高い。それぞれ別個で買った方がまだ安上がりで済むと言うのは買い手としてはなんとも許せない事だろう。

まあ近未来的な物が好きなお馬鹿さんなら喜んで買うと思うが

(見る価値もねえ)

重たい体を起こし目の前に置かれる机の上にあるテレビのリモコンを手に取り、電源を落とそうした瞬間……一方通行の指が止まった。

目線の先にあるはエアコンではない。一枚の机の上に無造作に置かれていた一枚のチラシだった。

どうやら大学の研究生が開発した試作品の広告チラシだった。一方通行はリモコンを机の上に置き、チラシを食い入るように眺めた。

チラシに紹介されている試作品はどうやら、微調整電力制御システムと言うもので簡単に言えば流れる電流のを調整、制御する為のシステムだ。

そう言った物は既に学園都市に限らず外の世界でも製品化させられているが、チラシに載っているのは学園都市の中でも最小サイズ、大きさは米粒一粒程度のスケールらしい。

そしてこのチラシに載っている製品の最大のコンセプトはこの米粒程度のICチップをつけるだけで様々な製品の電力を微調整出来ると言う事らしい。

分かりやすい言うならば扇風機のように強弱を自在に電流が流れている物なら何でもつけれると受け取ってもらいたい。

正直、そんな凄いシステムがあつたとしてもたいていの電流が流れる製品などは予め強弱など調整する事が出来るので、実用性は薄い。

しかし例外はもちろんある。そう例えば一方通行の首につけられている『電極チョーカ』。

最初の頃はただのチンピラを蹴散らすのに手加減など必要なかったし、電極のスイッチを攻撃の時はオン、相手が攻撃で怯んでいる時はオフと入れ替える事によって、バッテリーの残量を抑えていたのだが、最近はずんぴら相手にわざわざ自分がそのような動作をする事を遺憾に思えてきた。

一方通行はチラシをみながら考える。

もしかしたらこれを電極チョーカに取り付ける事が出来れば、もっと効率的に能力を使用できるかもしれない。

(だが、俺じゃ電極チョーカの詳しい構造はよくわかんねエ……となる)

一方通行はチラシを持ち出し、電極チョーカの開発者冥土帰し(カエル顔の医師)の所を訪ねた。

冥土帰しは電極チョーカの設計図と微調整電流制御システムのチラシを見比べ。

「うん、構造上可能だと思つよ、ただ制御システムの方はまだ大学の試作品レベルだから君の電極チョーカにつけられるかどうかはまだ分からないよ。まあとりあえず大学の方に問い合わせてシステムの方は取り寄せておくよ、電極チョーカの改造は色々な機材が必要

だから時間がある時に少しずつやっておくよ」

「悪いな」

「患者に必要な物を揃えるのが僕の仕事だよ」

そして一方通行は電極チョーカの改造を冥土返しに依頼した。勿論電極チョーカをもたない一方通行を病院に滞在する事となった。

一方通行が病院に滞在して4日後、電極チョーカの改造が終了した。

「付け心地や違和感に問題はないかい？」

「ああ、問題ねえ」

一方通行は新たに改造された電極チョーカのスイッチを切り替えたりして調子確かめる。

改造された電極チョーカのスイッチは3段階式のスライドタイプに変更され、扇風機と同じように弱、中、強のようにスイッチを切り替える事によって電流を調整出来るようになった。

後は3段階のスイッチをの切り替えでどの位、能力を解放するかを調整しなければならない。調整具合は一方通行が決めなければならないので冥土返しは調整に必要な機材を一方通行に渡し、自宅でも作業出来るようにしてくれた訳だが……

思ったより調整は困難を極めた。作業が思ったより繊細だったため、たつぷりと自室に3日も籠もってしまった。

そして現在に戻る訳だが、一方通行は新たに改造された電極チヨ  
ー力をスライドさせる。

まずは1段階チーベクトル操作のみ解放。ベクトル操作に必要な分だ  
けミサカネットワークに演算させてバッテリー使用量を極限まで抑  
える。ただし反射は使用不可、1段階のみフルで使用した場合の持  
続時間12時間。

第2段階チー反射のみ解放。ただし操作は使用不可なため、反射  
する向きを決める事は出来ない。フルで使用した場合の持続時間6  
時間。

第3段階チー能力完全解放。ベクトル操作、反射をフルで使う事  
ができる。フルで使用した場合30分。

(雑魚共をだまらすのは1段階目のベクトル操作だけで充分そうだ  
なア、面倒くさければ2段階に切り替えて反射を適用させればいい  
し、これで雑魚共相手に余計なバッテリーを使わなくて済むって事  
だなア)

一方通行は壁にかけられている時計を見る。

(もう昼の12時か……)

このまま寝てしまおうと思ったが、空腹が邪魔をして安らかな眠  
りにつけそうにない。

とりあえず腹ごしらえをするため、部屋を出てキッチンへと向か  
う事にし、部屋の扉を開けたのだが……一方通行の足が止まった。



内側に開かれた扉の目の前で正座をして本を読んでいる打ち止め  
《ラストオーダー》がいた。  
余程本に集中しているのか、ラストオーダーは一方通行がいる事  
に気づいてないみたいだ。

「おい、なにやってんだア？」

「……………！！！」

不意に声をかけられビックリしたのラストオーダーは小さな肩が  
ビクンと跳ね上がった。

しかし反応がおかしいラストオーダーは一方通行の顔を見たま  
顔を凍らせ、まるで信じられないものを見ているかのように口を  
クパクさせていた。

「……………おい」

ラストオーダーは一方通行の声に反応したのかよたよたと立ち上  
がった。

そして……………

「ヨミカワーーーーー！」

そう叫びながらラストオーダーはキッチンの方へと消えて行った。

「なんのお祭り騒ぎだア一体？」

一方通行はふと視線を下に向けた。

フローリングに無造作にばらまかれた本の山が散らばっていた。  
多分ラストオーダーが自分の部屋の目の前で読んでいた物だろう。

(なんの本だア一体?)

一方通行は本の山から一冊適当に取り出して本に書かれているタイトルをみた。

思春期!!引きこもり対策方法!!

「……………」

一方通行は一冊の本を持ったまま、首をゆっくりと動かしその他の本を見る。

全て『引きこもり』に関する本や資料だった。

「……………あのガキ」

一方通行は手に持っていた本をその場に放り投げ、ラストオーダーが向かったキッチンへと足を運んだ。

—————

「おッ!引きこもり少年じゃん」

キッチンに向かった一方通行にかけられた第一声はそれだった。

よみかわあいは黄泉川愛穂長い黒髪を後ろで縛った彼女は大人の色気全開……のだが生憎と野暮ったい緑色のジャージを着てその抜群のプロポーションを自身の手によって台無しにしている残念な女性だ。

「引きこもってたわけじゃねェよ」

しかし一見、3日も外に出ずに部屋の中で籠もっていれば誰もが引きこもりだと思ってしまうのが自然だ。

しかし部屋の中で一方通行は3日も寝ずに電極チョーカの改造を行っていた訳で、その苦勞を話しても仕方のない事なのだが、引きこもりとレッテルを貼られてしまっていたのは正直おもしろくない。

「にしても良かったじゃん、この子ずっとあなたの事を心配して部屋の前で引きこもりに関する資料を読んでなんとか公正させようと頑張っていたじゃんよ」

「うんうん、ミサカの思いがきつと神様に届いたんだねってミサカはハンカチを片手に涙を流してみたり」

「あのなア？俺が引きこもりをするタマに見えんのかよ？」

一方通行がやや不機嫌気味な声を放つ。ここはラストオーダーの行いに感謝する場面なのだろうが、正直素直に「ありがとうございます」などと言えるはずもない。

「まあまあ引きこもりなんて誰がなったっておかしくないじゃん」

「精神的に断崖絶壁に立たされたあなたは誰にも相談する事が出来ずに1人部屋の中で頭を悩ませていたんだねってミサカはミサカはあなたの苦惱を深々と考えてみたり」

「だからア！！引きこもりじゃねエツつてんだろ！！」

怒声を放つ一方通行、悪気は勿論ないのだろうが正直やりきれない気持ち溢れる今日この頃であった。

怒りをあらわにする一方通行であったが、3日も何も食べてないという空腹からその場に座り込んだ。

今は黄泉川が予め一方通行のために作ってくれていた、料理を温め直してくれているという事だった。

(しかし驚いたなア……まさかあの黄泉川が炊飯器以外で料理を作っているとはア)

そう黄泉川は料理を何でも炊飯器で済ます。炊飯器は炊く、煮る、蒸す、焼くと何でも出来るのでその便利性に捕らわれた黄泉川は何でも炊飯器で調理を済ませようとする少し変わった人種だった。

しかし一方通行が引きこもり？をしている間黄泉川の旧友、芳川よしかわ桔梗ききょうに「手を抜かずにちゃんと料理をなさい、お嫁にいけなくなるわよ」と諭され渋々、炊飯器に頼る調理を止めたと言う訳らしい。

(まア、炊飯器を使えばまともに食べる料理はできるンだア問題はねエだろう)

……しかし

「うおおおおおおおーいッ」

意味不明なラストオーダーの絶叫が聞こえた。

一方通行がラストオーダーの方を見ると鼻をつまんで黄泉川の料理から全力で遠ざかるラストオーダーの姿があった。

「……こりゃ失敗じゃん」

同じく鼻をつまんで鍋を見下ろす黄泉川。一方通行はよたよたと立ち上がり、恐る恐る鍋に顔をのぞかせた。

「……………ッ！！！」

絶句。

もつれつな魚が腐ったような刺激臭を漂わせる料理？中身は文章で表現しきれないが、例えるなら生がきをミキサーで混ぜてスープ状にしたような白と黒が入り混じったなんとも奇妙な物体がそこにあった。

「なんだア、この奇妙な液体は」

「練乳鍋れんにゅうなべ」

一言でこの液体の正体を明かす黄泉川。しかしこれを練乳鍋と思う人間は学園都市いや世界をまたにかけても存在しないだろう。

「……………はははッまあ味の方は保証するじゃん？」

「なんで疑問系なんだよ！！それにこんな異臭を放つもん食えるかア！！！」

「食べてみないと分からないじゃんよ」

ふざけんな！！と一方通行が叫んだが黄泉川はそれを無視、そして謎の液体の鍋を手で掴んだ瞬間……悲劇は起きた。

「あつツ！！」

充分に加熱された鍋の鉄で出来た部分を間違えて触ってしまった黄泉川。

黄泉川の手から離れた謎の液体が入った鍋は宙を舞い一方通行の頭上へと移動した。

逆さまになった鍋から謎の液体が一方通行の頭にこぼれ落ちる。

(……嘘だろ！！)

謎の液体と一方通行の距離は50センチ

一方通行は瞬時に電極チョーカのスイッチをオンにして反射を取り戻した。

そして……謎の液体は一方通行に直撃し反射され、四方八方に散らばった。

謎の液体は部屋のあるこちらに散乱し、壁に張り付いた謎の液体は肉を焼くようにジューという音を立て、壁に貼られた真っ白なクロスを溶かしていった。

まさかこんな形で新たな電極チョーカを使用するとは夢にも思っ  
てなかった。

-----

「はやく、はやくってミサカは支度が遅いあなたを急かしてみたり」  
結局、食事にありつけなかった一方通行は仕方なく外食する事に  
した。

黄泉川は散乱した謎の料理を片付けている。ラストオーダーは片  
付けての邪魔になるから一緒に連れてけとの事だった。

一方通行は靴をはき玄関のドアノブに手をかける。

「んじゃ、行ってくるぜエ」

「行ってきまーすってミサカは元気いっぱい黄泉川に両手を振って  
みる」

「ああ、車に気をつけるじゃん」

そんな本当の親子のようなやりとりをして、一方通行は玄関を出  
る。扉の向こうには綺麗な青空が広がっている。

そして始まる、学園都市最強の男の休日が……そして知る事に  
なる学園都市で起きようとしている巨大な闇を……

第2・5章とある一方通行のデート記録前編完

## 第2・5章 とある一方通行のデータ記録（後書き）

次回で2・5章完結です！！  
頑張ります！！



第2・5章 一方通行のデート記録 後編(前書き)

お気に入りが入りが2件減りました!!。

しかもーし全然落ち込んでません。

お気に入り60件これからも頑張ります!!

ちなみにスランプ抜け出せず、後半らへんがかなり駄文になってます。

## 第2・5章 一方通行のデート記録 後編

近所のファミレスにたどり着いた一方通行はラストオーダーに体をひこずられる形で入店した。

何故こんな事になったかと言うと10分前に遡る。

――

一方通行とラストオーダーは近所のファミレスに向かうため、第7学区の表通りを歩いていた。

ちょうど昼時と言う事でファミレスやコンビニでお昼を済ませようとする学生が道を覆い尽くし、表通りは活気が溢れていた。

そんな活気づいた街並みをよろよると酔っ払いみたいに歩く一方通行。外見からと言う事もあるだろうが、その姿は人混みの中でも一際浮いていた。

一方通行は目線を前方に向けた。人混みのせいで目的地がかなり遠くに感じられる。

「……もう歩けねエ」

空腹と眠気で疲労が極限まで達した一方通行の動きがふらふらと本格的に蛇行し始めた。

そんな一方通行を見てラストオーダーは呆れた顔で……。

「もう歩けないってまだ5分も歩いてないよってミサカは最近の若者の運動能力の低下傾向を将来的に心配してみる」

「……うるせエ、だいたいこの空腹の中5分も歩けた時点で奇跡だったんだ、クソツたれ」

「もう学園都市最強の威厳なんかこれぽっちもないね　ってミサカは貴重なあなたの姿を少々真剣に眺めてみる」

ナニコレ珍百景と言わんばかりラストオーダーは一方通行をやや楽しそう眺めていた。

……その時。

ブオツ！！と風をきる音と共に一方通行が持っていた、トンファ―状の杖がラストオーダーの脳天に容赦なく振り下ろされた。

ゴツンと言う鈍い音と共に頭を抱えその場に座り込むラストオーダー。そして頭を容赦なく叩かれた少女は鋭い目つきで一方通行を睨んだ。

「こんな可愛い女の子を殴るなんてどういう事？ってミサカは両目いっぱい涙を溜めて訴えてみる！」

「人の不幸を楽しんでじゃねエ」

「……ううしかも杖を振った時倒れないように電極チョーカのスイツチをさり気なくオンにしてるしってミサカはあなたのずる賢さを少々本気で妬んでみたり」

うーうーと一方通行の行動に大ブーイングを巻き起こすラストオーダー。

そして次第に彼らの周りには、なんだなんだと沢山の人集り（ひとだかり）が出来ていた。

周りからはいい歳の少年が小さな女の子を泣かせたと言う風に見えていらしく（実際泣かせているのだが…）、ヒソヒソと何か言葉を交わしている。

確実に一方通行に白旗が上がるような陰口ではないだろう。何時もあまり他人の目を気にしない彼も流石にこれは気まずい。

一方、ラストオーダーは人目を気にしていないのか、未だに嵐のようなブーイングを止める気配は微塵もない。

一方通行は頭を抱え近くのオフィスビルの壁に体を預け「不幸だ……」と一言嘆いた。

「ってかミサカの話し聞いてる？」

正直、半分以上聞いてない。意識は完全に上の空だった。

最早空腹が頂点までたどり着いた一方通行のお腹は獣のような唸り声を上げている。

そして一方通行の顔をラストオーダーはこっそり覗き込むと顔色が真っ白から真っ青へと変色していた。

なんだかお腹以外から口からも唸り声が聞こえてくる。

「これってマジでヤバい？ってミサカは怒りを抑えて少々心配気味にあなたに恐る恐る最終確認をとってみるんだけど……」

「……………」

返事はない。

意識があるかどうかも分からない。  
ラストオーダーは一方通行に色々と話しかけるが返事はお腹からしか聞こえなかった。

しかし突然と悪夢起こった。

「もう限界だア……跳ぶ」

空腹が限界に達した少年はいきなり電極チョーカのスイッチをMAXまで（操作と反射を取り戻した状態）引き上げ、ラストオーダーの小さな手を握った。  
とてつもなく嫌な悪寒が少女の全身をほとばしった。

「ねえ？一応聞いてみるんだけど……本気？」

一方通行は聞いてない、彼の瞳にあるのは200メートル先のファミレスだけだった。

ヤバいっとなストオーダーは即座に感じた。

……もしこの人混みの中一方通行が能力を使ってあのファミレスに突っ込んだ場合果たしてどうなるでしょう。

被害が出ないとおもいますか？

冷静さを失った一方通行がファミレスに激突する可能性は？

……そして自分の運命は……？

か弱い少女は一方通行の手を振り解こうとするが、2人の手は手錠で繋がれたように離れる様子はない。ラストオーダーは首をブン

ブンと振り、小さな抵抗を試みるが……

――少女の願いは残念ながら届かなかった。

ドンツ！！と言う激しい音と共に一方通行の足下のアスファルトが大きくめくれ上がった。

一方通行の周りを囲っていた学生達は危険を察知して、猛ダツシユで彼らから遠ざかった。

しかし時間にして一瞬。

その間を完全に逃げ切る事は不可能だった。足にかかる運動量の『向き』を変更させ、一方通行は弾丸のように表通りを突き抜ける。もちろん片手に握られているラストオーダーと共に……

案の定。逃げ切れなかった学生達は、ロケットのように道を突き進む一方通行の爆風に巻き起こりまわれ、ゴミクズのように所々に吹き飛んだ。

そして、ラストオーダーは地面から足が離れ、一方通行と共にロケットの如く空を飛んでいた。

空を飛ぶと言っても地面から30センチしか離れていない超低空飛行のだが……一応、空を飛んでいた。

「ちょっとちょっとストップ、ストップ！！ってミサカはあなたについてワオオ！！」

あまりの速度に少女の言葉は中断された。

ラストオーダーは視線を前方に向けると……

「うおおおおおいッ！！」

絶叫した。

なんとファミレス激突まで残り10秒をきってるではありませんか。

少女は考える。

そして思った。たった10秒で人間がどれだけ思考を働かせるか出来るか。

10秒の間に色々な言葉が出てきた。

そして、様々な言葉から一番適切で一番最初に出てきた言葉を、最後の願いを込めて……叫ぶ！！

「死ぬッ！！ってミサカは素直な感想をあなたに伝えてみる」

「……………」

無視かよ！！と内心ツツコミをいれるラストオーダー。しかしそんなツツコミをしている間に一方通行はファミレスにツツコミそうだった。

目を閉じてもう駄目かも……とファミレスに激突を覚悟した瞬間。突然ラストオーダーの足が地面に着いた。不思議と思った少女が瞳を開けると……………

「……………」

一方通行は腹を押さえて、その場に倒れていた。

「どうしたの？ってミサカはあなたに尋ねてみるんだけど……………」

空腹が限界に達した少年は虫のような息でポツリと呟いた。

「今ので空腹にトドメをさした……ア」

啞然と地面に倒れた哀れな少年をみる少女。少女は無言のまま一方通行を店の中へと引きずり込んだ。

――――

そして時間は現在に戻る。

無事？ファミレスに到着した2人の少年少女は店に入った瞬間、受け付けの爆乳ウエストレスさんに案内されて席に着いた。

ウエストレスさんは一方通行の異常な空腹状態を察知して大急ぎで料理を出してくれた。

現在は暴食王と化した一方通行は、出された料理を猛獣の如く平らげている。

あまり上品な食べ方とは言えなかった。

対してラストオーダーは注目したお子様ランチを黙々と食べていた。オムライスの真ん中に「我ここにあり」と言わんばかりに突き刺さっている風力発電のプロペラのプラスチック製模型が立っている。

本来ならこういうランチには日本国旗が立っているのだが、学園都市の独立した証を示しているのか、どこの学園都市の店にもお子様ランチに日本国旗が立っている事はない。

外の世界からも学園都市は輸入を頼っているのに随分勝手な話しだなくと思う10歳前後の少女。



「あア食った食ったア」

そんな年寄りのような思考を巡らせている内に元空腹少年は注目した料理（主に肉）をすべて食べ終わっていた。

「どうして一品しかたのんでないミサカより三品も頼んだあなたの方が早いのかってミサカはとても不思議に首を傾げてみる」

「大人と子供じゃ、腹の出来が違うんだよ」

「あなたのさつきまでの行動が果たして大人なのかなってミサカは全国の読者さんに尋ねてみたい」

「誰に向かって話しかけてんだア？」

なんでもないと突然話しの腰を折るラストオーダー、まあ本人が何でもないと言うなら、まあいいかと深く言及せずに一口手元にあったコーヒースをすすった。

—————

ラストオーダーがお子様ランチを食べ終わったのは一方通行が完食して10分後だった。

空腹少年から満腹少年へと戻った一方通行はまだコーヒースを飲み続けていた。これで5杯目だ。

やはりここは大人なのだろうか？こんな苦い物よく飲めるなーとラストオーダーはカップに入っているコーヒース眺めながら苦い顔をしていた。

「ああ、なんだア？お前も飲むかア？」

「ミサカにはまだ大人の味は分からないかもって、ミサカは遠慮気味に断ってみる」

一方通行はあそつと一言だけ興味なさそうに告げると、残っているコーヒーを全部飲み干し席を立った。

「帰るぞオ」

「えっ！！もう帰るのってミサカは突然の展開に少々慌ててみたり」

「ああ？もうメシは食ったし、ずっとここにおいても仕方ねエだろ？」

「えゝそんなのつまらないゝってミサカはミサカは席から離れずにぷーたれてみる」

予想外な事にラストオーダーは席から離れずに大きなテーブルの上に頭をのけて動かない。

一方通行としてはこのまま部屋に帰って3日分の睡眠をとる予定だったのだが、ラストオーダーはどうやらどこかに遊びに行きたいらしい。

このまま置いて帰るのもありだが、黄泉川が必ずそれを許さないだろう。

多分「ちゃんと連れて帰ってくるじゃん」などと言われてまたファミレスに戻らなくてはならない事になる。

「（面倒臭せエ）」

一方通行は頭を抱えて、ラストオーダーに視線を向けると……

ラストオーダーはファミレスに貼られている宣伝用のチラシを指さしている。

「あれ行きたいってミサカは目にお星様を光らせながら、可愛らしくお願いしてみる」

小首を傾げて、目からたくさんの星を放出しているラストオーダー。

一方通行がそのチラシに視線を向けると……………

「まじかよ……………」

—————

人が多い、周りには人、人、人とまるで人の海だ。

そんな人混みの中を一方通行とラストオーダーは歩いていった。

現在午後2時、日差しは丁度真上から差し、春だと言う事を感じさせない位気温が高かった。

熱い、一方通行はたっぷりと汗をかきながら歩き続ける。

「うおおおおおー！おっきい観覧車ー！」

ラストオーダーは学園都市の象徴共いえる風力発電の形をした観覧車を眺めている。

そこここは第3学区に新しく出来た『ファミリーチャイルドパーク』簡単に言えば遊園地だ。

結局、ラストオーダーの目からお星様攻撃に負けて、わざわざバ

スと電車を乗り降りし、苦勞してたどり着いた訳だが……。  
絶句した。

遊園地なので人が多い、それは分かる。

遊園地なので騒がしい、それも分かる。

……だが論ずるべき場所はそこではなかった。

「……聞いてねエ」

「なにが？ってミサカはあなたに質問してみる」

一方通行はこめかみをピクピクとさせ、ラストオーダーに問いかけた。

「知ってたのかア？」

「質問を質問で返すのは感心しないよってミサカはミサカはあなたに人と接する時のマナーを教えてみる」

「うるせエ！！お前ここがガキンちども専用の遊園地と知って行きたいって言ってたのかア？」

遊園地の入り口の看板にはこう書かれてある。

『対象年齢5歳〜10歳、集まれちびっ子共！！ファミリーチャイルドパーク！！』

そう、ここはただの遊園地ではない。学園都市が小さな子供が全ての施設で遊べるようにと作られた。

子供専用の遊園地だった。

小さな子供は普通の遊園地では、安全のため年齢制限があったり、入れない場所があったりする。

しかしこの施設は子供でもジェットコースターが乗れるようにと、安全対策を二重三重にもしており子供でも自由気ままに遊べると言うわけだ。

もちろん遊園地には一方通行と同じ年の少年はおらず、いるのは小さな子供か子連れのお夫婦位だ。

「ねえねえあれ乗ろうよってミサカは大きな新幹線の形をしたジェットコースターを興味津々に眺めてみる!!」

長細いレーンの上を凄いスピードで走り抜けるジェットコースターを見て、ラストオーダーは興奮が抑えきれないのか、全力疾走準備オーケーと言わんばかりに足踏みをしている。

「あんなア！流石に俺がここにいる事は場違いだろうがア！」

「えっ!?!どうしてってミサカはミサカは首を傾げてみる」

愕然とした。

気づいてない。

この少女は。

この場所がどういふ場所なのか……

「いいから早く早くってミサカは全力で新幹線に向かって直行してみる、おオおおおおおッ!!」

全力で走り去ったラストオーダー。

最早、学園都市最強の怪物ですら少女 を止める事は出来なかった。

――――

「もう駄目だア」

「情けないないぞってミサカは疲れきっているあなたに呆れてみたりミサカはまだ元気だぞ！！って……」

「頼む、少し黙れ」

あの後には散々だった。

ジェットコースターに乗った後、メリーゴランドに無理やりの載せられ（保護者同伴だと乗せられないと断られたため）

その後はコーヒーコースターに乗り。

小さな子供用の車と言うわけの分からない物に乗せられ。

そして現在、風力発電型の観覧車に乗っている。

一周の長さは15分でゴンドラは4枚のプロペラの先端につけられている。ゴンドラの数も4つと少なかつたため、待つのも1時間もかかってしまった。

一方通行達の乗っているゴンドラは現在、天辺の辺りだ。高さ30メートルから見える学園都市をラストオーダーは感激の眼差しで眺めていた。

「すごい、ねえねえって学園都市があんなにちんまり見えるって  
ミサカはミサカはこの感動をあなたに伝えてみる」

「……………」

「あつあれが黄泉川の家で、あれがさつきご飯食べたファミレスで  
……………」

学園都市を眺めながら楽しそうに笑う少女。

一方通行はしばらく黙ったままラストオーダーの笑顔を眺めてい  
た。

「(つたくこつちの気も知らないで呑気に笑いやがって…………)」

ふと目線を前に向けるとガラスに反射した自分の顔が見えた。  
そこに映っていたのは…………笑っている自分。

一方通行は自分でも気づかなかった、自分が笑っている事に…………  
…。

そこにはかつての自分はいなかった。  
きつと今こうして笑っているのは、そこにいる少女のおかげだ  
と思う。

かつて、闇に吞まれてた自分に小さな光を与えてくれた。  
初めて守りたいと思った少女。  
何度も守れなかった少女。

この笑顔を守りたい、その思いが自分を変えた。

だから一方通行は自分の今の笑顔を否定しない。

この少女が与えてくれたこの笑顔は自分だけのものじゃないと思  
うから。

「守りてエなこの笑顔はずっと」

そう一人言のようにポツリと呟いた。

その瞬間……………

ズゴンツッ！！と地面が大きく揺れた。

「えッ！？何？ってミサカはって……………」

ズゴンツッ！！とラストオーダーの言葉をかき消すように、もう一回地面が大きく振動した。

ゴンドラが激しく揺れ、立っている事さえ困難な状況だった。

「なんだア？」

一方通行はゴンドラから下を覗いて見る。

なんと下から聞こえるのは悲鳴。

そして、この場所に似つかわしくない、3人の青年達が悲鳴の中心に立っていた。

3人の青年達は体を銀色の剣に変えて周りの木や遊具を無造作に切り倒していた。

「ッち」

一方通行は電極チョーカーのスイッチをオンにして、ゴンドラのガラスを叩き割る。

「どこ行くの？ってミサカは尋ねてみる」



「便所だ、すぐ帰ってくる」

そう一言だけ告げて一方通行は叩き割った所ガラスから飛び降り、観覧車を途中下車した。

――――

「おらあ！！大人しくしやがれ！」

3人の内、黒いジャージを着た男が地面に鉄の拳を突き立て、客を威嚇する。

「逆らっちゃ駄目だぜ！痛い目みたくなかったらな！！」

サングラスをかけたもう1人の男も鉄の拳を客に向ける。

「おいおい、怯えてるだろ？大事な実験材料なんだから、大切に扱ってやれ」

黒のライダースーツを身に纏った男はケラケラと逃げ惑う客を見て楽しそうに笑っていた。

そして、近くにいた5歳位の子供に近寄り、胸ぐらを掴む。

「おいッこのガキ回収、なんか目つきが憎たらしいし」

「了解」

サングラスをかけた男は子供の首を持ち、そのままひこずるような感じでどこかへ連れ出そうとする。

「お母さんアあああああッ!!」

子供は両目いっぱい涙を流し、叫んだ。

恐怖、幼い子供の表情からはそれを受け取る事が出来た。

しかし、そんな幼い子供の顔をサングラスの男は愉快そうに笑ってみていた。

「息子を離してください!!何をやる気なんですかッ!!」

連れ去られる幼い子供の母は怒りを3の青年にぶつけながら、息子の元へ走ろうとする。

……しかし

「ババアは黙ってる!!」

黒ジャージの男は鉄のように固い腕を母の腹に突き刺す。

ゴキゴキ!!と言う嫌な音と共に母親はその場に倒れ込んだ。

「良太アあ……ああッ」

連れ去られて段々遠くなって行く息子を見つめながら、母親は嘆いた。

地面に倒れたまま息子の名前を悔しそう呼ぶ母親の姿をみて男達はニヤニヤと笑っていた。

周りの親子達は逃げ出すのが精一杯なのか、その2人の親子の姿を見ても、無視して逃げる。

「助けて……」

母親は叫ぶ。

「誰かッ！！息子を助けてください！！」

……………その時。

「ガアあああああああッ！！」

子供を連れ去っていたはずのサングラスの男の絶叫が聞こえた。

「どうした！！」

2人の男がサングラスの男の方へ目を向けた。

そこには、白い髪、赤い瞳をした不気味な少年が立っていた。

サングラスの男は腕がおかしな方向に曲がっており、膝を地面についたまま、絶叫していた。

「まったくんでもねエクソ野郎どもだなア！オイ」

真っ白な少年はゆっくりと男達に近づいて行く。

少年から発せられる威圧に男達からは不思議と嫌な汗がたっぷりと額からこぼれ落ちていた。

「なにもんだテメエ」

ライダースーツの男はゆっくりと重たい口を開いた。

「なにもんだア？ヒーローだよ」

真っ白な少年はうつすらと笑みを浮かべてもう一度。

「クソツたれのヒーローだよ」

その一言が戦闘開始の合図となった。

「くそツ！！何がヒーローだ！！なめやがって」

ライダースーツを着た男は手を銀色の鉄に変え一方通行に一直線に向かって来る。

「ほオ！体を鉄に変える能力者が……」

一方通行は余裕の笑みを浮かべたまま、襲いかかってくる男を見据えていた。

距離は5メートル。

一方通行が構える様子はない。

瞳を閉じる事も。

避ける事もせずに。

ただ向かって来る鉄の腕を見つめるだけ……………

「なめやがってエええええええッ！！」

激昂したライダースーツの男は構える様子のない一方通行にそのまま勢い良く鉄の拳を殴りつける。

普通の人間なら確実に無事では済まなかっただろう。

普通の人間なら……………

「あッガアあああああああッ!？」

悲鳴をあげたのは殴りかかった男の方だった。鉄の拳はハンマーで殴られたかのよいにへこみ、指の先端から拳全体に亀裂が入っていた。

黒ジャージの男は何が起きたか分からなかった、殴った方が悲鳴をあげて、殴られた方は無傷。そんな異常な光景をただ眺めていた。

「（どうなって……）」

「次はお前かア？」

一方通行が標準を黒ジャージの男に狙いを定めた瞬間。男の肩がビクウ！！と跳ね上がった。

一方通行が男達の目の前に現れてわずか10秒。

その間に仲間は2人もやられた拳げ句、この少年の正体不明な能力、男は恐怖を感じられずにいられなかった。

「（何なんだコイツは！）」

「何、黙りしてやがんだア？来ねエならこっちから行くぞオオ！！」

一方通行の足の重心が前に移動した。

「ちょっと待ってくれ、お前一体なんなんだよ……ってかなんで俺の邪魔をするんだ！！」

男のいきなり言葉を放ったため、一方通行は一度足を止めた。そして言葉は少しだけ選んで、こう言っちゃった。

「ヒーローが子供を守るのはお約束だろがア」

男は思考が止まった。

なんともこの少年には似合わないセリフだった。

「ふざけんな！！何がヒーローだ！人の計画の邪魔しやがって許さねー、俺の能力スチールオペレーション鉄鋼操作でテメエをぶっ倒してやる」

「御託はいいから、かかって来いよ三下ア」

黒ジャージの男は勢い良く鉄の拳を一方通行に向かって放つ……

しかし勝負するまでもなかった、男の拳と一方通行の体が激突した瞬間。バギツ！！と言う嫌な音と共に鉄の拳は決して曲がらない方向に折れた。

「ガアあああああああッ！！」

遊園地に響きわたる悲鳴。

黒ジャージの男は痛みのみならずその場にのた打ち回った。一方通行は心底つまらないそうに……。

「呆気ない幕引きだなア。後はアンチスキルやジャッジメントに任せればいいか……ッ！！」

胸が重たい、一方通行に突如、嫌な悪寒が襲った。

「（この感じは……）」

一方通行は周囲を見渡す。

この場にいるのは、倒れている3人の男達と、連れ去らそうにな

っていた子供とその母親。

そして……

2人、サングラスの男の隣に誰かいる。

まるで最初からその場に行たかのように2人の男がそこに立っていた。

1人は三角メガネに銀色の長髪、そして黒いコートの下に白衣を纏った男だった。

そしてもう1人は……知っている顔だった。

「久しぶりだな一方通行!!」

「テメエ死んだんじゃないかよ……」

一方通行と顔見知りの少年の間に不穏な空気が漂う。

一年前、一方通行に肉塊に変えられたら男。

学園都市のレベル5の第2位。

「なんでテメエがここにインだよ!!<sup>ダイクマター</sup>未元物質垣根帝督!!」

第2・5章 一方通行のデート記録後編〈完〉

第2・5章 一方通行のデート記録 後編(後書き)

スチールオペレーション今回も出ましたけどネタ切れな訳じゃないじゃない。

一応使い回したのには理由があります!!

これから連載頑張りますので応援よろしくお願いします



第3章 幻想御手 地帝の対馬黄河来襲編（前書き）

やっと出来たッ！！

ここからが

『とある魔術の禁断の能力者』の本編になります。  
お気に入り61件！！感謝です！！

### 第3章 幻想御手 地帝の対馬黄河来襲編

茜色に染まる学園都市。

黄金の色を放つ夕焼けが空や建物を綺麗なオレンジ色に染め上げ、嫌な気分を少し落ち着かせてくれる、そんな安らかな空間で彩られる学園都市。

しかしそんな空間に染まる事もなく、怪訝な雰囲気を漂わせる3人の人物がいた。

一方通行と垣根帝督。

そして、『新世界』鮮血の9人の1人地帝の対馬黄河。

彼らは互いに見る者を凍りつかせるほどの敵意を放ち合っていた。不穏な空気が漂う中、垣根帝督が口を開いた。

「本当に会いたかったぜ、一方通行！ずっと待ち焦がれてたんだ、テメエに会えるこの日を永かった本当に永かったぜ」

歡喜の笑みを浮かべる垣根帝督。彼から発せられた『会いたかった』その言葉に好意は感じられない。

むしろ逆、彼の『会いたかった』その言葉に込められた裏にあるのは殺意だけだった。

「お前の事は一度だって忘れた事はねえ、俺を肉片に変え、俺から全てを奪ったお前の顔だけは……」

歡喜の笑みに憎しみの声をあげる垣根。

そんな彼を一方通行は疑問に思わずにはいらなかった。

一年前の秋、垣根帝督はある理由で一方通行と戦った。

結果は無残にも垣根が暴走した一方通行に肉片に変えられる形で

敗北。

垣根帝督は『死んだ』はずだった。

しかし『死んだ』はずの垣根は今こうして現に笑い、声をあげ、肉片に変えられた形跡もなく悠々と一方通行の前に立っている。

死んだ人間は蘇らない。

それがこの世界で生きる人間の法則。

死者を生き返らせる事など、あの冥土帰しのチカラを持ってしても出来ない事だ。

「なんでだ……」

一方通行は思わず声をあげていた。

「なんでテメエが生きてんだよ！！テメエは一年前、俺に殺されたはずだろうがア！？」

問いかけない訳にはいかなかった。この異常な光景を目の前に流石の一方通行も戸惑いを隠す事は出来なかった。

垣根帝督をこの手にかけて一方通行だからこそ分かる。

骨や内蔵人体全てを砕いた感触は今もこの手に残っていた。

あれだけミンチ状況になって生きてる事など学園都市のレベル5だとしても不可能。

もし、仮に生きていたとしても、一生動けない体になるのは間違いないだろう。

なのに垣根は肉片になった事じたいがまるでなかったかのように今、この場所にいる。

一方通行の疑問を垣根は愉快的な笑みを浮かべながら、歌を歌うかのようにスラスラと答えた。

「確かに：一年前俺はお前に文字通り『肉片』に変えられた。だが別に死んだ訳じゃねえ」

死んだ訳じゃない。確かに一方通行自身、垣根の死を直に確かめた訳じゃない。

しかし、肉片に変えられた人間が昔の原型を保っている……？それこそが異常だ。

垣根は一方通行の表情を見て、苦笑した。

まるで、一方通行がそう言った疑問にたどり着く事は分かっていたと思わせるような……そんな感じだった。

垣根は最初から用意されていた台本を読むかのようにスラスラと言葉を続ける。

「お前に肉片に変えられた俺のその後は悲惨なものだった。アレイスターのクソ野郎にネバネバした液体の中に入れられて、脳みそなんか3つに分けられて保存されるわ、能力を吐き出すためだけの塊にされちまったんだからなあ」

垣根はそんな自分の不幸を笑いながら語っていた。

まるで昔話しを楽しそうに語るお年寄りのように。

「アレイスターは俺をどんな形でも再利用しようとしてんだろうなあ自分のプランのために……しかしアレイスターのプランは失敗に終わり、奴は学園都市から姿を消した」

垣根は話しを続ける。

「必要のなくなった俺は薬品漬けのまま放置され、薄暗い部屋ですつと過ごして来た。孤独で暗くて、闇なんかよりずっと深くドロドロしたそんな漆黒の中で俺はずつと過ごして来た。……あの日が来るまでなあ」

垣根は話しを一度きり、隣にいる漆黒のコートを羽織りその下に白衣を着た中年の男へ視線を向けた。

「全く、この人には頭があがらないぜ、バラバラになった俺を回収してくれたうえに、肉体まで取り戻してくれたんだからな」

何を言っているんだ……？回収された？肉体を取り戻した？

回収されと言言葉は分かる。隣にいる白衣を着た男がミンチ状態になった垣根を回収したと言事なのだろう。

しかし、肉体を取り戻したとは？

あれだけバラバラになった肉体を修復する事が出来るのだろうか……？

一方通行は垣根を回収した白衣を着た男へ視線を移した。

白衣を着た男は一方通行の視線に気づいたのか細長いつり目を更に細くし、蛇のような眼光で一方通行に微笑んだ。

その瞬間、ゾクツ！！と一方通行の背中に冷たい物が流れた。

「（……ツ！！この感じは！？）」

胸を押し潰すような感覚が一方通行を突如に襲った。

初めての経験ではない、海原、エイワスに近づいた時にも感じた事がある。

「……ッ！テメエ何モンだア！？」

突如に叫び出す一方通行。とても嫌な予感がこの男からした。

心臓を押し潰すような感覚を抑えながら一方通行は白衣の男を真紅の眼光で睨みつける。

白衣を着た男は獣のような瞳で睨みつける一方通行に気圧される事なく、ゆっくりと口を開いた。

「口の悪いガキだな気品に少し欠けるが寛大な私はお前を許そう」

上から目線な口調で話す白衣の男。

その一言でこの男の性格が嫌な奴と言う事は理解した。

「寛大な私の名前は対馬黄河。世界一寛大な学者であり、研究者であり、医者であり、新世界の鮮血の9人の一人である」

対馬は白衣の胸ポケットから煙草とライターを取り出し、煙草に火をつける。

「全く、おい垣根、さっきから無駄話しが過ぎるぞ、寛大な私はさつきまで寛大に話しを寛大に聞いていたが、流石に寛大な私でもこれ以上の私語は許さんぞ。早く当初の予定通りそこに転がっている『モルモット』共を回収しろ」

そう言われた垣根は軽く舌打ちをし、一方通行に背を向け渋々地面に転がって呻き声をあげている男達の元へと近づいていった。

一方通行は垣根の潔さよさに驚く、あの垣根帝督が反論する事なく従う。それは異様な光景だった。

この対馬と言う男の底知れぬ何かを一方通行は確かに感じた。

「お前達の目的はなんだ？さっきの会話を聞くかぎりじゃあこの騒動も最初から仕込まれたよオじゃねエか？」

垣根が生きていた事で本当は最初に聞くはずだった事を見失っていた。

垣根が生きている、そして動いている、それは認めざるえない事実。

しかし何故垣根を生き返らせた？

対馬と言う男は垣根を蘇えらせて何をするつもりだ？

全身に電撃のような悪寒が一方通行の体を駆け巡った。

嫌な予感がする。

「君の言う通りこの遊園地での『実験』は私が仕組んだ事だ、目的はそうだな……チカラを身につけた愚かな無能者は一体、どのような行動をとり、どのようにチカラを使うのか？って言う人間の思考回路の検証って所かな？」

「検証だとオ？こんな関係のない人間を巻き込んで何がしてエんだ」

「そんなにむきになって怒るなよ、ただの実験あそびじゃないか」

遊び。その言葉を聞いた途端、一方通行は異常なまでに反応した。

「遊びだとオ！？テメエらのせいで何人の人間が傷ついたと思ってやがる！！」

「知らんな。そして寛大な私はそんなちっぽけな事など気にしない」

感情のない声で淡々と答える対馬。

その態度に一方通行の怒りに火が着いた。

多分、垣根と絡んでいる以上こいつは『闇の住人』だ。

そんな闇に生きる人間が光に生きる人間に危害を加える。

一方通行はそれが許せなかった。

ラストオーダーと同じ光の世界の住人が傷つく事が……。

一方通行は電源スイッチがオンになっているかを確認、対馬を怒りの籠もった眼差しで睨む。

「テメエがどう言った目的でこの遊園地を襲ったかは知らねエ、けどな！！これ以上関係のない人間を巻き込むつつうんなら容赦はしねエぞ！！」

戦闘体制に入る一方通行。それに対して対馬は構える事もなく、一言だけポツリと告げた。

「チョーカーのスイッチを切れ」

そして、対馬は目線をとある方向に向けた。

対馬の目線の先にあるのは……風力発電の形をモチーフにした観覧車だった。

四枚のプロペラにつけられたら一番右側のゴンドラに1人の幼い少女がいた。

ラストオーダー、少女の周りを取り囲むように観覧車の下には5人、白衣を着て拳銃を持った男達がいた。

一方通行もそれに気がついた。

「…………ツ！！テメエ！！」

「あの少女がどうなってもいいのかな？さあ電極チョーカーのスイッチを切りなさい」

怒りで震える手をぎこちなく動かしながら、一方通行は電極チョーカーのスイッチを切った。

一方通行は能力の使えない『ただの人』へと戻ってしまった。



「利口だな。そして、安心したまえ君達に危害を加えるつもりはない。私は実験の後始末をしに来ただけだ」

そう言い放ち、対馬は男達を回収した垣根の方に目を向けた。

「正直、今回は被験体も集めるのが目的だったがまあいいだろう。

あのモルモットどもは回収したし今回はこれで失礼させてもらうよ」

そう言うと対馬は一方通行に背を向けた。

「あっそうそう」

対馬は一方通行に背を向けたまま、何かを思い出したかのように言った。

「直に楽しいパーティーが始まるから楽しみにしてくれたまえ、君には是非参加して欲しいからね」

そして、ゆっくりとした足取りで遊園地の奥の方へ向かって行った。

そして、しばらくして垣根と対馬の姿は遊園地から姿を消した。あのラストオーダーをとり囲んでいた白衣の男達もまるで最初からいなかったかのような静寂が戻って来た。

遠くからサイレンの音が聞こえる。騒ぎを聞きつけたアンチスキルがこちらに向かって来ているようだった。

「どオなってやがる」

一方通行はポツリと呟いた。

静けさを取り戻した遊園地。一方通行の髪を撫でるように優しく吹く風が、何故か一方通行の胸のモヤモヤを掻き立てるような複雑な気持ちにする。

垣根帝督。対馬黄河。あの2人は一体何がしたかったんだろうか……？

彼らの行動には不可解な点が多かった。

何故あの時、見計らったように垣根帝督は現れたのだろうか。

そして、対馬が言っていた無能者がチカラを得た時の行動の検証。無能者がチカラを得たとは一体どういう事なのだろう。

そして奴らは殺そうと思えば一方通行を殺せた筈だ。ラストオーダーを人質に取るなどと大胆な事までしておいて、何故殺さなかったんだ？

対馬の方に恨みを買った覚えはないが、垣根は自分を恨むだけの理由がある。

垣根は自分に復讐するのが目的と考えるのが妥当だ。

しかし、奴は対馬と共に潔さよく引いた。

「クソツ分からねエ事だらけだな」

吐き捨てるような言葉を放ち、ふと視線を観覧車の方に向けた。

「大丈夫ってミサカは〜」

ラストオーダーが泣きそうな顔でこちらに向かって走って来ている。

理由はどうあれ結局、あの笑顔を守れなかった。

あの2人さえ現れなければ、今頃はラストオーダーとの楽しい思い出が出来ていた筈だ。

もつと気持ちよく優しい夕焼けの風を感じる事が出来た筈だった。

「クソツたれがッ!!」

もう一度吐き捨てるような言葉を放ち。奴らが去った場所を忌々しく見つめた。

この事件が後に一方通行とラストオーダーを戦いの渦に巻き込む事になる事はまだ知る由もなかった。

――――

2

「許してくれ!!俺達が悪かった」

小さなマンションの一室で男達は猛獣に襲われる小さな子猫のように震えていた。

「だってどうする?対馬さん」

垣根帝督は部屋の隅で怯える男達を見ながら楽しそうに笑っていた。  
対馬は泣き喚く男達にゆっくりと近づき、優しいこう言った。

「大丈夫、そんなに怯える事はないよ。被験体の回収が出来なかった事とか、一方通行に一泡もふかせる事が出来なかった事とか、全然怒ってないから……」

対馬は怯える3人の男達の髪を優しい顔付きでそつと撫でた。しかし、男達に安堵の表情が戻る事はない。

「や…めッて」

男の1人が震える唇をガクガクと揺らし、叫んだ。

「やめてくれエエえええええええッ!!」

血の吐くような絶叫をあげる男。

そしてその瞬間。

ズシュッ!!と鈍い音と共に血しづきが男から吹き出た。

眼球は取れ、耳から血が噴水のように流れ落ち、男の皮膚は真っ赤に染められ、男は力なくその場に倒れた。

倒れた男からは夥しいほどの血の水溜まりが出来ていた。残る2人の男達から血の気が引いた。

そして、対馬がその2人の男達の頭に触れた。

「さあよく頑張ったね？寛大な私は君達に休みを与えよう」

男達の顔が絶望に塗り替えられた。

そして、男達は見た、人間が作り出す表情とは思えないほど、狂った笑みを浮かべる猛獣（対馬）の顔を人間が作り出す表情はこんなにも醜いものがあるのかと……そして。

ズシュッ!!と言う音と共に男達は体を赤に染め、そのまま動かなくなつた。

「パーソナルオートブシー 人体解剖相変わらずえげつない能力ですね対馬さん」

真っ赤に染まり人間の原型を保っていない男達を見ながら垣根は飛び出た男の眼球を足で踏み潰した。

「少しばかりやり過ぎたか……？まあどうでもいい寛大な私はそんな事を気にしない」

対馬は転がる男達に目もくれず、机の上に設置されているディスプレイ型のパソコンを見つめている。

画面には棒グラフや小難しい計画書のような色々な文章が表示されていた。

「垣根、例の物は完成したか？」

「ああ、舛田や佐々木とか言う奴らに試しに使用した結果レベル4まで能力を引き上げる事に成功した」

対馬は机の引き出しから一枚のCDケースを取り出した。  
CDケースには赤い文字でこう書かれている。

『A u n n n o s l e v e l u p p e r』

垣根はそのCDケースを受け取る。

「それを学園都市中にばらまけ、私はインターネットを使った方法でばらまく、貴様は街中に転がっているスキルアウトの連中にも適当にばらまいておけ」

「へいへい了解しましたよ。まさか、木山とか言うこれを作った科学者もまさかこんな形で使われるとは思ってなかっただろうに」

「他人の事など寛大な私には関係ない」

興味の無さそうな声を出す対馬。垣根は対馬の寛大と言う言葉の意味が少し気になったが、まあ「早くいけ寛大な私を怒らせたいのか？」と言われるだけだと思い、溜め息を吐いて口を黙らせた。

黙々と作業に取り掛かった対馬はキーボードをピアノを弾くようにもの凄い早さで叩いていく。

そして対馬が一度手を止めが決定キーを押した瞬間、画面いつぱいに1人の少女の写真が映し出された。

「で？この子の方は何も手を打たなくていいのか？何ならこいつをばらまく前に捕獲しに行くけど……」

垣根は両手の関節をポキポキと鳴らしている。やる気は満々らしい。

「まあまだいい。彼女の方は私なんかしておく。そう焦るな、お前は私の指示通りに動けばいいんだ」

つまんねえ……と垣根は吐き捨て、気だるそうに肩を落とし、画面に映し出された女の子をもう一度見つめる。

映し出しされた女の子の写真の上に小さな文字でこう書かれていた。

『御坂美琴を使った絶対能力者進化計画成功率100%』

こうして禁断の戦いは始まる。御坂美琴、幻想御手、絶対能力者。この全てが交差する時、絶望的な悲しい物語が始まる。

第3章 幻想御手 对馬黄河来襲編 開幕

第3章 幻想御手 地帝の対馬黄河来襲編（後書き）

） さあ！！ここからが本番です。皆さんスランプな私に希望の光を



第26話 ホモリアリテイー（前書き）

お気に入りが増えただと！！

ありがとうございます。

あまり評価は気にせずやっている作者ですが正直嬉しいです！！ありがとうございます

そして俺のスランプはいつ消えるんだ？

駄文ばかりで申し訳ないです

## 第26話 ホモリアリテイー

今日も平和な学園都市。

春の柔らかい日差しを感じる今日この頃、上条当麻、土御門元春、青ピアス、天城焰の上条属性4人組は学園都市の繁華街を全力で走り抜けていた。

今はお昼時だ、昼食を済ましに街へくり出す大学生達で賑わう繁華街、彼らの様な高校生は、基本お昼休みに学校の外へ出ることを校則で禁止されている。

そういう訳もあって彼ら上条属性4人は通行人達から注目を得ていた。

全力で走り抜ける彼らに最早明確な目的地など存在しない。

ただ……後ろから迫ってくる恐怖から逃げ切るのみ。

「ちくしょおッ！！なんでこんなに不幸なんですかアあああッ！！」

「泣き言はいいから走れ、かみゃん捕まったら終わりだぞ」

土御門の声に何時ものようなふざけた猫ボイスはない。

それだけ土御門も追い詰められた。彼の顔からは雨に何時間も打たれたような汗がポタポタと地面になだれ落ちていた。

くそツと上条は悪態づいた。隣にいる青ピアスや天城を見ると、彼らも土御門と同じように尋常ではない汗が頬をつたってポタポタと落ちていた。

「くそ」あの野郎全然ペースが落ちへんやん。ああこんな悲劇の逃走劇は謎の組織に追われる金髪碧眼少女の特権やと思っとなのにな

「  
いつもと変わらない調子で意味不明な言語を放つ青ピアス。しかしいつもの彼らなら金髪碧眼の前に必ず何か機会型とか、天空落下、未来の猫型ロボットなどの彼特有の形容詞がつく筈のだが、最早彼にも今はそんな余裕はないらしい。」

「当麻、奴は一体何者なんだ？なんか動きが半端じゃない位気持ち悪いんですけど！！」

天城は走りながら自分達を追ってくる追跡者の方を振り向いた。角刈りで筋肉質、タンクトップに膝まである半パンをはいた男が1人。

男は何故か猛獣のような格好で彼らを追っていた。比喻ではない、本当に獲物を見つけた猛獣のように四つん這いで繁華街を走り抜けていた。

「ホムヤんは知らないのか？奴は今年から俺達の学校に配属になった新たな生活指導員『ほめた すきお捕藻田好夫』だ」

天城の額に熱い汗と冷や汗が両方混じった嫌な液体が湧き出た。名前からして何か危なそうな感じだった。

「ッてかあくまで生徒の見本となる先生が街中を不気味な格好で走り抜けるってどうなんですかッ！！」

天城の疑問を纏った雄叫びがお昼の平和な繁華街に響き渡った。そして……天城の疑問に答えるかのように、後ろから何かを叫ぶ生活指導員の声が聞こえた。

「まっちなさっい君達！！急遽に退職した前任の災誤先生に代わり、学校を脱走したあなた達に厳重な罰則を与つたえまっす、大人しくそこに止まりなっさっい」

英語を知らない中学生が無理に日本語を英語に訳するような声を出す捕藻田先生。

あまりの異常な後継に通行人達は関わりたくないのか、彼らに道を譲るように早速と遠ざかって行く。

通行人達から見たら、ゴリラに追われる人間を見ているようだった。

「くそッこれなら前任の災誤先生の方が二倍はマシだったぞ」

上条は一年前の災誤先生の顔を鮮明に思い出していた。

因みに災誤先生はとある日、お昼休みに学校を抜け出した上条達を追っかけ回した時、とある女の子に強烈なタックルをお見舞されそのショック（女の子に負けた）のあまりそのまま退職した。なんとも可哀想な生活指導員だった。

しかし今はそんな過去の出来事を思い出しても仕方がない。

とにかく今は逃げる。

それだけだった。

「まっちなさっい君達！！本当に私から逃げ切れると思っていくるの、ですかっ？だとしたら甘々でっす！」

ふと後ろを振り向いた上条の表情がカチコチに凍りついた。

なんと……捕藻田先生が四つん這い走行を止めて、『二足歩行』に変わったのだ。

他の3人もそれに気が付き、何かとつもデンジャラスな予感が全身に駆け巡った。

「君達ッ！！私を本気にさせましたね？もう許しまつせん、あなた達4人共、生まれたてほやほやの私の脇汗わきあせをたっぷりと保健室のベットユツ（ベッド）で嗅がせてあげま〜す」

ゾゾゾッ！！4人の背中に虫が登るような奇妙な感覚が襲いかかった。

4人は得体の知れない恐怖で足が震えながらも更に全力で走り抜けた。

「ヤバいぞ！！あの体制は、捕藻田先生が誇る超能力『ホモリアリティー』が発動した合図だッ！！」

土御門が捕藻田のファイティングポーズを見て、ふとそんな事を口走った。

ホモリアリティーその能力名の説明は言うまでもない。

「行くわよッ！！」

気持ち悪いオカマボイスと共に筋肉質な変態ホモリスト、捕藻田先生がさつきとは比べものにならない位の速さで接近してきた。

その動きは正に標的に突き進むターミネーターのような俊敏な動きだった。

「ハハハハッ！！」

不気味な笑い声と共にスガガガッ！！と地面を蹴りながら、猛烈な勢いで迫り来る変態ホモリスト。

4人は半泣き状態で繁華街を駆け巡る。

しかし距離を縮まる一方。

そこでふいに上条の隣を走る土御門が話しかけて来た。

「カミヤン提案があるだが……」

「提案？」

土御門はコクリと小さく頷き、話しを続けた。

「このままでは捕まるのは時間の問題だ、だから1つこの状況を抜出す打開策を見つけた」

上条の目に希望の灯火が光出した。

そして、土御門は青ピラスと何か不自然なアイコントを取るとお互い頷いた。

「どうやら青ピラスも土御門と同じ打開策を見つけ出したらしい。」

「カミヤン、この方法は少々危険が伴う、だが成功すれば被害は最小で済むはずだこの方法はカミヤンがいなければ成功しない……頼む協力してくれ」

最小という言葉がとても気になるが、今はその事を深く考えている余裕はない。

上条は強く頷き。

「分かった。お前の策に俺は乗る!!」

「そうか……と土御門は小さく呟いた。」

「ありがとうカミヤン!!そして……」

言葉を不自然に一度きり。

「すまんッ!!」

上条の右を走る土御門、左を走っていた青ピアスは突如急ブレーキをかけ、上条の両肩を掴んだ。いきなり両肩を掴まれて急ブレーキをかけられた上条は足は地面から離れブランコのように足が宙に浮いた。

上条の顔が絶望に塗り替えられた。

「まさかお前らッ!?!」

上条は絶叫した。

こいつらの思考パターンを上条は高速で演算した。演算結果が出るまでに2秒とかからなかった。

「俺を生け贄にする気かお前らッ!!」

にまりッと上条をわざと不快にさせる笑みを浮かべる土御門と青ピアス。

そして……上条が2人の手を振り解こうとした、その瞬間よりも早く、土御門と青ピアスは上条当麻を追跡者の方へと放り投げた。

「当麻ッ!!」

「振り向くなホムヤン本人の了承は得ている、それに何より振り向かない事がせめてもの友情だ」

「そうやでホムヤンみんなが向かえる最高のハッピーエンドにはカミヤンを犠牲にする必要があつたんや」

その『みんな』の中には確実に上条の事は含まれてない。  
彼ら3人は置き去りにされた上条に振り向かず、我先にと逃げて  
行った。

置き去りにされた上条は尻餅をついたまま遠ざかって行く裏切り  
者達をただ見ている事しか出来なかった。

そして終焉は来る。

「はい上条ちゃんゲツチュユ!!」

追跡者たる捕藻田先生が尻餅をついている上条の背後に立ち尽く  
している。

上条は振り向く事は出来ない。

だがらせてめて奇跡を祈った。

災誤先生に追いつめられた時、強烈なタックルで追跡者を撃退し  
てくれた少女を思い出していた。

そして叫んでみた。無駄だとは分かっている……

「助けてくれ五和アあああああッ!!」

ゲシッ!!上条の叫びと共に強烈なボディーパープローが上条のあば  
らに食い込んだ。

「がはッ!!」

「駄目でしょう街中で大きな声を出しちゃさあ帰って嚴重なる罰を  
保健室でた・つぶ・りとお見舞してあげるわ」

「嫌アあああああッ!!」



上条はそのまま捕藻田先生にお姫様抱っこされる形で、愛の巣窟へと連行されてしまった。

上条当麻がこの後どうなったかは文章で表す事を控えさせて頂きたい。

2

「大丈夫ですか？上条ちゃん」

小萌先生の優しい声が聞こえる。

今は保健室の純白な清潔感あふれるベッドの上に横たわっている。何故か真っ白なベッドのシーツはネズミ色に変色し、あちらこちらに水玉のアートを作り出していた。

それは上条当麻の涙だった。

「……小萌先生、俺今日大事な何かを無くした気がします。ううっ……うっ……」

嗚咽を漏らしながら再び泣き始める上条に小萌はあたふたと必死に涙の理由を聞くこととする。

しかし傷つけられた純情少年上条当麻の心が癒える事はない。彼はひたすら泣いた。

この傷を癒やすのに涙は必要な物だと悟ったから……。

「そんなに泣いてばかりいては先生も困ります、誰かにいじめられたとかそんな感じなのですか？」

いじめとさえいじめなのだが、そこら辺のいじめとは質が違う。友達に平然と裏切られ、捨てられ、投げ飛ばされ、生け贄にされる。これをいじめとするには限度があるだろう。

上条は俯き涙を流したまま黙り込む。

小萌もそんな上条を見て半泣きになりつつあった。

嫌な沈黙が続く。

保健室に飾られた時計の音だけ虚しくカチカチと流れる。とそこで沈黙は破られた。

突如に保健室の扉が勢いよく開けられた。

「月詠先生いるじゃん！」

扉の向こうには緑色のジャージを来た綺麗な女性がいた。しかしどうも息が荒くとても余裕のない表情だった。

「どうかしたのですか黄泉川先生？」

黄泉川と言われる女性はベッドで泣いている上条を一旦気に止めたが視線をすぐに小萌の方へと向けた。

「月詠先生、今からちょい出てくる、うちのクラス任せてもいいじゃないん？」

「アンチスキルのお仕事ですか？」

「……ああ、ちつと今回は厄介そうじゃん」

黄泉川は小萌に内緒話をするかのようにコソコソと何かを喋り出した。

涙を流す上条にもその言葉が断片的に聞こえる。

「第7学区……メントの……が……襲われ……犯人は……スキルア……しい」

「……えっ？……アウトの皆さんは超能力は……ない……のに……ジャッジ……を……なんて……」

「それがど……スキル……の……が……超能力を……が……確認されるじゃん」

黄泉川は小萌にある程度の事を報告し、保健室の扉へと向かった。

「じゃッ月詠先生後は任せたじゃん」

「待ってくださいなのです」

さっそうとその場を去ろうとする黄泉川を小萌は呼び止めた。

小萌は何かを思い出すように心配そうな声をあげる。

「今回の事、一年前のあの事件とあまりにも酷似しています。気を付けてくださいね黄泉川先生」

黄泉川もその一年前に起きた何かに気が付いているのか、一瞬顔を曇らせた。しかしすぐに顔を元に戻した。

「まっこの仕事が終わったらメールするじゃん、全部終わったら飲みに行くじゃんよ」

そう言い残し黄泉川は保健室を飛び出たした。

心配そうに黄泉川が出て行った扉を眺める小萌先生に泣いていた上条は目を真っ赤に腫らしながら口を開いた。

「何かあったんですか小萌先生？」

いきなり上条に話しかけられた小萌は肩をビクウツ！と跳ね上がらせた。

そして、上条の顔を見て絶叫した。

「あわわわわ……上条ちゃんどうしたのですか！？その顔！！」

「はい？」

自分の質問と異なる答えが返ってきたため上条はおもわず面を喰らってしまった。

さっきまで少しブルーな感じだった小萌の顔は真っ白に染まりわなわなと震えている。

何やら上条の顔を指しているようなのだが……はて？自分の顔に何かついているのかと上条は保健室に飾られているB5用紙位の鏡に目を向けた。

ふむ、今日も我ながらツンツンである。と一言今日の自分への感想を述べ、自分の顔の異常を探してして見る。

……え〜と……ッ！！

上条は気付いてしまった。

自分の頬に何やら異様な唇の跡がついているではありませんか。その跡は決して女の子につけられたら生々しいものではない、跡が残るまで強引に吸い付かれた様な雰囲気を漂わせるその唇の跡。

だとしたらこの唇の跡は誰のもの……？ いや誰かは分かっている。しかし決して認めたくない何かが思考を遠回しにしてしまう。

「上条ちゃん？」

上条の体が小刻みに震え出した。プルプルと泣いているようにも見えるが怒っているようにも見えるその姿に小萌は何も言えずに黙っていた。

そしてようやく心の決心がついた上条は怒りの雄叫びをあげた。

「あのッ捕藻田の野郎ッ！！純情少年上条当麻のまだだれにも唇を許した事のない頬にキスしやがったなッ！」

捕藻田先生にキスされた。その言葉を聞いた直後、月詠小萌は顔を真っ赤に染めその場に倒れた。

3

第7学区の裏路地、建物と建物の上に挟まれた空間に位置するこの裏路地は昼間だと言つのに灯りはほとんどなく、薄暗い不気味な

世界となっている。

一般の人間ならまず立ち寄る事のないだろうと言うこの場所で惨劇は起きていた。

「弱っちいなあ」

1人の少年の周りを10人位のアンチスキルが取り囲み包囲網を張っていた。

少年はそんな彼らを見て苦笑した。

「おいおいお前らそんなオモチャのような拳銃で俺を相手にしようってかあ？ムカついた、消しくずにしてやるよお前ら」

少年は靴のつま先をトントンと叩き、この状況の中でも臆する事もなく余裕の笑みを浮かべていた。

その笑みに取り囲んでいるアンチスキル達は一步、得体のしれない恐怖にたじろいだ。

そんな中、1人の女性のアンチスキルが少年に向かって話しかける。

「お前が犯行を犯したスキルアウトを逃がした事は分かっている、大人しく両手をあげて降伏するじゃん」

周りのアンチスキルと違って一步も退く事のない女性アンチスキル黄泉川を見て少年は口笛を吹いて賞賛を称える。

「いいねえ、その勇敢な態度、すっげー握り潰したくなる」

「降伏するのか、しないのかどっちじゃんッ！！」

「もちろん決まってる」

少年はポケットに手を入れたまま、ゆっくりと地面を蹴った。

「お前らを殺してこの場を立ち去る、それだけだ」

少年の言葉が終わると同時に少年が蹴った地面の辺りに真っ赤な閃光が走る。

「まずいッみんなにげッー」

黄泉川の声は最後まで聞こえず、轟！！と言う爆炎の音で掻き消された。

少年を中心に半径30メートルをほどを覆い隠す爆炎が辺り一面を包み込んだ。

建物と建物の上に挟まれた裏路地に火の柱が上がる。

そして黄泉川を含むアンチスキル達は一瞬にして全滅した。

爆心地の中心に立つ少年、垣根帝督は彼らの生死を確認する事なく、ゆっくりと裏路地の奥の方へと消えていった。

第26話〜ホモリアリティー完

## 第27話 動き出す野望（前書き）

お気に入り75件です。ありがとうございます！！

さて実はあらずじを執筆すると言いましたが、実はまだできていません。申し訳ないです。

そこで今回、一章、二章で起きた事件の本当に軽い内容ですが前書きに書きます。

駅前的事件。

鮮血の9人、氷帝の翡翠氷河が天城焔を襲撃した事件。

この戦闘のおかげで建物やアスファルトなどが破壊された。アンチスキル、ジャツジメントの捜査は打ち切りにされた、詳細は不明。

常盤台中学生拉致監禁事件。

常盤台中学の送迎バスが襲撃された事件。

襲撃されたバスの中の生徒達は廃ビルに連れ去られてしまった。

事態を重く見た鏡晴也、白井黒子は廃ビルに潜入し、犯人グループと激突した事件。



## 第27話 動き出す野望

灯りもつけられていない病室の一室。

薄暗く静寂が支配するこの部屋で黄泉川愛穂は眠っていた。

彼女の体は全身を包帯で巻かれ、体の至る所に痛々しいほどの電極が貼り付けられており、病室に置かれている心電図の機会の音だけ病室に静かに響いていた。

死んだように静かに眠る黄泉川、そのそばに2人の小さな女の子がいた。

ラストオーダーと月詠小萌。

涙を両目いっぱい溜めたラストオーダーは黄泉川の右手を持つたまま、返事の返って来ない黄泉川に向かって必死に話しかけていた。

「お願いだから目を覚ましてってミサカはお願いしてみる……起き  
てよヨミカワ……」

聞いている者の息を詰まらす位にかすれた弱々しい声だった。

「黄泉川先生……全部終わったら一緒に飲みに行こうって約束した  
のにどうしてこうなっちゃったんですか……」

ラストオーダーの隣にいる小萌も小さな体を目一杯震わし涙を飲んでいた。

彼女の声もまた弱々しく聞いていて辛い涙の籠もった声だった。

そんな少女達を後ろから呆然と見ている少年一方通行。

彼は悲しみに満ちている少女達をただ見守る事しか出来なかった。  
別に一方通行とて悲しくない訳じゃない。

説教くさいし、馴れ馴れしいし、自分の心を無視してズカズカと入ってくる。

けど。それでも……。

こんな自分を見捨てる事なく、真っ向から自分に向かってきてくれた数少ない大切な人だった。

「（なんで、こんな事に……）」

一方通行はそれを出す事はしない。

もし一方通行が弱音を吐けば、ラストオーダーや小萌までもを不安にさせてしまう。

それだけは駄目だった。せめて自分だけはしっかりしてないと黄泉川にきつと笑われてしまう。

「（それでもよオ……）」

限界だった。

一方通行は病室の外へ飛び出し、夜の位病院の廊下へと飛び出た。そして、病院の壁を全力で殴った。

ガンツ！！と鈍い音が廊下に響き渡った。

電極のスイッチが入っていない一方通行の拳は真っ赤に腫れていた。

それでも、何度も何度も手に血が滲んでも尚、殴り続ける事を止めなかった。

その時……

「自分をそんなに責めてはいけないよ一方通行」

血で真っ赤に染まった一方通行の拳を後ろから掴む冥土帰し。

一方通行は振り向かない。

今、自分の顔がどうなっているか分からなかったからこそ……振り向けなかった。

そして振り向かないままゆっくりと震える口を動かした。

「黄泉川の様態はどうなんだ………」

「正直、危険な状態だよ」

間髪いれずに答える冥土歸し。

彼は医者だ、その場でもっと安心させる事も言えたはずだが、それはしない。

そんな一時の優しさに意味はない。

それを知っているからこそ例えどんなに彼が傷ついたとしても、慰めの言葉あえてかけなかった。

そして何より自分には医者として本当の事を話さなくてはならない責任がある。

冥土歸しは震える一方通行の手を握りしめたまま話しを続けた。

「全身に重度の火傷、壁に叩きつけられた衝撃で骨が内臓に突き刺さっていた、大規模な爆発に巻き込まれたみたいだね、彼女が着ていたアンチスキルの防具が耐熱性の特殊加工したアーマーだったのがせめてもの救いだっただよ、それがなければ今頃は……」

最後まで言葉を続けない冥土歸し。この先の言葉は彼にとって最も言いたくない言葉であって、一方通行にとっても聞きたくない言葉だった。

そしてしばらく重たい沈黙が続く。

悲しいに満ち、この胸を押さえつけるような気持ちを必死に堪えようとする少年の背中を冥土歸しは静かに見守っていた。

軽い慰さめは逆に一方通行の心を傷つけるだけだ。そんな事で少年の心が癒えるとは思っていない。

だから言った。冥土帰しの言葉が沈黙を破る。

「いつまでそうしている気なんだい一方通行」

「……うるせエ」

「彼女はきつと君がそんな顔をする事を望んでいないと思うよ」

「うるせエツツてンだろつがアあああッ!!」

冥土帰しの言葉に激昂する一方通行。

振り返った一方通行は冥土帰しの胸ぐらを持ちそのまま壁に押し付けた。

「テメエに一体何が分かるつつうンだよオオ! 守るって約束したんだア、なのに俺は……守れなかつたんだ!!」

奴当たりだつて事は分かっている。怒りをぶつける相手が違うのだから分かつている。

それでもこの胸を圧迫するような衝撃を和らげる方法を知らない少年はこの悲しみを誰かにぶつけるしかなかった。

それでもしなければ自分のこの胸に留まるいけない闇を誰かにぶつけてしまいそうだったから。

もう自分では止める事が出来なかった。

「何が学園都市最強だア!! 結局俺は黄泉川もあのガキの笑顔も何一つ守れてねエじゃあねエかッ!! ちくしょうがアアあああああああああッ!!」

自分を責め続ける一方通行。

別に彼が悪いわけじゃない。一方通行は黄泉川が負傷した時その場にいなかった。

その場にいなかった一方通行に黄泉川を守る事など出来ない。

けど、彼が悔やんでいるのはそんな小さな次元の話ではない。

重傷を負い今もなお死んだように眠る黄泉川、自分の非力を恨む。

学園都市最強と言う名を持ちながら、彼女に何も出来ない自分が

……。

泣いている少女の心すら癒やす事の出来ない自分が、何よりも恨んだ。

自分を責め、悔やみ続ける一方通行。

そんな少年に冥土帰しは初めて怒りを現わにした。

「いい加減にしるよ一方通行。いつまで終わった事を悔やんでいるつもりだ」

「……ッ!」

初めて見る冥土帰しの表情に一方通行は体は強張る。

「君が今しなくてはならない事はなんだ？そうやって自分を責め続ける事か？悔やみ続ける事か？そうじゃないはずだろう」

怒りの籠もった淡々とした声で冥土帰しは一方通行の揺らいでいる真っ赤な瞳から目をそらさず話しを続けた。

「君がしなくてはならない事はあの少女の悲しみを少しでも和らげる事だろ違うかい？」

酷な話しだと思う、一方通行だって悲しいのだ、その悲しみの気持ちは抑えきれないから今こうして嘆いているのに。

それを分かった上で冥土帰しは言っていた。

例え、一方通行がどれだけ傷ついたとしても、それが残酷な話しだとしても、それを全て分かった上での話しだった。

「大丈夫だ、彼女は必ず助ける。だから君はあの少女の笑顔を取り戻す事だけを考えるんだ、流石の僕でもあの少女の悲しみを和らげる事は出来ないからね」

冥土帰しは優しく自分の胸ぐらを掴んでいる一方通行の手を優しくゆっくりと離していく。

そしてもう一度言った。

「大丈夫彼女の命と体は完璧な形で救って見せる、それが僕が今やるべき事だかね」

冥土帰しはそう言うのと俯いた一方通行の肩に優しく手を添えた。

温かい手の温もりを服の上からしっかりと感じた。

一方通行は俯いたまま、冥土帰しに向かってポツリと呟いた。

「黄泉川を頼む」

その一言だけ告げ、冥土帰しに背を向けた。そして薄暗い廊下の先の闇に溶け込むように一方通行は歩いて行った。

「やり過ぎだ」

「悪い」

夜の学園都市が一望出来るオフィスピルの屋上に対馬黄河と垣根帝督の姿があった。

気持ちのよい春の夜風が対馬の長い銀髪のを撫でるように優しく吹いていた。

にも関わらず、対馬は大変ご立腹だった。

「アンチスキル相手にあそこまでする必要があったのか？お前のお陰で学園都市中大騒ぎだ、これでは計画に支障をきたしてしまうではないか」

「だから悪かったって言ってんだろ？そもそもあの出来損ない共がたかがジャツジメントの支部を襲うのに時間をかけ過ぎたのがいけなかったんだろ？」

対馬は白衣の胸ポケットから煙草を取り出し火を付けた。

どうやら相当機嫌が悪いのかさつきから煙草を吸うペースが異常に早い。

「まったく、まあいい寛大な私はお前を許そう」

これ以上終わった事を議論しても仕方がないと感じた対馬は一枚のA4用紙位の紙をズボンのポケットから取り出した。

垣根はそれを受け取り目を通すが。

絶句。

内容が頭に入らない位に文字が小さく、小さな用紙にくまなくびつしりと文字が書かれていた。まるで文字の壁だ。

「読めねー」「読め」

はあーと深い溜め息をつき垣根は渋々文章に目を通した。

目がなんだかチカチカして来たが、対馬が怖い顔で睨んで来るので仕方なく黙々と読み続ける。

たっぷりと五分位かかって読み終えた垣根はその用紙を対馬へと返す。

「その用紙に書いていた通り、統括理事会にはこれから私達が起こす事件に目をつむってもらおうように配慮してもらっている。今回貴様が起こした大規模な爆発も統括理事会の方が上手く手を回してくれるみたいだ」

「まあ対馬さん達が所属してる『新世界』が統括理事会と繋がってる事は知ってるけどよ、あれだけ大規模な事やらかして全部隠し通せるもんか？」

垣根の疑問に対馬は心底つまらなそうに答えた。

「例の馬鹿翡翠が暴れた駅前的事件、幻想御手のテストで行った常盤台中学生拉致監禁事件、全て統括理事会の手回しだ、頭の固い連中ばかりだがそこそこ上手くやってくれている。それに一応それなりの大義名分も差し出している」

「大義名分？」

「ああ、例の2つの事件、あまりにも規模がでかつたもので治安



維持部隊共に調査は打ち切りだと言っても、正義心の強い者は納得しないだろう。だから一応犯人を差し出した」

つまり、駅前の事件と常盤台中学生拉致監禁事件の収集をつけるために対馬は全くでっちあげの犯人を統括理事会に差し出した。

『事件の調査は打ち切りだ』と統括理事会が指示をアンチスキルやジャツジメントに出した所で正義感の強い者は納得しない。

多分それなりの理由を求めてくるはずだ、そのような面倒事を起こさないためにでっちあげの犯人統括理事会に差し出し、後は統括理事会がアンチスキルやジャツジメント、学園都市中に嘘の犯人を公開する事によって場は収まる。

そうする事で学園都市中の人間は納得し、統括理事会も彼らから怪しまれずに事態を済ませる事が出来る。

「相変わらず考える事がえげつないな、どうせ犯人として統括理事会に差し出したのは『一般人』なんだろう？」

「当たり前だ。私の部下を犯人として差し出す手もあったが彼らは忙しくてな、そこら辺を歩いているスキルアウトの連中を犯人として統括理事会に渡した」

不可解な会話を続ける2人。彼らの会話を第三者が聞けば疑問を浮かべるだろう。

しかし垣根は全てを理解していた。

学園都市中にこの人間が犯人です。と言う証明をするのに統括理事会の証言だけでは信憑性が薄い。

そこで統括理事会は犯人（虚偽）をアンチスキルに身柄を引き渡し、無理やり自分が犯人だと証言させるようにした。

しかし無実の罪を背負された人間が自分の事を果たして犯人とするのだろうか？

脅すのは簡単だ、しかし限度がある。『殺す』などの脅し文句を使ってしまうえば殺されるならアンチスキルに真実を話してしまうだろう。

それは困る、対馬はなるべく問題が表沙汰にならないようにしたい。

だから対馬は使った自分の能力を……。

「寛大な私の能力、パーソナルオートマシー人体解剖を使えば人間の脳の操作など簡単に出来るさ、彼らの脳に犯人としての記憶を埋め込めば、奴らは自分が犯人だと思ってしまう、何の疑いもなしにな」

「怖いな対馬さんの能力は」

「ふん、しかし我ら鮮血の9人の中で私の能力などちっばけなものだ、特に死帝のフラリスの能力など最早私の能力とは比べものにならない位に怖いぞ」

「対馬さん話しが脱線してるぜ」

対馬は話しをよく脱線させる癖がある。そして脱線に脱線を重ね、更に脱線させる対馬は時々会話がおかしな方向に流れる事がある。

そうなると会話の本題に帰れなくなり、最後は元の会話に戻る事なく終わってしまう。

それを阻止したい垣根は無理やり話しを本題に戻した。

「それより御坂美琴の方はどうなんだ？」

御坂美琴。学園都市最強のレベル5の第3位。

彼女の存在は対馬のとあるに計画に絶対不可欠であると対馬に読

まされた用紙に記されてあった。

何故、御坂美琴が計画に必要なのかは詳しくは書かれいなかったが、対馬が行う計画に彼女の詳しい能力データなどを記入してあった。

垣根は御坂美琴の電気使い《エレクトリックマスター》として能力を応用した計画と見ている。

対馬が口を開く。

「ふむ、御坂美琴の件についてはもう少し様子見だ。まだ時ではないそれにもう少し彼女について調べておきたい事もあるしな」

調べたい事、さっきの用紙には御坂美琴の個人情報から能力データやAIM拡散力場の情報が事細かに記されていた。

一体対馬はこれ以上何を調べる気なのだろうと垣根はふと隣にいる対馬の顔を見た。

「……………ッ!？」

狂笑。

悪魔のような微笑みを浮かべている対馬。

人間が笑う事にこれほど恐怖を覚えた事はなかった。

対馬は御坂美琴のデータが記された用紙を見ながら、何か面白い遊びを見つけた悪魔のような笑みを浮かべていた。

「さあ、そろそろプランの第一段階と行こうか……………」

対馬は夜の闇に染まっている学園都市を眺めながら言う。

「壊してやろう、学園都市も理不尽なこの世界も御坂美琴も全て、そして始まる『我らの新たなる世界が』」

夜の病院と言うのはとても気味が悪いがものだ。

日中は見舞いの客や入院患者などが頻繁に出歩き、結構賑やかなのだが今は夜と言う事もあって人とすれ違う事もそうそうない。すれ違つとしたら巡回のナースさん位なものだろう。

そんな薄気味悪い病院の廊下を杖を片手に歩いている少年一方通行はいた。

一方通行の足取りは重たく、どこか弱々しい感じだった。夜の病院の闇が少年の心を包み込むように広がっている。

「（オレに今出来る事）」

一方通行の脳裏にあるのは冥土帰しの言葉だった。

君はあの少女の悲しみを和らげる事だけを考えるんだ。と冥土帰しは言った。

しかし実際どうしたらいい？

殺戮を繰り返して来た一方通行にとって誰かを慰めるなんて事は全く無縁のもの、一万回もの悲劇を生み続けて一方通行にとって誰かの悲しみを癒やす方法なんて分からなかった。

「（一体なんてあのガキに声をかけたらいい？クソツ駄目だ全然分からねエ）」

途方に暮れる一方通行。

そこで……

ゴンツ！！と誰かとぶつかった。

電極チョーカーのスイッチが入っていない一方通行は尻餅を作く形で地面に倒れた。

「申し訳ありませんとミサカは深く頭を下げ謝罪します」

暗闇のせいで相手の顔がはっきりとは見えないがどこか聞き覚えのある声だった。

ぶつかって来た少女も薄暗闇のせいか一方通行の姿が見えていないようだった。

しかしそんな事は一瞬のつかの間だった。

一方通行と少女が互いの姿を認識した。

「……………オマエは」

そこにはかつて自分が一万回と言う名の暴力を振りかざし、傷つけた少女がいた。

第27話 動き出す野望 完

第28話 一方通行と妹達（前書き）

お気に入り77件突破！！

そしてそつごつ300突破！！

ありがとうございます！

これからも頑張ります

## 第28話 一方通行と妹達

温かい夜風が優しく吹いていた。夜空を見上げれば幾千もの星が眩い光を放っている病院の屋上に一方通行はいた。 落下防止用の金網に手をかけ、静まり返った学園都市を何か物憂げに見渡している。

そしてもう1人、そんな少年の背中を少し離れた場所で見ている少女。

御坂10032号。

御坂美琴のDNA細胞から作られた軍用クローン。

かつて絶対能力者進化計画にて一方通行に殺される予定だった少女。しかし実験の全貌を知った上条当麻により命を救われ、個々の命にはそれぞれの価値がある事を知った。

殺され手にして殺して手の2人は重たい空気を背負ったような感覚が充満する沈黙の中にいた。

沈黙を破ったのは2人ではなく、一方通行のポケットに入っている携帯電話だった。

マナーモードにしている携帯電話は鈍い音を立てながら小刻みに震えている。

しかし一方通行がそれを手に取る事はない。

元々知り合いが少ない一方通行にとってかかってくる人間など限られている。

「出なくてもいいのですかとミサカは問いかけます」

「……………」

一方通行は答えない。

「上位個体が貴方と連絡を取りたがってますよとミサカは報告します」

そんな事は知っている。知っているからこそ出なかった。

今の自分のこんな姿をあの少女に見せるわけにはいかなかった。

だからミサカ10032号には今は前持ってミサカネットワークによる情報の共用を切断してもらっている。

そうしなければミサカ10032号が見ている一方通行の姿がラストオーダーに届いてしまうからだ。

一方通行は携帯が鳴り止むまで待ち、そして振動が止まるのを確認してから口を開いた。

「笑えよ」

一方通行は闇の海に沈んだ灯りのついていない学園都市を眺めながら、唐突にそんな事を言った。

御坂妹は無表情な瞳を揺るがす事なく首を傾げた。

「笑えとは一体どう意味でしょうかとミサカは貴方の理解不能な言語に確認を取ります」

一方通行は視線をミサカ10032号の方に向ける。

一方通行の顔が見えた瞬間、ミサカ10032号の目が大きく見開かれた。

今の一方通行の姿はとても弱々しく、触れてしまえば壊れてしまいそうな、とても普段の彼からでは想像出来ない位に疲れた顔だった。

一方通行は視線をすぐに下に逸らし、固いアスファルトに視線を向けた。



「笑いてエなら笑えよ。何があつたか位、あのガキを通して伝わってンだろ？」

それはミサカ10032号に限らず全ての妹達がラストオーダーを通して知っている。

一方通行は俯いたまま話しを続ける。

「オレはテメエらにかつて一万回もの死を与えた、そんな極悪人がたつた1人の人間の死ぬかも分からない状況にこのザマだア」

「何が言いたいのですかとミサカは問いかけます、そんな事を言うためにミサカを呼び出したのですかとミサカは貴方に真意を問いかけます」

ミサカは一方通行に視線を向けたまま、

「それにミサカに貴方を笑う権利などありません。大切な人が傷つけば悲しんだり辛い思いをするのは人間として当然です、それをミサカに笑う権利なんてありますか？とミサカは少々怒りを現わにしてみます」

ミサカは無表情な瞳にどこか怒りの籠もった表情で一方通行を見る。

自分は人が悲しんでいる姿を見て笑う人間に見えるのか。

そんな人間に自分は見えるのかと。

一方通行とてそんな言葉を向けるつもりではなかった。

ただ……。

情けなかった。

一万回と言う死を押し付けて来た人間が、たつた1人の人間が傷

つけられた事にこれほどの重たい衝撃を受けた事が、情けなく、彼女達に申し訳なかった。

「ミサカを呼び出したのは何故ですかとミサカは改めて貴方の目的を問いかけます」

一方通行はミサカ10032号の顔を見る。

そして前髪を片手でたくしあげた。その鮮血に彩られた瞳は揺らいでいた。そして内緒話しをするかのよう少し言いくそくに言葉を放った。

「なア？オレは一体あのガキになんて言葉をかけてやればいい？」

一方通行は再び視線を夜の学園都市へと向けた。

まるで自分の表情を隠すように。

「分かんねエだよ、人を傷つけ来たオレが、あのガキを安心させる言葉をかける事なんてよオ」

怖かった。

自分があの子をどれだけ考えて安心させる声をかけた所である少女の心を逆に傷つけてしまうのではないかと。

それが怖い。

だから今ラストオーダーと何気ない会話をする事すら、一方通行にとっては怖かった。

あの少女との関係に大きな切れ目が入ってしまいそうで、それが何よりも恐ろしかった。

苦悩の表情を浮かべる一方通行にミサカは答えた。

「かける言葉なんてなんでもいいとミサカは答えます」

「なんだと」

ミサカの言葉にはどこか冷たいものがあつたがなげやりに答えた訳ではなさそうだった、ミサカは話しを続ける。

「あの上位個体は貴方が思っているよりずっと貴方の事を信頼していますとミサカは間髪いれずに答えます」

それにと付け加え、ミサカは自分の胸に手を当てた、どこか懐かしい思い出を頭に思い浮かべているのか少女の顔は優しい笑みを放っていた。

「大切な人から与えられる言葉と言つのはどんな不器用なものでも心を温めてくれるものですとミサカは一年前のあの時の少年言葉を思い出します」

彼女は今でも覚えている。あの悲劇の実験場に拳一つで強大な敵に立ち向かつてくれた少年の姿、言葉を今でも鮮明に思い出される。

『お前は世界でたった一人しかいねえじゃねえか！何だつてそんな簡単な事も分つかんねえんだよ』

その言葉はどこか強引で、でも温かくて。

『勝手に死ぬんじゃないぞ。お前には文句が山ほど残ってたんだ』

自分の命なんていくら失っても問題ない、と思っていた。けど、そんなちっぽけな存在でも失いたくないと叫んでくれた。

『今からお前を助けてやる。お前は黙ってそこで見てる』

その少年の姿は何よりもどんなチカラよりも強いと思う事が出来た。

その言葉があつたからこそ彼女達は今こうして己の意志でこうして『生きたい』と願う事が出来る。

大切な人から送られる言葉は例えどんな世界中を虜にする奇麗事よりもずっと心に響く、チカラになる。

だからもう一度言う。かつての自分を救ってくれた少年の言葉を胸に秘めそれを原動力にして来た少女は強い言葉で、

「大丈夫です。貴方の言葉が例えどんなものでもあの少女を想う気持ちさえ籠もっていれば、きつと届くはずですよミサカは確信を元に貴方に断言します」

彼女の無表情なガラス玉のような瞳には確かに強い芯が宿っていた。

それは一年前の彼女からは感じとる事の出来なかつた、人間としての温もりなのだろうか？

大切な人にかけられた言葉は特別。

しかし自分があのがきにとつてもしそれに見合う存在ではなかつたら？

臆病なのは分かつている。

それでも踏み出せない。

もし自分がそれに見合う存在ではなく、ラストオーダーの心を傷つけ、拒絶されるのが怖い。

一考に暗い表情を浮かべる一方通行。

その時……………。

バチンッ！！と一方通行の頬にミサカ10032号の平手打ちが

炸裂した。

電極のスイッチを入れてない一方通行に勿論有効打だった。

「痛ッ！テメエ何しやがるッ！！」

妹達による初めての有効打をお見舞いされた一方通行の頬は赤くなっていた。

ヒリヒリと言う肌を痺れさせる痛みがジワジワと滲み出る。

「全くいつまでそうやって悩んでいるつもりですか？とミサカは心底ため息を吐きつつ貴方に初めて有効打を当てた事を密かに喜んでいます」

「ふざけてんのかア？」

「ふざけてはませんとミサカは否定します。まあいい加減にしろと言う事ですとミサカは貴方の今の情けない姿に少し苛立ちと言うものを感じます」

ミサカ10032号はゆっくり歩きながら一方通行の鼻の先にまで顔を近づけてきた。

「貴方の今の姿を見てあの上位個体が喜ぶと思いますか？とミサカは貴方に問いかけます」

「……………」

「ならいい加減目を覚ましなさいとミサカは真剣に貴方に呼びかけます。ぐだぐだと傷つく事を悩むより、先に行動をしなさい、自分が傷つく事など二の次でいいはずなのでは？とミサカは貴方に問い

ます」

ミサカの言葉が一方通行の心に鋭いナイフのように突き刺さった。結局、一方通行はラストオーダーよりも自分が傷つくのが怖かっただけだった。

その事を彼女に諭され、一方通行は気づく。本当にあの少女の事を想っているのなら、例え自分がどれだけ拒絶、否定をされても真っ直ぐな心であの少女と向き合うべきなのではと、それが例え、自分を傷つける結果になったとしても。

ミサカは更に言葉を続ける。

「信じなさいとミサカは貴方の心にそう告げます。絆と言うのはお互いが信頼し合う事で初めて成立するものですとミサカは――」

「もういい分かった」

ミサカの言葉を途中で遮るように一方通行は言葉を放った。

「確かにテメエの言う通りだ、ツたく一体オレは何をそんなにビビっていたんだか……」

一方通行の目にさっきまでは感じ取れなかった強い生気が蘇る。絆な互いが信頼しなければ成立しない。あの少女を自分の言葉で傷つけ絆を失いたくないなら、まず自分からあの少女の事を信頼していないといけないはずだ。

だからあの少女の元に行こう。

例えそれが、どんなに自分が傷つく結果になったとしても……。「悪いな。情けねエ所を見せちまってオレはもう行くわ」

そう言いその場を立ち去ろうとする一方通行。

その顔はどこか笑っているように見えた。  
とそこで……………。

「お待ち下さいとミサカは貴方呼び止めます」

足早に立ち去ろうとする一方通行をミサカ10032号は呼び止めた。

その表情には「人を呼び出しといてさっさとその場を立ち去るとは一体どう言う事だ」書かれており少し眉毛が八の字になっている。しかし呼び止めた本題はそこではない。

「貴方は一体これからどうするつもりですか？とミサカは問いかけます」

「とりあえずあのガキとの所に行つて……………」

「そうではありませんとミサカは話しの主旨が曖昧であった事をお詫びします」

「主旨だア？」

「はい、貴方は上位個体の元に行つた後はどうするつもりですかとミサカは問いかけます」

ミサカには分かっている。

大切な人を傷つけられた一方通行が黄泉川を傷つけ相手をこのまま見逃す事はしないと……………。

一方通行は奇麗事ではなくそう言う人間だ。

かつて、同じく黄泉川が傷つけられた時があった。その時一方通行は怒りの爆弾を破裂させて暴走。

あの時の一方通行の様子はラストオーダーを通して全ミサカに伝わっている。

ミサカは思う。

もし黄泉川を傷つけラストオーダーの笑顔を奪った犯人が判明してしまつたら一方通行はまたあのスクランブル交差点での悲劇を起こしてしまうのではないかと……………。

ミサカに少しだけ緊張が走る。もし彼がそう言った決断に踏み込んでしまつた場合、ミサカ達には止める事など出来ない。

一方通行はミサカの問いに答えぬまま闇の中に大きく輝く巨大な満月を見上げている。

ミサカは一方通行の返答を待つ。

沈黙が生まれた。

そしてその沈黙を待っていたかのように少しだけ髪を撫でるような優しい春風が吹いた。

そんな中、一方通行は考える。

黄泉川を傷つけた犯人を許すつもりはない。

しかし自分が狂気に走ってしまった場合、黄泉川やあの少女を自分は今以上に傷つけてしまう。そんな事をしてしまえば自分は今更にあの場所に戻る資格などない。

闇を一度知つた人間はいくら光の世界に馴染んでしまつても簡単に戻ってしまう。

あの場所を失いたくない。

ならやる事は決まつている。

「黄泉川を傷つけ、あのガキの笑顔を奪った奴をオレは捕まる、そして、黄泉川の前で頭を死ぬまで下げさせてやる」

一方通行は決意に満ちた目でミサカの問いを返した。

ミサカの顔が少しだけ緩んだ。そして安堵の表情を見せた。



あの時の人を平気で傷つけ来た一方通行はもういない。それを確信した。

「そう言う事ならミサカも協力しましょう、とミサカは貴方に協定の申請をします」

「いいのかよ、オレはテメエらを一万回をも殺した罪人だぜそんな奴をお前は信用する事が出来んのかよ」

「罪人と言つのならミサカも同じですとミサカは間髪いれずに答えます」

「あア？」

ミサカは嫌な思い出を掘り返すようなそんな暗い表情を見せた。

「ミサカはあの実験の時、自分の命などどうでもいい、一人のミサカが死んだって全ミサカが死なない限り死ぬ訳じゃないそう思つてミサカは自分の命を実験の歯車の一部として差し出して来ました」

「……………」

「しかしミサカ身勝手な思いがお姉様にとても辛い思いをさせてしまった、そしてあの少年の結果としてあの実験に巻き込んでしまった、それがミサカ達の過ちであり罪です。とミサカは悔やんで悔やみきれない終わってしまった自分の罪を自覚します」

ミサカ達は知っていた。一方通行を止める事が自分には出来ない  
と知った御坂美琴があの実験を止めるために研究所の施設を壊して  
周っている事を……………。

きつと美琴は辛かったんだと今なら分かる。自分で体が動かせない人々を助けるために提供したDNAがこんな血と悲劇と殺戮の実験のために使われてしまった事が。

そして、その人を助けたいと思っていた自分の善意が一人もの人間を殺す悪意へと変貌してしまっていた事が。

美琴がどれほど辛い思いをしていたのかはミサカ達には分からない。

辛い一言で片付けていいのかも分からない。

だから今度はミサカ達が誰かの力になりたい、困っている人がそこにいるなら手を差し伸べたい。

だからミサカは一方通行に手を差し伸べる。

一方通行一人が実験の全貌を暴き、犯人を見つけるのはかなり困難なはずだ。

ミサカは握手を求める形で一方通行に手を伸ばした。

「ミサカにはミサカネットワークと言う情報網があります。必ず貴方の力になれるはずですよ。ミサカは確信を元にそう告げます。」

一方通行はミサカ10032号の小さな手を見つめたまま静止した。

迷いがあった。

簡単には言ったものの、アンチスキルの部隊を壊滅させるほどの実力を持つ相手だ、かなりの危険が伴う。

一方通行は悩む、ミサカネットワークの情報網は確かに心強い、しかし自分の利益のためだけにこの少女を巻き込む事が本当に正しいのか……。

一方通行が思考を巡らす中、ミサカが口を開いた。

「危険だからと思っているのですか？とミサカは問います」

「……………」

「それなら大丈夫です。貴方が私を守ってくれるのであらば何の心配も入りません、とミサカは貴方の強さを理解した上で安全を確保しています」

つまり、危なくなったから守ってくれと言う事だ。

一方通行の顔に子供のような笑みが生まれた。

そして……………」

ミサカ10032号の小さな手を握りしめた。

「お前は必ずオレが守る。絶対だア！！傷一つ負わせねエ、だから協力してくれ」

ミサカは握られた手を更に強く握りし返した。

ミサカに言葉はない。しかしそこには普通の女の子が見せる優しい笑みがあつた。

一方通行は握りしめている『誓いの手』を離さないまま、暗黒の中に小さな光を放つ星空を見上げた。

必ず犯人を捕まえる。

そして、全部取り戻して見せる。

あのガキの笑顔も黄泉川もそして全てを取り返してやる。

全ては日常に帰るために。

第27話 一方通行と妹達 完

第28話 一方通行と妹達（後書き）

はい駄文続きですねすみません！！

配信は一週間後になります

最近寒いぜ

頑張ります

## 第29話 科学理論の矛盾（前書き）

お気に入り84件突破です！！ありがとうございます。

更新を毎週水曜日と言う事にさせて頂きました。

後、今回の話。ラストオーダーに一方通行が合う所はスキップします、理由はありますのでご了承下さい。

それではどうぞ！！

因みに今回は説明書みたいになってます

## 第29話 科学理論の矛盾

翌朝、ワンルームのアパートの一室に一方通行とミサカ1003  
2号はいた。

「監視衛星への接続を完了しましたとミサカはハッキングが成功した事に安堵の溜め息をつきます」

ミサカは重たい溜め息と同時に肩の力を落とし、デスクトップ型のパソコンから少し顔を遠ざけた。

普段は無表情な顔にも流石に疲れがたっぷりと描かれていた。それもそのはず学園都市の監視衛星にアクセスするのにたっぷり三時間もかかってしまったのだ。

勿論、風紀委員でもアンチスキルでもないミサカには監視衛星のアクセス権限はない。正規のアクセスを行えないなら、不正にアクセスをするしかなかった。

ミサカには微弱だが電子制御能力がある。その能力を使用し頭の中で思い浮かべたものを機会の方へ移した結果、コンピューターの方が余波のような処理を勝手に行ってくれる。

通常のコンピューターでは解除の難しいセキュリティは電気を操る能力で乗り越え、能力防止用の特殊なセキュリティは普通のコンピュータ操作で対応する。

お互いを効率良く使用する事によってミサカは様々な標的へと侵入していった。

そして、作業は無事終了したのだが……………。

（分かっていたとしても、やはり納得はいかないものですとミサカは心の中で少々愚痴ってみます）

ミサカ10032号は隣で同じくハッキング作業をしていた一方通行を横目で見る。

一方通行は学園都市のバンクと風紀委員とアンチスキルの事件報告書が保管されているサーバーにハッキングをかけていた。

一方通行の能力はレベル5のベクトル操作。

その能力を応用してミサカ10032号と同じように電子制御の能力を操作と言う形でハッキングしているのだが。彼は学園都市の学生の能力データと風紀委員、アンチスキルの事件報告書が保管されているサーバー3つを同時にハッキングしている。

言うならば、違う種類の三台のテレビゲームを全て同時に操作しているようなものだ。

そして、それらをわずか30分で見事に片付けてしまった。

一つのハッキングに三時間もかけて集中していたミサカも流石にこれでは愚痴りたくなるものだ。

(まあ一番頭にくるのがミサカの苦労を『三時間』と言う一言の文で片付けられている事ですが。とミサカは決して出会う事のない誰かに少々怒りを覚えます)

と、そんな事を考えている最中、唐突に声がした。

「オイこっちの作業はとっくに終わってんぞ！まだ終わんねーのかア!?!」

不機嫌気味な声をあげる一方通行。作業の進行スピードが遅いミサカに多少ご立腹のようだ。

しかし精一杯頑張ったミサカとしてはその努力を考慮して少しは優しい言葉使いは出来ないものかと内心思うが、口に出す事はしな

い。代わりに、

「チツ」

色々な意味を込めて舌打ちをした。

「オイ、今舌打ちしなかったかア!？」

「なんの事でしょうとミサカは否定します」

ミサカ10032号は無表情な顔でその事事態まるでなかったかの如く否定した。

しかし隠せているのは顔だけで、ミサカの背後からドス黒いモクモクとしたオーラを感じる。

この10032号はどうも他の妹達の中では腹黒い部分が目立つ。さつきも一方通行がハッキングを仕掛けている最中、彼の作業スピードに嫉妬したミサカは一方通行のハッキング作業を妨害する微弱的な電波を飛ばしてきたりして来た。

このミサカの性格をだいたい理解した一方通行はあまり言及しても意味のない事だと察し、印刷したA4用紙十枚位の束をミサカの膝の上に無造作に放り投げた。

「読んで見る。風紀委員とアンチスキルのサーバに保管してあった事件報告書だ」

ミサカは放り投げられた印刷物を膝の上でトントンと軽く叩き、印刷物を読みやすいように整えた。そして一枚一枚をじっくりと目を通す。

〈風紀委員第187支部襲撃事件の概要〉



4月19日。時刻13時 30分。

第7学区に支部を置く風紀委員第187支部が襲撃された。

事件発覚と同時に近隣の第177支部所属。初春飾利、白井黒子が監視衛星にアクセスした結果、映し出されたのは複数のスキルアウト達と見られる男達だった。

しかし襲撃された第187支部の現場には複数の微弱なAIM拡散力場の残留が検出された。

スキルアウト達に超能力は使用出来ないため、彼らが犯人と言う可能性は低いと思われたが、監視衛星の映像を拡大し、男達の素性を学園都市のバンクから検出した結果。

彼らは全員『無能力者』だった事が判明した。

そして第7学区の裏路地にて、追跡中のアンチスキル達に重傷を負わせたのも同一犯の可能性（裏路地に監視衛星の映像が映し出されないスキマになっていたため）と見て調査中である。

第187支部を襲撃した理由は物品などは盗まれていないため不明でありこれもまた調査中である。

事件報告書を一通りミサカは読み終わると机の上にそつと置いた。

「黄泉川愛帆は風紀委員の支部を襲ったスキルアウトを追跡中に迎撃されたと言う事でしょうか？とミサカはこの事件報告書から必要な概要を取り出します」

ミサカは事件報告書の内容を思い出しながら情報を整理していくと一つ気掛かりな点が飛び込んで来た。

「スキルアウトが超能力を使用したと記されていますが、一体どう  
いう事なんでしょうか？」とミサカは疑問を口に出します」

当然の疑問だと思う。スキルアウト達と言うのは平たく言えばI  
evel0の武装集団だ。事件報告書に記されている事が本当なら  
ば、超能力を使用出来る時点で犯人はスキルアウトではない。

しかし彼がスキルアウト『無能力者』である事は風紀委員やアン  
チスキルの方がバンクにより調べがっている。

ミサカは思考を巡らす。もしかしたら突然能力が目覚めた？

もしかしたらスキルアウトの中に能力が使える人間が混ざってい  
た？

色々な考えを自分の中で模索して見るが、どれも決定的な答えに  
は当たらない。

「オイ、監視衛星の映像をだせ」

「ほえッ？」

考えて事している最中一方通行にいきなり話しかれたため、ミサ  
カは思わず阿呆な声をあげてしまった。

「オマエがハッキングした監視衛星の映像だア、時刻は19日の午  
後1時20分にセッティングしろオ」

「しかし監視衛星に犯人の映像は映し出されてなかったと事件報告  
書に書かれていたはずですがとミサカは――」

「見てエのはそこじゃねエ」

「？」

首を傾げるミサカに一方通行はいいから出せと先を促した。ミサカは洪々とパソコンを操作していく、そして監視衛星の映像がディスプレイ全体に大きく映し出された。

映像が映し出されている場所は黄泉川愛帆を含むアンチスキルが裏路地に突入している場面だった。勿論、監視衛星は裏路地の内部の様子を映し出せてはいない。映っているのは現場を空から見た映像だった。

そして、映像が映し出されてから2分後、裏路地を構成している灰色のオフィスビルの建物と建物の間から火山の噴火のように天に舞い上がるオレンジ色の炎の柱が吹き出た。

今の映像から理解出来る事は巨大な火の柱がスキルアウトを焼き払った事位なものだった。

しかし一方通行が注目しているのはそこではないようだった。

「やっぱりそういう事かア」

「何がですか？あの爆発の映像だけで何か特定出来る事がありますか？とミサカは……」

「今の火柱あれは爆発で起きたものなんかじゃねエ」

一方通行は映像をリプレイした。そして丁度火柱が上がる所で映像を停止させた。

「オフィスの窓ガラスを見てみる」

ミサカは裏路地を構成しているオフィスビルの窓ガラスをにらめ

つこするような形で凝視する。

言うまでもないが、あれだけ巨大な炎が隣で発生したのだオフィスの窓ガラスは勿論無事ではない。

窓ガラスの表面は溶けたチョココレートのようにドロドロになっていた。

……ドロドロに？

ミサカの目が大きく見開かれた。

「確かにおかしいですねとミサカは不自然な点に気づきました。あれだけの大規模な火柱が上がっているのに何故窓ガラスは溶けているだけなのですか？」とミサカは疑問を口にします」

普通、あれだけ大規模な炎が発生すれば間違いなく爆発と言う名の衝撃波が発生する。

衝撃波が発生した場合、窓ガラスは溶けるのではなく、粉々に吹き飛んでなければおかしいのだ。

爆心地が遠い場合ならまだ理解は出来るが、しかしオフィスビルは発生現場の隣で衝撃波をモロに受けているはずなのだが。

一方通行はパソコンに映し出された映像を眺めながら、ミサカの疑問に答えた。

「爆発つつうのは、主に急激な気体の熱膨張によって起こるもんだ、そして爆発による衝撃波は爆発の中心で爆発物の熱膨張が超音速で膨張した場合、爆発物表面が衝撃波を発生させるつつう訳だ。

だが、この映像を見る限り爆発による衝撃波なんざ起こってねエ」

「待つて下さいとミサカは混乱する頭を整理しながら貴方の問いに疑問を抱きます。それではこの炎の柱の正体は何なのですかとミサカは問いかけます。貴方の問いに沿って話しを進めた場合、科学理論的に色々と矛盾が生まれますとミサカは指摘します」

科学理論的な矛盾。例えば、街の中心に落雷が直撃したとしよう。落雷が発生した場合必ず雷サージと言うものが発生する

雷サージとは雷の影響により発生する過渡的な異常高圧電圧の事だ。雷サージがもたらす被害とは。

送変電施設の停電。

通信施設の通信ダウン。

停電。

家電製品の損傷。

などが存在する。

ここで今回の科学的矛盾。火柱の件と落雷の被害を重ね合わせるとうこうなる。

巨大な熱量を持つ火柱が発生したのに気体の熱膨張による爆発が発生しなかった。

落雷が街中に落ちたのに雷の影響により発生する雷サージが発生しなかった。

これが科学理論の矛盾であり、予定調和の無視。

この科学の街、学園都市の能力者達は基本的にそう言った科学理論を無視した能力は使用出来ない。

超能力者達の能力は自然現象を己のチカラで操る事が本質となるからだ。

だとしたらますます答えから遠ざかる。熱膨張を起こさない巨大な熱量を持った炎。これは最早科学ではない、

「非科学的ですねとミサカはこの映像の現象をそう説明するしかない」と断言します」

ミサカの独り言のような言葉に一方通行の眉が静電気を浴びたか

のようにピクリとわずかに動いた。

一方通行は知っている。この世界に存在する二つの異なる法則を、超能力と魔術。

一方通行は別の異なる法則を持った相手と交戦した事がある、エイワス、そして水の天使。あの2人は科学理論を無視した奇妙なチカラを使用してきた。

(まさか超能力とは別のチカラを持った奴の仕業かア)

思考を巡らせるが刻々と時間だけが過ぎていった。これ以上は時間の無駄と考えた一方通行は行動に移した。

ミサカのパソコンから離れ、隣の長テーブルに置かれている三台のパソコンの内の一つのパソコンを操作しだした。

「何をしているのですか？とミサカは問いかけます」

「アンチスキルの過去の犯罪の記録が保管されてるファイルにハッキングをかける」

「それで何か分かるのですかとミサカは再度問いかけます」

一方通行はミサカの問いに視線をディスプレイに向けたまま答えた。

「一人この状況を把握してるかもしれないねエ奴を知ってる、探してるのはそいつの連絡先だ」

そしてハッキングをわずか30秒で済ませた一方通行はそのファイルを開くため決定キーを軽く叩いた。

そして、一人の少年の顔写真付きの犯罪履歴とその他の個人情報

が記載されている情報が出てきた。

記載されている情報の一番上にはその少年の名前にはこう記されていた。

浜面仕上。

「彼がこの事件の全貌を把握しているかもしれない人物なのですかとミサカは少々疑問を抱きながら問いかけます」

ミサカ10032号の顔には「こんなとぼけた顔をしている奴がこの事件の全貌を把握しているだど!？」と書かれている。

ミサカは口には出してこそいないが、その顔には戸惑い……と言っよりも疑っているようだ。

「まアお前が抱いてる疑問は分からなくもないが、コイツならなか知ってる可能性は高いぜ」

「このアホみたいな顔をした少年がそこまで重要人物だとは!とミサカは戸惑いを隠せずにはいられなませんと心の心情を正直に答えます」

初対面の人間にここまでボロボロに言われる浜面。決して彼が悪いわけではない、ミサカ10032号の心が腹黒いのであって浜面は悪くはない(多分)。

あまり好印象ではないミサカは何度も首を傾げているが、一方通行が探していた人物は間違いなくコイツである。

「浜面仕上つつうのはスキルアウトのリーダーであり、アイテムつつう裏組織のリーダーでもあんだよ。あの火柱の正体こそ掴めてねエが、犯人がスキルアウトって分かってんなら問題ねエ、スキルアウトのリーダーがこの事態を掴めねエって事はないだろ」

火柱の正体は不明。

しかし犯人がスキルアウトと特定されているのであれば、そのボスに話しを聞くのが妥当な線である。一方通行達が知りたいのは火柱の正体ではない、黄泉川を傷つけたのは誰か？なのだ。

一方通行は浜面仕上の携帯番号をアンチスキルのサーバーから入手すると、次は浜面仕上が契約している携帯会社のサーバーをハッキングする。

調べているのは浜面仕上の通話記録。最新の通話記録は約10分前。そして、携帯に搭載されているGPS機能を携帯会社の方からアクセスする。

何故一方通行が浜面に直接電話しないかと言うともし仮に一方通行が浜面に電話をかけたでしょう。

「うおっ一方通行久しぶりだな」

なんて展開はまずない。

「……ツげ！一方通行」

と嫌な反応を見せるのが妥当だろう。そして今から行きますよ。などと言った場合、浜面仕上は逃走する可能性がある。

浜面が逃げたとしても一方通行から逃げ切れるわけではないのだが、わざわざ自分がそんな事のために動くのは非常に面白くない。

「よし、場所の特定は終わったア。今からあいつの所に今すぐ行くぞオ」

「ええ〜とミサカは可愛い声をあげ、その『アホ面』と言う人物に合う事を頑なに拒否してみます」



名前は完璧にわざと間違えた拳げ句、行きたくないと訴えるミサカ10032号。

「コイツの何が気にいらねェんだ」

「生理的に受け付けませんとミサカは即答します」

男の子ならだれしも聞きたくない言葉を平然と放つミサカ。もし浜面がこの場所にいたのなら彼の心は間違いなくガラスのように粉々に砕け散るだろう。

一方通行は仕方がないのでこのままミサカを置いて行こうかと考えたが、それでは困る。

浜面と現在地は結構距離があるので、一方通行はミサカに車を運転させる気だった。

「いいからグダグダ言わずについて来やがれエー!!」

「お断りしますとミサカは拒否し即答します」

「子供のワガママに付き合ってる暇はねェんだよ」

一方通行はミサカの手を思い切り殴るように掴むとそのまま玄関の方へと無理やり引っ張る。

勿論『浜面』に合う気のないミサカ10032号は一方通行とは間逆の方へと体を引っ張り、綱引きのような状態になってしまった。

そして突如。2人の手は滑るように離れた。

ドサツとフローリングの床に尻餅をついた一方通行とミサカ10

032号。そして短いスカートをはいているミサカはパンツが見える形で綺麗なM字開脚を展開させていた。

とそこで……………。

「一体何をやってるのってミサカはミサカは訪ねてみる」

突然。目の前にお怒りモード全開のラストオーダーが現れた。

さっきまで作業の邪魔になるので、少し離れたコンビニまでお使いにいかしていたのだが、一方通行とミサカが綱引き闘争を行って倒れた瞬間に帰ってきたらしい。

そして、遠い所まで歩いてお使いを済ませ、汗だくなって玄関をオープンすれば、一方通行がミサカのスカートを凝視しているではありませんか。（ラストオーダー目線）

ラストオーダーはお怒り最高潮なのか眉の方がピクピクと可愛しく痙攣けいれんしている。

「どうして貴方はただのミサカ風情にこんな大胆な事してるのー  
！！ってミサカはミサカは頭を両手でポカポカしてみたり」

「あのなア」

実はと言うとラストオーダーとミサカ10032号は現在ミサカネットワークによる情報の共有を切断している。一方通行は今回の事件にあまりラストオーダーを巻き込みたくなかったからだ。しかし、それが裏目に出ってしまった。

一方通行は尻餅をついたまま、頭をクシャクシャと掻き立て、くだらねエと一言吐き捨て事態を収集しようとしたのだが、ミサカ10032号の発言によって場は騒乱となる。

「いきなり襲われましたとミサカは上位個体に真実を伝えミサカの

無罪を訴えます」

「……オイツ!!!」

「不潔だよツて!!! ミサカはミサカは貴方に軽蔑の眼差しを向けてみたり」

「貴方の呼び名を今日から『アクセロリータ』と呼びましょうとミサカは全妹達に情報を伝達します」

好き放題言われ続ける一方通行。流石の彼もこれをくだらねエの一言で済ます訳にはいかなかった。

一方通行の眉、口元がビクビクと痙攣しだした。しかしそんな一方通行の様子に気づいていないミサカとラストオーダーは、

「一方通行は変態さんだったの? ってミサカはミサカはミサカにはまだ早い大人の領域に足を一步踏み出してみたり」

「まさかミサカもこんな事をされるとは思ってもみませんでしたとミサカは戸惑いを隠しきれませんと報告します」

ブチッ!!! 一方通行の血管がきれた。堪忍袋の尾が切れたと言う奴だ。

「テメエらしい加減にしやがれエええええええええええッ!!!」

直後、電極スイッチをオンにした一方通行の反撃が始まった。

第29話 科学理論の矛盾 完?

### 第30話 独占禁止(前書き)

すみません。水曜日ギリギリの投稿となつてしまいました。

そして謝らなければならぬ事があります。締切が迫っていたため、最後らへんが特に超ウルトラハイパー駄文マックスです。

それでもいいという方は見てください。

後2話後位に超展開します。それまでだらだらとしたストーリーにお付き合ってください

### 第30話 独占禁止

現在午前11時。

学園都市の第15学区は最大級の繁華街であり、流行りの発信基地として機能していた。

マスコミやテレビ局などの施設が多く立ち並ぶこの学区は学園都市の中でも土地の値段が高い場所として有名である。

「うわッ！！大きい建物がいっぱいあるってミサカはミサカは学園都市最大と言われる繁華街のスケールの大きさに絶賛してみたり」

「私達が普段行動の拠点としている第7学区が田舎のように見えませんねとミサカは正直な感想を述べます」

第15学区の繁華街を兄弟のように並んで歩くミサカ10032号とラストオーダー。

彼女達が今歩いている場所は繁華街の中心とも言える場所で、巨大な高層ビルや大型デパートなどは綺麗に整列しており、壁のように道の左右に展開している。

どうも学園都市が誇る最大の繁華街とも言っただけはあって人の数もまた最大級で少し歩くと体へ傾けなければぶつかってしまったり位におしくらまんじゅう状態だった。特に一般男子の腰あたりまでしか身長がないラストオーダーは、目を離せばすぐに幽霊のようどこかに消えてしまうのだ。そんな事もあってミサカ10032号はラストオーダーから目を離せないのだ。

「おおッ！！巨大なケーキが空にぶかぶか浮かんでるってミサカはミサカは目を輝かせてみたり」

ラストオーダーの目に飛び込んできたのは、お店が宣伝用として使用している巨大なケーキ型の風船だ。この風船を使用した宣伝方法はどうやら子供達から莫大な支持を得られるらしく、無駄な広告やCMより宣伝効果があるらしい。そのためか第15学区上空にはそういった宣伝用のアドバルーンが所々空を泳ぐように浮かんでいた。

（全くあんなに大きなケーキのどこがいいのでしょうか？とミサカは疑問に思います。ケーキは小さいくて少ししか食べられないからおいしいのでは？しかしミサカは上位個体と違って大人なため、あえて言葉に出さずに子供の発想を守りましょうとミサカは疑問を心の底にしまっておきます）

自分の考えが大人だと思っているミサカ10032号。

しかし実際、大の大人でもたまには大きなケーキを独り占めして食べてみたいと思うことは少なからずあるもので、ケーキは少量だからおいしいのに大きいケーキなんておいしくないだろと言うのは大人見解というよりも単なるエゴである。

「ねえねえあのお店に行きたいってミサカはミサカは提案してみる」

「駄目ですとミサカは即答します」

「え、何で？ってミサカはミサカはジタバタ足踏みをしながら理由を尋ねてみる」

「ミサカの任務は一方通行の用事がすむまで、上位個体である貴方を見張ることであり、身勝手な行動を制止することにありますとミサカは一方通行に命じられた任務内容を確認しつつ疑問に答えます」

実は一方通行は現在ミサカ10032号とラストオーダーとは別  
に行動している。

一方通行は現在第7学区で発生した。『スキルアウト第187支  
部襲撃事件』の全貌を知るために、犯行グループ、スキルアウトの  
リーダー『浜面仕上』に会いに行っている。

何故別行動をとっているかと言うとラストオーダーには今回の事  
件を追っている事は伏せているからである。

今回の一方通行が追っている事件は正直危険だ。

そして一方通行が探している犯人は、多数のアンチスキルを一撃  
で退けるほどの実力者《危険人物》である。そんな危険な人物を一  
方通行が追っているとラスチオーダーに知られてしまえば、彼女は  
必ず心配するだろう。

自惚れではない。

ラストオーダーとはそういう人間なのだ。

一方通行はラストオーダーになるべく心配をさせたくない。今回  
の事件も彼女の知られずにそのまま済めばいいと思っている。そう  
すれば、少なくともラストオーダーに危険が及ぶ事はない。

それを考慮してミサカ10032号には浜面との面会が終わるま  
でラストオーダーの面倒を見てもらっている。本当は第7学区の黄  
泉川のマンションで留守番をしてくれる事があるがたいのだが、き  
わめてアウトドア派のラストオーダーが家にいい子にお留守番など  
と言うことはまずない。

そして外はただでさえ最近物騒なので、ラストオーダーを一人野  
放しにはできないのである。

(にしても、この上位個体の子守はかなりの重労働ですとミサカは  
目を離せばすぐに消えてしまう上位個体の幽霊ぶりに少々嫌気がさ  
しますと心のなかで愚痴ります、まあミサカネットワークによりす  
ぐに居場所の特定は出来るのですがそれでもー！ー！ー！ー！)

ミサカは心の中で愚痴る事を即座に中止した。

ミサカは辺りを見渡す。

いない。

ついさつきまで隣を歩いていたはずのラストオーダーが消えた。

ミサカはこめかみに人差し指をあて軽くため息をついた。

言ってるそばからなんとやらとはこの事である。

「どうやら制裁が必要なようですねとミサカは上位個体に一発鉄拳をお見舞いする事をここに誓います」

目指す場所は分かっている。あの上空に浮かぶケーキのアドバルーンに向かってミサカはイノシシの如く突進して行った。

??????????

2

第15学区の学区内にあるゲームセンターに3人の若者がいた。

「ははははッガンアクションゲームでこの俺に勝てるとも思ったのかな？絹旗君？」

聞く者全てを不快にさせるような大声で笑う少年、浜面仕上は巨大な円形ドームの中にいた。

学園都市ならではの最新技術が詰め込まれたこのゲームセンターは若者人気のスポットで、現在浜面がいる円形状のドームもその最新技術が施されたゲームである。

その名も『超体感3Dガンアクションゲーム』またの名を3ガンである。



真黒な半径20メートル位円形ドームの中に入り（ニュアンス的には小さな野球ドームと受け取ってもらいたい）お金を入れる。

プレイコインを入れると真黒な画面に対戦ステージ選択画面が出現する。例えば対戦ステージをジャングルと選ぶとしよう。そしてら、球体ドームの中いっばいに森、草、虫、木などが本物同様に出現し本当にジャングルに入ったような感覚を作り出すというわけだ。そして対戦する1Pと2Pはそれぞれ専用の拳銃型コントローラー『ガンコン』を手に取り、立体として出現した木や茂みに隠れながら、対戦者である相手の体にめがけてトリガーをひくだけ。命中判定はコンピュータ任せとなるが、これがかなりシビアで、当たったかな？と思っても命中してなかったりする。

そう言った場合『残念腕にかすった程度です。相手はまだ死んでません』となんと憎たらしいコメントが表示される。

しかしこのリアル感がまた若者に絶大な支持を集めており、休日にはこのゲームをプレイしようと多くの若者達が長蛇の列で並んでいる。

とそんな大人気ゲームを完全に独占している、浜面は後に控えている人達の事を気に止めずゲラゲラと高笑いしていた。

「くそツたかが浜面程度に10連敗もするとは超悔しいです、もう一回勝負です次は絶対負けません」

そして高笑いしているこの馬鹿な男に10連敗と言う屈辱的な敗戦を与えられた少女は体を小刻みに震わせながら、ガンコンを構える。そんな少女の名前は絹旗きぬはた最愛さいあいふわふわニットのワンピースを纏いそのワンピースのスカートの丈が太もも程度しかないと言うかなりエロチイックな服装をした少女だ。

「なはははははッやめときたまえ絹旗君何度やっても同じ事だよ、これが実力の差と言うものなのだよッふふふふははははははッ」

上から目線の軍の長官的な言葉で絹旗を見下す浜面。因みに浜面の年齢は17歳つまり高校生であって、年齢12、13歳の絹旗をたかがゲームで下した程度でこの高笑いっぷりは大人げないと言うものである。しかしそんな事を微塵も気にしないおバカな浜面は拳銃の銃口を肩に乗せ我こそは強者なり!!と言った感じで余裕の表情を見している。

誰がみてもウザくまた憎たらしいく叩き伏せてやりたいと思うのだが、実は浜面はこのゲームで無敗の伝説的記録の保持者であり、連勝ランキング1と言うの名の絶対的地位に降臨している人物なのだ。

しかし負けず嫌いな絹旗の怒りの炎が収まる事はない。

絹旗は勝手にプレイコインを投入しリベンジの準備に取り掛かっていた。

「やめときたまえ絹旗君、私は弱者をいたぶる気はない、これ以上君を傷つけるのは良心が痛むと言うものなのだよ」

「浜面のくせに超生意気です」

「おやおやッ負け犬の遠吠えが実に心に響きますな〜」

「浜面超殺す」

などときゃあぎゃあと口論する二人。とそこでさっきまで二人のやりとりをつっこむ事もなく、ただ茫然と見ていた一人の少女が口を開いた。

「はまづら、もう止めようよ」

盛り上がっている最中、いきなりかけられた試合終了のホイッスル。

少女の名前は滝壺<sup>たきつぼ</sup> 理后<sup>りこう</sup>。大人しそうな可愛らしい顔つきに反し服装をピンクジャージー式と言うすごく地味な格好で飾っている少女。浜面的見解ではバニーがすごく似合うと絶賛されている。

そんなウサギさん系美少女滝壺はスツとドーム出口の方を指をさす。

爆熱ヒートアップ中だった浜面と絹旗は滝壺の可愛らしい人差し指に沿って目線を運んで行く、と。

地獄絵図まさにその言葉が目線の先の光景にはふさわしいだろう。次のプレイを心待ちにするプレイヤー達が出口の透明な自動ドア（中に人がいる場合ロックがかかっている）にへばり付き山のように盛り上がっていた。

まるで密室に閉じ込められたゾンビ映画のようだ。  
流星にこれではプレイ続行は不可能だ。

「残念だけど絹旗、ゲームセットだ」

「ツ次は負けません！！最後です、ラスト一回、このまま浜面に負けたと言う汚名を着せられたままでは、超終われません」

と言い放ち、再びガンコンを構えなおす絹旗。

負けたまま終われないと言う気持ちは分からなくもないが、このまま続けるとドアに獲物を見つけたゾンビのように張り付いているゲームプレイヤーがドアを突き破って入ってきそうだ。

それを警戒しながら勝者浜面は敗者絹旗を説得を試みた。

「マナーは守ろうぜ、ゲームセンターは公共の施設で俺達の物じゃないんだから」

「さあ何をしてるんですか浜面、ささつと構えて私に超撃ち殺されなさい」

「いやだからさあ〜」

「ステージはさつきと一緒にいいですね、超ブチ殺してあげます」

問答無用の完全無視。

浜面は両肩を重たいため息と同時にストンと落とし、ドーム外の怒り狂った猛者達に視線を恐る恐るゆっくりとスライドさせる。

なんと言うか「いつでも突撃OKっすよ」と言わんばかりに何人かこちらに向かつて両手を向けている、何らかの能力を使う気なのだろうか？あまりよろしくない冷や汗が額からこぼれる。

とにかく強制的にでもプレイを中断しなければと浜面は小走りに部屋の隅にポツンと置かれている長方形の長細いボックスへと向かう。

そしてそのボックスの搭載されている、お金返却ボタンと書かれているボタンに手を伸ばす。

「超逃げるんですか浜面？」

と絹旗が目を見刺すように細めて問いかけてきた。

「ええ超逃げますとも！出口をみて見ろ、あの怖い目でこちらを睨みつけてくる人々を！」

絹旗は視線を出口の方に一度興味なさそうに向け、そしてすぐに顔を浜面の方へ戻した。

「はい絹旗さん！感想をどうぞー！！」

浜面は芸能人にインタビューをする報道陣のようにマイクの代わりに拳を絹旗の顎のしたへと持つていき、寛大かつ最善なコメントを期待して待つ。のだが……………

絹旗が浜面の嫌な予感をそのまま実現させるような最悪な行動に出た。

「あの絹旗さんどちらへ？」

無言でコツコツとゆっくりした足取りで出口の方へと歩いていく絹旗。

そして出口に群がる猛者達へと近づき、ガンコンの銃口を彼らに向けた。

そして一言。

「外野は超黙ってる！！」

と宣戦布告。

そして、何事もなかったかのように元の位置に戻って来た。

出口に群がるプレイヤーの人々は口をポカンと開けたままその場に沈黙。

そして、すぐに牙を抜き出しでこちらに向かって、

「ふざけんなッ！！いい加減頭に来たぜッ！おい誰かこの扉を突き破れ」

「俺の能力『空間爆発』<sup>エリアボム</sup>ならこんな薄い扉位ぶっ壊せるぜ」

「よしやっちまえ」

善良なプレイヤー達は怒りを爆発させた。

浜面はその光景を見て、はい、やりやがったと一言吐き捨てるように言葉を放ち、そのまま頭を抱え込みその場にしゃがみこんだ。このままだと絹旗、浜面VSゲームプレイヤー達。と言う抗争が勃発してしまいそうだ。

絹旗は良い、彼女はレベル4の大能力者でその中でもかなりの使い手だ、例え雑魚が何人集まろうとも傷一つ負うことはないだろう。しかしその抗争に巻き込まれる被害者たる浜面は無能者なのだ、向こうには超能力者が何人かいるようだし、ただの拳の喧嘩になっても勝てる見込みはゼロだろう。つまり。

超能力者同社の喧嘩+浜面仕上参戦!! 病院送り決定!!  
と言う方程式が出来上がってしまうわけだ。

こうやっていつも知らぬ間に厄介事に巻き込まれるそれが浜面仕上と言う人間なのだ。

しかし悪い事ばかりではない。そうやっていつも厄介事の巻き込まれている浜面はある特殊なチカラを自然と身につけていた。

そうそれこそ『自分だけの現実』たる『自分だけは逃走』である。浜面は最速高速俊敏で自分の中でこの悲惨な状況を打破する手立てを考える。

選択肢1、絹旗を置いて滝壺と共に戦線離脱。

いやこれは駄目だ。後で絹旗に何をされるか分からない。多分いい結末は待ってないだろう。

選択肢2、絹旗と組んで善良なプレイヤー達を撃破する。

言うまでもないがこれもボツだ。悪いのはこちらであって彼らに

非はない。それ以前に喧嘩に巻き込まれて自分が死んでしまう。それは嫌だ。

選択肢3、善良なプレイヤー達と組み絹旗討伐クエストに参加する。

これだけは絶対駄目だ。自分で死亡フラグを成立させてしまうようなものだ。

3つの選択肢をわずか4秒で頭から引き出したが、どれも具体的な解決方にはならない。

となれば、やることは一つだ。

浜面は即座にプレイヤー達が待ち構える出口へと全力疾走で走り抜ける。

「おい茶葉のアホ面の男が向かって来たぞ！」

「構わねーやっちまえ」

向かって来る浜面を完全にターゲットと捉え、プレイヤー達の能力者組は右手や両手を浜面に向けている。

無能者組は両手を前方に構えファイティングポーズで浜面をお迎えをする。

それが目に映っても浜面は足を止める事はしない。

距離は約5メートルを切った。

その時……プレイヤー達は見てしまった、浜面の顔が笑っている事に。

プレイヤー達の人数は2、30人は軽くいる。その圧倒的な人数を見ても笑う位の余裕がある浜面を見てプレイヤー達は恐怖のあま

り全員一歩たじろぐ。

そして遂に浜面は行動に出た。

浜面は跳び。

膝を曲げ。

両手を地面に向け。

頭を下げた。

つまり！！

土下座だった。

「頼む！！もうワンプレイだけ、お願いします」

つまり浜面が選んだ選択肢とはこれだ。

このまま絹旗を説得するのは不可能。かと言ってプレイヤー達とこのまま交戦すれば、必ず痛い目に合う+下手をすればアンチスキルやジャッジメントに御用となる。

そうなればもう土下座してでもプレイヤー達を説得するしかない。だった。

「お願いしますよ」

「駄目だ」

勿論、プレイヤー達もここで退くわけにはいかない。

しかし浜面にはある秘策があった。

それがこれだ、ワン・トュー・スリー

。

「ならこれでどうだ！！もし俺が次のプレイであいつに勝てば、あの少女を『ウサミミバニー』にコスプレチェンジさせ、君達に1日だけ贈呈しよう！！これならどうだアあああああああ」



全力の浜面の遠吠え。プレイヤー達は一瞬だけ沈黙したそして……。

「「「うおおおおおおおオツ!!!!!!」」」

と延長十回サヨナラ勝ちを決した野球ドームから聞こえるような歓声が沸き上がった。

浜面は立ち上がりプレイヤー達の歓声を浴びながら絹旗の待つ戦場へと舞い戻った。

「って事なんだけど超OKですか？絹旗さん」

「女の子を生け贄に捧げて自分の難を逃れるとは超最低ですね」

グサリと浜面の心に鋭いガラスの破片が突き刺さった。

絹旗と滝壺が氷より冷たく、切れ味抜群のナイフより鋭い視線で浜面を軽蔑の眼差しで見つめる。

浜面はその場から逃げ出したい衝動にかられたが、それは後ろのプレイヤー達が許してくれるわけがない。

「よしなら、こうしよう絹旗君、次のプレイでもし俺に勝つことが出来たら、一週間何でも絹旗の言う事に従おう。」

「超本当ですね」

「超本当だ」

「ほオ、ならその賭オレが乗ってやる」

ビクンッ！と浜面と絹旗の肩が電気を浴びたように大きく跳ね上がった。

いきなり聞こえた声。

もちろん、浜面の声でも絹旗の声でも滝壺の声でもない。

浜面と絹旗は声が聞こえたゲームプレイヤー達がいる方向を見る。

「探したぜエ浜面」

その声を発しているのは全身真っ白な少年だった。

ドーム出口にいるプレイヤー達は一方通行の人のものとは思えないほどの鮮血の瞳を見て道を空けるように散開する。

浜面は一瞬思考が停止した。

そして徐々に思考が覚醒する。

「な……ん……で？」

自分でも気づかない位かすれた声だった。そしてもう一度今の事実を確認するかのようになり、

「何で、お前がここにいるんだよ一方通行!!」

第30話 独占禁止〜完

第30話 独占禁止（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

それでは、また水曜日に投稿します  
しつれいします

### 第31話 ゲーム(前書き)

お気に入り89件!!読者の皆様に感謝!!

これからも完結に向けて頑張ります。

しかし単純計算で後何話で完結だろうと計算した結果。

多分300話は軽くいきそうです。いったい後何年後なんだ?

その前に2012年に地球が終わらない事を祈ります。

そしてお知らせです。

来週は話しの展開を一気に持ち上げるため、連載を休みます。再来

週は超展開まで持ち込む予定です。

勘違いされるのは嫌なんで一応。

『決してモンハンがやりたいわけではありません』

と予約せずに買えなかった事を報告します。

### 第31話 ゲーム

東京ドームの二万分の一にも満たない小さなロールケーキ状の建物の中で、浜面仕上と一方通行はお互い向かい合い少し緊張する雰囲気を作り出していた。

ここは第15学区のゲームセンター。

学園都市最大のゲームセンターであるこの場所はゲーマーである者なら誰もが一度は足を踏み入れる神聖な聖地でもある。

とそんな若者に人気最前線とも言えるこの娯楽施設にはなんとも似つかわしくない人物、学園都市最強の男、一方通行。

血を連想させる真っ赤な眼球に真っ白な肌、そして全身をその肌と重ね合わるように純白をイメージした服装を纏っている。しかしその白さからは何故か良いイメージは感じられず、不思議と死を認識させるような白さだった。

そんな異様な雰囲気を漂わせる少年の姿にさっきまで賑わっていたゲームセンターの熱気は急速に冷え込み、場は沈黙が支配する空間へと変わり果てていた。

浜面と絹旗の試合を心待ちにしていたドーム出口のゲーマ達は初めて見る不穏な空気を纏う一方通行の姿に全身金縛りにあったかのように体を硬直させ、ただ遠くにいる一方通行の姿を息を呑みじつと見守る。

絹旗はガンコンを片手にただ一方通行の姿を目視したまま沈黙を守っていた。

絹旗最愛はアイテムのと言う裏の組織の人間だ。そして一方通行も表の人間ではない。

だからこそ分かる。

一方通行は闇の住人だと言う事を一目で理解した。

何か決定的な何かがある訳ではない、だが感じる物が確かにそこにあった。組織の任務の時に感じる背筋が軋む《きしむ》ような独自の緊張感。一方通行からは確かにそれを感じる。

(この威圧感、超何者なんですかッ!！)

ただそこに存在するだけでここまで感じる重圧に絹旗は見えない何かに押されるように一方後ろに下がった。

ギリリツと一方下がった絹旗の動きを追うように一方通行の眼球が動いた。

そして一步、一步と一方通行は杖を片手に絹旗に近寄る。

絹旗もつられるように一方通行が動くたびに一步、また一步と後ろに後退する。

(なんで超こっち来るんですか!)

その時、ガンツと後ろに下がり続けて来た絹旗の背中が行き場を無くしてドームの真つ黒な壁にぶつかった。

行き場を失った絹旗はせまり来る一方通行に若干恐怖を感じながらも拳を構えた。

(なんかよく分からないですけど、超やる気と言つのなら、こちらも超迎え撃つまでです)

と一方通行に右手を差し出す。絹旗の能力は窒素装甲<sup>オフエンスアーマー</sup>。空気中の窒素を操り自動車でも赤子を持つように軽く持ち上げる怪力を身につける事が出来る能力だ。

(手加減は超してはいけない気がします。なら超全力で行きます)

しかし、絹旗が構え拳を放つより早く一方通行の左手が動いた。その真つ白な左手は絹旗の持っているガンコンへと伸びて行き、そして銃口の部分を掴んだ。

「ちょっと超何するんですか！？それは私の――」

「借りるぜエ」

ガシツとそのまま銃口を引つ張りガンコンを絹旗から奪い取る一方通行。そして何事もなかったかのように絹旗に背中を向け浜面の元へと戻っていった。

何が起きたか一瞬分からなかった絹旗はガンコンを持ち去る一方通行の背中を呆気にとられながらただ呆然と眺めていた。

そしてガンコンを片手に持った一方通行は浜面と向き合う形で再び戻り、クワガタのような光沢を放つガンコンの銃口を浜面の方へと向ける。浜面はその銃口を見ながら時が止まったかのように静止していた。

「さっきの約束忘れてねエだろうな？」

「は？」

突拍子過ぎる発言に浜面は思わず面を食らってしまった。

と言う前に浜面は一方通行と言うイレギュラーな存在が何故このゲーム大好きバンザイと言った者達が集まるこのゲームセンターにいるのかが理解出来てなかった。

脳裏にあったのはたったそれだけで、まさか一方通行からそんな発言が飛んで来るなんて思っても見なかった。

ってか約束って何？

もちろん一方通行がここに着いたのは今さっきの事でそんな約束とかそう言ったやり取りは行ってない、話の流れが全く掴めない、混乱する頭を一度整理するかのように顔をブンブンと左右に振り、改めて一方通行の顔をジッと凝視する。

そしてマイクの調子確かめるように一度ワザとらしい咳払いをして、

「あゝ約束って一体何の事でしょうか？」

とお偉いさんに話しかけるひ弱な部下社員のように恐る恐る聞いてみた。

一方通行の片眉が上がる、浜面は「えっなんかまずい事言いました？」と顔が引きつったまま少し涙目になっていた。

「さっきテメエが言ったんだろが、もしテメエに勝つ事が出来たら何でも言う事聞いてやるッてよオ」

………確かに言ったのは言ったが、それは一方通行に向けられた言葉ではない、その約束は絹旗のみ有効な約束であるはずなのだが、しかしそんな理屈が通用する相手ではなさそうだ。

(クソツ 一方通行の奴 一体俺に何をやらせる気なんだ？絶対ろくでもない事に違いない、かと言って逃げれるのは絶対無理だ。こうなればとりあえず話だけでも聞いてみよう、ろくでもない願いなら………どうしよう)

心の中で問答してみたがやや不安感が残る形となってしまった。浜面はエサを食べる金魚のようをパクパクさせて、



「あの〜もし俺が負けた場合一体何をさせられるのでしょうか？痛いのは無理ですよ、自分あまり痛いのが得意じゃないんで………」

「イイねエ、話しが早い分こっちは大助かりだア、何せ面倒せエガキをアイツだけに任せるツうのはどうも心配なんぞなア」

あのガキ？と一瞬何か引つかかるワードが飛び込んできたが、本題はそこではない。

浜面は息を呑み込み、どうか危険に巻き込まれるような危ないお願いは来ませんようにと心の中で神様にお祈りする

そして遂に一方通行から本題を言い渡される。

「別にテメエをどうしようなんて考えてねエ、オレが欲しいのは情報。それだけだ」

「情報？なんの？」

「それはテメエをこのゲームで叩きのめした後でゆっくり聞かせてやる」

情報。

まあ実際そんなものかとは思う。学園都市最強の超能者が無能者の浜面に助けてくれなどな絶対ない選択肢であった。

痛くない事をしなくていいと安堵の表情を見せる浜面。しかしもう一つ聞いておかなければならない事がある。

「じゃあもし俺が勝ったらどうすんの？」

「ウサミミでもなんでもつけてやるじゃねエか」

「……………」

言葉を失う浜面。

確かに浜面が勝利した場合、絹旗をウサミミバニーにコスプレチ  
エンジさせると言う約束だったが……………。

「さア始めんぞオ」

「いやいやちよつと待て!!」

「なんだよ」

「いや確かにそう言う約束は確かにあったが、その約束をお前が守  
る必要なんて……………つかお前のウサミミ姿なんぞみたくもないわッ  
ッ……………」

絶叫する浜面。

しかし

「はまづら鼻血」

「へ!?!」

滝壺がこちらを指指して「鼻血」などとワケノワカラナイ事を言  
ってきた。けど、何だろっ鼻から温かい液体がなだれて来ているの  
を感じるのは……………?

とりあえず鼻水なんてカツコ悪いから拭いておこつと滝壺の言葉  
を否定したい浜面は冬でも寒いわけでもないのに手をプルプルと小  
刻みに震わせ、涙を吹くように鼻をこすってみる。

目の錯覚を信じたかった。

これが夢なら今すぐ覚めて欲しかった。

だって鼻をこすった部分に真っ赤な液体がついてるなんて有り得ないじゃないですか。

「嘘だ」

一言、現実から逃げるように浜面はその言葉を放つ。

浜面はふと辺りを見渡す。滝壺と絹旗が今までに感じた事のない、オーラを出している。

例えるなら色は青、そしてそのオーラに込められている感情は……。

『変態』『最低』『サヨナラ』の3つだった。

「待て誤解だ滝壺、絹旗！いくら俺がバニー好きと言いましてでもね、男のバニー姿に萌えるほど俺の心は………」

「超キモイです浜面。そんなにウサギが超好きなら月にでも行つてればいいんです。止めませんか」

「大丈夫だよはまづら、例えはまづらが月に行つても私は帰ってくるのをずっと待ってるから」

いやいや、月にウサギなんて絶対いませんから。と心の中でツッコミを入れつつ、浜面はズゴーンと鐘を打つ効果音を放ちながら、その場に座り込んだ。

「始めンぞオ」

ブレイクハートの状態の浜面を無視して一方通行はさっさとゲー

ムを開始する。浜面は「心の整理をさせて下さい」と一方通行にタイムをかけたが、戯れ言程度に聞き流し、対戦ステージ選択画面へと移った。

浜面は滝壺と絹旗の冷たい視線を浴びながら戦うはめになってしまった。

2

試合のルールが決まった。

対戦ステージ、廃工事。

バトル形式。放った攻撃が直撃、またかすった時点で終了のワンヒットデスマッチ。

試合時間。3分。制限時間が過ぎた場合引き分け。

武器。コンパクトハンドガンA P

オートパワー

武器はコンパクトハンドガンのみ、廃工事にあらかじめ設置されている支給品を駆使して戦う。

能力の使用は禁止。ゲーム場の内部に設置されているAIM拡散力場感知装置に一定の拡散力場が検出されると自動的に負けになる。普段から発せられている拡散力の値はゲーム内部に入った時点でデータ登録済み。

それ以上を超えるとアウトになります。

ゲーム開始。

ゲーム開始と同時にドームの中は選択ステージ廃工事へと変わっていた。

コンテナが山のように積み重なり、辺りには古錆びた工事用大型クレーンやコンベアー、作業用の箱型の機械や旋盤機の機械などが障害物となつて無造作に展開していた。

ズガン、ズガガガン。と作り物の廃工事に本物に近い銃声は何度も響き渡る。

「ツチ」

軽く舌打ちをして近くのコンテナに身を縮め体を隠す浜面。ガンのコンのマガジンを一旦抜き取り、はめ直し、空になつた弾丸をリロードする。

一方、一方通行も黄色い大型クレーン車の影に隠れて弾丸をリロードする。

お互いの距離は10メートル。しかし銃撃戦の場合そんな数値に意味などない。

(クソツ 一方通行の奴、やっぱりそこらのゲームプレイヤーとは比べもんになんねえ)

そう浜面が何故このゲームで連勝ランキング1位と言う栄光に輝いているかと言うと理由は簡単だ。

このゲームはより本格的に銃撃戦が楽しめるためにと開発された

もので、普段拳銃や撃ち合いなどの言葉とは無縁の人々に緊張感かつスリリングな模擬戦を楽しんでもらえると言うのがこのゲームの最大のコンセプトだ。

そして実戦に近いと言う事もあって実際に銃撃戦を体験した事のある浜面と実戦を経験した事のないプレイヤー達との力の差は歴然の差がつく。

現に浜面は拳銃一つで学園都市最強のレベル5の一人を倒したり、第三次世界大戦を生き抜いたレベル5とはまた違った化け物なのだ。そんな浜面に銃撃戦を行なった事のない人間が勝てる訳がない。

しかし今回はまた相手が違う。相手は銃撃戦の実戦経験を持つ人間だ。だいたい超能力者と言うのは能力に頼りっぱなしになるため、銃などももちろんあまり使わない。(絹旗が浜面に負けたのもやはり銃撃戦は浜面の方が経験値が高いため)

しかし一方通行は能力使用モードを使わなくても戦う事が出来るようにと拳銃の使い方を知っている。一方通行もかつて多勢のスキルアウトや木原数多率いるバウンドドッグと銃撃戦で戦った事がある。

お互い銃撃戦の経験者。勝負は互角だった。

ズガンッ！！ズガンッ！！ズガンッ！！と互いの銃声の音が幾度となく交差する。

(ほオ、浜面の奴けっこうやるじゃねエか)

相手である浜面を賞賛する一方通行。正直な所、一方通行はこの勝負は一瞬で終わると思っていた。

しかし浜面の動きが思ったより俊敏で一方通行が撃てばすぐさま物影へと飛び込み、すぐさま打ち返してくる。とそんな攻防を行っ

ているといつの間にか残り時間2分をきってしまった。

一方通行は時間を気にしつつ、新たな障害物を見つげるため辺りを見渡す。一方通行の場合、杖をついたままの移動となるため、あまりアクロバティックな動きは出来ない。そのため物影に隠れて撃ち続けるしかないのだ。

(まアとりあえず、あそこのコンテナに移動するか)

一方通行が目指したのは右に5メートル離れた場所にある赤い色のコンテナだった。ゆっくりと移動し、一方通行は片膝をつく形で体を小さくする。

(ツたく防戦一方じゃらちがあかねエ、時間も少ねエ……ならツ！)

隠れていたコンテナから勢いよく飛び出す一方通行。

そしてその姿は敵である浜面からもしっかりと肉眼で確認できた。

(ああ？何考えてやがんだアイツ？時間がねえから焦りやがったのか！？)

いきなり飛び出して来た一方通行。浜面の隠れている場所を探しているのか、小走り気味で杖をつきながら廃工事を走りまわる。

もちろん浜面からしては格好の的だった。そしてこのチャンスを浜面が見逃すわけがない。

(へっ勝機を焦ったな一方通行。悪いがこのゲーム俺の勝ちだ)

勝利を確信した浜面。

そして隠れているコンテナから再度確認のため、一方通行に気づかれぬようにそっと覗き込む。

一方通行は大型クレーン車の手前に置いてある旋盤機の前で身を隠した。

(今さら隠れたって遅いんだよ)

一方通行の隠れている居場所は分かった。

浜面はゆっくりと一方通行の隠れているコンテナに中腰でゆっくり移動しつつ障害物に隠れながら一方通行の隠れている旋盤機に向かう。

そして旋盤機の目の前まで近いた浜面。

旋盤機に上手く身を隠していると一方通行は思っているのかトンファー型の杖の先端が旋盤機からはみ出していた。トンファー型の杖が仇となってしまった。

(終わりだッ!!)

バツと勢いよく一方通行が隠れている場所に飛び出す浜面。

「なッ!?!」

思わず驚愕の声を挙げる。

そこにいるはずの一方通行の姿はなくあるのはワザと浜面に見えるように置かれた一方通行の杖だけだった。

「ゲームセットだア」

ガチャリと浜面の背中に銃口が押し当てられた。



「畏だったのか」

そう一方通行がワザと廃工事を浜面に見えるように走り回ったのは、自分の位置を浜面に知らせるため、そして浜面に見えるように身を隠し、更に自分のトンファー型の杖も浜面に見えるように置き、浜面に一方通行はここにいると錯覚させたのだ。

とうの一方通行は浜面が旋盤機に向かう最中に隠れながら浜面の後ろに回っていた。

杖がなく片膝をついた一方通行は銃口を更に強く押し当てながら、

「いいかア？銃撃戦を制するのはテクニクや経験だけじゃねエ」

「くッ」

「結局は頭の冴える奴が一番強エンだ、覚えておけよ」

ズガンッ！！浜面の背中に押し当てられていた銃口から銃声が聞こえた。

勝敗はついた。

浜面はまるで本物に撃たれたかのように力なくその場に倒れた。

浜面仕上。連勝記録99勝でストップ。100勝までの後1勝を学園都市最強の男一方通行で飾ろうと考えていた野望は儚くも散っていった。

第31話〜ゲーム〜完

### 第32 悲劇の前日（前書き）

お気に入り93件！！ありがとうございます。

実は今回は話しの繋がりが所々おかしいと思います。

インフルエンザで苦しみながら執筆したため、今回は誤字や話しの繋がりが超おかしな事になってるかもです。

風邪が治り次第修正しますので今回は勘弁して下さい！！  
それではご覧下さい

### 第32 悲劇の前日

第15学区のメインストリートと言うのは実に賑やかだ。

現在時刻は16時。季節は春の上旬と言う事もあり日の沈みはまだ早く、街の色を夕焼けが綺麗な茜色に染め上げている。

そして、オレンジ色の日差しを待っていたかのように、外には大勢の退屈な授業を終えた学生達が道に溢れ出ている。

授業が終わり、ファミレスで晩御飯を友達と済ませようとする学生、ゲームセンターに友達と遊びに行く学生。巨大デパートでショッピングを楽しむ学生。それなり放課後の青春を過ごす学生達の顔はどこか新鮮で活気に溢れていた。

そんな中、そんな青春真っ盛りな学生達とは対照的にどんよりした空気を周囲に纏い賑やかな第15学区のメインストリートの賑やかな活気に溶け込めてない若者達がいた。

一方通行、浜面仕上、絹旗最愛、滝壺理后。4人共顔にしっかりと疲れの表情が見てとれた。

実はあの後、負けた事が実に腑に落ちなかった浜面は一方通行に再び勝負を挑んだ、が結果は惨敗。しかしそれでも連勝記録1位と言う勲章を胸に深く刻んでいる浜面は納得出来ず再び挑んだ。そして惨敗。

己の意地と名誉を完封なきまでに粉碎されその拳げ句、絹旗、滝壺からは男でも萌える変態浜面と言う何とも痛いレッテルを張られてしまった。

このままでは終われないと浜面は幾度となく一方通行に挑んだが、結果は変わらなず、そんな事を繰り返している内にたっぷり四時間も費やしてしまった。

そして、そんなエンドレスな結果も変わらぬ勝負をずっと見ていた絹旗と滝壺もお疲れモードと言わんばかりに両肩を垂らし前を歩

く一方通行と浜面の背中を見ながらゆったりと歩いていた。

「にしても、まさかあの人が学園都市最強の超能力者、一方通行だとは超思いませんでした」

突如に絹旗が一方通行の背中を見ながらそんな事を呟いた。絹旗は一方通行の存在をもちろん知っている。しかし実際会った事は無い。

知ったのはゲームが終了した後だった。

まさか学園都市最強の超能力者である一方通行とゲームセンターで出会うなど絹旗は思っても見なかった。未だに信じられないと言うのが正直な心情である。

「大丈夫だよ、きぬはたあの人悪い人じゃないから」

隣を歩く滝壺からふいにそんな事を言われた。

「大丈夫って超何を根拠にそんな事を言っちゃってるんですか？いいですか滝壺さん。一方通行は手に触れただけで人間を殺す事が出来る超反則地味な能力の使い手なんですよ。もし少しでも機嫌を損ねたら何をするか分かったもじゃないですよ全く」

「怖いのか？」

「超違います。警戒しているだけです」

「大丈夫だよ、きぬはたそんなに怖がらなくても、もし何かあっても浜面が守ってくれるから……」

「滝壺さん。人の話し超聞いてました？別に怖いとかじゃなくて警

戒……」

絹旗の弁解の途中で滝壺が何故か絹旗を安心させるようにと安堵の笑みを放った。

その直後絹旗の眉毛が10時10分の方角に上がり、滝壺に掴みかかるような勢いで「超馬鹿にしてるんですか!!」と怒声を放った。

それでも変わらない滝壺の天使のような微笑みに完璧に馬鹿にされていると勘違いした絹旗は滝壺の柔らかいほっぺを片手で雑巾のように強くひねった。

「ひはいよ……きぬはた」

「私を超馬鹿にした罰です。後30秒は続けッて、ふぎゃ!？」

突如に絹旗のほっぺを同じようにつねる滝壺。どうやら相当痛いらしく滝壺の目はウルウルと揺ぎ今にその瞳からは涙が直ぐにでも零れ落ちそうだった。その痛みを絹旗にも味わせてやると言う感じで更に強くつねる。

滝壺だって人間だ。普段大人しい人間でもやる時はやるのだ。

「はき壺はん……超ひはいです」

「ほれは私もおんなじだよ」

2人は人混みの中足を止めお互い向き合いほっぺたをつねり合う。とそんな子供のような喧嘩を繰り返す2人の様子に気づいた浜面

「おッ!ちよい何やってんだよ2人共」

2人の喧嘩を止めるため浜面はダッシュで絹旗と滝壺に駆け寄り、2人の手を引き離そうとするが。

「超邪魔です!!」

バゴン!!と絹旗の強烈な肘打ちが浜面の顎を突き上げるような形で直撃した。ゴフツと言う声と共に舌をモロに噛んだ浜面は地面を陸に上げた魚のようにのた打ち回る。

そんな光景をただ呆然と見ていた一方通行は携帯をポケットから取り出し時間を確認する。

現在16時30分。ラストオーダーとミサカと別れて随分と時間が経っている。

一方通行としてはいち早く事件を起こしたスキルアウトの情報が欲しかったのだがかなり時間をくってしまった。

それもこれもここでのた打ち回っている馬鹿のせいだと、改めて認識するとゆっくりと浜面の元へと向かう。

……………そして。

「いつまで遊んでやがんだア三下ア!!早く起きやがれエ」

ボゴツと浜面の腹に強烈な蹴りが食い込む。

「クパア!?!」

意味不明な雄叫びと共に浜面は目を真っ白にしてそのまま気絶してしまった。

そして電極スイッチをONにした一方通行はそのまま浜面の襟首を片手で持ち、喧嘩待っただかな女性陣を無視し、ひこずりながら目的地へと移動した。

同時刻。ラストオーダーとミサカ10032号は同じ第15学区のプランナーと言う名前のケーキ屋にいた。

結局ミサカの言う事を聞かずにケーキ屋に直行した自我の強いラストオーダーにミサカ10032号は制裁を加える筈だったが、いざケーキ屋にたどり着くとやはり女の子なのか、美味しそうなケーキに目がくらみ、気が付けばケーキを注文してしまっていた。と言うのは言い訳なのだが、ラストオーダーの子守などと言う大変重労働な仕事を押し付けられているのだ、多少のご褒美は欲しいものだ。

今は2人共店内の丸椅子に腰掛けテーブルに向かい合う形で座っている。

「やってしまいましたとミサカはテーブルの上に置かれている大量のお皿に目を背けつつ、摂取したカロリーの量を気にしてみます」

お皿の山。

2人の眼前の光景にその言葉が相応しいだろう。

学校の机より少し大きめのテーブルには溢れんばかりのケーキのお皿が積み重ねていた。

まあケーキと言えば誰でも欲張って食べたいな〜と思ってしまわない事もないがこの量は異常だ。これだけお皿が積み重なるのを見るのはお寿司屋位だろう。

ケーキ屋でこれはまずない。

お店の店員さん達や周りのお客さん達も流石にドン引きである。

「食べ過ぎて気分悪いかもってミサカはミサカは口を押さえて見ると言うか何か出そうかも……………」

「こんな所でゲボなど絶対吐かないで下さいとミサカは警告を出しつつ化粧室に向かう事をお勧めします」

「そうしてくるってミサカはオエッ」

今にも吐き出しそうなラストオーダーは勢いよく席を立ち猛ダッシュで化粧室へと駆け込んだ。ケーキを食べ過ぎて気分が悪くなるなどなんとも贅沢な事だろう。

ミサカはラストオーダーが立った時倒れてしまった椅子を元に戻すと店内にかけられている振り子時計に視線を移した。時刻は17時に差し掛かるうとしていた。

もうかれこれ第15学区に来て5時間が経つ、やはり慣れぬ土地に長時間いるせいか疲労で少し肩が重たい。

ミサカは疲れが籠もった溜め息と同時にスカートの中からひよこをモチーフにされているジュニア用の携帯電話を取り出しアドレス帳の中から一方通行の電話番号を表示する。

あまりにも遅いので帰りますと一言言ってやろうとでも思ったがミサカは表示されている電話番号を一度眺めると直ぐに携帯電話を畳んだ。

もう少しだけ付き合ってやろう。

ミサカは病院の屋上で一方通行から言われた言葉を思い出す。

協力してくれ。たったその一言を聞いた時ミサカは嬉しかった事を思い出す。ミサカは時々自分はお荷物な存在なんじゃないかと思っていた。

絶対能力者進化実験の時、自分と言う名の存在が御坂美琴と言う



1人の少女を苦しめた。そしてごく普通の高校生上条当麻を血塗れた非日常な世界を自分のせいで見せてしまい巻き込んでしまった。

自分と言う名の存在が絶対能力者進化実験を生み。そして一方通行に一人の殺戮を与えてしまった。

自分が誰かの役に立てた事などあったのだろうか？そう思う日は少くない。考えるたびに胸が痛んだ。生きる大切さを知り個々の存在を尊重して妹達は今生きている。

しかし本当にそれでいいのだろうか？もしかしたらまた自分と言う存在がまた関係のない人間を巻き込んでしまうのではないだろうか？

自分は誰かの助けになれるのだろうか？これでいいの？  
そう自分に問いただす日は少なくなかった。

だから一方通行に助けを求められた時は嬉しかった。

自分が誰かの役に立てる。たったそれだけで心は満たされた。自己満足なのは自分でも分かっている。けどこの気持ちに偽りなんてない、だから自己満足でもこの気持ちは本物だ。

だからもう少しだけ待つてあげよう。

ミサカは椅子に座り一方通行の帰りを待つ。しかしミサカのそんな思いとは裏腹に一方通行がゲームセンターで遊んでいた事を彼女は知らない。

3

ここは第15学区のファミレス。やはり学園都市で一番栄えている学区と言う事もあって、第7学区にある同じチェーン店のお店と

比べると敷地の規模が違う。

テーブルの数は軽く50席はあるだろう、とにかくビックサイズのファミレスだった。

そんな大きなファミレスの一番端の席を一方通行、浜面仕上、絹旗最愛、滝壺理後は陣取っていた。

絹旗と滝壺は結局あの後お互いの頬を引っ張り合いをししばらく続けていたらしいが、どうやらスタミナの限界が来たのか先にファミレスに入店した男性陣より10分ほど遅れてやって来た。

ぐだぐだ。絹旗と滝壺の今の様子を言葉で例えるならそんな感じだろう。体力が回復していない2人はテーブルに両手を乗せて伸びていた。

そんな2人を見て浜面は目の前に置かてたお水をそつと滝壺に差し出す。

「ありがとうはまづら」

滝壺は差し出されたお水を口に運ぶ。その様子を見て絹旗は口をムツとさせて、

「滝壺さんにはお水を与えて私にはないって超どう言う事ですか？」

やや不機嫌な気味な声を出す絹旗。なんとなく滝壺の方が可哀想だからと言うのが理由なのだが、残念ながらあの水は本来は浜面に差し出された水でもちろん一つしかない。

絹旗は自分の水を席に座った瞬間飲み干している。

ここにはおかわり用のお水のポットを置いていない、そう言うアフターサービスはせずなるべく客にドリンクを注文させて利益を上げようと言うのがお店側の策略なのだろう。ケチらずドリンクを注文すればいい話しなのだが、残念ながら現在の浜面の持ち金は157円。ドリンクの値段150円。

157円 - 150円 = 7円。

(……………うむむむむッ)

浜面の両手が携帯のバイブモードのようにもの凄い勢いで振動し出す。

もしドリンクを頼んでしまえば浜面の残り残金は7円だ。そして次の学園都市からのお金の支給日まで後3日。

(どうする俺、この150円は俺が3日間を生き延びるために必要不可欠な全財産だ。しかしここで絹旗を見捨てるのは何だか可哀想だ。いやしかし……………)

頭の中でお金(157円)と絹旗を天秤にかける浜面。今この瞬間にも絹旗はこちらに向かって「お水下さい」と超連呼してくる。

(自分のこれからの3日間を取るか、それともこのクソ可愛らしくもないコイツの喉を潤す事を優先するか……………どうする、どうするよ俺！)

とその時。

「チッ」

軽い舌打ちと共に隣に座っていた一方通行が自分の水を絹旗に差し出した。

「えッ？」

驚愕する絹旗。

一方通行から差し出された水を見つめたまま絹旗は動かなかった。

「なんだ飲まねエのか？」

一方通行はテーブルに肩肘をついたままいつまで経ってもお冷やを受け取らない絹旗にそう呼びかけた。

絹旗はその水が自分に差し出されたものと確信をもつとかなり遠慮気味にお冷やを受け取る。

「超サンキューです」

「くっだらねエ事でいつまでもバテてんじゃねエよ」

そう吐き捨てるよう言葉を放つと一方通行は膝を組み直し視線を浜面の方へと向ける。

なんとか財産を失わずに済んだ浜面は安堵の溜め息を吐く。一方通行の思わぬファインプレーに助けられた浜面は一方通行に向かつて親指を立ててグッドサインを出す。

浜面の安堵の籠もった満面の笑みを見て機嫌を悪くしたのか一方通行はその親指を決して曲がる事のない方向へと強く曲げた。

「ぎゃあッ！」

ありきたりな叫び声をあげる浜面。店内の注目が瞬時に一方通行のテーブルへと向けられた。

注目されている事に気付いた一方通行は浜面の指から手を離すといつもよりかなり声の低いトーンで浜面に投げかけるような話しかけた。

「オレはテメエらと漫才をするためにここまで来たわけじゃねエん

だ！いい加減本題に入りてエンだがイイかア？」

「おッおうそうだったな」

そう、わざわざこのファミレスまで移動したのは決して食事をしに来た訳でも、仲良くお喋りをしに来た訳でもなく、落ち着いた場所ので浜面から情報を聞き出すために来たのだ。

それが下らない喧嘩でバテた少女の介抱だとか浜面の残金の心配とか一方通行にとってはどうでもいい。

一方通行は本題に入る前に溜め息を吐き体の力を一度抜く。そして口を開こうとした瞬間。

P i P i P i P i

突然浜面の携帯が鳴りだした。

「あア！？だれだこんなタイミングの悪リイ時に電話かけてくのは」

浜面は急いでズボンのポケットに入れてある携帯電話を取り出す。そして携帯の画面には発信者の名前が表示されていた。

「げッ 麦野だ」

「無視しろ」

「そんな事したら後で殺されます」

一方通行の言葉をいい加減に断ると浜面は慌てて通話ボタンを押す。

「もしもし」

『はまづら君？あんだ一体今どこにいるのかしら？』

あれッ？何故か麦野のしゃべり方がどこか違和感があるのだが。なんとというかあまりよろしくない事に怒ってるっぽい。

「あの〜麦野さん？」

『何？』

「何を怒ってらっしゃってるのでしょうか？」

ギシッ！電話の向こうから奥歯を噛み締めるような音が聞こえる。確実に麦野のは怒っているみたいだ。しかし浜面は怒られるような事は何もしていないと思っているのだが。

『はまづら？あんだ今日例の事件について話しがあるから私達に集合かけたわよね？』

「……………あッ！！」

『あッ！！じゃねえええええ！！！！』

浜面の電話から麦野の怒声がテーブルに座っている三人にも聞こえる位まるでスピーカーのように大きな音で響き渡る。

浜面は思い出した。確かに昨日アイテムのメンバー全員に17時に第15学区のコーヒーカーフェまで来るように集合をかけた事を。実はゲームセンターで遊んでいたのも集合時間になるまでの暇つぶしで、遂ゲームに夢中になり過ぎていて本来の目的をまるで最

初からなかったかのようにすっかり忘れられていた。

浜面は恐る恐る店内に掛けられている時計を見る。17時30分。完全に時間を過ぎてしまっている。

どうやら絹旗と滝壺もその事をすっかりと忘れられていたらしく2人で顔を見つめたまま「あゝ忘れてたー」などとかなり脳天気な感想を述べている。しかし浜面からしたら忘れてたーなどとは絶対に言えない。

理由は超簡単で冗談ぬきで殺されるからである。

『まあ浜面には後で体裁を加えるとして、今あんだどこにいんのよ？絹旗と滝壺も一緒なんでしょ？私とアイギスもそっち行くから場所教えなさいよ』

体裁と言つ言葉がかなり気になるが聞き返す勇氣もない浜面は麦野の言う通りに場所を教えた。

『あッそれなら今丁度近くにいるわ』

プツンと唐突に電話が切られた。

そしてわずか30秒後。

店内の出入り口に2人の女の子が入店して来た。

「マジで速え」

体裁の心の準備をする暇もなく麦野がやって来た。そして店内をグルリと見渡し浜面を発見すると足早にこちらに向かって来た。

そして無言のまま浜面の背後へと移動した麦野は一発浜面の脳天に拳骨をお見舞いする。

ガツンッ！！バゴンッ！！拳骨の衝撃でテーブルに頭を打ちつけた浜面は頭を抑えゆっくりと麦野の顔へと視線を移す。

顔は笑っている、しかし心がまったく笑ってない。なんと言うかゴゴゴゴツと言う効果音付きのオーラを体に纏っているようなそんな感じだった。

「ありやや！浜面さん爽快的に痛そ〜でも悪いのは浜面さんなんだよ〜」

いつの間にか絹旗の隣の席に付きにつこりと微笑みを放つセーラー服を着た少女がいた。

「あれ？アイギス超いつの間になんですか？」

アイギスと呼ばれる年齢14才位の女の子はセーラー服に白いキヤップ付きの帽子を被り、本来なら肩まである翠色の髪を帽子の中に納めている。

アイギスは絹旗の質問を無視してテーブルにあらかじめ置かれているお店のメニュー表を鼻歌を歌いながら楽しそうに眺める。

「おおッ春の新作桜餅ビーフステーキ！爽快的に美味しいそうです」

ジュルリツと目にお星様を輝かせるアイギス。

「麦野つちもそんなにピリピリしてないで席に座りなさいな〜」

とアイギスが席に座るようにすすめるが麦野は目を鋭く細めて、

「アイギスあんたもこのアホ面に待たされたんでしょうが！何でそんなに平然としてられんの？」

と怒りの矛先をアイギスに向けてきた。アイギスは人差し指をお



でここに当てたまま麦野に笑いながら返答する。

「いや〜だって浜面さんに怒ったって爽快的に意味ないって言うか無駄な体力使うだけですしー、まあ爽快的に言えば怒る事すら時間の無駄、浜面さんのために私の貴重な人生の一部の時間を捧げると言うのが耐えられないだけです」

アイギスは決して優しい人間ではない。浜面の事で怒る事に一度しかない貴重な人生の時間を消費したくないだけで、別に浜面が可哀想だから怒らないと言うわけではない。

浜面はアイギスの容赦ない毒舌のせいで精神的なダメージを受けると麦野から視線をテーブルに戻しそのまま頭をテーブルにぶつけたまま顔を伏せる。

顔を伏せたのはアイギスから己の精神を守るためである。アイギスの毒舌はこんなものではない、目を合わせたら最後まちがいはなく廃人コースへと招待される事になる。

それだけアイギスの毒舌は凄まじいのだ、かつてアイギスのせいで精神を破壊寸前に追い込まれた人間を見た事ある。

浜面はテーブルと顔をにらめっこしたまま石像のように動かなくなつた。

その姿を見た麦野は怒る気が失せたのか大人しくアイギスが指定した席に渋々ついた。まだ怒りが完全に消化しきれていないのか人差し指でテーブルをコツコツと叩いていた。しかし不意に麦野の指がピタリと停止する。麦野の視線に映るのは目の前に座る真っ白な少年。

「なんで学園都市最強の怪物のあんたがそこにいるのかしら一方通行？」

「あん誰だテメエ？」

眉をひそめ真つ正面にいる麦野を鋭い眼光で見つめる一方通行。麦野はその鮮血に彩られた目を一度凝視すると不適な笑みを放つ。

「絶対能力者進化計画で一万人もの量産クローンを殺したあんたがなんでここにいるのかな？」

その言葉を聞いた瞬間一方通行の顔が僅かに揺らいだ。

「何故テメエが実験の事を知ってやがる」

絶対能力者進化計画。学園都市で密かに行われていた学園都市最強のレベル5一方通行がレベル6へと進化する事を目的とした闇の実験。しかしその実験の事知っているのは統括理事会の一部の人間か実験の研究者達しか知らないはずだ。

浜面と関わっているから裏組織の人間と言う事は直ぐに認識出来た。

裏組織に入れば学園都市で非公式に行なわれている非道で残忍な研究や実験の事を嫌でもその存在を知る事になるが、あの実験だけは機密レベルが違う。

2万人のクローンの殺害をと言う事がもし何らかのひょうしで表舞台へとバレたらと学園都市統括理事会は嚴重な措置を施しあの実験だけは裏組織の人間にも触れる事なく隠していたはずだった。しかし麦野はあの実験を知っている。

穏やかなファミレスの一角が怪訝な緊張感が支配する。その空気を瞬時に読み取ったアイギスは席を立ち上がった。

「まあまあお二人共そんな爽快的に睨み合わないの、麦野さん？この真つ白な人見た目は爽快的に怖いですけど、悪い人じゃ無さそう

ですよ、私達に危害を加えるかもって警戒する必要は爽快的にないですってツたく麦野っちは本当に仲間思い何だからかつわいい」

「なツ!？」

麦野の顔が自身の真つ赤な髪と同様に急激に赤くなる。

子恥ずかしい事を平然と言うアイギスの口をマツハで両手で塞ぐ。

「麦野お前!」

その言葉に感動したのか浜面はテーブルから顔を起こし麦野に尊敬と感激の眼差しを送る。そして席を立ち上がり麦野の両手をアイギスの唇から奪いとる。

「まさかお前がそこまで俺達の事を考えてくれていたなんて……  
麦野お前は偉い!」

「黙れツ!」

「ふがア!？」

照れ隠しで放たれた麦野の正拳突きが浜面の顔面に突き刺さる。

浜面は今日その場に押されたようにゆっくり倒れるとテーブルの角に頭を打ちつけと言うダブルパンチを喰らった。

「ありゃ〜爽快的に同情はしませんけど痛そうですね〜まあ浜面さんのためにこれ以上時間を費やすのは嫌なんで爽快的にほっときましょ」

「超賛成です」

アイギスの提案に絹旗は頷く。滝壺は大丈夫？と一言声をかけ放置した。

一方通行は気づく。

さつきまで重たい空気が充満していたはずが、いつの間にか元に戻っている事に。一方通行はとっさにアイギスの方をジロリツと睨む。

その視線に気づいたのかアイギスは一方通行と目を合わせるとにっこりと笑みを放つ。

やられた一方通行は瞬時にそう思った。

一方通行としては麦野に実験の事を問い詰めるつもりだったがアイギスに横槍を入れられたせいでタイミングを失い場の空気を通常に戻されてしまった。どうやらアイギスの狙い通りらしい。

一方通行は大人しく負けを認めるとアイギスから視線を逸らし床の一部と化している浜面の方へと目を向けた。

「浜面ア！そろそろいい加減本題に入りてエンだがさっさと起きてくんねエか？」

一方通行の言葉の呼びかけに浜面は腕立て伏せのようにな両手を地面につくとそのまま体を後ろに倒し床に座った。

「おツそうだったなで、俺から聞きたい情報ってなんだ？」

一方通行はズボンの後ろポケットから綺麗に畳まれたハンカチのような用紙の束を取り出し、浜面の座る床へと投げ捨てるような感じで渡す。

浜面はその用紙を手にとると用紙に大きくピックアップされているゴシック体の文字を目で読み取る。

再び空気が変わる。

浜面の口が痙攣を起こしたかのようにヒクヒクと震えていた。思ったように動かない口を浜面は必死に動かし、声を絞り出した。

「……なんで」

小さくてよく聞き取れないかすれたような声を出す浜面。そしてもう一度今度ははっきり聞こえるような大きな声で、

「なんでお前がこの事件の事を探ってるんだよ一方通行ッ!!」

その用紙には記されていた。

『スキルアウト第187支部襲撃事件の概要について』

4

銀髪の髪を揺らしながら第7学区の学生寮の屋上にひっそりと佇む男がいた。

新世界鮮血の9人の第9位地帝の対馬黄河。

彼は屋上からまるで見下すように地上の風景を眺める。

「実につまらない世界だなこの学園都市は……なあ垣根?」

対馬の隣にいるホストのような顔立ちをした青年垣根帝督は相槌を打つと、右手に持っていた銀色のアタッシュケースを対馬に手渡した。

対馬はそれを受け取るとケースのロックを外し中身を取り出した。中に入っていたのは、土のテレズマを彩った大きさにして30センチ位の緑色光沢を放ったの二丁拳銃だった。そしてその奇妙な光沢を放つ拳銃にはこう記されてあった。

『Humus』ラテン語で地帝と意味である。

手に持った二丁拳銃を夕日と重なるような眺める対馬。そしてゆっくり口を開く。

「無能なスキルアウト共は集まったか？」

対馬の問いかけを始めから分かっていたかのように垣根は10枚位の束となったA4用紙を対馬に見せた。そこにはA4用紙びっしりに名前が記されていた。

「集まった数はおよそ300人位だ、全員学園都市に恨みを持つ連中ばかりを集めた。早く見てみたいぜ学園都市が狂気に染まる光景が」

垣根はその光景を垣間見ているか楽しそうに笑っていた。対馬も釣られるように笑みを放つ、

「確かに楽しみなのだが、その前に一仕事だ。今から超電磁砲の元に行つて来る」

「ああじゃあ俺は今からスキルアウト共の元に行つて計画のミーティングでもして来るぜ」

夕日が地平線に吸い込まれるように沈んで行く。そして空は夕闇へと変わって行く。

そして禁断の能力者地帝の対馬黄河は学生寮の屋上をあとにし、超電磁砲・御坂美琴の元へと向かつて行った。

御坂美琴の日常が終わる。

第32話〜悲劇の前日〜完！！

### 第33話 禁断は動く(前書き)

最近、何故か駄文続き。最初は風邪で頭が回らないからかなと思って思ったんですけど、やはり違いました。

俺には最初から小説を書くほどの文章力はなかったと言う事に気づきました。

しっかし。連載は続けます。放棄はしません！駄文続きなら勉強して文章力を上げます。

愚痴みたいになってしまいましたが、ご覧下さい



### 第33話 禁断は動く

第15学区の賑やかなファミレス。放課後を楽しみむために学生が多く集まるこのファミレスはいつもと変わらない活気で溢れていた。しかしファミレス店内の一番端のテーブルだけは違っていた。どこかお通夜のような静けさが漂うこのテーブルに座っている浜面仕上が両拳を組み額に当てたまま悔しさを噛み締めていた。

「ちくしょう……黄泉川ッ!!」

その様子をただ慰める事すら出来ずただ見守る事しか出来ない滝壺達。

一方通行から語られた真実。

スキルアウト第187支部襲撃事件。

その事件の事をスキルアウトのリーダーである浜面はもちろん知っていた。しかしその被害を受けたアンチスキルの中に黄泉川が含まれている事までは掴めてなかった。

浜面仕上にとっても黄泉川愛穂は大切な人だ。と言っても過去に14回自分を留置場にぶち込んだ人間でもあるのだが、それでもそんな馬鹿な自分の事を諦めずにきつと改心してくれると信じてくれた数少ない人でもあった。

浜面は顔を上げずにただ沈黙を守る。しかしそれを一方通行は許さない。

「オイ、いつまでそうしてる気だクソツタレ! こっちは時間がねエんだ。知ってる事を洗いざらい吐いてもらっせ」

その容赦ない言葉に麦野は席を勢いよく立ち上がり一方通行の胸ぐらを掴み、吐息がかかる位まで顔を近づけた。

「あんた何様？」

「テメエには関係エねエだろ」

関係ない。

その言葉を聞いた瞬間麦野は一方通行の頬に強烈なビンタをおみまいする。バシィッ！と鞭で叩いたような音が店内に響く。注目が一気に一方通行と麦野に向かう。しかしそれでも関係なく麦野は怒りを露わにした。

「関係ないですツて？関係大有りよ。コイツはアタシ達の仲間、それを平気で傷つける奴は誰だろうが許さない！」

麦野沈利はある事件をきっかけに仲間が大切だと言う事に気づいた。一年前の彼女は仲間を仲間と呼びながら利用価値がなくなれば見捨て、逆らえば殺し、裏切り者がいれば容赦なく惨殺するような人間だった。

自分への裏切り者浜面や滝壺を殺そうとした事もあった。けど今は違う。

彼女はとある理由でロシアに行った浜面、滝壺を殺しに行った。しかし結果は失敗。体はポロポロになり、もう死ぬしかないそう思った自分に救いの手を差し伸べたのは浜面だった。

馬鹿な奴だと思った。

自分を殺そうとした人間を助ける。そんな人間世界中に一体何人というのだろうか？現に浜面の体は傷だらけで何回も自分に殺されかけた。

そんな状況下の中でも浜面は言った。『もう一度やり直そうと』その時、麦野は嬉しかった。

こんな醜く殺人鬼へと変貌してした自分を受け入れてくれる仲間

がいる事に、そして同時に悔やんだ。こんな自分をまだ想ってくれている仲間に一体どれだけ惨い事をしてきたのかと、償っても償いきれない。

だから誓った。

もう自分は仲間を傷つけない。仲間を必ず守る。

その思いを胸に麦野は今一方通行に牙を向いている。

「これ以上浜面に関わるって言うんなら私は容赦しない例え学園都市最強のアンタでもねッ！！」

麦野の目は本気だった。今にも一方通行を殺してしまいそうな勢いで言葉をぶつけている。その様子を見て絹旗やアイギスは麦野の両肩を持ち落ち着くように説得を試みるが、麦野の怒りが収まる事はない。

一方、一方通行は麦野に掴まれている白く細い手を舐めるように見つめそのまま麦野の顔を真つ赤な眼球で睨みつける。

「オイいい加減離せよ三下ア。オレはテメエと話しをしに来たわけじゃねエンだ外野は黙ってる」

今度こそ限界だった。麦野の左手には青白い閃光がホタルの光のように点々と現れた。麦野沈利の原子崩し《メルトダウン》の粒子を拳に収束させる。

「ちょっと麦野さん超何を……？」

「コイツを殺す」

間髪いれずに答える麦野。迷いはない、コイツは仲間を傷つける敵それだけで牙を向く理由は充分だった。一方通行は眉一つ動かす

事なくただ電極スイッチの電源を入れる。

そして麦野の左手が一方通行に向かって突き出される。

「止める麦野ッ！！」

麦野の閃光の拳がピタリと一方通行の眼前で停止する。

「なんで止めんのよ浜面」

一方通行に拳を突き出したまま麦野は浜面を睨みつける。麦野の瞳を見て浜面は小さく笑った。

「ありがとう麦野、けどいいんだ」

「いいつてアンタ……」

浜面は店内を見渡すとお店の店員や客に頭を下げる。そして麦野の左手を包み込むように握りしめる。その瞬間青白い閃光は花火のように散り輝きを失った。

「悪い一方通行。ちよつと場所移さねえか？」

「構わねえ」

一方通行は了承すると席を立ち早速とその場から立ち去った。

一方通行が見えなくなったのを確認して絹旗が浜面に話しかける。

「超いいんですか浜面？あんな人と二人きりで」

「ああ大丈夫だ。それより麦野例の事件の資料貸してくれないか？」

まだ機嫌が治っていないのか麦野は言葉を発しない。そんな様子を見て浜面はやれやれと言った感じで頭をクシャクシャとかきむしる。

「麦野怒ってくれてサンキューな、でもあいつはああいう奴なんだよ。どこか攻撃的な話し方をするけどさ、あいつだって大切な人間を傷つけられてんだ。苛立ってたんだよ多分あいつも分かるだろ？」

「それはそうだけど」

「大丈夫、大丈夫！！すぐ帰って来るから」

どこか軽く流された感じがするが、あまり嫌なアイツを待たせると戻ってくるかもしれない、そう考えると麦野は渋々と白いシヨルダーバックからA4用紙が十枚位束になった資料を浜面に渡した。

「んじゃツちよつくらあ、あツそれとアイギス」

「爽快的に何ですか？」

「あまり俺の滝壺をいじめんなよ！」

そう捨てゼリフを吐くと浜面は一方通行の後を追って去って行く。その姿をアイギスは自慢の翠色の髪の毛をクルクルと回し首を傾げる。

「私爽快的に滝壺つちをいじめた事ありましたっけ？」

と疑問の声を上げながら隣に座る滝壺の顔を見る。滝壺も目を合

わせるがすぐに視線を逸らし浜面にもらったお冷やの容器へと注目を移す。

容器の中には何故か沢山のコシヨウが振りかけられていた。

「あいぎす?」

「滝壺さんだけ浜面にえこひいきされるのは爽快的に気に入らせんからね」

複雑な女心と言つものだろうか。アイギスは浜面を少し心配しながら帰りを待つ。

2

空の色は薄暗い紫色に変わっていた。街の所々に設置されている電灯にも灯りがつき始め、時刻は完全下校時間になっていた。そのため、今は帰宅を急ぐ学生が街の中に溢れていた。

しかし彼らにはそう言った規則など関係ない。一方通行と浜面仕上はファミレスから数分離れた自然公園のベンチに座っていた。

風景は夜に近く自然公園特有の森や草木は不気味な空間を作り出していた。そんな空間に不思議と溶け込んでいる一方通行は浜面に渡させた資料を黙々と呼んでいた。

その資料の内容は

『スキルアウト暴動事件の概要』

学園都市のレベル0集団『スキルアウト』が4月の始めから現在4月23日までに起こした事件の件数は30件にも及ぶ。

しかし学園都市は彼らが起こした事件を表沙汰に出す事はしておらず、ニュースやマスコミなどのメディアには情報の開示をしていない模様。

反学園都市組織『アイテム』は組織の行動理念に乗っ取り学園都市が隠蔽するこのスキルアウト暴動事件の調査を行った。

結果分かった事は4つ。

始めにレベル0集団のスキルアウトは全員超能力を保持していた事。レベル0が能力を開花する事は考えられない事ではないが、100を超えるレベル0が全員能力を開花させるのは明らか不自然である。

この件については現在調査中である。

2つこのスキルアウト集団暴動事件を指揮している人物『さえじま 牙島真』について。

牙島真。スキルアウトのリーダー浜面仕上を補佐する幹部。

第7学区の喫茶店を襲ったスキルアウトをアイテムのメンバーアイギスが捕獲した。

そしてそのスキルアウトを尋問した結果この暴動事件を主に指揮している牙島と呼ばれる人間らしい。

しかしこの暴動事件を企てるのは牙島本人ではなく別の人物で主導者は他にいない。更に尋問を進めるが相手の口は重たくこれ以上成果はあげれないと思つたため、表の世界とは別に裏の人間だけを取り締まる組織『裏の番人』に引き渡した。

3つ目、スキルアウト全員が暴動に参加しているわけではない事。詳しく言うと2つの派閥に分けられる。

浜面仕上に協力する『浜面派』と能力を犯罪に使う『牙島派』実質牙島派は全スキルアウトの一割もいない。事件を起こしているのはごく一部の人間である。

4つ目第7学区の風紀委員第187支部襲撃事件。能力を保持したスキルアウトが風紀委員の支部を襲撃し物品を荒らした模様しかし盗まれたものはなく何故このような行動とったかは不明。逃走中のスキルアウトが能力を使用しアンチスキルを撃退した。

以上の事から不明な点は多くアイテムのメンバーは調査に誠意を尽くし学園都市の闇の部分を探る事を第一目的とし調査を続行せよ。書類制作者麦野沈利。

一方通行が読み終わるのを確認し浜面は口を開く。

「俺達が分かかってんのはそこまでだ。どうだ少しは何か役立つ情報はあったか？」

一方通行は資料を浜面に返し、紫色の空を見上げる。

「欲しい情報はなかった」

「……そうか」

無意識に溜め息が出る。一方通行が欲しいのは黄泉川愛穂を傷つけたスキルアウトの情報だ。記されていた風紀委員支部襲撃事件に書かれていた情報は風紀委員やアンチスキルのデータバンクから入手済みだった。

溜め息が何度も空を切る。その落胆している姿を浜面は申し訳なさそうに見ながら、

「悪いな、俺は確かにスキルアウトのリーダーだけど奴らをまとめる力は悔しいけどない、俺に力が無いばかりに今回あのクソババアを結果として傷つけてしまった。俺の責任だよ……」



自分の表情を隠すように顔を下に伏せる浜面。一方通行は視線を浜面の方へと移す。

「なア？テメエといたあのお前を含めた女達もこの事件について調べんのか？」

「ああ、俺達アイテムは元々学園都市の非公式部隊で統括理事会のアホな連中の暴走を阻止するために作られた部隊なんだ。けど今は違う俺達アイテムの今の目的は学園都市の裏を探りその実体を暴き解決するのを目的してるんだ」

学園都市には数え切れないほどの闇がある。

統括理事会が学園都市には不利益と考えた事件などは全て隠蔽されるし、人体実験など裏ではかなり行われている。

アイテムはそう言った学園都市が闇に葬り去ろうとしている事件を突き止め解決又は阻止するのを目的としている。

つまり反学園都市な組織とも言える。

それは学園都市全体を敵に回しているようなもの、しかし浜面に迷いはない。

「もう身勝手な大人達に利用されるは真つ平なんだよ俺達は……」

浜面は一年前を思い出す。御坂美鈴襲撃事件やアイテムとスクールの戦い。そして学園都市の別起動隊に追われロシアへと向かった事。

全てが全部泥臭い欲望に埋もれた大人達が起こしたものだ。使い捨てのスキルアウトに御坂美鈴を襲撃させ、アイテムとスクールの戦いではアイテムをバラバラに引き裂かれた。

そして麦野沈利。

彼女の体は今もボロボロだ。内臓は常人よりも数少なく、右手は義手をつけ、片目には義眼を装着している。それもこれも全て大人達が解決する問題を押し付けられた代償だった。

許さない。学園都市のクソな大人達も麦野の体を滅茶苦茶に改造してまでも己の欲望に利用した統括理事会の人間もそれを知っていて見過ごす人間も全部。

だから浜面仕上は新生アイテムとしてそう言った腐った大人達の野望を阻止しよう自分達、麦野や滝壺のように実験とか計画だとかで苦しんでいる者をもう二度と出さないためにもこうして反学園都市組織として活動している。

浜面は公園のド真ん中にポツリと置かれている時計に目をやる。

現在時刻は6時を回ろうとしていた。麦野達はもう解散したのだろうか？そんな事を思っている最中、一方通行は腰掛けていたベンチを立ち上がる。

「もう行くのか？」

「ああ情報が手に入らなかったんならここにいる意味はねエからな」

「そうか」

浜面も同じくベンチを立ち上がる。一方通行は帰路へと目線をやると、苛立った声で、

「クソツセめてあの爆炎の正体さえ分かれば捜査する視野が広がるのよオ」

愚痴のように零す言葉。浜面はそれが一方通行の欲しかった情報の一部だと認識すると、詳しく詳細を聞いて見る事にした。

「爆炎の正体って何だ？それさえ分かれば犯人が分かるのか？」

一方通行は浜面の方へと振り返る。

「ああそれさえ分かれば後は風紀委員や研究者達のデータバンクでも開いてそいつの能力の種類を調べる事が出来る。後はこのスキルアウトを指揮している冴島とか言う奴を問い詰めれば黄泉川をやった奴も分かるはずなんだがな」

爆炎の正体。

浜面は思う、それなら真っ先に疑うのはもちろん発火能力者なのではないだろうかと、しかし一方通行とて馬鹿ではない、浜面が導き出す答えに学園都市最強の頭脳をもつ人間がたどり着かない訳がない。

疑問が尽きない中、一方通行は携帯から一枚の画像を表情すると浜面に良く見えるように画面を浜面の方へと向ける。

携帯に移しだされた画像には裏路地を構成しているビルが映し出されていた。灰色なビルの表面は焼け焦がれて真っ黒になっている。どうやら謎の爆発が起きた後の写真らしい。

「おかしいと思わねエか？」

「何が？」

「窓を良く見てみる」

そう言われ映し出されているビルの窓を見てみると、特に変わった様子はない、ビルの表面と同じくドロドロにガラスが溶けているだけであった。

「これが何か？」

「馬鹿かテメエは！？辺りを吹き飛ばす爆炎が上がったんだア窓ガラスが溶けるだけで終わる訳ねエだろ」

ハッと浜面は息を吸う。どうやら気づいたらしい。

「ワケ分かんねエんだよクソツタレ、爆炎が上がったのに爆発が起きねエなんて。能力の検討がつかねエ、だいたいこれが超能力かどうかも怪しいんだ。非科学的過ぎるぜクソツ」

これが学園都市最高の頭脳を持つてしても分からない難問。

しかし浜面は違った。非科学的その言葉を聞いた途端浜面は目を針金のように細めた。非科学的そのワードからとある人物が真っ先に頭の脳裏を横切ったからだ。その人物はアイテムをバラバラに引き裂いた要因の1つとも言える人物。

その人物がすぐ頭に浮かび上がったのは忘れたくても忘れられない位に憎いからだからだろうか？しかし奴はもう死んでいる。浜面はその人物の名前を出すか迷う。死んだ人間の名前を挙げた所で余計に一方通行の頭脳を混乱させるだけかもしれない。

それを思うと言わないべきではないかと内心考えるだが、何故だろう胸の奥にざわめきを感じてしまうのは……。

「……………」

浜面の浮かない顔が、一方通行の帰路へと向かう足を止めていた。何か言い出そうとしているのかそうでないのか、分からないが何か隠している事がある事だけは確かに感じとれた。

少しでも真相へと近づくため一方通行は目先を浜面の瞳と重ね合

わせる。

「なんか知ってんなお前？」

「え！？いや何でも……」

しかし一方通行は逃がさない。その真っ赤な血色の眼球が答えろと訴えかけて来る。金縛りにあったかのように浜面はその瞳から視線を逸らす事が出来ない。

「話さねエならオレは今からかたばつしにスキルアウト共を潰しに行く」

「……………ッ！！？」

それは脅迫にもよく似た言動だった。

スキルアウトのリーダーである浜面がそれを許さない事を知っているながら宣告して来ている。

かたばつしに。

それは最悪『浜面派』の人間にも危害を加えると言う事だ。

一方通行がもし行動に移した場合、それを阻止するチカラは浜面にはない。

浜面はもう二度と口に出したくない人物の名前を言う事を決意した。

「俺はそんな非科学的な事を実際に起こす事が出来る可能性のある人間を知っている」

「誰だ」

ただ先を促す一方通行。  
浜面は一度深く呼吸をし、吸い込んだ息と共にその人物の名前を出した。

「垣根帝督」

一方通行の目が大きく見開らいた。  
呼吸するのも忘れ一方通行の思考が停止した。  
垣根帝督。

かつてスクランブル交差点にて一方通行に惨殺された人間の名前が一方通行の思考を駆け巡る。

「わっやっぱり逆に混乱させちまったか、悪い垣根は一年前お前が殺したはずだもんな、なしなし今のは忘れてくれ」

いや、垣根帝督は死んでなどいない。一方通行は近日垣根帝督と第3学区の遊園地で再会した。奴が何故生きているのか分からないが、確かに奴は呼吸をし、言葉を放ち、能力を使用していた。

徐々に思考が覚醒して行く。

もしレベル5と言う実力を持つ垣根が犯人となれば、アンチスキル数十人を撃退するなんてわけではない。

一番の難問であった正体不明な爆炎もそれなら説明がつく。垣根帝督の能力『未元物質』はこの世界には発見されていない新たな法則を作り出す事が本質であったはずだ。

「クソツタレよく考えたら簡単な事じゃねエか何やってんだよオレ」  
一方通行は一時垣根が怪しいと踏んだ事はあったが、その考えはすぐに違つと判断してしまった。

垣根帝督のような人間がスキルアウトみたいな下の連中に協力す

るはずはないと考えたからだ。

裏を返せば垣根帝督ほどのチカラを持った人間がスキルアウトを頼るはずがない、垣根なら自分一人で鼻歌を歌いながらも風紀委員会の支部を襲撃する事が出来ると思っただからである。

しかしその決め付けが仇となり、垣根が犯人だと言う答えをみずから捨ててしまっていた。

自身の早計的な考えを悔やむ一方通行は拳を電灯に当てたまま更に力を込めてもう一発電灯を殴る。

その様子をただ呆然と見ていた浜面は我に帰ると強い口調で一方通行にこう問いだした。

「ちよつと待てよ一方通行。垣根はお前が殺したはずたる！？何でそのまま話しが進んでんだよ。垣根は死んだんだ！死んだ人間がどうやって黄泉川を……………」

「垣根は生きてやがるぜ」

「なッ!?!」

絶句。

浜面の表情が口を開けたまま仮面を被つかのように固まった。浜面はさつきまで一方通行が垣根を殺した事を忘れて話しているのかと思っていた。そんな馬鹿な話しはないと知りながらもそう思っていた。

しかし事實は違った。

垣根は生きている。

突きつけられた真実に重たい衝撃を受ける浜面。

浜面にとつて垣根帝督は『災悪』そのものな存在だった。かつてアイテムをバラバラに引き裂いた張本人が生きている。

浜面はその事実をまだ受け止められないでいた。  
しかし一方通行は浜面の頭の整理する時間を与えない。

「オイ今すぐにだ、事件を起こしたスキルアウトを指揮している冴島ツて奴の情報を教えろ」

「……？」

垣根帝督の生死を頭で論じている浜面に追い討ちをかけるかのよう  
に一方通行は新たな情報の開示を求めてきた。

「冴島を探してどうする気だ？」

とりあえず今は話しの流れに乗るしかないと判断した浜面は会話を  
合わせる事にした。しかし疑問なのは一方通行は垣根帝督が犯人  
と睨んでいるはずなのに何故冴島の情報を欲しがるんだ？

その答えはすぐに一方通行の口から言い渡された。

「冴島ツて奴のバックに誰か別の主導者がいるツてお前らが調べた  
情報には書いてあったよな？」

「確かに書いてあったけど……ツてまさか！！？」

「今までの推理が正しなら間違いねエ、多分その主導者ツスカつう  
のは垣根だ」

浮き彫りになった犯人の影を追って長い戦いが幕を開ける。

一方通行は垣根について、浜面仕上は冴島についてをお互いの情  
報交換をするため、再びベンチに腰をかける。

現在時刻 18時10分。



そして同時刻。

3

学園都市の西の外れには大きな工場地帯がある。  
そこにある列車の操車場に御坂美琴はいた。

「出てきなさい！手紙に書いてあった約束通り一人で来たわよ。姿を現しなさい！！」

「ふむ、確かに時間通りだ。遅刻しなかった事を寛大な私は誉めてやるっ」

いきなり後方から甲高く嫌みにもよく似た声が唐突に美琴の耳を突き抜けた。

美琴が後ろを振り返るとそこには、銀髪の長髪の男がまるで最初からそこにいたかのように立っていた。

銀髪の男はずれ落ちている三角メガネを定位置に戻すと、口元を薄く切り裂いたような薄気味悪い笑みを放った。

「初めまして超電磁砲・御坂美琴君。寛大な私の名前は対馬黄河と申します。では早速始めましょうか？楽しい宴を」

スツと美琴に向けられた右手。

「なッ！？」

その瞬間ズガンッ！ズガンッ！！と対馬が右手に持っていた拳銃から炸裂音が響き渡った。

第33話 禁断は動く〜完！！

### 第34話 絶対能力者進化実験（前書き）

新年明けましておめでとございます！！

これからもご愛読される事を祈りつつ連載を頑張ります！！

そして今回は対馬黄河の絶対能力者進化実験の核心に迫るわけですが、計画の内容は伏せています、ストーリー構成のために取った方法なので、

今回も話しがワケのワカラナイ事になってますがよろしく願います

### 第34話 絶対能力者進化実験

学園都市の西の外れにある操車場で一つの発砲音が鳴り響いた。発砲音を発した銃口から線香のような細白い煙が吐息のように吐き出されていた。

銃口の先にいる御坂美琴の思考が停止する。

「――自分は撃たれた？」

そう思ったのだが自分の体を弾丸が突き抜けた跡も痛みもない。それを確認すると美琴はゆっくりと視線の矛先を白衣に黒いロングコートを羽織った男。対馬黄河へと向ける。

「ビックリしたか？まあ安心しろ弾丸は装填していない中身はただの爆竹だ」

そう言うつと対馬は持っている玩具の拳銃を足元に落とし、抱きしめるように両手を広げた。

「改めてまして、ようこそ御坂美琴君。私は新世界鮮血の9人所属の対馬黄河と言うものだ。早速だが私からのラブレターは受け取ってもらえたかな？」

ラブレター。

その言葉に美琴の思考は再び動き始める。

「ええ、学生寮にわざわざ名指しで送りつけて来たあれね」

銃口を向けられ、玩具とは言え発砲された事に腹が立ったが美琴はあえてそれを無視した。無視した理由は他でもなく対馬から美琴に贈られた一枚のラブレターの真相をいち早く知るためだった。

スカートのポケットの中から美琴は一枚の八ガキサイズの便せん用紙を取り出した。

「どう言う事が説明してもらおうかしら」

「どう言うも何も無い。記してあった通りの意味だよ、絶対能力者進化計画を再開したい。だがそのためにはどうしても超電磁砲の異名を持つ君の協力が必要なんだ」

突然の出来事に正直訳が分からなかった。対馬から送られた手紙には確かに絶対能力者進化計画の再開を意味した内容が文章で記されていた。それを見た時、一年前の悲劇が鮮明に脳裏を横切った。

学園都市最強の能力者『一方通行』を幻のレベル6に進化させると言うその実験は二万もの妹達を殺す事を前提とした残酷かつ悲惨な実験だった。その実験は途中とある1人の少年が一方通行に敗北を与えた事で中断されたが結果としては一万もの妹達を結局救う事は出来なかった。

そんな悪魔が描いたような実験を再開しようしている目の前の男。何を目的でそんな事を言っているのかは分からないし聞く気もない。

ただあの悪魔のような実験を繰り返すと言うのなら、黙っている訳にはいかなかった。今ここにいる理由はたったそれだけで協力なんて出来るわけがなかった。

「どうした早く返事を聞かせてくれないか？」

何時までたつても言葉を発しない美琴に痺れを切らした対馬はそう言葉を放った。

と同時に。

ズカントッ！！と美琴の右手から一閃の雷光が対馬に向かって放たれた。雷の槍は対馬の丁度右頬を通り抜けそのまま直線上にあるコンテナに激突し、爆発音と共にその姿を消した。

「ふざけんじやないわよ！！アンタが一体何者かとか何を思っただの実験を始めようとしているのかは知らないけど、また妹達達を殺戮の輪廻の中に送り込む事をこの私が許すわけないでしょうが！！」

隠しきれない敵意の視線が美琴からは感じられる。それでも対馬は顔色を変える事はなく、そんな敵意さえ心地良いと言っばかりに白衣から煙草を取り出し火を点けた。

「勘違いしてもらっては困るな超電磁砲。誰があの出來損ないの軍用クローンを使うと言った」

「何ですって？」

対馬は白衣の内側を手を伸ばしベルトに馳せてあった一枚の茶封筒を取り出し、美琴の足元に向かってそれを投げる。

美琴は対馬の動きに警戒しつつ、足元の茶封筒を手に取り、中身を取り出す。

「寛大な私が新たに発案した絶対能力者進化計画の計画案だ」

美琴はその二十枚構成の束になっている計画書を一枚一枚丁寧に捲り、計画書の文字を一文一文をじっくりと凝視する。次第に美琴の表示がどんどん怒りの形相に変わっていく。

・・・何なんだこれは？

美琴はその計画書を最後まで読むことなく握り潰した。

「アンタ正気なの？」

下を俯いたまま美琴はそう訪ねた。

「ああ正気だ。分かるだろ？そこに記されていた通り君のチカラが必要なんだ、どうだい寛大な私に協力してはくれないか？」

馬鹿げている。

美琴はそう思った。

この計画書は計画書何てものではない。例えるなら『悪魔のシナリオ』

ここに書かれていたのは学園都市の崩壊を意味したものだ。

そんな事をもし本当に実行に移せばこの男は学園都市中の人間全てを敵に回す事になる。そうなった場合コイツは1日と持たずに必ず学園都市のアンチスキルやジャッジメントに捕まる。

現に学園都市最強のレベル5である自分でさえ、学園都市に本気で追われた場合、確実に1日も保たない。

学園都市はそんなに甘い世界ではないのだ。

しかし美琴が本当に呆れている部分はそのではない。

「改めて聞くけどアンタ本当にこの実験が成功すると思ってるの？」

「無論だ。私の理論に則ればこの実験は必ず……………」

「無理よ」

確信が籠もった即答だった。御坂美琴は知っている。この実験は確実に意味のない事を、

「何故無理だと決めつける？」

「簡単な話しよ。一年前に行われた絶対能力者進化実験は『樹形図の設計者』ツリーダイヤグラムが生み出した唯一の方法だからよ」

つまり美琴が言いたい事はこうだ。

一年前の絶対能力者進化実験は今は無き世界最高の究極の予言機シミュレ械装置イタ『樹形図の設計者』を使用し優秀な研究者達が演算に演算を重ねた結果の元行われた実験だった。

先も説明したが『樹形図の設計者』は現在存在しない、一年前の夏に白いシスターの操る魔王の一撃が大気圏を突き抜けて撃墜されている。

つまり『樹形図の設計者』はもうこの世に存在しないのだ、『樹形図の設計者』なしでは絶対能力者進化実験の成功への方程式は組み立てる事は出来ない。

それ以前に一年前に『樹形図の設計者』は絶対能力者進化実験の成功法則を一つしか導き出せていないのだ。

目の前にいる男対馬黄河の計画案が本物ならば、『樹形図の設計者』を超える 頭脳を持った化け物と言う事になる。しかしそれは考えられない。

あの世界最高のスーパーコンピュータを人間一人の頭脳が上回る事は常識的に考えられない。

つまりそこにある絶対能力者進化実験の計画論は偽物であり、ただの学園都市を破滅へと向かわせるだけのただの幻想なのだ。

「なるほどな、確かにお前が言う事は最もな意見だ、いや流石だ賞賛しよう超電磁砲・御坂美琴君」

パチパチと鈍い音の拍手を送り賞賛を讃える。



「さあ無駄だと分かったのならアンタが計画しているそのバカな実験を今すぐ中止しなさい」

「それは出来ない」

美琴の口が思わず馬鹿みたいに開いてしまった。

対馬の計画は成功しないとさつき美琴は説明したばかりなのだ。それでも出来ないと言い張る対馬黄河。

知的な見た目とは裏腹に本物に馬鹿なのか？と思ったが、それは違うみたいだった。

対馬の顔が笑っているのだ、まるで美琴が最初からその疑問に突き当たるのを予測していて、それが見事に当たったのを楽しむように、

「説明しようか御坂美琴君。『樹形図の設計者』確かに便利な機械だ、君が言う通り私にあの装置を超える頭脳は残念ながら持ち合わせていない」

対馬は短くなった煙草を捨てると、もう一度新たな煙草を取り出し火を点け話しを続けた。

「しかし所詮『樹形図の設計者』と言えど操作するのは人間だ、『自分達の世界しか知らない』研究者達の知識を元に演算をしているのでは『樹形図の設計者』も宝の持ち腐れと言うものだ」

「自分達の世界しか知らない？」

会話の趣旨が掴めない美琴。自分達の世界しか知らない研究者達、その言葉の意味に困惑の表情を見せる美琴。

美琴の困惑する表情を眺めながら対馬は淡々と核心に迫る。

「君は魔術を信じるかね」

「はあ!？」

魔術。

その言葉を聞いた途端美琴の思考に急ブレーキが掛かった。緊迫感の籠もった会話の中にいきなり魔術などとオカルト話を絡まらせられたのだ。

美琴は思考を巡らせる。

もちろん魔術と言う言葉は聞いた事がある。しかしそれはアニメやゲームでの話しだ。

実際にそれを見た事はないし、それ以前に魔法と言うの存在はもう小学生になる前から信じてない。

美琴はふと対馬の目線を見るとその目は真剣そのものだった。

そこで美琴は理解した。

コイツは異常者だと。

魔術なんてオカルト話を本気で信じているコイツにまともな話などするだけ無駄そう心の底から思った。

「帰りなさい」

「何故だ？」

「何故ですって？アンタ本当に頭が終わってんじゃないの？魔術なんて言葉本気で信じて、アンタみたいな馬鹿話し合うだけ無駄無駄。アンタみたいな奴は家に帰って魔女っ子番組でも見てなさい。話しをするだけ無駄なのよ」

馬鹿らしいと一言付け足し美琴は対馬から背を向ける。絶対能力者進化実験を再開すると聞いた時はこの男に怒りすら覚えたが、そんな感情は消え失せた。

結局魔術などと可笑しな話しを信じるただのオカルトマニアなどだと。そんな人間が『樹形図の設計者』を超える演算式を組み立てる事は出来ない。

時間の無駄だった。

そう思い背を向けたのだが、それ以上美琴の体が動く事はなかった。

(何？体が動かない)

美琴の体は全身まるで見えない拘束具で固定されたかのように動かなかつた。

「話しは最後まで聞け、御坂美琴」

そこで美琴は気付いた。自分が握り潰しめていたレポート用紙がいつの間にかシルバー色の十字架に変わっている事に、

「一体アンタ何を？」

「君はどうせ話しを最後まで聞いてくれないと思ってね、レポート用紙に魔術的仕組み込ませておいた」

「相手の動きを封じ込める能力者ってわけね」

「超能力ではない魔術だ」

対馬は動けない美琴に代わりみずから美琴の眼前へと移動する。

「話しを続けようか、樹形図の設計者に研究者達が組み込めた情報にはこの学園都市での科学理論、数学理論、自然科学、超能力者の能力データやAI M拡散力場の情報が事細かにインプットされているが、その中に魔術的知識は組み込まれていない。つまり私は『樹形図の設計者』が一年前に弾き出した絶対能力者進化実験のデータの中に魔術と言う新たな知識を入れる事によりレベル6を生み出す新たな法則を編み出したと言うわけだ」

魔術を信じていない美琴にとっては理解に苦しむ話だった。

対馬黄河の理論を理解できる一般人は間違いなく学園都市にはいないだろう。

学園都市は宗教、魔法、オカルトなどと言う言葉とは正反対に位置する街なのだ。科学と魔術は言うならば敵対的關係。

学園都市の人間は全てとは言わないがオカルトと言われ分野を科学知識で片付けてしまうからだ。

例えば心霊現象。これは自己暗示から来る幻視として説明出来るし、呪いなどは強迫観念から来るマイナスプラシーボ効果の典型なんだと科学はオカルトの存在を否定する。

そんな科学の最先端に行く学園都市の人間が魔術を信じる事なんてないのだ。

それは対馬黄河も理解している。御坂美琴がこの話しを理解出来るとは思っていない。

「御坂美琴君、君が何と言おうと私はこの実験を実行させてもらう、もちろん君にも協力してもらう。無理やりにもな」

対馬黄河は指をパチンと鳴らすと御坂美琴が手に持っているシルバー色の十字架に突然亀裂が入る。そして亀裂は波紋のように広がり十字架はガラスのようバラバラに砕け散った。それと同時に美琴の体を縛り付けていた呪縛がとけた。

「もう一度聞く私に協力しろ」

美琴は自身の体が動く事を確認すると、ゆっくりと対馬に向かって右手を差し出す。

右手からは青白い閃光がバチバチと花火のような音を立てながらスパーク現象を起こしていた。

正直対馬黄河の話しは半分も分からなかったし、理解する気もない。

だけどコイツはこの無茶苦茶な計画が本気で成功すると信じている。信じているからこそ、ここで止めなくてはならないそう思った。コイツの描いたシナリオは学園都市の終わりを意味した最悪な内容。

実験が成功するとかしないとかそんな事はどうでもいい。

成功すると信じてコイツがこの悪魔のような実験を実行する事が問題なのだ。

「アンタに協力する気はない」

その代わりと言葉を付け足し美琴は重心を落として戦闘態勢に入る。

「そんな馬鹿みたいな実験は私が今ここで止めてあげる、そんな実験はただの妄想が生んだ幻想だって事に気付く前にね」

「……………」

予想はしていた。

御坂美琴に魔術的な理論は信じてもらえない事を、そして予定通りだった。

「いいだろう御坂美琴学園都市のlevel5の実力はどれほどなものか私も一度拝見してみたかった所だ」

対馬黄河はズボンのベルトに引っ掛けていた二丁拳銃を取り出す。緑色の光沢を放つその二丁拳銃の銃口を御坂美琴に向ける。

「さあ、見せてくれ！超電磁砲のチカラと言うものをこの私に！！」

言葉が終わると同時に閃光と銃声の音が交差した。学園都市第3位の超能力者 御坂美琴と魔術師対馬黄河の戦いが幕を開けた。

第34話 絶対能力者進化実験 完

### 第35話 超電磁砲VS地帝の対馬黄河（前書き）

投稿に二週間もかかって申し訳ないです。お気に入り1000件突破。夢みたいです、ありがとうございます。

今回も小説として成り立っているか分かりませんが、よろしく願います

### 第35話 超電磁砲VS地帝の対馬黄河

学園都市のとある操車場で眩い雷光が幾度となく轟音を鳴り響かせていた。

操車場を囲むように配置されているコンテナは爆発物が中で起爆したかのように粉々に砕け散り、小石や砂利が構成する地面は円形状のクレータが所々に広がっており戦いの凄まじいさを物語っている。

戦場と化した操車場。

向かい合っているのは超電磁砲と対馬黄河。

御坂美琴は対馬が実行しようとしている絶対能力者進化実験を阻止するため、魔術師である対馬黄河に戦いを挑んだ。

負ける気はしなかった。level5と言う地位に付き自分のチカラの大きさを理解しているからこそ、この戦いはすぐに終わる。そう信じていたのだが、

「はあ……はあッ何なのよコイツ」

そんな自信とは裏腹に美琴は苦戦していた、戦いが始まってからわずか五分、御坂美琴の雷撃は一度も対馬に当たる事はなく、周囲に広がる障害物を破壊しているだけだった。

「どうした超電磁砲この程度か？」

「くッ！」

美琴は苦い表情を浮かべながら右手を対馬に差し出す。

「何度やっても当たりはしない」



「じゃあこれならどうよ!!」

美琴は右手を勢い良く真横に振り払い、数十本の糸のように不規則な動きをした細い白い雷撃を発射した。

『拡散する雷撃』

美琴が本来使用する雷撃の槍はエネルギーを一点に集中する事で速度、威力、命中の精密度を非常に高い能力値で放つ事が出来る。

それに対して『拡散する雷撃』は一点に集中する電気エネルギーを散開させる事により、雷撃を無数の糸のように拡散させる。一発一発の威力は弱い但不規則に広範囲へと広がるため相手は予測する事が難しくなる。

ほどこいた糸のように広がる雷撃が対馬黄河に向かって解き放たれた。

「ははッ考えたな、確かにこれは避けきれない」

襲いかかって来る雷撃を目の前にしてもそれを脅威とは思っていない。

対馬は左右に握る二丁拳銃を美琴ではなく地面に向ける。

ズガンッ!!バン!バン!バン!バン!発射された弾丸は計五発。弾丸は砂利の大地に吸い込まれるのにめり込み、その姿を消した。

誰が見ても意味のない行動だと思うだろう。しかし異常はすぐ起きた。

ズガガガガッ!立つ事すら難しいほどの強い揺れが大地を振動させる。

(……………なに?)

美琴が疑問に思うも束の間、対馬と雷撃を遮るように砂の大地が盛り上がり、数十メートルもある大地の壁は拡散する雷撃とぶつかり合い、美琴の雷撃を防いだ。

「残念だったな御坂美琴君」

大地から生えた壁が邪魔して対馬の顔は美琴からは見えませんが、確実に馬鹿にしたような表情をしているに違いない。

そう思うと美琴は腹が立って仕方がなかった。

「アンタ舐めてんの？さつきから守ってばっかで一度も攻撃して来ないなんて、やる気はあんの？」

そう、美琴が怒っているのは自分の攻撃が当たらないからではなく、対馬黄河は戦闘が始まって一度たりとも美琴に攻撃して来ない事にあつた。

美琴は人一倍にプライドの高い少女だ。対馬が攻撃して来ない事に美琴はプライドを傷つけられている。

手加減されているようで、相手にされていないみたいで、それが何より腹立たしい。

「アンタの能力は自分を守る事しか出来ないの？あんまり私を舐めてないで正々堂々戦いなさい！！」

「おや？攻撃して欲しいのかい超電磁砲。見かけによらずDMな性格だな、そして一つ訂正させて頂こう私が使っているのは『能力』でなく『魔術』だ」

「そんな話し信じる訳ないでしょうが！！」

バチン！と火花を散らし美琴は雷撃の槍を対馬への行く手を阻む大地の壁へと撃つ。

青白い閃光はレーザーのように大地の壁を貫き、更にその先にいる標的へと進む。

しかし。

対馬黄河は横に三步動いただけで、美琴の雷撃を回避する。

「何度やっても無駄だよ、君の技は威力は高いが一直線に進むだけで避けるのは簡単なんだよ」

「チッ」

美琴は軽く舌打ちすると、今度は『拡散する雷撃』を放つ、

「無駄だ」

対馬は弾丸を一発貫かれ風穴が空いた大地の壁に打ち込む。

すると大地の壁は元の形に姿を形成し、新たに雷撃を防ぐバリアとなった。

『拡散する雷撃』はエネルギーを分散させているため、壁を貫く事は出来ず、ただ大地の壁に焦げ跡を残しただけだった。

「クソッ鬱陶しい」

雷撃の槍は軌道に対馬に見抜かれ効果なし、『拡散する雷撃』は立ちはだかる壁が防いでしまう。

攻戦一方なはずなのに、相手に有効打を当てられない。

歯がゆい気持ちを抑えながら美琴は次の手をうつ。

バキバキッ！！無理やり何かを剥がすような音が対馬の耳に響いた。

もちろん自身が作った大地の壁のせいで美琴が何をしているのかは分からない。

「これは防ぎ切れるかしらッ！！」

美琴の声が聞こえたと同時にバチバチと電流を纏った長い鋼鉄のような物が三本ほど対馬の上空に現れた。

鋼鉄レール。

美琴の能力『電撃使い』としてのチカラを応用し、鋼鉄レールに磁力を与える事により操作を可能とする便利スキル。

鋼鉄レールはそのまま直立し、美琴は対馬黄河の元に勢い良く落下させる。

「鋼鉄レールとの距離は上空十メートル。激突まで二秒。」

対馬は初めて勢い良く右へと回転する、更に右へ右へと。

その瞬間。

ドン！ドン！ドン！と対馬黄河がいた位置に鋼鉄レールが聖剣のように大地に刺さった。

しかし追撃はここで終わらない。

回転し、片膝をついて体制を崩している対馬の上空に次は黒い渦を巻いた巨大なサイクロンが出現した。

磁力で集めた砂鉄の渦。

磁力で収束させた砂鉄を振動させる事により生み出した、殺傷力抜群なその砂鉄の竜巻。

当たれば怪我ではすまない。美琴の中に最早手加減はなかった。

「これでトドメ!」

漆黒の竜巻は対馬に向かって上空から襲いかかる。

(さあ降参しなさい)

美琴は対馬が白旗をあげる時間を与えるため、速度を制御してゆつくりと漆黒の竜巻を移動させる。

しかし。

対馬は降参する気配はない、それより動く気配すらしないのだ。その場に膝をついた対馬は避ける事はしない、ただ白衣の内ポケットから一枚のカードを取り出したただけだった。

《大地は元素、始まりは土、死者をこの世に転生させる礎となれ》  
「Ut pro humus, elementum ors  
a est ingravescio crepidoinis  
ut discipulus planto is univer  
sitas servio mortuus alio」

対馬が一枚のカードに話しかけるように呪文を唱え、漆黒の竜巻へと向かってそれを投げる。

不思議な事にカードは風に流される事もなく意志を持っているかのように黒い竜巻へと一直線に突き進む。

「目覚めろ」

対馬は二丁拳銃をカードに向かって構える。そして一発だけ弾丸を発射した、弾丸は風を切り、凄まじい勢い良いでカードに描かれている六芳星の中心を貫く。

その瞬間

『ガアアアアアアアアッ！！』

虚空から力強い雄叫びが響き渡った。

対馬のものでも美琴の声でもない。

人間の声とは到底かけ離れた、ビリビリと肌を震わせるひび割れた雄叫びだった。

「頭が痛いッ何なのよこの声は……？」

あまりの音量に頭痛が美琴を襲った、今も尚止むことのない雄叫びの爆音で操車場一帯の地面、コンテナ、電灯全てを振動させた。そして突如にその正体が現れる。

カードを貫いた弾丸が急にピタリッと動きを止めた。時が止まったように動かなくなった弾丸はオレンジ色の辺り一帯を包み込むような光を発した。

『ガガガガアッ』

刹那。

美琴が作り出した漆黒の竜巻を『巨大な剛腕』が握り潰した。

「えッ！？」

何が起きたか分からない美琴は間抜けな声を発した。

石や砂、アスファルトなどを固めて作り出したような巨大な剛腕、

長さ10メートルもの長さを誇る巨大な腕は砂鉄の渦を握り締めたまま、自分事地面に叩きつけた。

ゴオンッ！握り締められていた砂鉄の渦は叩きつけられた衝撃で形を崩しそのチカラを無し、こぼれ落ちる砂のように地面にサラサラとなだれた。

一方、巨大な土の手は形を崩す事もなく地面に直立していた。天を掴むように差し伸べられている巨大な拳。

美琴はその姿を眼球に焼き付ける。

美琴は最初対馬は相手の体を麻痺させたり、拘束する精神能力者だと思っていた。

しかし奴が今使っている能力は別系統のチカラだ。

目の前にそびえ立つ巨大な剛腕がその証明をしている。

「どうなってんのよ」

疑問を押し留める事が出来ずに声に出る、能力を二つ使用する事は理論上に不可能。

しかし対馬は確実に別系統の能力を使用している、否定したくても美琴は実際にそれを見ている。

銀髪の長髪をなびかせ、余裕の笑みを浮かべいる対馬は美琴の疑問に答えた。

「学園都市の能力者達は実質能力を二つ使う事は出来ない、しかし寛大な私は現に能力を二つ使用している、それは何故？」

「能力の応用？」

「馬鹿め、貴様は目の前にしているこれを応用して相手の体を麻痺させる事が出来ると思っっているのか？」

対馬は視線を巨大な剛腕に向ける。

確かに美琴はこの能力の応用で体の動きを封じる事が可能だとは思っていない、しかし違うと分かかっていても他に否定する材料がないのだ。

対馬は視線を美琴に戻すと、

「認めるよ超電磁砲、これは超能力ではない魔術だ」

放つ言葉を失う美琴、魔術なんて今でも信じていない、しかもう否定する言葉も証拠もないのだ、

「そこまで深く考えなくていいじゃないか超電磁砲、貴様はありのまま受け入れろ、そして魔術の存在を知った以上私の計画が幻想でない事を理解しろ、さあ」

遠くから手を差し伸べる対馬黄河、それは協定を意味しているものだろう。

だが、美琴は対馬の手を見向きもしなかった。

その代わり、雷撃の槍を対馬黄河の体へと走らせた。

ズガンッ！と衝突音が響く、雷撃の槍はそのまま横に倒れた巨大な剛腕の手のひらがを受け止めた。

いきなりの攻撃にも反応する巨大な剛腕。巨体に似合わず素早い剛腕に美琴は思わず舌打ちをする。

「今のはいけると思っただけ、馬鹿みたいに早いわね」



対馬の協定に答える事もなく攻撃に移った美琴、対馬が初めて怪訝な顔を見せる。

「今の行為は協力しないと言う事か、クソガキ」

「当たり前でしょ！！魔術？魔法？馬鹿じゃないの、私はそんなもの信じない、それに例え信じたとしてもそれで私が協力するなんて本気で思ってるの？」

魔術が存在するとかしないとか、そんなものは美琴には関係なかった。

対馬黄河の考案した絶対能力者進化計画は沢山の人間を犠牲にして成り立つものだ、美琴はそれを止めたいからここで未知の能力を所持している対馬と戦っているのだ、立ち止まる理由にはならない。

美琴はポケットから一枚のコインを取り出す。

日が沈み暗くなった闇を照らす月のように綺麗なコインはこの戦場に唯一存在する光。

美琴はコインを親指ではじき上空に飛ばす。

一回、二回、と回転するコインはゆっくりと地球の重力に引かれ降下する。

そして再び美琴の指に戻ったコインを美琴は親指で弾き飛ばした。

その瞬間。

膨大な衝撃波が巻き起こった。

コインを音速で飛ばす事により生み出される御坂美琴の必殺技『超電磁砲』

コインは摩擦熱によるオレンジ色の直線を描き、強大な衝撃波と熱を生み出した。

地面の砂が津波のように上空に舞い上がり、辺りのコンテナを吹き飛ばし、そして対馬黄河の元へと向かって行く。

向かうと言っても時間はわずか1秒もない、音速の閃光の動きを目で追うのは不可能。

何が起きたか分からない対馬は反応する事が出来ずにただ呆然と立っている。

(決まった!!)

勝利を確信した美琴。

だが、

バキバキと『超電磁砲』の閃光が音をたてて、対馬の前方で動きを止めた。

(えッ?)

まるで見えない壁とぶつかり衝突しているかのようにオレンジ色の閃光は対馬の前方で音速の動きを止めた。

ガガガガッ!!と激しい音を放ちながらオレンジ色の閃光は見えない壁とぶつかり合っている。

「どっなってるのよ」

疑問の声を発したと同時にオレンジ色の閃光の根源であるコインは完全に焼け落ちその姿を虚空へと消した。

「やはり、あの技だけは肉眼で反応するのは不可能か、事前に防御術式を組んでおいて正解だったみたいだな」

「……………ッ!!」

防御術式。

美琴にはそれがどういったもの全く分からないが、自分の必殺技である『超電磁砲』が謎の防壁によって防がれた事だけは理解出来た。

美琴は奥歯を噛み締める、今の超電磁砲は御坂美琴が誇る最大にして最強の一撃。

常人なら反応する事もその存在を確認する事も出来ずにこの技の前に倒れる。

しかし対馬には超電磁砲は通用しなかった。

その事実には美琴の勝利への自信が傾き始める。

電撃は通用しない。砂鉄の渦も切り札であった超電磁砲も対馬には軽くあしらわれてしまう。

(……………どうしたら)

攻略法が見えない。

この感覚は学園都市真正銘の怪物『一方通行』と戦った時以来の事だった。

勝てない。

何故かそう思ってしまった。

対馬の余裕を浮かべる笑みが、

対馬から感じる気味の悪い雰囲気、

一方通行と重なって見えてしまう。

脱力を起こし、動きを止める美琴。その様子を見て対馬は心底呆れたように言葉を放った。

「やはり子供か……つまりん結末だな」

「……………」

「まあ良い、抵抗しないのなら私は大助かりだ、このまま君を連れて行くさあ私に付いてきなさい」

……………

「バチィ！！と雷撃の槍が突然美琴から発射された。

「なにッ？」

瞬時の出来事に対馬の反応が遅れる。しかし対馬が反応出来なかったにも関わらず雷撃の槍は巨大な剛腕が受け止めた。

「諦めてなかったのか？」

「さあ、どうかしら。ただこのままアンタの思惑に黙ってついて行けるほど、私は軽い女じゃないって事よ」

勝てるかどうかは分からない。だけど降参する理由はなかった。自分が黙って協力すれば必ず対馬は実験を始める、それだけは駄目だ、勝てる勝てないなんて後回しにするしかない。

そう割り切った美琴は新たなコインを取り出した。

「やる気は充分みたいだな」

「ええ、今度こそまる焦げにしてあげるわ、覚悟なさい！！」

美琴は親指でコインを弾く。  
多分美琴の超電磁砲は対馬の謎の防壁で防がれてしまったろう。  
しかしそれがどうした？

防がれるのなら、防げない位まで撃ち込むまでの話だ。

決意の眼差しを向け美琴はコインを親指で弾ッ……………ズガン！！

美琴のコインを対馬が拳銃で撃ち抜いた。

「……………え？」

対馬は発砲した衝撃でずり落ちたメガネを上げると状況を理解出来ていない美琴を無視して、自身が身に付けている金色の腕時計を見つめる。

「時間だ、非常に残念だがもう君と遊んでる時間はない」

突然告げられたタイムリミット、そして対馬の表情が今まで見せていた余裕の表情とは一変して、獣が標的を狩るような険しい表情へと変化した。

「君の実力は理解したよ。どうやら私は君を買いかぶり過ぎていたようだ」

対馬の持っている緑色の二丁拳銃を中心に風が集まる。

最初はそよ風程度の風、しかしだんだん風は勢いよいを増し土や砂利は対馬の二丁拳銃に吸い込まれるように収束する。

美琴の足が自然と押されるように一步下がる、理由は分からない、だが五感が警告している。

……今止めなければやられる。

危険を感じた美琴は慌てて、コインをもつ一枚取り出すが……。

「無駄だ」

バキバキッ！とコインが風化したように崩れ落ちた。

「……………なッ！？」

「私の術式の組み立てる邪魔するな、この術式を構成するのは非常に難しいんだ、星座の方角、送り込むテレズマの加減、立ち位置、術式の意味、全てが少しでも狂えば辺り一体が吹き飛ばぶぞ」

相変わらず美琴には分からない言語が多いが、対馬はかなり真剣だ。

そして、二丁拳銃はいつの間にか操車場に広がる大地から集められた、砂、土、石などが収束し、二丁拳銃は長さ2メートルを超える『大地の二丁拳銃』へと変わっていた。

大地のあらゆるものを組み合わせ作られた褐色の二丁拳銃は太陽が沈んだ薄暗い操車場に溶け込むかの如く不気味な雰囲気纏っていた。

大地の二丁拳銃の銃口が10メートル先の美琴の捉えた。

「超電磁砲、君のチカラは私の予測より遥かに劣っていた。しかし君の頑張りを寛大な私は認めよう」

明らか馬鹿にした言葉を贈る対馬。美琴はその言葉に強い怒りを感じるものの、それを口に出せなかった。

自分は奴より弱い。今までの闘いを見ていて分かるように美琴は一方的に攻撃していたにも関わらず対馬に一撃も有効打を当たられていない。

その事実にも美琴は反論する意志も言葉も行動も全てを封じ込めざる得なかった。弱者が強者に向ける牙なし。悔しいが歯を食いしばった。

そんな美琴の様子を見て、対馬は真剣な眼差しを崩し、最初の頃と同じように相手を見下したような細く鋭い眼差しへと戻る。

「褒美を与えよう超電磁砲、君に鮮血の9人の隊長格にしか使う事の許されない禁断の魔術をお見せしよう」

「禁断の魔術……？」

「そうだ。そんな事より君は幻獣と言う存在を知っているか？」

幻獣。

美琴は常盤台中学に通うエリート学生で、文学、学術、雑学、あらゆる分野を幅広い知識で学んでいるが、幻獣と言う言葉は聞いた事もない。

美琴が知らない事を表情で察すると対馬は話しを進めた。

「幻獣と言うのは簡単に説明するならば、現実には存在しない架空の生物の事だ」

「何それ……？ ネットシーとかペガサスみたいこの世界にいるかいな  
いか言われてる生物の事？」

「そうだ。私達鮮血の9人の隊長格はそれぞれ幻獣と呼ばれる生物

達を魔術と言う形でこの世界に君臨させる事が出来るのだ」

夢みたいな話しをする対馬黄河。

科学サイドの美琴から見れば対馬の話しは夢物語に違いないだろう。

しかし対馬はそんな夢物語を本気で実現させるチカラを持っている。

科学世界とは逆の位置に存在するオカルト世界のチカラ魔術。

対馬黄河の『大地の二丁拳銃』から突然、褐色の神々しい光が放たれる。

目を背けてしまうほどの光が暗闇に沈んだ操車場を包み込む。

「見せてやろう。私が司る幻獣の姿をそして知れ、君は一生私にはとどかない事をッ！」

対馬の大地の二丁拳銃が大地を見つめる。

……………そして。

(奈落に眠る神を守りし番人は、その役目を解き、我の力の象徴となり起原せよ。具現は大地、真実は世界、神々の戦いは今ここに終焉を迎える)

A watchman should comply with  
God who sleeps in the hell, and  
he should untie that duty, and  
he should become the symbol  
of my power, and do origin. A  
s for the embodiment, the world,  
a gods' and goddesses' battle  
invite the end as the ground



d , t h e t r u t h h e r e n o w .

対馬黄河は唱え、一秒の間隔を空け、大地の二丁拳銃を足元に向け発砲した。

大地の二丁拳銃からは弾丸ではなくSF映画で出て来るような巨大な円柱型のレーザー砲が大地に突き刺さる。

「準備は整った、さあ今こそ見せてやる。私のチカラを!!」

御坂美琴の悲劇はここから始まる。

「出でよッ!百腕の番人へカトンケイル!!!」

第34話 超電磁砲VS地帝の対馬黄河完

第36話 百腕の門番へハクションケイル（前書き）

超久しぶりの更新です。

皆様長い時間更新を怠り申し訳ありません。

今回も駄文です。

っというかこの小説は全てにおいて駄文なのでご了承ください。

少しでも皆様の退屈の凌ぎになれるように頑張ります

### 第36話 百腕の門番へヘカトンケイル

幻獣。

それは現実には存在しない架空の生物を意味する。

ドラゴンやペガサス、精霊や悪魔などRPGによく登場するモンスター達も幻獣と言う名のカテゴリーに当てはまる。

幻獣は人間の作り出した想像上の生物。しかし古来の人々は幻獣の存在を遺跡や神殿、書物などに書き残し現在までその存在を伝承している。

それは幻獣の存在を世界に広めた唯一の証明。

現在、世界各地に拡大した幻獣の存在は多くの人々に愛され、ゲームや映画、国やスポーツチームの紋章としてその存在を広めている。

多くの人々の心の中で生き続けている幻獣。人々に愛され続ける事により幻獣は伝承、伝説として生き続ける。

幻獣を信じる人々の思いは強く、ある国の一角では崇拜され人々に崇められている者まで存在する。

人々の思いや信仰心は強大な力になる。

それは思い。

思いは時に力となり、そのチカラをこの世界に具現化させる事が出来る。

それが魔術だ。

信仰心や人の思いを原動力とする魔術は幻獣を信じる人々の信仰心すらチカラに変換する事が出来る。

それを可能した奴らがいる。

鮮血の9人。

そしてその1人地帝の対馬黄河は御坂美琴に幻獣のチカラを持って立ち向かう。

幻獣は今、現代に蘇る。

2

「何が起きてるのよ一体……？」

御坂美琴は困惑していた。

両目を見開いていても今、起きている事が理解出来なかった。

対馬黄河が両手に持っている『大地の二丁拳銃』から突然神々しい光が発せられ、呪文のような言葉を紡いだ途端、対馬黄河の立つ位置を中心とした半径20メートルの大地が爆発した。

「さあ刮目<sup>かつもく</sup>せよ！これで今宵の戦いは終わる」

対馬黄河は体を十字架に広げると、それに連動するかのよう爆発し飛び散った大地の破片が対馬の体を埋めるかのように集まって行く。

砂や砂利や地層に深く眠る石は対馬の体に吸収されるかのように勢いよく集まる。

石と石はマグネットのように引かれ合い、砂と砂は混ざり合い対馬の体を覆って行く。

その動作を繰り返す事、数十回。

パズルを組み立てるかのように対馬の体に密着して行く大地のあらゆる物質は混ざり合い、遂に一つの形となった。

一言で言うならば“巨人”

対馬黄河は大地の物質を素材とし自身の体を巨人へと変貌させた。大きさは二十メートル。マンションの五階に相当する巨人。その姿に御坂美琴は言葉を失った。

巨人のスケールの大きさ、それも勿論ある。しかし美琴が真に絶句しているそこではない。

それは眼前にそびえ立つ巨人の姿。

巨人の胴体部分には悲痛の顔を浮かべた五十の頭、そして両肩から伸びている大木のように太い二本の腕、そこから更に数百の腕が枝のように生えていた。

その姿に美琴の表情は強張る。

何故だか分からない。

けど今その目に移る巨人の姿を見上げながら心の奥底で一瞬“勝てない”と悟ってしまった自分がいた。

相手が大きいからと言う理由ではない。

例え巨人と同じ大きさを誇るクレーン車やかつて戦ったAIMバーストとぶつかり合うとしてもlevel5の地位に君臨し絶対的なチカラの持ち主である彼女は臆する事もなく笑って立ち向かえるだろう。

だが、目の前に立つ巨人だけは違った。クレーン車やAIMバーストとは違う違和感を美琴は確かに胸のざわめきと言う形で感じていたからだ。

それは圧迫にも良く似た威圧感。

その場に存在するだけで胸を押し潰すような感覚が美琴の自信を

も圧迫する。

一步自然に足が後ろに下がる。

美琴は自分の体が震えている事に気が付いた。

(どうして……)

小刻みに震える体をどうしても抑え切れない。

戸惑う美琴。

しかし次第に困惑は恐怖へと変わって行く。

「震えてるじゃないか御坂美琴、別に怖がる事はない。君が一言協力しますと言えばすぐその恐怖から解放してやる」

「怖がつてなんかいいわよ!!」

精一杯強がるように叫ぶが声は震えていた。

恐怖を隠すように叫んだ声は虚しくも対馬には見抜かれており、

大地の巨人と化した対馬はさぞかし面白そうに、

「いや、怖がるのは当然だよ、君はまだ中学生の女の子だ。怯えたり、怖がつたする事は別に恥ずかしい事じゃない」

「……………ッ」

「こちらもそろそろ時間がないんだ、君が協力する気がないのであれば強行な手段を選ばなくてはならない、これで最後だよ御坂美琴君、私に協力しろ」

これで最後。

対馬黄河は御坂美琴が協力に断れば今度こそ容赦なく攻撃してく

るだろう。

美琴自身もそれに気付いている。

勝算はない。

自身が誇る最強の超電磁砲すら対馬には効かない。

美琴にはもう奴を止める術などなかった。

「……………けど」

美琴は両拳を強く握った。

勝算はない、しかしそれは諦めの理由にはならない。

勝算と言うのはただの式であり答えではない。

美琴は強い眼差しで眼前にそびえ立つ塔のような巨人を見据える。ポケットからコインを一枚取り出し、それを親指で弾く。

暗闇の中を舞う月のように輝く一枚のコインは空中を優しく回転し落下している。

「まだ抵抗する気か？」

対馬の問いかけに美琴は薄く笑って答えた。勝利を諦めてないその瞳は真っ直ぐ倒すべき敵へと向けられていた。

勝てるかどうかではない。

勝って対馬の悪夢のような計画を止めなければ学園都市は悪魔の脚本とも呼べる対馬の計画書に完全に飲み込まれてしまう。

大好きな人達が住む学園都市を守りたい。

その思いを胸に美琴は自分の全てのチカラをこの一撃にかける。

「吹き飛ばえええッ！！」

美琴の声と同時に青い閃光の槍が角のように伸び、そして空中に舞っていたコインを同時に弾きだした。

そう、雷撃の槍と超電磁砲の同時射出。

ただ超電磁砲を単発で放った所で土の巨人と化した対馬黄河の鉄壁の鎧を砕く事は不可能だ。それはついさっき痛いほど痛感した。

超電磁波だけではパワー不足、なら更にパワーを足せばいい。

青白い雷撃の槍はコイルのように巻き付く形で超電磁波と交わり一つの剣となる。

大気を焦がし、音を消し飛ばす。そんな凄まじいエネルギーを宿した雷光は真つ直ぐと巨人の心臓部へと突き進む。

直後。

ゴオオオンツ！！魔獣の雄叫びのような音が空気を振動させた。

必殺の雷光が対馬黄河の大地の巨人、ヘカトンケイルに直撃した音だった。

「……これは…予想外だな……」

対馬黄河は雷光が直撃した巨人の心臓部を見つめたまま、その声を漏らした。

なんと美琴の放った雷光が見事に鉄壁とも思われたヘカトンケイルの心臓部を貫いていたのだ。

それを見た美琴に安堵の笑みが戻る。

「……どう？自慢の鉄壁を貫かれた感想は？」

余裕を取り戻した美琴の声。今まで対馬に攻戦一方で戦いを繰り広げていたにも関わらず、有効打を決める事が出来ない苦しい現実と戦って来た美琴にとってこの一撃は相手にダメージを与えただけでなく、精神的にも救いの光となっていた。

しかし問題が一つだけあった。



「……………はあ…はあッ」

呼吸が激しい。

そう、美琴は今の一撃に自身の全てのチカラをつぎ込んだのだ。もう微弱な静電気すら起こす事の出来ない完全な電池切れ。美琴にはもう対馬に反撃するチカラはおろかその場に立っている事すら限界に近かった。

「さあ、大人しく降参しなさい。それとももう一発ぶちかまさない駄目なのかしら？」

苦しい息を押し殺し、願いと脅迫が混じった言葉を対馬に放つ。

戦うチカラがない美琴にとっては一刻でも早く降参して欲しい。恐らく今の美琴の現状ではレベル0の人間一人ですら相手にする事は出来ないだろう。

増してや、強大なチカラを持っている対馬が攻撃して来たのなら今の美琴ではひとたまりもない。

足がふらふらになっている事を悟られないように意識し同時に心の中で祈りながら、対馬の返答を待つ。

……………そして。

「下らぬ」

「なッ!？」

長かったのか短かったのかよく分からないが対馬から返って来た言葉はそんな一言だった。

そして嘲笑うかのように言葉を続けた。

「馬鹿な小娘だな君は、私のヘカトンケイルが風穴が空いたぐらいの事で崩れるとでも思ったのか？あまりの馬鹿らしさに呼吸が止まって窒息死するかと思ったよ」

「……くッ」

「悔しいか？ふむ小娘のわりには、なかなかいい顔で睨みつけてくるじゃないか、なかなか私好みの表情だ」

だが……と付け足し対馬はヘカトンケイルの巨大な両手左右に展開した。

「私の一番好きな表情は君みたいな強気で生意気な小娘が見せる絶望に彩れた顔だよ」

言葉と同時にヘカトンケイルの周囲の地面が浮き上がった。

そして砂利や石、泥、操車場の大地を構成する全ての物質がヘカトンケイルの心臓部、御坂美琴の一撃により空けられた穴へと吸い込まれるように集まって行く。

その様子を見ていた美琴の顔色がみるみる内に変わって行く。

「………そんな」

その一言は美琴の希望が砕けた事を意味しているような弱々しい声だった。

「素敵な表情じゃないか……驚いたかい？万全の策を巡らし苦勞の末にやっこの思いで空けた風穴がこうも簡単に塞がれるなんて、そ

それはそれはショックだろ？」

対馬の言う通りヘカトンケイルの心臓部の穴は操車場の大地の物質を吸収し、最初から何事もなかったかのように元の形に戻っていた。

「私のヘカトンケイルはこの操車場のあらゆる大地を素材とし構成している。完全に破壊したければ、この操車場に隣接している全ての大地を剥ぎ取るしか方法はないのだよ。最も出来るかどうかは常識で考えれば分かると思うがね」

その言葉を聞いた瞬間、美琴の強気な姿勢も戦意も希望も全てが完全に砕けた散った。

勝てない。

最初に心が直感的に感じた感情が再び湧き上がる。

勝てない、勝算はない。しかし、それは諦めの理由にはならない、そう思いそう感じ、そう自分に言い聞かせる事で美琴は今の今まで必死に一欠片の奇跡を信じ戦って来た。

だが、もう限界だった。

あまりにも圧倒的過ぎるのだ。目の前の巨人の力が。 いや、力だけではない。

威圧感、スケール、超電磁砲すら通さない鉄壁の鎧、更にこの世界の大地を全て消滅させなければ幾ら砕こうが叩き潰そうが再生してしまう蘇生能力。

今度こそ完全な手詰まり、能力をもつ使う事の出来ない美琴に如何なる奇跡すら起こる事のない、完全なる敗北。

ガクンと美琴が膝から崩れ落ちる。

「こんなの勝ってこない」

膝を地面についたまま、夜空を見上げるように対馬黄河の巨人へカトンケイルを力なく見つめる。

ヘカトンケイルの胸部から浮き出ている50個の慈悲の表情を浮かべる顔達が今の美琴の姿を嘲笑うかのように口を細めた。

悔しい。

だが、何も出来ない。

戦意喪失した美琴はただ呆然と巨人の嘲笑う表情を見つめるしかなかった。

そして、その様子を見ていた対馬は美琴が敗北を認めた事を確認すると、巨人の頭からその姿を現した。

「再び眠れヘカトンケイル、ティタンの牢獄へと帰還せよ」

直後。

マンション5建てのスケールを誇るヘカトンケイルの形が崩れ出す、

水をかけられたら砂のように音もなくその姿を帰るべき大地へと戻り、その姿を完全に消した。

ヘカトンケイルと融合していた対馬黄河の姿がはつきりと美琴の目に焼き付く、しかし抵抗はしない。美琴にはもう能力を使う事は出来ないのだから。

「さて、では御坂美琴君。君には協力してもうよ拒否権はない、抵抗する権利も意志を見せる権利も言葉を発する権利も全てだ」

対馬がゆっくりと美琴に近づくと、そして握手を求めかのように手の平を差し伸べた。

美琴はその手を掴まない。

「言ったはずだ、貴様の意志は見せるなど……………」

ボゴツ！！

美琴の腹に拳が食い込んだ。

「……………があッ……………」

そして対馬に体重を預けるかのように前に倒れ込む。

対馬は美琴を抱えたまま白衣から古い折りたたみ式ではないコンパクト携帯電話を取り出し着信相手を設定しコールを鳴らす。

『終わったか？』

予め連絡を待っていたのか通話相手は僅か3コールで電話に出た。

「ああ予定より少し時間が掛かったが御坂美琴の捕獲が完了した」

『へ〜珍しい。対馬さんほどの化け物が予定が狂わされる程のおもれー何かがあったのかよ』

ケラケラと嫌みたらっしく笑う電話先の男、しかし対馬は相手にする事もなく目的を告げる。

「御坂美琴を回収しこれから帰還する。集めたスキルアウト連中のほうはどうなっている」

『ああ、バツチリ準備出来てるぜ、最も元々血の気が多い連中の集まりなだけにアンタの指示待たずして暴れそうな感じだけだな』

「ふん、所詮は無能な黄猿共だ。頭を使わず本能だけで行動しようとする、カラスの方が余程利口だな」

『違いねえ。まあ騒ぎを起こすようなら何人か見せしめにでぶっ壊して黙らせるから問題ないとして……それより学園都市の正義のヒーロー達がそっちに向かってるぜ』

「アンチスキルか」

『何人いんだ？50、60ざっと見た感じそれ以上だな』

電話の男は操車場が見える付近にいるのか、向かって来るアンチスキルの数、武装、現在地を対馬に伝える。

「やはり人払いを張っていても限界があったか……了解だすぐに帰還する。垣根帝督」

『なんだよ』

「良く見ておくんだな今の学園都市を明日からはもう見られないかもしれないからな」

対馬はそう言い残すと携帯電話を切り、御坂美琴の意識がない事を確認すると、一枚のルーンのカードを取り出した

(我が人影を現世から切り離せ)

「Singulus nostrum instarex is

u n i v e r s i t a s .  
r .

そう言葉を放った瞬間。対馬黄河と御坂美琴は空気に溶けるかの  
ように姿を消した。

戦士は去り荒れ果てた戦場に残されたのは少女のポケットから落  
ちた一枚の小さなコインだけだった。

第36話 百腕の門番 完

### 第3章 エピローグ（前書き）

はいいつも通り駄文です！！

今回は第三章完結と言う区切りにさせて頂きました。

えっこんな半端で？と思われるかもですが、第4章に入る前に文章力の修行をします。

そして第4章からはパワーアップして帰って来ます。

よろしく願いします



### 第3章 エピローグ

1

現在日本時刻 4月22日午前0時。

薄暗い闇が蔓延する外の街を一人の少年は歩いていた。

ホスト顔の顔つきをした少年。茶色のスーツの胸を全開まであけて、ポケットに手を入れたまま歩く少年は第7学区の裏路地へと入って行く。

夜空の光があまり入って来ないせいか裏路地は表通りより更に暗く、足元すら見えない。

闇に溶け込むかのように少年は裏路地の更に奥へと足を進める。

何もない真つ暗な世界を臆する事もなく、ただ淡々と進む。

と急に少年の足が止まった。

「……………ここか」

少年が足を止めた先には地下へと潜る石作りの階段があった。

少年は階段を進む。

深く深くまだ深く。

日常的な世界から自ら遠ざかるように深い闇へと一歩一歩降りて行く。

そして再び少年の足が止まる。

階段を降りた先には木造の古ぼけた扉があった。叩けば壊れると言つより叩けば貫通しそうな位古い扉だった。

少年はその扉との間合いを取る、そしてポケットに手を入れたままその扉を突き刺すような形で本気で蹴る。

ガンツ！！響いたのはそんな鈍い音だった。  
勿論、扉を壊した音ではない。少年の一撃は扉に穴を開ける事は  
なかった。

「チツ結界か」

少年は不機嫌そうにポケットから両手を出すと扉を手で横にスライドさせた。

扉なのに障子のように横に動く、まるで忍者屋敷のような構造に少年は頭を抱えるとそのまま扉の奥へと進む。

奥に進むに連れだんだん視界がはつきりして来る。

少年はそのまま突き進むと広い場所に出た。

それは巨大なステージ付きのバーだった。

ステージには光を反射させるプリズムが設置され、バーカウンターは長さ20メートル程の大きさをほこり、更に4人がけの木造丸型テーブルが30台ほど配置されている。

学校の体育館にバーカウンターが設けられているかのように広い場所、しかし驚くのはそこではない。

「何人いやがんだ？300、400人位は余裕でいんぞ」

まるで大企業のパーティーのような人の数に少年は少々呆気にとられてしまう。

少年はしばらく集まった人間を見渡してみる。ほとんどの人間が人相の悪そうなチンピラばかりである。

腕に髑髏のタテューをしている者もいれば、酒を飲み交わし腕相撲をしている者、更に「俺は昔伝説の……」などと自分の武勇伝を

自慢気に話している奴らもいる。

これでは大企業のパーティーと言うより暴走族の集会である。

「うぜえ」

少年は一言素直に感想を述べると、近くにいた体の大きいスキンヘッドの少年に声をかける。

「おい」

「ああ!？」

如何にも喧嘩すんのかコラア!的な言葉で返すスキンヘッド、しかし少年の顔を見ると顔色が段々と白くなって行く。

「こっこれは失礼しました垣根さん」

そう少年の名は垣根帝督。

学園都市最強のレベル5の第2位の未元物質ダークマターを扱つ真正正銘の怪物である。

「オイ、ハゲ頭。対馬さんはどこにいる」

「はっはい!!対馬はステージの裏に」

垣根は対馬の居場所を聞き出すと、チンピラの雑踏の中へと向かう。

「おいテメェら垣根さんのお帰りだ、道を空ける」

スキンヘッドの少年の言葉に集まったチンピラ集団共の注目が垣根に集まる。それを見たチンピラ達はさっそうと道を譲るかのよう  
に垣根から遠のく。

垣根がステージへと登る、そしてそのままステージの裏まで移動  
した。

ステージ裏には何もなかったパイプ椅子に座っている少女と目的  
人物の対馬がいるだけだった。

「遅かったな垣根」

対馬が言葉を放つ。

「すみませんね。扉を蹴ったりして遊んでたら遅くなりました」

「入り口の扉の事が、ここはマナー悪い連中が集まるのでな貴様の  
ように扉を蹴り破って入ってくる馬鹿共防止のために結界を張って  
いるんだよ、まあ貴様はそれを知っていてわざわざそのような真似  
をしたと言う事になるな、チンピラ以上の馬鹿か、それとも……」

「お小言は充分ですよ」

垣根は対馬の嫌みがこれ以上進む前に言葉で区切る。

垣根が目線がふいにパイプに座っている少女へと移った。

下を向いたまま歯を食いしばっている少女。目線は垣根や対馬に  
は向いてないが少女からは間違いなく自分達に敵意ある感情が向け  
られていた。

「これが御坂美琴か」

垣根は御坂美琴の目前まで近づく。美琴は垣根に視線を合わせない、ただ下を向いたまま、何も言う事はない。

敵意はあるのに戦う気はないその様子に垣根は不機嫌そう顔を浮かべる。

「チツなんだこの様は？これが俺と並ぶ学園都市最強の人間の一人の姿かよ」

垣根は美琴の髪を強引に上へと引つ張り無理やり顔を上へと上げた。

鋭い目つき。今にも飛びかかって来そうな獣のような目、だがそこに戦意がない以上それは姿だけの獅子と一緒に。

自分と同類にならぶ存在はずなのに、この様はなんだ？怒りが込み上げる。

「まあそこまですておけ垣根、御坂美琴は私達の計画の主要言わばキーパーソンだ、大事に扱ってやれ」

「チツ」

垣根の手が美琴から離れると、対馬は話しを進めた。

「ではステージに戻るぞ哀れで無能なスキルアウト共の待ちかねだ」

「了解。ってそれよりスキルアウト共の数かなり増えてねえか？俺がアンタに報告した時の倍位は……」

「私が更集めた。君と違って私は頭脳派なのでな馬鹿の扱い方な

ど重力演算工程式の応用より余程簡単な事なんだよ」

「ああそうかい」

流れるような返事を適等に対馬に送り、垣根を含む、対馬、御坂美琴は暗い裏ステージから表ステージへと移動する。

対馬と垣根の登場により、騒がしかった400人以上のスキルアウト共が一斉に静寂を作り出す。

御坂美琴の姿に戸惑う者もいたが、皆それを口にしない。

対馬と垣根は言わば王。

王の横に立つ少女を疑問に思い口に出す必要は兵隊にはないのだから。

対馬がステージの中央へと移動する。

そして予めにスタンドに立てかけられていたマイクを手に持ち第一声を口に出す。

「全てをぶち壊せ」

最初の言葉はただその一言だった。

対馬は続ける。

「今までレベル0と言うだけで苦しい思いを強いられ偏見と差別だけが交差し君達を苦しめている学園都市を我々は断じて許してはならない。弱者たる君達をジャッジメントは力で排除し、アンチスキル共は同じ弱者の身にありながら君達は迫害する、君達はそれを許してはならない断じてだ!!」

対馬の演説は続く。

「力がある者、力が無い者。何故それだけで人は世界は君達を傷つける、同じ人間なのに力がないだけで何故？それを君達示さなくはならないこの学園都市に！！今この瞬間！この無差別的はルールを作り出したこの世界に」

対馬の演説にスキルアウト達は強い眼差しで答える。

「さあ！力は与えた、チャンスも与えた、それを実行するだけの戦力も全て！。示せこの傲慢と欲望が渦巻く学園都市に、時は満ちた、改革の時は来た。全てを破壊しろ！」

そこで言葉を一度切り。

「新たな主人公達よ！！」

その瞬間。

うおおおおおおおッ！！と活性の声が上がった。  
スキンアウト達の志気が見る見る上がって行くのが分かる。

「やっぱり対馬さんについて来たのは正解だったんだ」

「やってやるぜ能力者共、今までの仕返しは利子を揃えてしっかりと返してやる」

「王よ！アンタの赴くままに俺達について行きますぜ！」

「学園都市をぶっ壊せエええ！！」

様々な声上がる。もうスキルアウト達は対馬の忠実なる駒、そ

れを確認すると王は更に話しを続けた。

「盛り上がっている所申し訳ないのだが、皆一度こちらに耳を傾けて欲しい」

スッ……と一瞬でまた静寂が生まれた。声の残響すら一瞬で消えた。

「正直は話し君達400人に指示を与えるのは私一人では実に困難な事と言える、そこで三つに部隊を分ける」

そう言うと垣根に連れられ美琴も対馬と並ぶように配置され、舞台には対馬、垣根、美琴の三人が横一列に並んだ。

「ではまず、この作戦のメインを指揮する対馬部隊、強能力者共を叩き潰す垣根部隊、そして、強能力者や低能力者あらゆる能力者達に罰を与える言わば遊撃隊の御坂部隊この三つの部隊に分かれてもらおう」

対馬はポケットから一枚のガムの銀紙を取り出した。

「君達に今日この場所に来てもらった際、銀紙を各員に渡してあると思う、そこに君達が所属する部隊名が予め記入されている、後で各員それぞれの隊長の所に行き指示を受けてくれ」

スキルアウト達はそれぞれ配られた銀紙をチェックする。

対馬部隊、垣根部隊、御坂部隊。

それぞれ自分達の役割を認識すると、顔を再び王へと戻す。

それを確認した対馬は再び言葉を放つ。



「いいか君達。隊長の命令は絶対だ。皆それぞれ隊長達の指示に従い迅速に学園都市の能力者共を一掃しろ！以上だ」

短い演説を終えると対馬は持っていたマイクを押し付ける形で垣根へと渡す。

「後はまかせる」

それだけを述べると対馬は美琴を引き連れステージ裏へとその姿を消した。

ステージに残された垣根は対馬から渡されたマイクを持ち直す。

「ってな訳で引き継ぐって程でもないが。いいかテメエら作戦決行は今から7時間後の午前7時ジャストに行く、お前らは配られた幻想御手を装着し各員の俺達の指示通りに動け、以上だ」

3

「この書類に君にやって欲しい必要な事を全て記している、作戦決行までに頭に入れておいてくれ」

ステージ裏へと戻った美琴と対馬。

対馬は突然パイプ椅子に立てかけていた茶封筒を美琴に差し出した。

しかしそれを美琴は受け取らず俯いたまま歯を食いしばっている。本当は今でもこの瞬間に目の前の男を倒したい。けど……美琴は

負けたのだ、それも圧倒的な形で、抗う術も、気力も全てはぎ取られた。自分がどんな目にあつても最悪殺されよう共、美琴は心の底では協力などしたくはない。

だが……協力せざる得ない理由があつた。

「そう言えば、君が表舞台から去って2日が過ぎた訳だが、どうも君の行方を探している1人のジャツジメントの少女がいるようだが……」

ビクツと美琴の肩が電気を浴びたように跳ね上がった。

「万が一の可能性を考えて、君を搜索する事で我々の存在に気付く恐れがある。今の内に手を打っておく事も出来ない事はないのだが……」

「黒子は関係ないでしょ」

そう美琴は人質を捕られていた。

逆らえば、美琴に関係する全ての友人、知人を全員の命は保証しないと。

だから協力しないと選ぶ選択肢はない。

自分に対馬を止める力がない以上、協力するしか手はなかった。

「安心したまえ、君が協力する以上。君の友達の安全は確実に保証する、もちろん今の所ジャツジメントの少女を含め君の友人はターゲットから外すように垣根に指示を出している」

「……ッ！」

「まあ、どちらを選べばいいかは考えるまでもない事だが、どうす

る？」

もし美琴が協力をすれば沢山の人間が傷つく、だが友達は助かる。逆に美琴が協力を拒んだ場合、変わらず沢山の人間が傷つき、美琴の友達は真つ先にこの男に狙われる。

自分にどうする力もない以上、答えは明白だった。

美琴は無言のまま茶封筒の中身を取り出し、計画書に目を通す。その様子を見て対馬は満面の笑みを浮かべた。

（前提条件は全てクリア。流石だな私は……一寸の狂いもなく計画は順調だ）

対馬黄河の計画は7時間後に始まる。

御坂美琴を主要とした絶対能力者進化実験。

蘇った垣根帝督。

幻想御手。

能力を得たスキルアウト。

計画の鍵は全て揃った。

後は7時間後、全てが始まり、そして終わりを迎える。

第三章・エピローグ完

第38話 崩壊の序曲 前編（前書き）

第四章スタート。

会話文が多いですがどうぞ「了承」下さい。

### 第38話 崩壊の序曲 前編

どうして世界は人に優劣をつけるのだろう。同じ人間なのに何故人は互いを傷つけ合うのだろう。

人は身勝手だ。

この学園都市だってそうだ。

無能力者と超能力者、それだけで人間の価値を決め付ける。

学園都市と言う世界は歪んでる。

けど人が世界を作り上げて以上、全ての原因は人間にある。

優劣なんてなければ争いは起きないのに。

力で人間の存在価値を決め付けなければもっと人は笑いあって明日を向かえられるのに。

だからお願いです。

スキルアウトとか無能力者とか超能力者とかどうでもいいから、

そんなしがらみに捕らわれない1人の少年に切に願います。

どうか今から起きる残虐で欲望渦巻く悲しい陰謀を止めて下さい。

私はもう無理だから……………。

私はもう歪んだ世界の一部だから……………。

後は任せたね。

そして、アンタの力で私も止めて、一度も私に負けた事ないんだからそれ位楽勝でしょ？

こんな下らない幻想なんか打ち破ってね。

じゃあ、さよなら。

そして……………ごめんね。

4月23日。

学園都市全学区の交通機関の停止及び全学校の休校が学園都市統括理事会から言い渡された。

時刻は午前8時。

何時もなら通学時間帯で賑わう通学路も学生の姿は見えない。その代わりに……………。

「オラア！！出て来いや超能力者共」

「手当たり次第にぶっ壊せエ」

謎の集団が学園都市中に徘徊していた。更に街中を見渡すと建物の窓ガラスは砕かれ、アスファルトには亀裂が入っており、街灯は倒れ、信号機はその存在意義を無くしたかのように点滅をしなくなっていた。

これが理由。

学園都市統括理事会はこの騒動を学生達のデモとして学園都市中のアンチスキル、ジャツジメントに嚴重警戒態勢及びデモ活動の阻止を指示する。

言うまでもなく一般的市民は学生寮から出る事を頑なに禁じている。

デモ騒動が開始されて一時間後、緊急対策会議を終えたアンチスキルとジャツジメントが遂に出動した。

「諸君らに警告する。直ちに無差別デモを中止しなさい」

アンチスキルの防弾特殊車両が第7学区の十路地交差点を徘徊す

るデモ集団を囲むように配置された。

デモ集団の数は僅か5人。対するアンチスキルとジャツジメントは総勢30人を超えていた。

どちらが不利からは歴然の差。

しかし……彼らがその行動を止める気はない。

「おい獲物を発見したぜ、こりゃ手間が省けたぜ」

デモ集団達はこの人数差を前にまだ自分達は狩る側だと思い込んでいる。

その言葉を聞いた堅苦しい制服を着た中年のアンチスキルの男は拡声器に手を伸ばす。

「私は第7班アンチスキルの指揮官だ。君達、状況を見て判断してくれ。君達の抵抗など最早意味などない、指示に従わない場合速やかに武力鎮圧を行うように上から指示されている。私達とて君達を傷つけたくない、ここは大人しく……」

ゴオオオン！！と爆発音が司令官の言葉を掻き消すかのように唐突に響いた。

司令官の男が爆発音の発信源の方に視線を移すと……。

「なんて事を……！？」

目の前の光景を理解をするのを脳が拒否しているのか、頭が空白になった。

アンチスキルの防弾特殊車両が爆発し、周囲を炎が拡散し更に爆風によってアンチスキルやジャツジメントが空を舞っていた。

バタバタバタと落下して行く学園都市の治安維持部隊達は地面に強く叩きつけられ、あるものは体を建物に叩きつけられ、放り投げ

られた人形のように力なく倒れていった。

「ガソリントankをぶち抜いたら車なんてただの爆発物だぜ」

デモ集団の5人の内の1人が手の平から炎を噴射しながら楽しそうにそう言った。

そう凄く楽しそうに……。

その様子を見て司令官は激怒した。

「ふざけるな！！君達が一体どれだけ重大な罪を犯したか分かっているのか？ジャツジメントなんて学生なんだぞ。それを……」

「もう我慢なんねーマジでムカついた」

デモ集団の中の1人の少年が不穏な空気を身に纏い、集団の輪を外れ司令官の方へ前に出た。

司令官を護衛する特殊防護服を装備したアンチスキルが少年に黒光の光を放つ銃を向け構えた。

恐怖も戸惑いもなくただ自身に向けられている銃口をポケットに手に入れたまま特に興味も示さずただ呆然と見つめている。

そこで炎を噴射しているデモ集団の1人が輪をはみ出した少年に駆け寄る。

「困りますよ垣根さん、最初は俺らにやらせてくれる約束じゃないですか」

垣根と呼ばれる少年。

そう少年の名は垣根帝督、学園都市の最強の怪物の1人だ。

垣根は言い寄って来る集団の1人の言葉にも興味も見せず銃口を見つめている。



「撃つぞ」

銃口の引き金に指を当て司令官の横に立つ護衛のアンチスキルは言った。

脅しか否かは分からないが、その引き金は直撃すれば間違いなく人間の命を奪う事が出来る代物だ。

それを目の前に突き付けられたら常人であれば脅しでも身が凍るだろう。

しかしそれらを全て否定するかのように垣根は銃口を向けているアンチスキルに向かって人差し指を立てた。

「オイ、そんな玩具で俺を殺れんのか？それじゃ駄目だよな全然駄目だ」

「玩具ではないぞ」

確かに垣根に向けている銃は暴徒鎮圧用ゴム弾ではなく、殺傷力抜群の本物の弾丸。直撃すれば超能力者と言えどベースが人間である以上間違いなく重傷は避けられない、下手をすれば間違いなく即死。それは垣根でも例外ではない。

「子供の君を撃ちたくはないが、これ以上被害を拡大させる爆弾を私達は放置する事は出来ない」

「なら撃てよ」

「いいんだな？」

「その躊躇命取りになるぜ」

「……………ッ！！司令官発砲します」

司令官は小さく頷く、発砲許可を確認すると護衛のアンチスキルは銃の照準を定め、引き金を引いた。

バンッ！！発砲音と同時に一つの弾丸が発射された。

決して人間では捉える事の出来ない速度で弾丸は垣根の心臓に目掛けて突き進む。

垣根は動かない。

生死は明らかだった。

だが、

「なッ！！」

起きてはならない事が起きた。

護衛のアンチスキルが発砲した弾丸が一度停止し直線軌道を変え湾曲し自らの意志を持っているかのように方向を変えた。

弾丸が向かった先は……………。

「……………がつ……………！？」

その場にいる垣根を除く全員の思考が停止した。目の前の光景を皆ただ見ている事しか出来ない。

ポタポタと血の雫がアスファルトに模様を描く。

「司令官ッ！！」

護衛のアンチスキルの声と同時に司令官は堅いアスファルトに体を叩きつけた。その衝撃で体内の血は一気に噴射され赤い水溜まりに身を沈めた。

そう湾曲した弾丸は司令官の丁度心臓を正確に突き抜けていたのだ。

地面に倒れた後も司令官は指を動かして生きている反応を見せていたが、その動きを完全に停止した。

それが人の死だと言う事に気付くには皆、その時間はかからなかった。

「そんな……俺は……なんて事……」

垣根に向けて銃口を発射させた護衛のアンチスキルは持っていた銃を地面に落とし、顔を覆い理解出来ない現実から目を背けた。その様子を垣根はあざ笑った。

「もう戦意喪失かよ、さっきまでの威勢はどした？ああ！？結局半端な奴ほど敵意なんざこもってねえんだ」

垣根が司令官の死体へと足を進める。

「教えてやる、俺を本気で殺る気なら敵意じゃなくて殺意で来いじやねえと死ぬぜ、コイツみたいによ……」

垣根の足が司令官の頭の上に乗る、バキバキと骨が軋む音と共に司令官の頭が風船のように破裂した。

司令官の首なし死体。ジャツジメントの学生達は初めて見る人間の死体にショックを隠せずにいた。

吐き出す者、気絶する者、涙を流しながら立ち尽くす者。そして次第にそれらの感情は垣根に対する恐怖へと変わる。

「垣根さん。そろそろ俺らも参加していいっすか？」

垣根の周りにデモ集団の男達が集まる。垣根の行いで土気が向上したのか男達は皆、自身が持つ各能力の一端を周囲に拡散させている。

「いいぜ。お前ら好きなだけ暴れてやれ後、能力者は殺すな利用価値がある」

「アンチスキル共は？」

「殺せ」

それが合図となり第7学区駅前交差点は血の嵐が舞う事となった。対馬黄河隊「土の門番」垣根帝督を含む元スキルアウト達は手に入れた能力を糧に学園都市を破壊と混迷の世界へと変貌させていく。

2

「とうま、とうま」

「なんだ？」

「外が何だか騒がしいよ、何かあった？」

「ああ、何だか反学園都市の学生達がデモ活動を起こしてるんだとさ」

ふーん。と少女は適当に自ら振った話しを流すと、

「とうまお腹すいた」

と話しの流れを変えた。ベッドに横たわりポテトチップスを頬張る少年上条当麻は持っていたポテチの袋を空腹少女インデックスに投げ付ける。

インデックスは自分の膝の上へと落下したポテチの袋をしばらく凝視すると、頬を膨らます。

「とうま、こんな物で清き少女のお腹を満たせると本気で思ってる？お肉食べたい」

「無理」

「お肉食べたい」

……。どうやら空腹少女インデックスは退く気がないみたいだ。と言っても無理なものは無理、駄目ではなく無理なのだ。

現在学園都市の学生達は皆外出を禁止されている。もちろんスーパーにもコンビニにも行くことは出来ない。

唯一の食事と言えばアンチスキルが宅配してくれる支給物資だけ。しかしそれは1人分であって2人分はない。それもその筈、上条当麻の学園都市の住所記録では独り身と登録されている。(仮に年頃の男が18才未満の少女と同棲となれば大問題になる)

よって住所記憶を元に支給物資を宅配してくれるアンチスキルは上条宅には1人分の食料しか届かない。

(っつても、インデックスに俺の食料の半分以上分けてるからこのま

まだと流石にキツいな……)

と言つてもどうにもならないのが現状である。

勿論な話のだが、脱走なんてまず無理だ。学生寮の出入り口に見張りのアンチスキルが2人。そして学園都市中にはジャツジメントやアンチスキルがデモ活動の鎮圧作業の為かなりの人数で巡回している。

学生寮の見張りさえ……と思うが、現実にはゲームではない。上条当麻は忍者でもなければ、暗部組織の隠密部隊でもない、ただの学生だ。

(仕方ない。土御門にでも食料分けてもらうか……まあ大人しく分けてもらえるとは到底思えないけどな……)

上条はベッドから起き上がるとベランダへの方に移動する、何故玄関から向かわないかと言うと絶対安全の為、学生寮の中も自由に動く事を禁止されているからである。

ガラガラとガラス張りのドアを開き、上条が一步ベランダへ足を踏み入れた、その時……。

キュイン!!と言う音が上条当麻の右手から聞こえた。

「なッ!？」

上条自身、この音と言うよりこの感じは身に覚えがある。それは自身が持つ幻想殺しが異端能力に触れ反応し打ち消した事を意味している。

(外に出た瞬間右手が反応した……?けど一体何に?)

「魔力」

インデックスが上条の心の疑問を答えるように間髪入れずに答えた。

インデックスは立ち上がると上条に続くようにベランダへと出て何かを感じとるかのように静かに瞳を閉じた。

「どうした……？」

「近いよ」

「何が？」

「魔術の反応」

上条はベランダから外の様子を眺める。今まで部屋の中にいたので分からなかったが、耳を澄ますとかすかだが爆発音が聞こえる。詳しい位置は分からないが駅の方角だった。

「この爆発音……まさか魔術師が……？」

「違うと思う、魔術の反応があるのは多分この学生寮の中だと思うよ。でもおかしいね、こんなに強い魔力なのにどうして今まで気付かなかつたんだろう？」

……ん？と上条は自分の右手を見る、そう言えばさっき幻想殺し  
が何かに反応したのだが……あれは関係あるのか？まあ関係あるに  
しろないにしろ何か異端能力に反応したのは間違いない。

「一体何に反応したんだ？」

「結界だ」

スバツととなりのベランダから人影がいきなり上条の目の前まで飛んで来た。

金髪ヘヤーにサングラス、隣人の土御門だった。

「さっきカミヤんの右手に反応したのは結界だ。それもご丁寧に魔力の存在を俺や禁書目録に悟られないようにするためだけの言わば魔反結界」

「土御門!!」

「ちなみに結界はどうやらこの学生寮の周辺の空気に張り巡らせているみたいだよ。だからカミヤんが外に出た瞬間その右手が反応したわけ、更に言うとその結界の魔法陣学生寮のあちこちに張り巡らせてあるぜ」

「ちよっ…ちよっと待ってえ!!」

上条当麻は混乱していた。いきなり二メートル近くあるうべランダからベランダを飛び越え何を言い出すかと思えば、結界だの魔法陣だの正直な話し上条当麻には唐突に専門用語を頭で処理出来る立派な頭脳は持ち合わせていない。

「分かるように一から説明して頂きたい」

「仕方ないにゃ〜じゃあカミヤんに分かるように……」

と言葉を一度不自然に切り、



「学園都市。魔術師いる。それ問題。俺達マーク。企み。不明。結界。張られていた。」

ムカつく位言葉を断片的に切りながら話す土御門。完全に馬鹿にしている。

上条当麻は魔術師が学園都市にいる事だけ理解すると、

「……で？俺にどうしろと」

「どうするって……一緒に探すんだにや〜」

「何で？」

土御門はため息を大きく吐き出すと、肩をすくめ話しを続けた。

「いいかカミヤん。俺達のいる学生寮に誰かが魔術の存在を感じさせないようにピンポイントで結界を張った、この事が何を意味する事が分かるか？カミヤん」

「つまり俺達に存在を気付いてほしくなかったって事か？」

「半分正解だが半分ハズレだぜいカミヤん。確かに存在を知られたくない事は間違いじゃない、だが本当に問題なのが……」

「私達の存在を把握してるって事だね」

インデックスが土御門の話しを割って入る。インデックスは土御門の言いたい事を理解しているみたいだった。等の上条は未だに話

しの主旨が曖昧で混乱している。

インデックスが土御門の代わりに話しを進めた。

「とうま、私達が学園都市にいるって事は別に魔術組織の中じゃもう一般的に知られてる話しなんだよ」

そこは分かる。現に大覇星祭の時もインデックスにどこやらの魔術師達がサーチをかけていた事があった。多分インデックスの言葉通り魔術師達は彼女の存在が学園都市にいる事を知っている。

インデックスは上条が理解した事を表情で確認すると更に話しを勧める。

「けどねとうま、私達がこの学生寮に住んでいる事はイギリス清教の一部の人間だけなんだよ」

「一体それの何が問題なんだ？」

結局の所上条当麻はこういう遠回しな話しが苦手なのだ。眉をビクビクと痙攣させている土御門、上条のアホっぷりに我慢が限界なのか大声を張り上げて、

「結論だけ言うぜカミヤん、魔術師が学園都市に侵入している、もちろんイギリス清教からは何も連絡はない、だからイギリス清教の人間じゃない。そして相手は俺達を邪魔者扱いして結界を張った位だから味方じゃない、しかも相手は禁書目録や俺の存在を認識し学生寮全体に結界を張っていた。これは完全に悪意が感じられる。何かを仕出かすつもりなのは考えなくても分かる」

更に……と付け足し土御門は人差し指でベランダから学園都市を指を指す。

「現在学園都市は反学園都市の連中のデモ活動で警備体制が内側に集中し過ぎて外側のセキュリティがあまくなっている。侵入して来た魔術師がこの混乱最中の学園都市で何か仕出かして見る、良い結末は待ってないぜ」

つまり、悪意満々の魔術師が何か仕出かす前になんとかしようと言うのが土御門の話だった。

だが根本的なものがまだ解決していない上条は恐る恐る問う。

「それって俺必要？」

第38話 崩壊の序曲前編 完

第39話 崩壊の序曲 後編(前書き)

ありゃ!!いつも通り駄文でお送りします!!  
お気に入り121件ありがとうございます!!

### 第39話 崩壊の序曲 後編

上条当麻、土御門元春、インデックスの三人は駅前に続くメインストリートのド真ん中に立っていた。

現在学園都市は反学園都市の学生達のデモ活動が発生しているため、学園都市の全学生、住民は全学区外出禁止を学園都市統括理事会から命じられている。

にも関わらず、上条達は第7学区の駅前に向かっていった。

別に好き好んで外出した訳ではない。

第7学区の上条が住む学生寮に魔反結界と言う特殊な魔術が張られていたからだ。

魔反結界と言うのは、普段は魔術を跳ね返す結界魔術だが、また別の用途がある。

それは結界の外内の魔力の断絶。

学生寮に張られていた結界、難しく考えず単純に考えると学生寮を魔術から守るためと考えるのが一番単純だ。

だが魔反結界の場合それも違ってくる。

今回、結界を張られていた理由はインデックス達に外で発生している魔力の流れを察知されなかったため。魔反結界は魔術だけでなく魔力すら反射する。

つまり結界内にいるインデックス、土御門に魔力の発生は知られない。

だが、上条がとある事情でベランダ（外）に出たせいで結界が幻想殺しによって消されてしまった。

結界が消えた事で魔力を感知した土御門はこの結界を張った魔術

師を捜索するため上条とインデックスを連れ出した。

正直、上条には何故自分が連れ出されたのか分かってない。ただ「うるさい黙ってついて来い」と言われ無理やり連れてこられた。

因みにインデックスもついて来たのは、彼女の利用価値は学園都市の中より外のほうで重宝される。学園都市に彼女の存在価値を知る魔術師がいる限り、彼女一人を学生寮に野放しには出来ない。

それに浮幽霊かつ至ってインドアな彼女は幾ら学生寮外禁止と言われも、それを健全かつ素直に守ってくれるいい子ちゃんではないのだ。

話しを戻し、上条達はとりあえず、爆発音が響いている駅前に向かっていている。

デモ活動の煽りを受け、街中に一般市民の姿は見えない、どこか不気味な雰囲気漂ういつもと違う学園都市に上条は今起きている出来事の重大さを理解する。

「……けど」

上条は街中を見渡す。

一言で言えば異常だった。

別に街中に一般市民がいないとか、デモ活動が起きているから異常と思っっている訳ではない。確かに現在の学園都市は異常だが異常の中に足りない異常があった。

「学園都市の治安維持部隊が一人もいない……どうなってるんだ？」

土御門が真面目な声でそう呟いた。

そう、デモ活動鎮圧や巡回活動などをしているはずのアンチスキル、ジャツジメントの姿が見えないのだ。

上条達が悠然とメインストリートのド真ん中に立っているのも、彼らの存在がいけないからだ。

上条達はゆっくりとした足取りで歩き慣れた駅前への道を進む。

上条はキョロキョロと辺りを見渡しながら、土御門は無言で周囲を警戒しながら、インデックスは……………。

「とうまお腹すいた」

と緊張感の欠片もない言動をさつきから連呼していた。

普段は魔術師絡みとなると身を引き締める彼女だが、やはり空腹には勝てないらしい。

(どうする？この際コンビニにでも行こうかな？)

そう一瞬思ったが、やはり駄目だ。

店員もいないコンビニに入ってお金だけレジに置いとけば…………と考えたが、根本的な話し財布を忘れた。

言うまでもなく幾ら緊急事態と言え万引きは絶対駄目だ。

上条当麻はお父さんやお母さんが悲しむ行為は決してしないのだ。

「我慢しなさい」

上条は結論的にそう言うしかない。

インデックスはほっぺを膨らませ、

「とうま、我慢は体の毒なんだよ」

「そう言いましてもお財布がないから上条さんには何も出来ません」

「お肉食べたい」

……。どうしよう。上条の涙腺が思わず緩んだ。

このまま我慢しろと言いつけると、間違いなく文字通り上条当麻のお肉を噛んでしまう、予想や予言ではない。上条当麻の経験値がそう確信している。

「とつま」

「何ででしょうか姫？」

「いただきます」

ガブリッ！！と鋭い牙が上条の腕を挟んだ。

最早、叫び声をあげる事すら馬鹿らしい、上条は確定していた未来が現実にならずに済む事を知り、それに対し何も出来ない自分を心で密かに嘆くだけ。

（これは不幸ではない、単なる理不尽だ）

もう正直、魔術師とかデモ活動とかそんな事は頭にない。

痛い、理不尽、離して、いつまで続くの？それだけだった。

「カミヤんツ！ー！」

不意に土御門が叫んだ、驚いたインデックスも思わず上条の腕から凶器を離す。

「どうした土御門？」



「血の匂いだ」

その一言で上条は現実に帰る。

「カミちゃん急ぐぞ！！この血の匂い、駅前の方角だ。尋常じゃないぞ……………一体どれだけの血が……………」

その時。

土御門の言葉を遮るように炎の柱が上条達の右横から現れた。

「……………ツ！！」

土御門は上条とインデックスの頭を地面に押さえつけ、瞬時に轟！！と炎の柱は上条達の頭があつた位置を横切つた。

土御門の反応が後、コンマ何秒遅ければ2人の頭は確実に焼き払られていたろう。

土御門は炎の柱が放出された場所を見る。

建物と建物で構成された薄暗い裏路地から16才位の人相の悪いチンピラ風の青年が右手を向けて微笑んでいた。

右手からはオレンジ色に光る火の粉がホタルの光のように点々と周囲を舞っていた。

「ツチ！！ハズしたか……………」

青年がゆっくりと上条達に近く。

「もう一発行くぜ！！」

青年の右手がオレンジ色に光る、そして先ほどと同じく一直線に進む炎が上条に向かって噴出された。

「うおッ！！」

上条が驚くのもつかの間、炎の柱は上条に直撃した。

「ヒット」

青年は嬉しそうにニヤニヤと顔をにやつかせる、そして炎に飲み込まれた上条から視線を剝らすと次にインデックスへと照準を変える。

「さあ次はシスターさんだ」

右手が光る。青年の能力がインデックスに牙を向けた。

突然の出来事に動けないインデックスに容赦なく炎の光線が向かう。

「ハハハッ消える！！」

「お前がな！！」

「……………！！」

声が青年の耳に届いた瞬間、上条を包んでいた炎が消し飛んだ、そして瞬時に上条はインデックスを襲う炎の柱を右手で殴りつける。すると炎の柱はその形を忘れたかのように形を崩し火の粉となり姿を消した。

「そんなッ!!」

何が起きたか理解出来ない青年。

彼は知らない。上条当麻には幻想殺しと言う異端能力を打ち消す力がある事を……。

そして一瞬。上条達をその視線から外してしまったと言う決定的なミスを犯した事も……。

「馬鹿が……」

「しまった!!」

青年が上条当麻の能力に一瞬気を取られた事で土御門が青年の懐に潜り込んだ。

バキィッ!!と青年の肋わきばを土御門の肘がえぐり込むように突き上げる。

「あがッ」

「悪いが加減はせんぞ」

九の字に折れ曲がった青年の顎を土御門は左拳で追い討ちをかける。

「ゲフッ……」

顎に見事なアッパーを決められたら青年は、そのまま後ろに倒れる。

後頭部を思い切り地面に打ち付けた青年は強打した部分を頭で抱えようとす。

だが……。

それより早く土御門が右手を蛇の口のように広げて青年の首を絞めた。

「貴様は何者だ？何の目的で俺達を狙った？答える！！」

「……離せよ」

「全て答えたら離してやる、まずはこちらの質問に答えてもらおうか。それとも、このままその首をへし折ってやるつか？」

土御門の右手に力が入る。青年の首がギシギシと音を立てた。

「やめ……分かった、話す。話すからこれ以上は……ッ」

土御門はふんと鼻息を漏らし、首に入れてた力を緩める。

呼吸が少し楽になった青年は息を整え口を開いた。

「俺は反学園都市の人間だ。今学園都市中でデモ活動を起こしている一味だ」

「俺達を狙った理由は……」

「理由なんかねえさ。ただ学園都市の人間だったら誰でも良かったんだよ」

その言葉に上条の顔が強張る。

「誰でも良かっただと!?!」

上条は怒りを剥き出しにしたまま、地に伏せている青年に近づくと

「テメエのせいで、インデックスはもう少して死ぬ所だったんだぞ  
！！」

「関係ねえんだよ」

その言葉は上条の逆鱗の触れた。

バゴツ！と上条の右手が青年の丁度、鳩尾みぞおちに食い込んだ。

「ごほッ…ゲフッ……」

苦しく咳き込む青年。更に土御門が首を抑えているため、激しく咳き込めずに苦しみの表情を浮かべていた。

だが、上条の怒りはそれで収まらない。上条は右手を大きく後ろに引き、更に拳に力を入れる。

「止めるカミヤん」

土御門の言葉に上条は右手を引いたまま、動きを止めた。

「コイツにはまだ聞きたい事がある。その怒りは全て聞き出した後でしっかりとぶつける」

「くッ」

上条は拳の力を緩めると、アスファルトに小さくなって座っているインデックスの元へと駆け寄った。

上条当麻は私利私欲のため、傷ついた人間を何人も何回も見てき

た。

それだけ人の涙を知っている。

それは何とも耐え難い苦痛であり、二度と見たくない現実でもある。

だからこそ許せなかった。

目的があるから人を傷つけていいと言う訳ではない。けど理由もなく人を傷つける事はもつと許せなかった。

目的もなく人を傷つけるのはただの『暴力』だ。

上条当麻は仲間が暴力に巻き込まれる事をとにかく忌み嫌う。主人公臭く、正義感の強い、それが上条当麻と言う人間の本質だ。

上条はそんな『暴力』を行う反学園都市の連中に怒りを込めて叫んだ。

「これが学園都市で今起こっている、関係ねえ人達を苦しめてるただの暴力だと言うなら、そんな幻想放っておく訳にはいかねえ！」

「とつま」

上条当麻の怒りの雄叫びがインデックスの心にも確かに伝わった。だが、

「くっくっくッ！！」

呼吸が整った青年が不気味に笑い声をあげた。気が動転して笑っている訳ではない。確実に上条の今の発言をあざ笑っている笑みだ。

「何が可笑しいんだデメエ？」

「今の発言。もしかして俺達を止めるとでも言っていてえのかな」と思  
つてよ」

「だったらなんだ」

「無理だぜ」

断言。

この青年は一言でそう言い切った。

「根拠は？」

土御門は問う。青年は淡々と答える。

「俺達の仲間の数はざっと300人以上。全員能力者だ。たった3  
人しかいないお前達じゃ、どう考えても多勢に無勢」

更に……と付け加え。

「俺達のデモ活動を指揮している方は3人いるんだが、そのお方達  
は全員“化け物”だ。何たってその内の2人は学園都市の最強と言  
われるレベル5なんだからな」

その言葉を聞いた上条と土御門は啞然とした。インデックスには  
学園都市の用語が分かっていないらしい。

だが、学園都市の人間から言わせればそのレベル5は孤高の存在で  
あり、目標でもある。

上条は驚きの感情を飲み込み。言葉を放つ。

「そのレベル5って誰だ」

上条は知っている、レベル5と言う人間の強さを……。

一人は御坂美琴。もう一人は学園都市正真正銘の怪物、一方通行。

美琴とは犬猿の中でいつも顔を合わせれば喧嘩となり、レベル5の圧倒的な力量をいつも容赦なく振るって来る。

青年の先ほどの突然とも言える炎の柱を防げたのも彼女がいつもけしかけて来る奇襲の経験値があつてからのもの。

そして一方通行。

上条は一方通行とはかつて二度と激突している。御坂美琴を超えるレベル5の頂点に位置する一方通行。

その実力は最強に相応しく、彼に勝てる人間など世界中を探しても一握りと言える。

実力を知っているからこそ、上条は聞いた。

息を飲み、青年の口が動くのを待つ。

そして……。

「一人は学園都市の第二位、垣根帝督。そして更に序列を並び」

上条当麻は事実を知ってしまう。決して予想もしていない人物がこの事件の指揮をしている事を知る事になる。

「学園都市の第三位超電磁砲“御坂美琴”だ」

こうして上条当麻、土御門元春、インデックスの戦いの扉は開いた。

だが、まだ扉は開いたばかり。

学園都市の崩壊の序曲はまだ始まったばかりなのだから……。



第39話 崩壊の序曲後編〜完

## 第40話 告げられた真実（前書き）

今回は説明だらけで楽しくないかもです。

ちよい最近、新連載考案のため更新遅いですが、ご勘弁を！！

## 第40話 告げられた真実

「御坂だって……?」

上条は戸惑っていた。デモ活動を起こしている一味である青年から告げられた真実。

御坂美琴はこの反学園都市のデモ活動を指揮している一人だと…。

上条は御坂美琴と言う人物がどのような少女かよく知っている。荒ぼつく、自己中心的で、顔を見ればいつも喧嘩をふっかけて来る。

正直は話し上条には九割くらい苦い思い出しかない。

けど同時に御坂美琴がとても優しい少女だと言う事を知っている。

一年前の絶対能力者進化実験の祭、一万人以上の人間を悲劇の輪廻から救おうと、自分の命を投げ出そうとした事。

自分の後輩が危険に巻き込まれたと知った時、街中を駆け回り、大事な後輩を死に物狂いで救おうとした事。

負傷した自分の代わりに私が戦うなんて言ってくれた事もあった。そんな彼女の優しさの一面を知ってるからこそ、上条はその話を信じる事は出来なかった。

「そんな話し、信じると思うか?」

上条は自身が思ってる心の内をそのまま言葉に出した。

土御門の右手に縫い止められ、地面に這いつくばっている青年は、

上条の言葉を鼻で笑った。

「ふん。信じようが信じまいが、事実だ。お前達が何を思った所で何も変わんねーよ」

なら、と上条は思う。御坂美琴がこの事件を指揮していると嘘を証明するには、御坂美琴がこの事件を指揮していないと言う事実を見つければいい。

上条はポケットからポロポロの携帯を取り出し、通話ボタンを押す。

宛先は勿論、御坂だ。

コール音が鳴り響く。

「……………」

コール音が鳴り響いて10秒。上条には何故だかその時間がとても長く感じ、嫌な汗が体から浮き上がった。

その時、プツンとコール音が鳴り止んだ。

「もしもし御坂かッ！……………」

上条は咄嗟に携帯電話に向けて、そう叫んだ。

が……………」

携帯電話から聞こえたのは御坂美琴の声ではなく『お留守番サービスに接続します』と言うアナウンスだった。

「くそッ！！何やってんだアイツ。寝てやがんのか？」

上条はもう一度かけ直す。しかし結果は変わらない。

そんな上条を見て青年は大きく口を開いて笑った。

「馬鹿だな」御坂隊長は今作戦中。それに対馬さんが、プライベートの電話なんて許す訳ないじゃん。俺達だって作戦前に全員携帯電話は没収されてるしな」

「なる程。誰かがもしお前のように捕まった時に情報を漏らさないようにする為か……………」

「正解」

土御門はよく組織間で使う簡単な情報封鎖手段だ。と上条に教えた。

「おい、俺からも聞きたい事が幾つかある」

上条に変わり、今度は土御門が問う。

「作戦と言うは何らかの連絡手段が無ければ、不手際と言うものが発生する場合がある、お前達はこのような大規模な作戦をまさか連絡手段の一つも確保しないで行っているのか？」

作戦を行う際の仲間内の連絡手段は必ずと言っていいほど必要となる。

だいたいどの組織も自分の今現在の状況を知らせるため、合図や緊急時の集合場所、定期報告、と言うものが決められている。

漫画のように作戦成功しなかった場合は死んだと言う事、などと言うのは現実ではほとんどないと言える。

作戦は成功させるためにある。

仲間内の情報の開示が出来てない場合、様々なアクシデントに対応出来ない。作戦が予定通りに進むとは限らないのだ。

人一倍プロの魔術師として様々な作戦を実行して来た土御門はそれを知っている。

土御門は確信していた、必ず連絡手段は確保していると、それはプロとしての確信だ。

「ああ……あるぜ。言わねーけど」

その言葉を聞いた瞬間メキメキと青年の首が嫌な音を立てる。

土御門が右手を更に締め付け、首の神経を圧迫している音だった。

「死にたいか？」

冷酷な表情に冷酷な声。

土御門の殺気を確かに感じとった青年は殺されると五感で感じ取り、すぐさま口を開いた。

「これだ……これだ……頼むから離して……」

土御門は右手の力を緩め、青年がポケットから取り出した連絡手段に視線を移す。

「ああ!?!」

この後及んでまだふざけてるのか。と言わんばかり上条の顔に怒りが浮き上がる。

青年が取り出した連絡手段とは、ただのカエルの形をした携帯ストラップだった。

「馬鹿にしてんのか？」

状況を認識出来てない馬鹿にもう一発お見舞してやろうと上条は青年に歩み寄る……………。

「待って、とうま」

沈黙を守っていたインデックスが上条を呼び止めた。

「…………？」

「そのカエルのお腹、通信術式の陣が刻まれてる」

「何だって!？」

上条が食い入るようにカエルのストラップのお腹に注目する、確かにカッターナイフで削られたような後で魔法陣みたいなのが描かれてある。

「って事は…………ツ!!」

その時。

ダンッ!と土御門が青年の頭を地面に叩きつけた。

「土御門？」

さつきも決して優しい表情ではなかったが、突然の土御門の顔から人間らしい感情が消えた。

鬼の形相とも言える表情で土御門は更に腕に力を込め、青年を問

い詰めた。

「これは命令だ」

鋭く刺すような言葉が青年の耳を突き抜ける。

「このストラップを配布した人間は誰だ？ 答えるよ、死にたくなければ……」

「……ひいッッ！！」

「答えるッ！！」

土御門の怒涛の叫びが周囲に響く、これほどまでに感情を露わにした土御門は上条にも初めてだった。

何をそんなに感情的になっているのか……。上条には理解出来な  
いでいた。

そんな上条の疑問を更に深めるようにインデックスが、

「答えて大事な事だから、あなたにこのストラップを渡したのはだ  
れ？ このストラップを“何回”使った？ 答えて！！」

「ああ…… 答えるから…… 首を離せ……」

今度は土御門が完全に首から手を離れた。

涙目で恐怖により呼吸が整わない青年は先までの生意気な態度を  
消し、恐る恐る質問に答えた。

「対馬さんだ」



「ストラップを渡した張本人か……？」

「そうです」

対馬。初めて聞く名前だった。

土御門は尋問を続ける。

「これはお前達全員に配られたのか？」

「ああ…作戦を執行している全員分だ」

「数は……？」

「ざっと400人」

「クソツたれッ……！」

バンツ！！と土御門は通信術式の携帯ストラップを地面に叩きつけた。

困惑する上条を無視して土御門は、

「最後にこれだけ聞きたい、垣根帝督。俺は奴を知っている。死んだはずだが……？」

「何を言っ……？」

どつやらこの情報は知らないらしい。

土御門は青年の様子から嘘は言っていない事を見抜くと咄嗟に立ち上がった。

「急ぐぞカミヤん」

「どうかしたのか？」

「確実に死人が出るぞ」

上条の表情から血の気がひいた。アニメや漫画でよく使われる言葉を現実で、それもこの状況で聞かされ、上条はその言葉の真意を問い詰めた。

「俺に分かるように説明してくれ土御門」

時間がなく切羽詰まった雰囲気を漂わせる土御門だったが、上条の真剣な眼差から逃げる事が出来なかった。

「分かった」

そう言つと土御門はため息を放ち、感情を一度リセットする。そして……

「まずカミヤん。信じたくないがコイツの言った事は全て事実だと言つのは間違いない」

「……何!？」

「俺は嘘つきを専売特許としてやってるのはカミヤんも知っている筈だ。だから嘘つきの俺に嘘は通用しない。断言する。こいつが言う学園都市のレベル5の2人は間違なく、このデモ活動を指揮している」

「待てよッ！垣根って奴を俺は知らないけど御坂は少なくともこんな事をする奴じゃない」

そう御坂美琴は白。それが上条当麻の中の真実。  
だから上条は反論する。

「確かに自己中心的で生意気で勝ち気でいつもビリビリ飛ばして来るけど、御坂はこんな無意味な暴力は絶対に起こさない。アイツを知る俺が言っただ間違いないよ」

上条にも確信があるからこそ、土御門の確信とぶつかり合った。

上条は御坂美琴の仲間でありたい。そう思うからこそ、ここは退けなかった。

そんな上条に土御門は……。

「確かにカミヤんがそこまで言うのなら、間違いなく“その”御坂美琴はこんな馬鹿げたデモ活動に参加しないだろうな」

土御門は、だが……と付け足し。

「コイツらが言ってる“その”御坂美琴は、どうなんだろうな？」

その言葉に上条は反応した。

「……まさかッ!!」

「そう、御坂美琴なんて学園都市じゃ有名中の有名人だ。彼女の名を名乗る別の御坂美琴がいても不思議じゃない」

つまり、確かに青年は嘘を言ってない。青年は御坂美琴がこのデ

モ活動を指揮していると思ってる。

けど、それが本物の御坂美琴だと言う確証がない。

話しを整理すると御坂美琴を名乗る別の御坂美琴がいると言う事だ。

だが、何故御坂美琴？と上条は不意に疑問に思った。御坂美琴のふりをして一体何のメリットがあるのかよく分からない。

上条の心情を読み取ったかのように土御門が答えた。

「さつきも言ったが御坂美琴は学園都市で有名な人だ。理由は学園都市の数少ないレベル5だからだ。ここまでは分かるな？」

「ああ」

「よし、じゃあ仮にカミヤん。カミヤんはA作戦に参加するとしてよ。俺はB作戦。作戦の内容は全く同じ。違いは一つ指揮者だ」

土御門は話しを続ける。

「まずカミヤんの作戦の指揮者を御坂美琴とする。そして俺の指揮者は青髪とでもしよう。この違い分かるか？」

話しは簡単でバツクに御坂美琴と言う強力な存在がいれば作戦全体の士気が上がる。

逆にバツクに青髪がいたとしても対して役には立たないし、いざという時に頼りにならないので士気は最悪下がってしまう。

「つまり御坂美琴と言う学園都市のレベル5を指揮者にする事で雑兵の士気は格段に上がる。いざという時、何かあったら用途はそれ

「それだけだな」

上条は安堵のため息を付く、それは御坂美琴がこの事件に関係してないと言う確信を得られたらため息だった。

土御門は上条の不安が払拭された事を確認すると、

「カミヤん。とりあえず駅前へ急ぐぞ、あの通信術式を使用している人間を片っ端しに止めに行く」

「……？」

デモ活動を止める理由は分かるが、通信術式を使用している人間を止めに行く……？

目的が変わっている事について上条は、

「どうして通信術式なの……？」

と土御門が言葉を間違えたのかな？と思いついて聞いてみた。

「この通信術式、この街の住人には、とても危険な物なんだよ」

インデックスが土御門に変わって上条の疑問に答えた。

「危険？」

「うん、とうま。前にこの街の超能力者には魔術は使えないって話したの覚えてる？」

その話しは知っている。この街の超能力者は魔術を使う人間と回路が違うので使用すれば命に関わる危険があると。

現に隣にいる土御門がそうだ。

彼は超能力者の身で魔術を使う事が出来る、だが魔術を使えば体中の血管を反動でズタズタに切り裂かれてしまう。

「ん？待てよ……」

上条はとある矛盾に気づいた。

超能力者に魔術は使えない、でもこの通信術式は魔術を使って通信を行う物だとそれは上条でも分かる。

「どう言う事だ？」

「気付いたみたいだね、とうま。この術式は魔力の波をある一定の周波数に合わせ、同じ術式同士の間で通信する通信術式なんだよ」

「え……周波…すう？を魔力に……ッ何だって？」

難しい言葉は上条当麻の専門外。

土御門が分かりやすく説明する。

「携帯電話で通話する場合、音を特定の電気信号に置き換え、通話相手の携帯がその電気信号を受け取り又、音に変換するその繰り返しで携帯で通話が出来る。この通信術式は簡単な話し電気信号を魔力に置き換えてるだけだ」

簡単にまとめると、携帯の場合。音→電気信号に変換→信号を携帯が受信→音に変換。

通信術式の場合。音→魔力の波→通信術式が魔力の波を受信→音に変換となる。

「つまり通信術式を使うには魔力が必要な、でも超能力者に魔術は使えない」

「じゃあ、コイツらはどうやって。まさか渡したのはいいけど実は使えませんでしたってオチじゃ……」

「いやカミヤん。この通信術式なら魔力が無くても使用は出来る、あるものを引き替えに……」

「あるもの……？」

「人の命、即ち人間の生命エネルギーだ」

深刻な顔こそ見せないが、真剣な眼差しで土御門は語った。

「多分カミヤんの頭脳では理解出来ないと思うから説明する。人には見えない生命の波動を発してる。学園都市ではAIM拡散力場のような物だ。この術式は人間の発する生命エネルギーを魔力に変換し、通信を行っている」

土御門は話しを続ける。

「結論を言っぜカミヤん。この通信術式、使い過ぎた場合、生命エネルギーを術式に飲み込まれ確実に死ぬ。回数は10回が限度だろう、止めるぞカミヤん、死人が出る、話しが長引いた急ぐぞ!!」

全ての説明が済み、土御門が地面に這いつくばっている青年を気絶させるため、腹へ一撃を決めようとした瞬間。

白い閃光が空から舞い降りた。

「なッ!？」

土御門はバックステップで回避する、が閃光の標的は違った。

「がああああッ!！」

閃光が貫いたのは青年の右肩だった。

青年は悲痛の雄叫びを上げ、地面をのた打ち回る。

土御門と上条、インデックスの三人は閃光が舞い降りた、空を見上げた。

「天使？」

インデックスのその言葉は間違ってたなかった。

空から舞い降りたのは、天使だった。

6枚の真っ白な天使の羽を生やした、少年。

土御門はその目を疑った。

「バカな」

地上にゆっくりと舞い降りた天使。土御門はその天使を知っている。

地上へ帰還した天使は両手を広げて一言、挨拶のような軽い感じ  
で言葉を放つ。

「パーティーへようこそ、元グループの土御門元春。そしてそのご友人」



その瞬間。

天使の翼が爆発した。

勢い良く背中中の翼は破裂し、そして、青年の首、両肩、胸、両股、心臓、肺を全て6枚の翼は的確に貫き、切断した。

人間が血の風船のように思ってしまっ位、青年の体から血が溢れ出る。青年は言うまでもなく即死だった。

天使は死体に目も向けない、そして上条達の驚愕の表情を満足したかのように笑みを浮かべ、

「さあ、次は誰から殺してやろうか？」

現れた天使。

「天使の名前は、垣根帝督。」

学園都市第2位の化け物は優雅に笑い声をあげていた。

まるで彼らの命の終わりを歌うかのように。

第40話 告げられ真実完

## お知らせ

久々にアップして来たらお知らせかよ！！とお思いの読者の皆様  
大変申し訳ありません。

現在、新連載考案中のため1ヶ月連載を休ませて頂きます。大変  
申し訳ありません！！

とある魔術の禁書目録？が終わり、更にとあるの世界に魅入られ  
てしまった作者は、新たなとあるの世界を執筆したくなりました。  
私情で申し訳ありません。

多分、新連載は作品は8月位に連載させて頂きます。作品名は。

とある魔術の契約執行人

舞台はこの作品と同じく一年後。

現在設定を事細かに考案中です。

休載期間は1ヶ月。皆様勝手ながらではございますが、しばらく  
お待ち頂きたい。

今回は土御門と垣根帝督の戦いです。

また1ヶ月後よろしく願います。

失礼します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9350m/>

---

とある魔術と禁断の能力者

2011年7月26日09時30分発行